八つの仮面

食器野さら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
八つの仮面

【Ｎコード】
Ｎ８３１０Ｑ

【作者名】
食器野さら

【あらすじ】
腐敗した組織、様々な嘘が飛び交う社会、そんな世界に八つの仮面が降り立つ。ある意味で世界を破壊しようとする彼らの道は、真っ赤に染まりつつも、暖かさに満ちていた・・・・・。※ＳＴＳ編開始！

プロローグ（前書き）

懲りずにまた始めちゃいました（＾＾Ａ；

プロローグ

――多くの転生せし者達が、この地に降りる時。

――法の守護者の闇が浮き彫りになる。

――それを『善』とする転生せし者と、『悪』とする転生せし者達の間で争いが起きる。

――それはゆっくりと全てを飲み込み、やがて八人の手によって終わりを告げる。

――法の守護者は滅びる、しかし代わりに真の秩序が訪れるであろう。

聖王教会の某騎士が読み上げたこの預言は、管理局上層部を震撼させた。

これを受け、上層部は『転生者管理法』を制定、『転生者（トリッパー）』を徹底的に管理局へ勧誘し、協力的でない者は即刻切り捨てていった。
しかし、その程度では未来を変えられないことを彼等は知らない。
すでにゆっくりと、その時は近づいていた。

全てが青に彩られた、怪しげな雰囲気の部屋。
――――いや、『部屋』と言うには少々狭い。
上に、窓の外の景色は動いている。
前へ前へ、ゆっくりと。
そのことから、ここはリムジンか何かの車内と推測できた。
そしてその部屋の奥に、『そいつ』はいた。
白髪に、異様に長い鼻、ぎょろっとした目玉は充血している。
『そいつ』の隣には、部屋と同じ色合いの服を身に纏った女性が、何かの書物を読んでいた。
やがて、『そいつ』が語りだす。

「ようこそ、ベルベットルームへ・・・・・・」

にやり、という効果音が着きそうな笑みを浮かべて、しゃがれた声で話し出した。

「今回皆様にお見せするのは、私としてはとてもとても興味深いお

話でございます」

笑みを消さないまま、『そいつ』は何かのカードを取り出す。

「皆様は『ペルソナ』というものをご存知ですかな？」

カードをシャッフルし並べながら、『そいつ』は話を続ける。

「簡単にご説明させていただくと、己の奥底にあり、己を守るもう一人の己にございます」

伏せて並べたカードを開く、そこには『0』と『愚者』の文字が描かれていた。

『そいつ』は次々カードをめくりながら続ける。

「ペルソナとは、必ずこのタロットカードのアルカナのどれか一つに属しています」

「しかし・・・・・」と言ってる割に、『そいつ』はさも楽しそうに笑う。

「私たちがお相手してきた客人とは、住む場所・・・・・いいえ、『世界』が違うところで覚醒した方々は違います」

言うなり。『そいつ』は突然せっかく並べたカードを部屋中にぶちまけた。

「属性はあるものの、しかし、そのどれもがこの『アルカナに属さない』のです」

ぶちまけたカードを片付けようともしないまま、『そいつ』は懐から別のカードの束を取り出す。
しかし、枚数がタロットカードに比べて圧倒的に少ない。

「存在するのはこのカードの枚数と同じく八体・・・・・その一つ一つがとても強力な力を持っています」

並べられた八枚のカードを一つ一つ捲りながら、『そいつ』は口を動かした。

「『剣士』、『弓兵』、『騎兵』、『槍戦士』、『魔術師』、『狂戦士』、『暗殺者』、『道化師』・・・・・・これらがどのように世界を変えていくか・・・・・楽しみではありませんか？」

誘うような口調で『そいつ』が喋り終えた時、隣に座っていた女性が突然書物を閉じてこちらに振り向いた。

「進路を変更いたします、車内がゆれると思われますので、お気をつけ下さい」

リムジンが、進路を変える。

プロローグ（後書き）

今回登場した『彼ら』抜きではペルソナは語れないと思い込んでます。
実はペルソナシリーズは未プレイなんですが、ほら、世の中には『プレイ動画』や『ｗｉｋｉ』という便利なものがありますから・・・・ｗ（
生暖かく見守ってもらえると嬉しいです。
では次回ノシ

第一話ある日の（前書き）

今回原作キャラは出てきません。

第一話ある日の

・・・・・・何だかへんな夢を見ていた気がするが、面倒くさいので気に留めないことにした。
目覚ましが鳴って、それを叩く様にして止める。
まだ眠いけど、学校に遅刻するもの面倒くさいからな。
だるい体を無理矢理起こして、冷蔵庫へ。
扉を開けて、タマゴとベーコンを取り出して、熱したフライパンに乗せる。
焼きあがったそれらを、ご飯と一緒に腹にかきこみながら、テレビのニュースを見ていた。
画面の中では、有名なタレントがインタビューを受けていた。
朝ごはんを食べ終わった後、食器を流し台に置いて、制服に着替える。
そして鞄を持って、玄関に出てから。

「・・・・・いってきます」

誰もいない家に向かって、そう言った。
ああ、そういえば名乗っていなかったな?
俺の名前は『道村空也(みちむらくうや)』。
市立中学校に通う、『転生者』だ。

周りの学生（特に私立の中学校）の視線が突き刺さっているが、気にしない。
ほら、よく『気にしたら負け』って言うだろう？
ま、正直な話、いちいち相手するのが面倒くさいだけなんだがな。

「空也、おはよう！」
「相変わらず視線突き刺さってるなぁ？おい」

後ろから突然、肩を叩かれ、軽口をかけられた。
振り向くと、友人である『剣ヶ原刀子（つるぎがはらとうこ）』と『東雲幽斗（しののめゆうと）』がいる。
世間話したり、今日の授業について話したり、そうこうしている内に学校についたので、靴箱で上履きに履き替えて、教室へ行く。

「はよー」
「お、ミッチー！つーちゃん！ゆー！おはよー！」

入ったとたん、いくつか出来ている一団の中の一つから、元気すぎる声がかけられた。
『ミッチー』とは、俺のことだ。
ガラだけじゃなくて噂も悪いから、せめて呼び方だけでも、ということらしい。

余談だが、こいつが俺をあだ名で呼び始めた瞬間、こいつの学年ではこいつの『最強伝説』が生まれたとか、そうじゃないとか。
なお、『つーちゃん』は刀子のこと、『ゆー』は幽斗のことである。

「おはよキコ、今日もテンション高くない？」
「だってこれがあたしなんだもん！」

俺達を愛称で呼んだ女の子はそう言って無い胸を張った。
彼女は『伊達騎子（だてきこ）』。
俺らより一つしたの学年で、元気が取り得の女の子だ。

「ソーマ、一日中このテンションに付き合わされんだろ？尊敬するよ」
「何事も慣れですから」

幽斗に聞かれ、俺の隣で淡々と答えるのは『伊達槍馬（だてそうま）』。
騎子とは双子の兄弟で、槍馬のほうが兄らしい。
ヘッドホンがトレードマークのローテンションな奴だ。

「まあ、いいんじゃないかな？何事も前向きになるのは大事だよ」

席に座った状態でそう言うのは、『鷹宮弓成（たかみやゆみなり）』。
この学校の生徒会長で、文武両道の優等生だ。
俺らのグループのリーダー的存在でもある。

「暗いところより明るいところだよね～ぽかぽかしてあったかいし」
「いや、今夏一歩手前だから日向は勘弁だわ」
「あれ？そうだっけ？」

騎子に突っ込まれているのは『狂咲由香（くるいざきゆか）』。

学年もクラスも騎子達と同じで、どこかおっとりしてるというか、ぽわぽわしてるというか・・・・・・。
『不思議ちゃん』という言葉が良く似合う。
それと、こいつは体系が細い。
不健康的に痩せすぎってわけでもないが、もうちょっと食べてもいいんじゃないかってくらいに細い。
だけどこんな外見に似合わず馬鹿力の持ち主だ。
・・・・・・・・・・・・・・あの細っこい体のどこからあんなパワーが出てくるのか、正直俺がかなり気になっている疑問だったりする。
まぁ、怪力少女に関する考察は置いといて・・・・・・軽くぶっちゃけると、今まで紹介したメンバー全員『転生者』だ。
俺や他のメンバーが『転生者』であると自覚したのはとある共通の力が目覚めたことが原因だが、その辺はあとで話すので割合させていただく。
さてと、担任が入ってきたので午前はここで解散。
学生らしく勉学にはげみますかね・・・・・・めんどくさいけど。

「そーいやさ、ミッチーは聞いたことある?『ごくたまに、ある日突然人がいなくなる』って都市伝説」

「知らん、聞いたことも無い」

昼休み、屋上にて昼飯の弁当を食べていると、キコがそう話を振ってきた。
そんなもの知らないので、ばっさり切ったが。

「・・・・・駄目もとではいえ、聞いたあたしが馬鹿だった」

キコはそう残念そうに頭を抱える。

「けどあながち無視できないよね、そういうの聞くとさ」
「まぁ、わたし達自身が都市伝説になりそうなものだもん」

刀子の言葉を皮切りに「ねー」と女性陣は声をそろえた。
それでも構わず、俺は弁当にパクつく。

「そういや話は変わるけど、駅前商店街の有名な喫茶店、確か・・・・・『翠屋』だったか、そこに新しいメニューが出来たそうだ」
「ほんとっ!?」
「どんな!?」

幽斗が出した話題に、真っ先に食いついたのはキコと由香。
二人とも甘いもの好きだからな。
対する幽斗は冷や汗をかきながら、

「いや、残念ながらどういうものかは知らないぞ、俺は聞いただけだしな」
「うーん、そう聞くとますます食べたくなるのが人間の性」

そう言って、由香と一緒に悩みだすキコ。

すると、

「よし、明日みんなで翠屋いくぞー！」
「ちょうど午前授業ですもんね！」

立ち上がって元気よく宣言する二人。
だがしかし、

「お前らだけで行って来い」

女性陣全員ならともかく何故俺等までいかにゃならんのだ。

「ぶーぶー！いーじゃんよどうせ皆やることないんでしょー？」
「残念、俺は明日バイトだ」
「なん・・・・・だと・・・・・・！？」
「大げさなリアクションはやめろ」

がやがやと、騒がしいながらものんびりとした時間が過ぎてゆく。
このまま何も起こってくれなければ、面倒くさがりの俺としてはうれしいのだが・・・・・・。
・・・・・あ。

「そーいや、明日のバイト、翠屋だった」
「何ーっ！？それを早く言わんかいっ！！」

放課後、帰り道。
今日はとっとと帰りたい気分だったので、幽斗たちとは学校で別れた。
みんなでわいわいというのもいいが、こうやって自分のペースで進むのも結構楽しい。
途中商店街の人たちに、色々おすそ分けをしてもらった。
自宅についたので、玄関の鍵を開ける。
両親の稼ぎがそれなりに良かったらしく、家もその辺のに比べて結構広い。
あれだ、武家屋敷のちっちゃい版を想像してくれ。
両親が死んでからは、俺一人になってしまった。
幸い近所には優しい人が多いから、特に寂しいというわけでもない。
前述の通り、帰宅途中に通る商店街の人たちも俺を構ってくれるし、遺産も、両親の友人がきちんと管理してくれてる。
それでも俺が『独り』なのに変わりない。
その所為か、広い家が更に広く感じる。
二階の自分の部屋で寝転がって、ぼんやり外を眺めていた。
外がすっかり暗くなった頃。

向かいの家の二階の窓で、光がチカチカと点滅しているのが見えた。
何事かと思って立ち上がってから、全て理解する。

――――――まだ俺に構うか・・・・・・。

数年前から中学校での・・・・特に私立の奴等からの俺の評判が、すこぶる悪い。
原因は『とある誤解』からなのだが、気付いた時にはもうどうしようもないくらいに広がっていたから、俺にはどうもできなかった。
その『原因』になった『彼女』は、今日も性懲りも無く部屋を真っ暗にして、懐中電灯を点滅させている。
これは『幼馴染』である俺たちの秘密の信号のようなものだ。
明かりをつけては消しを三回、一回長く光らせた後、再びつけては消しを三回。
『今日は楽しかった？』の意味だ。
『あんなこと』があってからも、『彼女』はずっと続けている。
それにたいして俺は知らぬ存ぜぬを決め込んできた。
いい加減諦めてくれてもいいんだが・・・・・・。
ああ、だから『不屈のなんとか』・・・・・・だったか。
・・・・・本当に諦めが悪い女だ。

ｓｉｄｅ　？？？

今日も信号を送ってみた。
結果はいつも通り、無反応だった。

「・・・・・・はぁ」

思わずため息が出てくる。
『あんなこと』が起こってから、友達の間で彼の評判が一気に悪くなった。
・・・・・わたしの所為だから。
わたしが弱かった所為だから。
だから、せめてわたしだけでも『彼』と接点を持ってなきゃ。
それなりに『彼』がどんな人か知っているし、意外と寂しがり屋っていうのも知ってるし・・・・・。
とにかく！わたしの所為で独りになんて・・・・・・・させちゃだめだ。

第一話ある日の（後書き）

前書きで出てこないって言いつつ、結局最後に出ちゃってますｗｗ
次回は戦闘でも書きたいなーっと。
それではノシ

第二話ボラバイト（前書き）

お待たせしました、二話です。
８／７：誤字修正。

第二話ボラバイト

「・・・・・・であるからして、この数式は・・・・・」

うちのクラスの数学担当が黒板にびっしり数式を書き込んでいる。
今日は二年がインターンシップ前と言うこともあり、それにあわせて全学年が午前授業になっていた。
ちなみに今はその午前最後の四時限目なわけで、授業中にも関わらず、アイコンタクトやジェスチャーで今日の予定を確認しあっている。
秒針が、一周した。
同時にチャイムが鳴って、先生がまとめを手短に告げてから出て行く。
途端に教室中が騒ぎ出した。
まだホームルームも済んでいないのに、みんながみんな帰宅ムード全開だ。
・・・・・・・かく言う俺のその一人だが。
っと、弓成が近づいてきたな。

「空也は予定通り翠屋に？」
「ああ、二時から」

教科書その他もろもろを鞄に入れつつ、会話する。
弓成はそっか、と返事をした。
ん、今度は刀子か、

「わたし達もご飯食べてからいくから」
「分かってる、一応客として接するから他人行儀なのはご愛嬌な」
「りょーかい」

丁度その時、担任が席に着くよう指示しながら教卓についた。
どうやらホームルームを始めるようだ。
速く終わらせろという生徒の視線を受けながら、担任は話し始めた。

割と早く担任の話が終わったので、真っ直ぐ翠屋に向かう。
ちなみに、バイトバイトといっているが、実は単なる小遣い稼ぎである。
翠屋のお陰で平均年齢は下がっているとはいえ、年配の方が多いのは変わらないわけで・・・・。
だから手伝う代わりに、ちょっとした小遣いや食べ物などをおすそ分けしてもらっている。
ほらあれだ、『ボラバイト』のようなものだ。
親の友人が遺産を管理してくれているとはいえ、そればっかりに頼るのもなんだしな。
そうこうしている内に翠屋についたので、扉を潜った。

「お、空也くんか！」
「こんにちは」

最初に話しかけてくれたこの人は、高町士郎さん。
翠屋のマスターで、気前のいい人だ。

「来てくれてありがとう、制服奥の方にあるから」
「分かりました」

次に声を掛けてくれたのは、その奥さんの桃子さん。
翠屋のパティシエで、人気商品のシュークリームもこの人がつくったものだ。
この二人に小さく会釈してから奥の控え室に入って、バイト用のロッカーに荷物を入れて翠屋のエプロンを着る。
制服のままで来ているので、上着だけを脱いだ状態だ。
今日から七日間着ることになるので、大切にあつかわなきゃな。
任される仕事は接客のみだが、しっかりやるとするか。
控え室を出て、手を洗う。
店の規定どおりに、肘まできっちり。
最後に身なりを確認してから、店頭に出た。
高町夫妻にもう一度会釈してから、注文表とボールペンを装備。
早速入ってきたお客に向かっていき、営業スマイル全開で、

「いらっしゃいませ、何名様ですか？」

もう数えるのも億劫になるくらい『いらっしゃいませ』を繰り返した頃。
見知った顔がぞろぞろ入ってきた。
それでも構わずに営業スマイルを浮かべて、

「いらっしゃいませ、何名様ですか？」
「あっはっはー！ミッチーちょー似合ってる！」
「すみませんこれは気にしないで下さい、あと、六名です」

腹を抱えて笑う騎子を他所に、槍馬が人数を述べる。
かしこまりました、と返事してから席に案内した。
先に来ていた客の配膳を済ませてから、騎子たちの席へ。
ボールペンと注文表を取り出した。

「ご注文お決まりでしょうか？」
「新作のこれを三つ、あとカフェオレを六つ！」

簡潔に書き付けて、読み上げる。

「ご注文繰り返させていただきます、春のラズベリーケーキを三つ、カフェオレを六つ、以上でよろしいでしょうか？」

弓成がうなづいたのを確認。

「承知しました、ゆっくりおくつろぎくださいませ」

〆に営業スマイルをかましてから、その場を去っていった。
注文をカウンターに置くと、桃子さんが近づいてくる。

「お疲れ様、休憩入っていいわよ」
「分かりました」

会釈してから、みんながいる席へ向かった。

閑話休題。

近づいてくる俺に真っ先に気付いたのは、幽斗だった。

「休憩か？」
「ああ、さすが人気の喫茶店だ、ちょっと疲れた・・・・・」

おもわずどっかりと座り込んだ俺を見て、刀子は苦笑いをした。

「大変だねぇ」
「まぁな」
「あれが一週間、か、すごいねぇ～」

出されたお冷を口にして、由香がのほほんと喋る。
それに対して騎子は机に顔を乗っけて、

「長年の経験って奴じゃない？空也結構長い間ボラバイトもどきしてるでしょ？」
「俺らが知ってるだけでも、五～六年くらい？」
「だな」

しばらく和やかな空気が流れる。

すると、

「お父さん、お母さん、お待たせ！」

バタバタと、少々急いだ足音が聞こえてきた。
聞き覚えのあるそれに、思わず反応してしまう。
みると、見覚えのある後姿が見えた。
そいつが振り返りかけたので、さっと視線を逸らした。
だが、運命は逃がしてくれないようだ。

「空也くん？そろそろ・・・・・・」
「・・・・・・了解」

不可能と分かっていても、彼女と視線を合わせないように努めながら立ち上がる。
というか、名前を呼ばれた時点で合わせるも何もないか。
顔を上げると、彼女はかなり驚いた様子でこっちを見ている。
・・・・・・別に気にしなくてもいいんだがな。

「早速これを４番と６番テーブルにお願いね」
「分かりました」
「あ、あの・・・・・・」

彼女が何かを言いかけるが、一応スルー。
視線で黙らせてからお盆を受け取って、運んでいった。
気配で彼女がこっちを見ているのが分かったが、無視を決め込むことに。
その後もしばらく視線を感じていたが、夕方頃になれば流石にそれもなくなっていた。
そして弓成たちも帰っていく。

とりあえず、手を振っておいた。

ｓｉｄｅ　槍馬

「あー最高だった！」

翠屋のケーキに満足してはしゃいでいる騎子を呆れた目で見つつ、家に帰っている。
まぁ、喜ぶ気持ちも分からなくも無いかな。
双子は意思疎通が出来るもの、なんて思われているけど、一応はその通りだ。
いや、流石に全部は分からないけど、共感を求められたら、流れが分からなくても条件反射でうなづいちゃうんだよな・・・・・・。

「海鳴の学生にとって翠屋のケーキを食べることがある意味の贅沢よね！」
「ん、あそこの味はいいと思うよ」
「だよねー！」

我が妹ながら、本当に無邪気に笑う。
・・・・・・・前世で死んでしまった時に、『また双子がいいね』

って笑いあったことが叶って、喜ばしいことだと感じている俺がいた。

「はぁー・・・今なら死んでもいいかも」
「こら、物騒なこと言うなよ」
「冗談だよ、ジョーダン！」

笑いあっていたその時だ。

「じゃあ死なせてやるよ」

振り向く間も無く、光で見えなくなる。

ｓｉｄｅ　？？？

車に撥ね飛ばされて死んだと思ったら、いきなり目の前に神が現れて、しかも俺が死んだのは手違いっていうじゃねぇか。
むかっ腹が立ったんで怒鳴り散らしてやったら、色々チートな能力をくれた。
しかも行先はリリカルなのはだって聞いて喜んだのは記憶に新しいぜ！！
こうなりゃなのはやフェイトを奴隷にしてやらぁ！！
・・・・・・・・・だが、な。

「聞いてねぇぞ・・・・俺以外の転生者がいるなんて」

俺は木の上にいるわけだが、見てる先に双子の転生者がいる。
なんで転生者か分かるのかって？何と言うか・・・・感覚？
会話から聞くに、もう翠屋にいってやがった。
ということは既になのはとエンカウント済みのはずだ。
女のほうはともかく、男のほうはつぶしておく必要があるな・・・・・。
すると女のほうが、

「はぁー・・・今なら死んでもいいかも」

自分でも、口角が上がるのが分かった。

「じゃあ死なせてやるよ」

もらった虚（ホロウ）の能力、虚閃でぶっ飛ばしてやった。
もろに直撃して、周りのものを巻き込んで吹っ飛んでいく。
きっちり結界を張っているから一般ピーポーどもには気付かれねぇ。
っは！ざまぁ見やがれ！完全に伸びてやがる！！
さぁ、あとは男の方を殺しておしまいだな。

の、はずだったんだが・・・・・・。

「こらーっ！！いきなり何するんじゃー！！！」

思いっきり殴られてた。

ｓｉｄｅ　騎子

危なっ！！めっさ危な！！！ってか問答無用にどかーんとかないでしょ！！？
近づいてきた奴を思いっきり殴り飛ばしちゃったけど、別にいいよね？

「ちょっとソーマ！起きてる～？」
「起きてる、ヘッドホンに埃が入ってないといいけど・・・・・それと転生者だね？」

しっかり頷いて前を睨む。
さっき殴りつけた奴が丁度起き上がっていた。

「っち！このアマ、なんで意識が・・・・・・」

あれ？もしかして今の一撃で倒せたとでも思ってるのん？

っはっはっはー！

「ざまーみーろ！あたし双子がそう簡単に倒れるわけじゃないモンねー！」

腕に『収めていた』トンファーを取り出して、戦闘体制に入る。
ソーマも同じ方法で二丁銃を取り出していた。

「俺たちに喧嘩売った事、今更後悔しないよね？」
「軽くすっ飛ばしてあげるから覚悟しなれ！！」

相手は倒せなかったことにいらっとしてるみたいね。
こっちもの凄く睨んでるし。

「・・・・・・・んな訳あるか・・・・」

うかつに出てったらやられそうだし、しばらく様子見？

「俺は完全無敵のハズだろ？何で転生者一匹殺せないんだよ！？」

え、こいつ自分が無敵だと思い込んでたの？
ばっかみたい、無敵なんてただの幻想じゃん。
生物である限り何らかの弱点はあるのは当たり前だっての！

「馬鹿みたいだね、最強なんて本来存在しないものだよ」
「そーだそーだ！身をわきまえろー！！」
「・・・・・・・っ！」

おお、怒ってる怒ってる。

「このクズ共がぁ！！塵残さず消してやらぁ！！」

突っ込んできたけど別に危ないわけでもないかな？
隙まみれだし、横に避けてチョップすれば問題ないねー。
・・・・・・・けど、

「それじゃ尺にあわないよねー？」
「まったくだ」

あたしも槍馬も青いもやを出す。
同時にあわられたカード目掛けて、あたしはトンファーで、槍馬は銃で。
それを破壊する。
あたしは気に入ってたバッグを、槍馬はヘッドフォンを埃まみれにされたんだ・・・・・・。
とーぜんの報い受けさせてやる！

「いっくよー！ケンタウルス！！」
「こい！クーフーリン！！」

あとあれだ！こいつ碌なことしない！！

「それじゃあ空也くん、お疲れ様」
「はい、ではお先に失礼します」
「ええ、気をつけてね」

さて、店の片づけもあらかた終わった頃。
帰っていいと言われたので、お言葉に甘えることにする。
控え室に戻ってエプロンを外し、注文表とボールペンを所定の位置にしまってから、ロッカーを閉める。
そして振り返ると、

「・・・・・・・・・」

彼女がいた。

「・・・・・・何か用か？」
「・・・・・・・・・このままでいいの？」

『何が？』と聞くと、『あのことだよ！！』と返してくる。

「空也は全然悪くないのに、みんな勘違いしてあなたを悪者扱いだよ！？悔しくないの！？」

・・・・・・・・・『あんなこと』をまだ自分の所為だと思い込んでいるらしい。

「面倒くさいからやめた」
「っどうして！？」
「思いたい奴等には勝手に思わせておけばいいんだよ」

途端に、しゅん、となって俯く彼女を見て、若干罪悪感が沸いたのはここだけの話だ。

「・・・・・・お前が抱える理由は無いはずだろ、もうすぎたことだ」

長居する理由は無いので、とっとと帰ることにする。

「・・・・・いい加減に忘れろ、なのは」

すれ違いざまに、そう言って置いた。

第二話ボラバイト（後書き）

思ったより戦闘がかけませんでした・・・・・・^^；
次回は・・・・どうしよっかな？

第三話会議もどきと占いと（前書き）

アイデアがばんばん出てくるので、またまた更新ｗ
もしかしたらしばらくはこっちを更新し続けるかもです。

第三話会議もどきと占いと

お手伝いが済んだのと、お父さん達に帰っていいよって言われたので、家に帰っている。
すると、ケータイが鳴った。
取り出して画面を見ると、『アリサちゃん』と表示されている。
・・・・・・・・ちょっと憂鬱な気分になった。
それでもでないわけにはいかないので、仕方なく出ることにする。

「もしもし？」
【なのは！？ちょっと、大丈夫なの！？】

・・・・・・・・・・ため息が出そうになったのはここだけの話だよ？

「何が？」

とりあえずとぼけておいた。

【何って、空也のことに決まってるじゃない！何もされなかった？】
「アリサちゃん心配しすぎ、大丈夫だよ」
【けど今日から一週間翠屋にいるんでしょ！？】
「いくらあの人でも、人前では何もしないと思うよ・・・・・・ここだけの話、あの人担当はホールだけだから、人目が多いし、大丈夫」

電話の向こうで、アリサちゃんの『っぐ』と言うのが聞こえる。
やがて、

【・・・・分かったわ、士郎さんも桃子さんもいるから、きっと大丈夫よね】

「うん、アリサちゃん、心配してくれてありがとう」

それじゃあ、と電話を切った。

「さてと、どうしてこうなったか、説明してもらおうか？」

「え、えっと・・・・・・」

「・・・・・・」

・・・・・・・・・今俺の目の前には、笑っているのに明らかに怒っている弓成と、正座させられてる騎子と槍馬がいる。

背景は一面の銀世界、視界の隅には由香に棒切れでつつかれている転生者の遺体がある。

ちなみに刀子と幽斗は銀世界になってしまった周辺を片付けている。

「まったく・・・・・・お気に入りを埃まみれにされたっていうのは分からなくもないけど、だからってこれはやりすぎだよ」
「はい・・・・・・」
「その、すみません」

珍しくしゅんとしている二人を見て、思わず笑いだしてしまった。

「はぁ・・・・・・こんなんじゃ、後始末のほとんどを『おばあさん』に頼むことに・・・・・」
『あらあら、問題はないわよ?』

突然弓成の目の前に空間ウィンドウが現れる。
そこには、見覚えのある和やかな顔が映っていた。

「わー!ミゼばあ!」
「おばーちゃんだぁ〜」

由香と騎子はのほほんとした空気をかもし出すばあさんにつられて、明るい表情になる。
・・・・・・一応言っておくが、彼女は本当の祖母ではない。
まぁ、色々縁があって『おばあちゃん』と呼ぶことを許可してもらった人、かな?

「おばあさん、けど・・・・・・」
『いいわよ別に、予想の範疇だからねぇ』

モニターの向こうでほっほっほと笑うばあさん。
相変わらず平和ボケした雰囲気を持つ人だ。

「すみません、お願いできますか？」
『ええ、可愛い孫の頼みだもの』
頼み込む弓成と、即答でＯＫを出すばあさん。
こうもあっさり引き受けてもらってしまうと、どうも罪悪感が・・・・・。
まぁ、この有様じゃあ頼らざるを得ないような状況だな。
そういう訳で今日はお開きになった。

翌日、学校。
昼休みもあと少しと言う時間帯。
俺たちは・・・・・屋上にいた。

「っていうかあたしらはともかく、弓成と刀子はいーの？生徒会長と副会長でしょー？」
「別に」
「わたしも、ね」
何故集まっているかって？

サボりを口実にした作戦会議的なものだ。
議題はもちろん、昨日騎子と槍馬を襲った転生者について。

「さて、昨日二人を襲撃してきた転生者のことだけど・・・・・・」
「来たばっか、弱い、むかつく、以上」
「突っ込みどころ満載だけど・・・・・・同意せざるを得ないね」

即効で短い感想を言う騎子に、珍しく突っ込み無しで同意する槍馬。
・・・・・・ヘッドフォンをやられたことが相当頭にきているらしいな。
今日はヘッドフォンを首にかけた状態になっている。
どうやらあれ以来、音質がかなり悪くなってしまったらしい。
弓成は苦笑いしてから、

「えと、じゃあどんな能力を使ってた？」
「生意気にＢＬＥＡＣＨの虚（ホロウ）の力、のっけから虚閃（セロ）ぶっぱなしてきたから間違いない」

当時のことを思い出しているのか、双子はイライラした雰囲気を隠そうともしない。
・・・・・・不謹慎だとは思うが、そいつを見てみたいと思っている俺がいた。

「それで、他は？」
「うんや、特に何も、ね？」
「ああ、虚閃で吹っ飛ばされた後、問答無用で片付けちゃったからね」

しれっと答えた騎子と槍馬は手をぎりぎりと握っている。
そんな二人を見た幽斗は苦笑いして、

「まぁ、いいんじゃねぇか？二人の話からするに、けっこう人間的に酷い奴だったみたいだしさ」

と、その時、

「お前等・・・・・またここにいたか」

「あり？せんせー？」

いつのまに来ていたのか、俺たちの担任が屋上の扉のところで仁王立ちしていた。

そういえば、五時間目はもう終わっている。

流石に六時間目は出ないと、な。

ちらっと弓成のほうを見ると、さっきので大方の話は聞けたらしい。

小さく笑みを浮かべていた。

「道村たちはともかく、鷹宮と剣ヶ原は何をしていたんだ？」

「すみません、それが・・・・・」

刀子が前に進み出て、にこにこしながら、さらさらと話していく。

・・・・・嘘を。

いや、話の流れ的には嘘じゃないけど。

「むぅ・・・・昨日そこの双子が不審者に絡まれた、何とか逃れることは出来たものの、不安が残っていたので、友人達に同席してもらい、相談会を開いていた、と」

「ええ」

曇りが無い笑顔で言い切る刀子。

・・・・・・・・何故か頼もしく見えたのはここだけの話である

ことを告げておく。

周りが真っ青で、部屋にしてはせまいところ。
多分、リムジンか何かの車の中だと思う。
その奥の方に・・・・・・。
何と言うか、人、何だと思うけど。

「おやおや、これは珍しいお客人だ・・・・・・」

人間って、あんなに鼻が大きくなるものなのかな?
何をどうすればあんななるんだろう・・・・・・?
おじいさんと思われるその人は、カードをシャッフルして並べてい

た。
タロットカード、かな?
やがて一枚一枚を捲り始める。
すると、おじいさんは「ほう」とため息をついた。

「・・・・・あなたには、呪いのようなものがかかっていますな」
「・・・・・・・・え?」

いきなり告げられた占い結果に、思わずぽけっとしてしまう。
初対面にそんなはっきり言うのもどうかと思うんだ。
占いならともかく、そんなにやにやした表情で言われちゃったら流石にいらっとくるなぁ・・・・・。

「絆を失くす呪い、業を背負っていく呪い、仮面をかぶり続ける呪い・・・・・・・」

・・・・・・・・・・・・。

「それでも、あなたは生きていく力を持っていけますか?」

おじいさんは、こっちをじっと見ている。
・・・・・・・正直、おじいさんが言っている意味が分からない。
仮にそんな呪いを受けたとして、生きていけるどうか分からない。
不安、だけど。

「・・・・・・多分、大丈夫です」

その答えを聞いたおじいさんは、にやりと笑った。

「それもまた、一つの答えでしょう・・・・・・・改善策としてこ

ちらがお伝えできるのは、もう一人の自分を受け入れることです」

『もう一人』の、自分？

「あなたとはもう会うことは無いでしょうが・・・・・どうか、道を外されませんように」

最後におじいさんの声が聞こえて、意識が遠のいた。

というところで目が覚める。
まだ春先なのに、汗でぐっしょりになっている。
呼吸が荒い、どこか閉じこもった場所にいた気分だ。
何がどうだったのか、よく思い出せない。
けど何か、将来に関する重要な内容だったような・・・・・・。
んー・・・・・・。

――――我は汝

また眠りそうになった時、そんな声が聞こえた。

奥底で、わたしはうずくまる。

――＊＊＊

閉じ込められた中で、わたしは息をする。

――――気付いて欲しいな

ただ、『あの人』が『わたし』に気付くのを待つだけ。

――――否定して欲しくないな

そうすれば、『わたし』は『あなた』の力になるから。

『あなた』が望めば、『わたし』は・・・・・・・。

第三話会議もどきと占いと（後書き）

はい、三話でした。
あと今回からこちらでも、後書きのほうで返事をさせていただきます。
題して、『お返事の部屋』！
そのまんまや！という突っ込みは無しの方向で！！

天ノ刃羽斬様
ぶっちゃけ彼はかませ犬的な人物なので、早々にご退場してもらいましたｗｗ
二人の過去については、まだまだ引っ張りますよ～↑
催促なんてとんでもない、感想欄に載ってるのを見つけたときには狂喜乱舞しましたからｗｗ（

さて、次回の内容はひ・み・つ☆↑
期待してもらえると嬉しいです。
それでは。

第四話襲撃と失踪（前書き）

アイデアが出てくるのはいいけど、書き上げてもグダグダになってる気が・・・・。

３／６：一部修正

第四話襲撃と失踪

翠屋のバイトも今日で一週間目。
ここまでの間、特に問題はおきなかった。
今日で最終日なので、今まで以上にきっちりやらせていただこうと思う。

「空也くーん？配膳お願ーい！」
「分かりました！」

さて、気張っていきますか。

一段落して、控え室で休んでいる。
今日が休日だからか、客がまさに雪崩のように押し寄せてきていた。
ぶっちゃけ、滅茶苦茶疲れた。
体力には自身があったんだが・・・・・人気店は格が違うな。
いつも手伝っている年配者の店より、動き回る必要があるようだ。

「あ、お疲れ様空也くん」

「どうも、お疲れ様です美由紀さん」

たそがれていると、高町家の長女、美由紀さんが来た。
すると隣に座っていいかと聞かれる。
特に断る理由が無いので、一応肯定した。
しばらく、他愛ない話をする。
と、突然、

「・・・・・最近さ、なのはの元気が無いんだ」
「・・・・・・？」
「いや、ね、何か思いつめているというか、何と言うか・・・・・・」

・・・・・・つまり、

「何か悩んでいるようだと」
「うん」

どうしよう、心当たりがあり過ぎるんだが。
美由紀さんにもそれを見抜かれたらしい。
割と真剣な顔で、

「何かあるんだね？」
「というか、美由紀さんも知っていると思います」
「何が・・・・・って」

『あぁ～』と、思い出したように上を見上げた。

「・・・・・あの子らしいというか、何と言うか」
「あれは俺の自業自得です、別にあいつが気負う理由は無いはず」

「それでも悩んじゃうのがなのはだから」

・・・・・どうも納得できん。

「だいたい、そんなに悩んでいるなら友達は？ある程度のガス抜きくらい出来るはずだ」

「出来てるようだったら相談してないよ、それに、君の不評の原因でもあるから、余計に、ね」

そういえばそうだったな。

まぁ、言いだしっぺだからって恨む気は無いが、友達ならガス抜きくらいしろっていう話だ。

人のことをとやかく言う趣味は無いが、今のあいつらはどうなっている？

「空也くん？どしたの、そんなに考え込んで？」

「え、あ、いえ、何も・・・・・・・」

考え込んでしまっていたようだ。

美由紀さんの声で、現実に引き戻される。

ついでに休憩時間も終わったようなので、仕事に戻ることにした。

「空也くん今までお疲れ様、はいこれお給料ね」
「はい、お世話になりました」
「もう！そんな言い方したら今生の別れみたいじゃない！」

別にその気は無いのに、桃子さんにばんばん肩を叩かれる。

「すみません、地味に痛いです」
「あら、ごめんね」

謝っている割には反省の色が見えない。
けどそれを指摘したらいけない気がしたので、あえて無視することにした。
給料の入った封筒をバッグにしまい、一礼してから翠屋を出る。
外は大分暗くなっている、足元や周りに気をつける必要があるようだな。
何にせよ、早く帰ることが先決だ。
帰宅が遅くなって面倒ごとに巻き込まれるのもごめんなので、真っ直ぐ家に向かうことにする。
・・・・・なにも起こらないことを祈ろう。

翌日、私立聖祥中学校。
昼休み、屋上でご飯を食べていると、見知った顔が凄い形相でこっちにきた。
うちの一人がわたしの肩をがっちり掴んで、

「なのは！アリサから聞いたけど、大丈夫だったの！？」
「・・・・何が？」
「決まってるやん！空也のことや！！」

肩をがっちり掴んでいる子――フェイトちゃんとその後ろにいるはやてちゃんとすずかちゃんが、心配そうにこっちを見ている。
思わずため息をついてしまった。

「・・・・・別に大丈夫だったよ、人目も多かったし、仕事関係

で2、3回話しただけだから」
「ほんとに？」
「隠してないよね？ほんとに何も・・・・・」
「・・・・・・っ」

この人たちは・・・・・・・・・・・・何度も・・・・・・・・何度も！！

「何もないって言ってるでしょ！！」
「・・・・っ！？」
「・・・・・・！」

・・・・・・・・・・・・。

「ごめん、でも本当に何もないから」
「わ、分かった」

まだお弁当の中身は残っているけど、もう食欲がない・・・・・・・。
・・・・・・・・速く教室に戻ることにした。

「そーいやさー」

いつもの屋上。
騎子が俺を見る。

「そもそもミッチーって、何でみんな・・・・・・特に私立の奴等に毛嫌いされてるわけ？」
「・・・・・・・・・」
・・・・・・・・・突然痛いところを、突くなこの元気娘は。
「今更だな」
「むー、だって気になったんだからしょーがないじゃん」
「でも確かに気になる、生徒会長と副会長あたりなら何かしってるんじゃない？」
槍馬の言葉を皮切りに、俺以外の視線が弓成と刀子に集中した。
二人は『見られても・・・・』という顔をしている。
「・・・・・・人のイタイ昔話を根こそぎ掘り出すのがお前らの趣味だったのか？」
・・・・・・しばらくこの状態が続いたが、何だか本人達がいたたまれない感じになってきたので、フォローを入れた。
皮肉っぽくなったのはご愛嬌だ。
「うぐっ、で、でもうちの学校のはともかく、私立の奴等からの悪評半端無いじゃん！！」
「言わせたい奴には言わせておけばいい」
視線が今度は俺に集中しているのが分かる。
だが騎子は諦めていないようだ。
黙り込みはしたものの、知りたいという気持ちが気迫で伝わってくる。

といっても、こいつのあしらい方は慣れているのでスルーすることに。
やがて騎子も諦めたようだ。
視線を感じなくなった。

夕方。
昼間にあんなことがあったので、今日は一人で帰っている。
何だか、いつもより憂鬱な気分だ。
・・・・・・・・周りが嘘にまみれて、精神が限界になってきた気がする。
ホントのことを知っている人は隣にいない。
・・・・・・一人じゃないのに、独りぼっち。
また・・・・・・・・『独りぼっち』・・・・・・。

――――一人ぼっちが嫌だなんて、弱虫のいうことだよね～？

「・・・・・・・・っ！！？」

後ろを振り返っても、誰もいない。
けど確かに今声が・・・・・・・。

「ひゃっほう！見つけたぜ！！」

っ上！？
見上げると黒い羽をはやした男の人が見える。
こっちを見下ろしているその人は、気持ちの悪い笑顔を浮かべていた。

「っくっくっく・・・・・ここでお前を殺せば、この世界はもらったも当然だぁ！」

男の人は言うなり黒い剣を振り下ろしてきた。
とっさにバリアを張るけど、まるで障子紙を切るみたいに突破される。
少し肩を切られて、思わず後ろに下がった。

「思ってたより動けるみたいだなぁ？『原作』とは大違いだぜ！！」

『原作』・・・・まさか。

「転生者（トリッパー）・・・・・・？」

「正解！ついでにいいこと教えてやるよ！」

男の人は、また剣を振りかぶって接近してくる。
今度はシールドを三枚重ねして、前に突き出した。

「原作キャラは、転生者様にゃ勝てねぇ！！」

「え、きゃぁっ！」

また紙みたいに切られた。
そんな、思いっきり硬くしてあったのにこれって・・・・・・。
蹴り飛ばされて、地面を転がる。
ダメージを受けたのは腹一箇所のはずなのに、全身が痛い・・・・・・。
動こうにも動けない・・・・。
けど、助けを求めるわけには行かない。
だってわたしは・・・・・・。

――――不屈のエースオブエースだから？くっだらなーい！

「・・・・・・・・・・・・っまた・・・・・・・・」

この声、いったい？

「はっはぁ！突然だんまりか！？遺言くらい聞いてやろうと思ったが何も言わないんじゃしたかねぇ！！」

しまっ・・・・・・。
目の前が真っ暗になって、あの男の人しか見えない。
・・・・・・死ぬの？
いやだ、嫌だ嫌だ！！
まだ謝ってない！あの人にごめんなさいって言ってない！！
それにこんなところで独りでなんて・・・・・・いや！！

「おいでませ！アルトリア！」
――――任せろ！トウコ！
「なんっ！？ぐおおおぉぉっ！！」

目の前に薙刀を構えた人と、何か見えないものを構えて宙に浮いている人のようなものが降りた。
男の人は『二人』の一閃に飛ばされて、壁に打ち付けられる。
二人とも凄くきれいで、凛とした雰囲気があっていた。
・・・・・・・・って、いけない！

「あの、逃げてください！その人、わたし達じゃ・・・・・！」
「うん知ってる、『原作キャラ』じゃかてないんでしょ？」
「え・・・・・？」

その人はこっちをみて笑うと、もう一度男の人と向き合った。

「海鳴市立月白中学校生徒会副会長！剣ヶ原刀子！」
――トウコの剣であり鎧であり彼女自身である、ペルソナアルトリア！
「推して参る！！」

威厳たっぷりの佇まいで『二人』は名乗りを上げて、男の人に斬りかかった。
さっきとは打って変わって、今度は男の人が苦戦し始める。
男の人は何度も何度も切りかかるけどひらひら避けられて、逆に反撃されたりしている。
・・・・・すごい、転生者（トリッパー）相手にあそこまで戦ってる。

「っ、このっ、てめ！同じ転生者だろぉ！？何で邪魔するんだよぉ！！」
「はて、おかしなことを聞きますね」

『二人』が、縦一閃で男の人をまた吹き飛ばす。

「わたしは確かに転生してこの力を手にしましたが、それ以外はどうだっていいです」
――ただ、私もトウコも貴様のような外道は見逃せん！！
「っ畜生！！」

男の人はもう闇雲に剣を振り回す。
考え無しに振られているのに凄い速さのそれを、簡単そうに避けていく。
本当に・・・・・すごい人だな。

「っだったら・・・・・・・・」

すると男の人が消えた。
魔力は・・・・・探れない。
完全にどこにいるか分からなくなった。
どこに・・・・・・・？

「おや、姿を消しましたか・・・・」
――気配も無いようだ、どうする？トウコ？
「うーん・・・・・アルトリアですら探れません、か」

少し考えこむ『二人』。
すると、薙刀を持った人はふふっと笑った。
顎にあてていた手を離すと、青いもやを出す。

「ちょっと荒っぽいけど、これで・・・・・」
――御意

風が『二人』の周りを駆け巡る。

動けないわたしはただそれを見てることしか出来なかった。
やがて、風の動きが激しくなる。
『二人』は自分の武器を振り下ろす。

「マハガルーラ！！」

その場全体に、風が吹き荒れる。
次の瞬間に見たのは、風に切り殺されるあの男の人の姿だった。

『あの子』は、『わたし』と同じ存在。

いいな、『わたし』もいつか『あなた』とあんなふうに背中を合わせたいな。

受け入れてくれるかな?気付いてくれるかな?

『わたし』は『あなた』の一番の味方だよ。

だって、『わたし』は『あなた』で『あなた』は『わたし』なんだから・・・・・・。

今、また声が・・・・・・・・?

いったい・・・・・・・・・。

「大丈夫?」

「え、あ、はい」

いつの間にかあの薙刀の人が目の前にいた。
何かを構えた人のようなものもいなくなっている。
薙刀の人に手を貸してもらって、何とか立ち上がった。
まだ体は痛いけど、さっきよりは楽になっている。

「ごめんね、もっと早くに来れたらよかったのに」
「そんな！あの、こちらこそ、助けていただいちゃって・・・・・・
その、ごめんなさい」
「いいよ、無事でよかった」

そう言って、薙刀の人は笑った。
・・・・今になってよく見てみると、きれいな人だなぁ。
あんなに戦えるし、わたしなんかとは大違い・・・・・。

「わたしはもう帰るけど、帰り道には気をつけてね？」
「あ、はい、ありがとうございました」

その人に一礼してから、帰ろうとして、思い出した。

「あ、あの」
「うん？」
「さっき、月白中って言いましたよね？」
「ああ、言ったね」

・・・・・だったら、

「あの、道村空也って・・・・・・」
「知ってるよ」

・・・・・・。

「・・・・・・確かにちょっと前から評判は悪くなってるけど、うちでは別に変わったところは無いかな？」
「そう・・・・・・ですか」
いいな、きっと受け入れてくれる人がいるから、そんなに悪く思われてないんだ。
・・・・・・いいな。
「じゃあ、わたしはここで、帰り気をつけてね」
「・・・・・・ん」
小さく頷いてから、その人に背中を向けて家に帰ることにする。
・・・・・・・・自分の無力を思い知った時間だった。
――――はぁ？今更気付いたの？あんたは最初っから弱いじゃないっまた！
――――あんたの実力なんて高が知れてるのよ、負けてとーぜんよ！
誰！？
――――くすくすくすっ決まってるじゃない
後ろに気配を感じた。
――――わたしはあんたよ
振り返ると、

――――ハァーイ、こ・ん・ば・ん・は？

翌朝。

今日もいつも通りに、登校するはずだったんだが。

珍しく玄関が強くたたかれる音がする。

返事をしてから出ると、これまた珍しい顔がいた。

「美由紀さん？おはようござ・・・・・・」

「それどころじゃないよ！！大変！大変なの！！」

美由紀さんはかなり興奮している様子だ。

とりあえず深呼吸をさせて、落ち着かせてる。

その上で、改めて用件を聞いてみた。

「なのはが、なのはが昨日から帰ってきてないの！」

「・・・仕事か何かじゃないんですか？なのは、管理局ってのに勤めてるんでしょ？」

「連絡してみたけどいないのよ！街中も探したけどどこにもいなくて！！」

はぁ・・・・一体どうなっているんだ？

帰ってないって、だったらどこに・・・・・？

・・・しょーがないな。

「放課後、俺も友人に手伝ってもらって探してみます」

「あ、お願いね！」

「はい、それじゃあ俺はこの辺で」

美由紀さんと別れて、学校に向かうことにした。

・・・・・・・。

・・・・・・・・・・。

・・・・・・・・・・・・・・。

何か面倒ごとに巻き込まれていなきゃいいが。

第四話襲撃と失踪（後書き）

刀子のペルソナについては、『ｆａｔｅ』のセイバーがペルソナっぽくなった感じを想像してください。
さて、『お返事の部屋』いきまーす。

天ノ刃羽斬様
連続感想ありがとうございます。
ミゼばあは・・・・・・・・むふっｗ↑
ご想像にお任せしますよｗｗ（
悪評に関しては、本来はそんなに大きなことでもありませんけど、誤解や妄想もどきで大事になりすぎていますから。
３人のリアクションが上手くかけていると嬉しいです。

次回、ちょっと早いですが過去話っぽいものを。

第五話影（前書き）

彼女覚醒なるか！？

３／４：一部修正

第五話影

「探して欲しい人がいる？」

昼休み、いつもの屋上。
みんなに人探しを頼むことに。
捜索対象はもちろんなのはだ。

「ああ、昨日から行方不明らしくてな、捜索を頼まれたんだ」
「俺らは別に、なぁ？」

幽斗がみんなに確認を問うと、全員が頷いた。
・・・・・まぁ、こいつらのことだ、引き受けてくれると分かっていたが・・・・・・。
いざ受け入れてもらうとうれしいものがあるな。

「それで、その子の特徴は？」

弓成にそう言われて、今朝美由紀さんから受け取った写真を見せた。
すると刀子が珍しく驚いた顔をして、

「この子、会ったことある・・・・・」

・・・・・・！？

「本当か・・・・・！？」
「うん、昨日の夕方転生者に襲撃されてたのを助けたの」
「それは何時ごろだった？」
「えっと、結構暗かったから七時くらい」

なるほど・・・・・。
だったら、七時以前と七時以降の足取りを掴んでみる必要があるな。
早速提案をし、放課後全員で手分けして捜索をすることになった。

少年少女、聞き込み及び探索中・・・・・。

放課後、ショッピングモール『アックスボリューム』のフードコート。
みんなで集めた情報を交換した。
結果・・・・・・。

「やっぱり、七時以降の足取りが掴めないな・・・・・・」

商店街のおじさんやおばさんにも聴取をしてみたけど、情報は掴めなかった。
だが何もないと言うのも不振すぎる。
一体何があった・・・・・？

「そういえば、商店街のおじいちゃんが言ってたよ?なのはちゃん、何か悩んでる感じだったって」
「悩みって・・・・・・」
「・・・・・・」

由香の報告を聞いた弓成と刀子はじっと俺を見た。
理由がなんなのか、俺も重々承知している。
引きずってばかりだと思っていたが、あいつは他人に見られて分かるくらいに・・・・・・。

「・・・・・何か知ってるみたいだな」

幽斗が、どこか暗い口調で問いかけてきた。

視線が一気に俺に集中する。
・・・・・・そろそろ時候か。

「・・・・・・・・騎子達二年組に気付く前だから、中一の頃だったか・・・・・・・・なのはがおばあさんを庇って、ヤンキーっぽい人たちに絡まれていたのを見かけたんだ」

みんな、黙って聞いてくれている。

「流石にまずいかなって思って側に近づいてたら、なのはが路地裏に引きずり込まれている所だったんだ、それを追いかけて・・・・・・」

その追いかけて、追いついた後の時を思い出して口を閉ざしてしまう。
正直、喋っていいのか分からない。
つかの間考えた結果。

「・・・・・・・・その後は、正直自分でも何が起こったのか分かっていない、ただ、気付いた時には血まみれでなのはと向き合っていて、ちょうどそこになのはの友人達が来た」

『あとは知っての通りだ』と締めくくって、全員の反応を見てみた。
みんながみんな、微妙な表情をしている。
やがて、弓成が口を開いた。

「俺と刀子はそのときちょうど生徒会の研修生として先輩の助手をしていたんだ、空也の事件はそこで知ったんだよ」
「ということは、なのはって子の失踪原因ってそれがらみ？」
「てか、今のミッチーの話聞いてたらそうとしか思えなくなったわ」

幽斗と騎子が、確信したような顔で頷いた。

「とりあえず情報は集まったから、これからは捜索を中心にしようよ」

「りょーかい、行きそうな場所とかの情報も掴んでるしね」

刀子がまとめをして、全員がグループになって散開する。

・・・・・・・・・・。

「悪い、俺は単独行動する」

「？別にいいと思うけど、どしたの？」

由香に理由を聞かれたが、あえて無視してある場所へ向かった。

っ・・・・・・・・・。
・・・・・・・・あれ？ここは・・・・・・・・。

「・・・・・・・・・・・あ」

目の前に、真っ赤な景色が広がる。
確かここは臨海公園にある、普段誰も来ない場所だ。
わたしも『あの人』もまだ小さい頃に見つけて、二人だけの秘密にした場所・・・・・。
一年中紅葉している、不思議なところだ。
けど、どうしてここに？
あの後は真っ直ぐ帰ったはずなのに・・・・・・・。
・・・・・・そうだ、薙刀の人に助けてもらったあと、声がして・・・・・・・。
振り返ったら・・・・・・・・・・。

「そだ、『わたし』が・・・・・！でも何で？いつの間にここに・・・・？」

ケータイを取り出して確認すると、日付が次の日になっていた。
っていうか次の日!?え、一日たってる!?
わたしここで一晩すごしたの!?
一体何がどうなって・・・・・！
もう一度ケータイを確認すると、メール、電話ともに着信履歴がすごいことになってる。

な、何がなんだか分からないけど、とにかく帰らなきゃ。
えっと、ここから出る場所は・・・・・あっちだ！
とにかく走って出口に向かうことにする。
走って走って、あとちょっとでここから出・・・・・・。

「って、え・・・・・？」

何で・・・・どうして・・・・・・？

「出れてない！？」

確かに出口に向かって行ったはずなのに、何でかまたここに入り込んでしまっている。
何で・・・・・・・？どうして・・・・・・・？

『出られるワケないじゃない』

「・・・・っ誰！？」

後ろを振り返ると、わたしとおんなじ顔をした『人』が空にいた。

「フェイト！いた！？」
「いない！」
「もう、いったいどこにおるんや！？」
「こっちもダメ！」
「こっちも！」

今アリサ、はやて、すずかの四人で、公園内を探し回っている。
エイミィにも調べてもらった。
確かになのはの反応はここから出ているのに場所が掴めない。
一体どうなって・・・・・・？
・・・・・？向こうにいるのは・・・・・・。

「っ空也！！」

まさかあいつが何か・・・・・・！
アリサ達のほうを見るとみんな気付いたらしい。
小さく頷いて、後を追うことにした。

「本当にあの場所にいるのか！？」
――ああ、だが妙な力が蔓延している、心してかかれ
「分かっている！」

ただひたすらに走って、『あの場所』へ向かう。
近づくにつれて、真っ赤なが楓増えてくる。
同時に妙な気配も強くなってくる。
と、その時、

「ああっ！」

なのはの悲鳴が聞こえた。

何とか着地の態勢をとって、地面に立つ。
今わたしが纏っているのはバリアジャケット。

ただし、いつものアグレッサーではなく、フルドライブのエクシードだけど・・・・・・。
それでも相手に傷を付けられていない。

『あはははははははははっ！！』

目の前で笑い声を上げている相手は、金色の目以外は、同じ姿、同じ魔法、髪の色、声まで同じ。
・・・・・・同じ、なのに。

『よっわーい！そんなんじゃわたしは倒せないよぉ～？』

そう言ってまた高笑いを上げた『わたし』は歪な黒い杖を振りまわしている。

「・・・・・・っうぐ・・・・・・」

立ち上がろうとしたけど、体が動かない、痛みが邪魔している。
こんな戦い初めてだ。
無理に動かした所為なのか、せっかく血が止まった腕の傷から、また血が流れ出している。
すると、前のほうから足音が聞こえてきた。
ばたばたと不揃いなテンポを刻んでいることから、それが二人以上だと簡単に推測できる。

「なのは！」

案の定、真っ暗な中から現れたのはフェイトちゃん達だった。
こっちを見たみんなは、もう一人の『わたし』を見て驚いている。
一方、もう一人の『わたし』は、みんなが来たのを見計らったよう

に、にやにや笑って、こっちを見た。

『不屈なんて無くなればいいのにね？』

突然口を開いた。

『わたしはずるい子、みんなに構ってもらいたがりの弱い子』

「っな、何を・・・・・」

背筋にぞくっと電撃が走るような感覚がする。

同時に、やめて欲しいと願った。

『独りが怖い、誰でもいいから隣にいて欲しい』

「・・・・・・！」

思わず頭を抱え込んでしまう。

『独りぼっちは怖いよねー？みんなに囲まれていたいもんねー？』

「ち、ちが・・・・・」

震えがとまらない。

『だからみんなの気を引くために綺麗ごとほざいたり無茶やったりする！！』

「っやめて！！」

突然、『わたし』がお腹を抱えて笑い出して。

『そしたら大当たりじゃない！みんなみんなわたしを見てくれる！卑怯者でばかばかしいわたしをね！！』

「・・・・・・・・いや・・・・・・・・」

あの子が言ってることが的を射ていたからなのか、無意識に言葉が出てくる。

『くすくすくすっ、ねぇ覚えてる～？六年前に【みんな】と戦ったときのこと、わくわくしたよね～？上手くいけば恩人としてみてもらえるんだからさぁ～』

「・・・・・やだ、見な・・・・・・・・」

震えがいっそう強くなった。

フェイトちゃん達に向けて、拒絶のような言葉を言ってしまう。

『そしてこれも大当たり！フェイトちゃんもはやてちゃんも、わたしを頼ってくれた！！弱っちぃわたしをね！！』

「見ないで・・・・・・・」

ふっと、フェイトちゃん達のほうに視線を向ける。

みんなはまだ何が起きているのか、理解できていないみたいだった。

・・・・・・・ほっとした自分がいた。

「あ、あなたは何なの！？勝手なことばかり言わないでよ！！」

せめてもの抵抗に、『わたし』に向かって怒鳴る。

すると、『わたし』はまたにやっと笑って、

『何度も言わせないでよ、わたしは、あなたよ』

「ち、違う・・・・・・！そんなはずない・・・・・・・！！あなたなんか・・・・・・・あなたなんか・・・・・・」

震える声で、

「わたしじゃない！！」

『わたし』を否定した。

「なに勝手なことほざいてるのよあんた！！」

「そうだよ！なのはちゃんがそんなこと思うわけ無いじゃない！！」

「なんや状況わからへんけど、もう御託はごめんや！」

「あなたがなのはな訳ない！なのはであって堪るか！！」

はやてちゃんとフェイトちゃんが、アリサちゃんとすずかちゃんの二人を下がらせて、デバイスを起動させる。

その時だった。

『・・・・・・・っく・・・・・・・くつくつくつくつくつっ・・・・・・・・・あーっはっはっはっはっ！！！』

『わたし』が今までに無いくらい大笑いして、赤黒いオーラを噴出した。

『あははははっあはははははっ！！気持ちいい～さぁーいこぉ～・・・・・・！！』

赤黒いオーラは、段々と『わたし』を包み込んですっぽり覆い隠してしまう。

『そんなこと言われたら・・・・・・わたし・・・・・・・』

同時に、意識をごっそり持っていかれる感覚がした。

視界が一気に暗くなって、街の明かりと『わたし』がかろうじて見える状態になる。
そんなわたしが、完全に気絶する瞬間に見たのは、

『暴れたくなっちゃうじゃなぁ～いっ！！』

バケモノに変わってしまった『わたし』の姿だった。

――――もうよせ空也！！このままだとお前の腕が・・・・・！
「だからって諦める人物じゃないことはお前が一番知っているだろう！！」

声のするほうへむかっていると結界のようなものにぶち当たり、何とか突破しようとしている次第だ。

刀で何度も斬り付けるが、キリがない。
やけに硬い結界だぞ・・・・・。
何度目か分からない斬撃を繰り出した時、結界にひびが入った。

「っよし！」
――――あとは任せろ！！

バックステップで一旦退く。
次の瞬間にはひびに雷撃が叩き込まれていた。

「いくぞ！！」
――――応っ！

刀を構え直して、中のほうに再突撃する。

閑話休題。

中に入って見たのは、バケモノと戦っているテスタロッサ達と、傷つき倒れたらしいなのはを護るように、隅っこに待機しているバニングスと月村だった。
再び刀を握りなおして、敵と思われるバケモノを見据えたときに、応戦していたテスタロッサ達がバケモノに吹き飛ばされる。
そしてバケモノの視線が動く。
ただし、俺ではなく気絶しているなのはの方に、だが。

『あなたはもう要らない、だってわたしがあなたになるんだから！』

言うなり、バケモノは口に風を溜め込む。
標的は言うまでもなくなのはだ。
っ！チャージが思ったより早い・・・・・！

間に合うか!?

――おい!忘れていないだろうな!?『私達』の弱点は・・・・・・!

「こう言う時に自分を可愛がる主義じゃない!!」

そうこうしている内に、風が発射された。
予想の斜め上を行く速度でなのはに撃たれたそれを見据えながら、
ただ滅茶苦茶に走って、近づく。
だが間に合わない・・・・・・・・!
何とか、しないと・・・・・・・・!
もう必死に、『カード』を出して叩き割る。

「防げ!!」

――承知した!!

バニングス達ごとなのはを突き飛ばして、自分が盾になる。
次の瞬間、衝撃が来て、吹き飛ばされた。
ペルソナごと庇ったので、ダメージは二倍だ。
なんとか体制を立て直すものの、弱点を突かれた所為か、体が思うように動かない。
流石に無理をしすぎたか・・・・・・・。

『あらら~?乱入者さん?くふふっ楽しくなってきたわねぇ~』

目の前のバケモノは鉤爪を打ち鳴らすと、俺を見る。

『ふふっ丁度こいつらじゃ退屈してたところだしぃ?良いわよぉ~
かかってきなさい!!』

威嚇でもするかのように、バケモノはくわっと牙を見せた。
それを皮切りに、バケモノは突進してくる。
歩法を駆使してなんとかそれを避けると、バケモノに接近、一閃する。
もちろんこの程度で倒せると思っていないので、すぐに次の行動に出る。
奴が放ったのは疾風属性の攻撃。
恐らく、こちらの属性も効くはずだ。

「こい！『イザナギ』！！」
――いくぞ！ジオ！！

カードを割り、黒い中に深みのある蒼のコートを纏った俺のペルソナ、『イザナギ』は、大剣を構え、雷を落とす。
相手にダメージは通ったようだが、これといった突破口は開けなかったようだ。

「っち、弱点じゃないか・・・・・」
――だが効いてはいる、いけるぞ！
「わかった！」

構えた刀で、再び斬りかかる。

「ちょ、あんた！」

背後から、バニングスの声が聞こえる。
が、構ってる暇はないので『すっこんでろ！』とだけ言っておいた。
・・・・・あとで思ったが、仮にも女性相手にすっこんでろはあんまりだったような気がする。
バケモノの尻尾が地面を巻き込みながら薙ぎ払われてきた。

前転を利用して何とか避け、引っ込めていたイザナギを再び召喚、神経を研ぎ澄ませる。
だが体がついてこないのでは意味がなく、研ぎ澄ませる前と大差ない結果になってしまっている。
それでも負けるわけにはいかない。

『あははは、あーっはっはっはっは!!強い人はいいわね~自分で自分の身を護れる!』

突然バケモノが攻撃の手を止め、卑屈な目で俺を見てきた。
思わず俺も動きを止める。
先に受けたダメージの所為か、体が鉛を纏ったようにだるかった。
そんな俺を見ながら、バケモノは続ける。

『あんたの所為で、わたしがどれだけ背負ってきたかわかってるの?』

何処か寂しさを含めた言い方で、語りかける。

『周りは嘘ばっかり言う、本当のことを言っても誰も聞いてくれない、それどころか言わせようともしないじゃない!』

歪な杖と融合している腕を、振るった。
ごうっと、風が起こる。

『それもこれも全部、あんたの所為よ!!』

続けて、爪先をこっちに向けた。

「そうよ!だいたいあんたの所為でなのはが傷ついて、こんなこと

になってるんじゃない！！」
『うるさい！黙れ！！』

俺の後ろで吠えたバニングスに、バケモノは雷撃を打ち出した。
とっさにイザナギを向かわせ、雷撃を吸収させる。

『お前らもお前らだ！！わたしは友達のお前らに本当のことを言おうとした！！何度も！！！！』

『彼女』の発した声は、まるで呪詛を唱えているようだった。
発言するたび『彼女』の声は泣いている様に聞こえる。
俺は、戦闘態勢を解いていた。
だが戦いは終わっていない。
だから、

「・・・・・・・・・イザナギ」
――――分かっている

イザナギを傍らに寄せる。
『二人』同時に武器を構えて、『二人』同時に斬った。

どこか暗い場所にいた気分だ。
未だに重たい体を起こして、目を開ける。
目の前に、『わたし』がいた。

「・・・・・・・・・っあなたなんか・・・・・・わたしじゃ・・・・・・・・」

気絶する前のことを思い出して、そう口にしてしまう。
・・・・・・・・・分かってる、けど、認めたくない。
認めてしまったら、何か失くしちゃう気がする・・・・・・。
すると、誰かに肩を叩かれた。
反射的に振り返ると、空也がいる。
戦ってくれていたのかな?すごくぼろぼろになっている彼はわたしを見て、黙って首を振った。
そして『わたし』に目を移して、

「・・・・・・・あれは元々お前の中にいた者だ、お前が普段押さえ込んでいた感情が、許容の限界を迎えて実体化してしまった姿」

そう教えてくれながら、わたしと『わたし』の間に立つ。

「だから、お前が受け入れてあげなきゃ暴走するしかない」

受け入れて・・・・・あげなきゃ・・・・・。
空也に黙って促されて、『わたし』と向き合う。
そう言えばさっきから『わたし』はだんまりだ。
何も喋らない。
後ろから視線を感じる。
きっとフェイトちゃん達も見ているんだ。
・・・・・・・・。

「・・・・・・・難しいね、自分と向き合うって」

思わず、自嘲的な笑顔が出てきてしまう。

「あなたはわたしで、わたしはあなた、か・・・・・・・・」

確かに、『わたし』の言うとおり、そう思ってしまっている節が時々あった。
それが実体化して暴走して、みんなに知られて、見られちゃった。
・・・・・・何だか、『わたし』に遭遇したときならいざ知らず、今になってみると、もう腹を決めるしかないみたい。

「・・・・・・・・こんなわたしだけど、また一緒に歩いてくれる？」

そう、聞いてみる。
『わたし』は黙ったまま、無邪気に笑って頷いてくれた。
つられて、わたしも嬉しくなる。

「これからも、よろしくね」

『わたし』に近寄って、手を差し出した時。

「・・・・・・・・・認めるの？」

「え？」

予想していなかった言葉に、振り返る。

『友達』がみんな、まるで悪人を見るような目でわたしを見ていた。

「なのは、汚い自分を認めるの？」

「・・・・・・・確かに汚いかもね、けど、それもひっくるめてわたしだから」

「そっか・・・・・・・・・」

大丈夫だと思ってた。

みんななら、わたしも『わたし』も認めてくれると信じていた。

・・・・・・・・・・・・・・・信じて、いたのに。

「幻滅だよ」

第五話影（後書き）

わたしが書きたいのはキャラクターじゃなくて人間なんです。
と、おそらく次回に言うべきであろう言い訳をここで言ってみちゃったり。
空也含む転生者組のペルソナに関しては、一段落してから登場済みの『者』の設定を出そうかと。
あと、自分で書いててゲシュタルト崩壊起こしそうになったのはここだけの話です。
それでは『お返事の部屋』ＧＯ！

天ノ刃羽斬様
なのははもう何度も襲撃されているので、もう慣れてしまったというか。
ただ、今まで襲ってきたのが経験不足だったり、単に魔力がでかいだけの奴等だったので、その辺描写できるようになりたいですｏｒｚ
モノクロームファクターは知りませんが、『黒』っぽくかけてると嬉しいです。
あと・・・そう簡単に覚醒させませんぜｗｗｗ↑
彼女にはもうちょっと悩んでもらいます。

ＡｆｔｅｒＲａｉｎ様
初めまして、ご感想ありがとうございます。
Σ（○□○　ペルソナ４をプレイしている上に予想の斜め上を行くカップリングを妄想した方が降臨なされた！！↑
個性をかき分け切れているみたいで安心です＾＾
シャドウをシャドウっぽくかけてるといいのですが・・・・。
残念ながら剣×道はありませんが、強い女性が魅力的と言う意見には頷けます＾＾

展開に期待していただけるようがんばります！

Ｖｅｒｉｔａｓ様
ここにもいらっしゃいましたかｗｗ
言われてみればそうですね、ゲーム関係いっぱいです。
全部実際にプレイしてませんけどｖ（（
面白いって直感的に思ったものをクロスオーバーさせてるので、それがたまたまゲームだったって話じゃないんでしょうかｗ？
（以上、若本に若本で返事ｗ）

さて、次回はどうなるなのは！？
それではノシ

第六話一段落（前書き）

今回結構難産でしたよ・・・・・！

追記：所々修正。

第六話一段落

「空也！！」

心と体、両方の疲労でぐったりしたなのはを抱きかかえていると、
幽斗の声が聞こえた。
振り向くと、幽斗の後ろからは弓成達も来ている。

「わ、ちょっ、ミッチーぼろぼろじゃん！！」
「何やらかしたの！？」

流石にここまで負傷した姿を見られたらそうなるか。
早速弓成がペルソナを召喚して、治療を始めてくれる。
そのすぐ後、俺は少し考えてから、

「・・・・・刀子、アルトリアの全て遠き理想郷（アヴァロン）でなのはを・・・・・」
「え、いいけど・・・・・空也は？」
「俺は別に・・・・・なのはは被害者だからな」

つかの間考える刀子だが、すぐに了承してくれた。
召喚されたペルソナ『アルトリア』になのはを渡し、一息つく。

「ね、何があったの？」

一段落したところで、改めて由香が聞いてきた。
話していいものかどうか考え込んでしまったが、みんなを信じることにする。
こいつらなら、バニングス達のようになるはずがない。

「ふぇ、フェイトちゃん？」

テスタロッサの口から出てきた言葉に、困惑した様子のなのは。
それに構わずに八神達が口を開く。

「あんなのなのはちゃんやないに決まってる」
「だいたいあんただって否定してたじゃない」
「なのはちゃんに黒い部分なんてあるはずない」

俺も、恐らくなのはもはっきり見た。
友人四人全員が、うつろな目をしている。
それが洗脳されたようなものであるということに気付いたのは、俺だけのようだが・・・・・。

――――空也！

突然聞こえたイザナギの声。
何が起こったのか聞かなくても、『俺』が何に気付いたのかわかった。
視線が、もう一人の『なのは』の方に向かう。
そしてすぐに、彼女の様子が明らかにおかしいことを察することが出来た。
『やめてほしい』と、目が語っている。
首をふるふると横に振って、手を前に突き出し、友人の冷たい言葉の猛襲を受けているなのはを、護ろうとしていた。
だが、その行動はこれといった効果を出してくれない。
やがて、

「もうあんたを友達なんて思いたくない」
「もうあなたを仲間なんて思いたくない」
「間違っているあなたなんて、あなたじゃない」
「や、やめてよ！この子を否定しないでよ！どっちもわたしってだけの話じゃない！！」

必死になって、『なのは』を庇って、テスタロッサ達を説得しようとするなのは。
だが、とどめは無情に刺された。

「絶交だよ、なのは」

バリンっと、何かが砕ける音が聞こえた気がした。
なのはが力なく膝をつくと同時に、『なのは』にも変化が起きる。
青い、悲しみや寂しさといった負の感情を漂わせたオーラに包まれ、消えてゆく。
『なのは』は今にも泣き出しそうな顔で、なのはに向けて必死に手を伸ばした。

なのはが手を取ってくれなくても良かったようだった。
ただ、届けばいいと思っているようだった。
しかし背中を向けて去るテスタロッサ達を、呆然と見送るなのはに、触れることすら叶わないまま、『なのは』は完全に消え去り、一枚のカードを残す。
それは一瞬だけ存在した後、青いもやを発しながら砕けて完全に消えた。

「・・・・・・・・・なのは」

未だに愕然とした表情をしているなのはに、声を掛けるしか出来ない。
――――強い人はいいよね。
ついさきほど、『なのは』に言われた言葉が脳裏をよぎる。
・・・・・・・・・俺は強くない。
目の前で傷ついた幼馴染すら救えない、最低な人間だ。
そうやって自己嫌悪に浸っている時、隣でどさっと、何か重いものが落ちる音がする。
はっと現実に戻ると、なのはが倒れていた。

「お前達が来たのは、そのすぐあとだ」

黙り込んだみんなを見渡して、締めくくる。
いつのまにか、俺もなのはも治療は済んでいた。
なのはが纏っていた武装も解除されている。
ちなみにだが、お察しの通り、俺となのはは幼い頃からの付き合いだ。
魔法を使えることくらい知ってるし、あのＲＰＧっぽい服装が防具だってことくらい分かる。
とにかく、なのはを家に送ることが先決だ。
・・・・・・正直、気まずい部分があるが、仕方ない。
そのことを話すと、みんなが同行してくれるといってくれた。
みんなに感謝しつつ、高町家に向かうことにした。

どうして・・・・・!?

こんなことって・・・・・・・!!

認めてくれたのに・・・・・・・・・

一緒に歩こうって言ってくれたのに!!

そんな・・・・・・・・・・

また、閉じ込められるの・・・・・・・・・・?

ダメだ・・・・・・・・・

・・・・・・・・

また、独りに・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

なのは・・・・・・・・

俺たちは今、高町家の玄関前にいる。

・・・・・・さっさと入ればいいだろうって？

残念、そうも行かない理由があるんだ。

目の前には黙ってこっちを睨む男性が一人。

もちろん、士郎さんだ。

玄関の一歩手前にある門を潜ったところに仁王立ちしていたもんだから、動こうにも動けない状態にある。
さらに広い家とは言え、ここは玄関。
本来は通り過ぎる場所だ。
そこに9人も立ち往生するとなると、流石に狭く感じる。
・・・・・・ぶっちゃけ、沈黙がかなり痛い。
それを破ったのは原因である士郎さんだった。

「・・・・・・・何があったのかは、フェイトちゃんたちから聞いた」

・・・・・・あいつら、士郎さんに告げ口したのか。
『けど』と士郎さんは続ける。

「俺はなのはの親であり家族だ、判断はなのはの言い分を聞いてからにと思ったが・・・・・・」

視線が、俺におぶさっているなのはに向かう。

「・・・・・・・空也くん、変わりに君が話してくれないか?」
「・・・・分かりました」

なのはにも俺にも、疚しいところなんで一つもない。
だから、堂々と返事をした。

閑話休題。

なのはの心の闇が暴走したこと、本人がそれを受け入れたものの、友人達が拒絶したこと。
先ほど起こったことを、出来るだけ詳しく聞かせた。

聞き終えた士郎さん含む高町家のみんなは、真剣に考え込む。
やがて、

「・・・・・・俺は、なのはに非はないと考えている、お前達はどうだ？」
「わたしも同意、そりゃ信じてる人や自分のの真っ黒い部分を突きつけられたら、動揺はしちゃうけどさ、それでも受け入れたなのははえらいと思う」

士郎さんの問いかけに、美由紀さんが少し笑いながら答える。
桃子さんも何も言わなかったものの、なのはのことを信じてくれているのは人目で分かった。
・・・・・・いい家族に恵まれたんだな、なのは。
ちなみになのはは自室に運ばれた。
今頃静かに寝ているんだろう。

「しかし、君・・・・いや、君達が転生者とはね」

実は、事情を話すにあたって、転生者であることを士郎さん達に打ち明けた。
重たかった空気が、少しだけ軽くなる。

「はい、といってもなのはに危害を加えるつもりは毛頭ありませんし、させません」

胸をはって、堂々と言い切る。
対する高町家の皆さんは優しく笑って、

「そりゃ頼もしいね・・・・・・娘を、よろしく」

言うなり、士郎さんは深々と頭を下げた。
少し照れくさかったが、信頼されているのはとても嬉しかった。
ほんの少しのあいだ、和やかな空気が流れたが、

「今の会話、何にも知らない人が台詞だけ聞いたら、結婚の許しをもらいに来た娘の彼氏と父親っぽいよね」
「ぽいじゃなくて、まさにそれだと思うなぁ～」

騎子と由香が要らんことを言いおった。
空気が固まって、士郎さんから何やら怪しいオーラが滲み出てきた気がする。
とりあえず、原因になった二人を睨みつけておいた。

「こ、これからどうするんすか？主に学校とか！あいつらと同じなんでしょ？」

何とか嫌な予感を外れさせる為にか、幽斗がそう提案した。

「あ、そうだね、空也の話だとかなり嫌われちゃったみたいだし、そんなんだったら・・・・その・・・・・・いじめ、とか・・・・・・・」

最後の部分を控えめに発言しながら、美由紀さんが答えた。
士郎さん桃子さん夫妻も、頭をかかけて熟考し始める。
と、今度は槍馬が手を挙げて、

「じゃあうちに来れば？」
月白中

まるで泊まる所がないなら来いよ的なのりで、さらっと言ってのけた。

だが、言っていることは双子の妹と違い、なんというか、まとも（？）な意見だ。
高町家の皆さんもそれだっていう表情をしている。
とりあえず、今後の方針の選択としては最重要候補に挙がったのはたしかだった。
本人に意見を聞く必要があるからということと、もう遅いことが重なったので、解散することになった。

まぶしい。
何かやわらかいものに包まれている感じがする。

これは・・・・お布団？
・・・・ああ、わたし、帰ってきたんだ。
・・・・・・・・・・学校、いかなきゃ。

「・・・・・・・・・っ」

制服に手をかけたとき、背筋に寒気が走った。
同時に吐き気がしてくる。
・・・・・・・苦しい、全身が痛い。
上手く息が出来ない。
・・・・・これは、遅刻覚悟しなきゃかな？
しばらく部屋にうずくまっていると、痛みが退いてきた。
苦しくて吸えなかった分の空気を思いっきり吸って、ため息をつく。
時計を見ると、もうどんなに頑張っても絶望的な時間だった。
また、ため息が出る。
なんだか制服を触るのが怖くなってきた。
けど、パジャマのまま下に降りるわけにも行かない。
・・・・・・・・考えた結果、普段着を来ておりることにした。

階段を下りると、お母さんが台所でお皿を洗っていた。
お父さんもお姉ちゃんもいないみたいだね。
テーブルの上にはわたしの分らしい朝ごはんが置いてあった。
席に着こうとするとお母さんがこっちに気付いて、近寄ってくる。
・・・・・・怒られる、かな。
結構遅い時間に起きたし、遅刻決定だし・・・・・・。

「あ、なのは、おはよう」
「・・・・・ん、おはよ」

・・・・・・？
お咎め、無し？
あれ？でも時間的にはアウト、だよね？

「なのは、今日学校行かなくてもいいから」
「・・・・・・・え？」

え、えと、どういうこと？

「・・・・・・・昨日空也くん達から色々聞いたの・・・・それに、思うところもあるだろうから」

お母さんは笑っているけど、どこか暗い。
・・・・・・・・何だか、罪悪感が沸いてきた。

「・・・・・ごめんなさい」
「いいのよ・・・・大変だったわね」

そういうと、頭を撫でてくれた。

「あ、じゃあ翠屋の手伝い・・・・・・」

流石にこのまま家に引きこもるわけにもいかない。
けど、お母さんは首を横に振って、

「それもいいわ・・・・あの子達に会ってしまったら何をされるか・・・・・」

お母さんの顔は、すごく心配している。

・・・・・・。

「うん、わかった」

今のわたしに出来ることは限られすぎている。
だからここは、お母さんの言うとおりにすることにした。

屋上で大の字になって寝転んでいる。
今日は弓成達もいないので、俺一人だ。
昨日の出来事を思い出していた。
なのはのこともそうだが、それよりも彼女を拒絶したバニングス達

のことを考えている。
見間違えでなければ、あいつ等の目は明らかに操られている類のそれだった。
・・・・・・何者かに、思考をいじられたのか？

「お前はどう思う？イザナギ」
――――同感だ、というか明らかに感じ取ったぞ・・・・・・精神が操り人形にされているようだった
「そうか・・・・・・」

なのはとあいつら全員の共通点といえば、

「時空管理局・・・・・・ばあさんがかかわっているとは思えないが、確認を取る必要があるな」
――――そうだな、聞いておく必要があるだろう

丁度六時間目のチャイムが鳴る。
・・・・・・・・ホームルームには出席しておくかな。

少年、学業&移動中・・・・・・・・。

帰り道。

「んー・・・・・・洗脳、か」
「確かに考えられなくもないよね」

考え始める幽斗と由香。
弓成と刀子も『ありかも・・・・』という顔をしていた。

「じゃあ帰ったらおばあさんに連絡だね、俺が引き受けるから、みんなはゆっくり休んで」

思考がまとまったらしい弓成が、連絡を引き受けてくれた。
というか、そういう難しいことは伊達兄妹より弓成に任せたほうが安心できる。

「あ、そーだ！ミッチー！！」

別れ際、騎子がこっちに手を振ってきた。

「なのはちゃん！声かけてあげなよ～！？」
「・・・・・りょーかい」
「あっはー！それじゃあした聞かせてねー！」

あいつの表情からして、絶対に声を掛けなければならないようだ。
・・・・・・顔くらい見ていくことにした。

俺は今、高町家前にいる。
・・・・・一年振りとはいえ、ちょっと緊張する。
門のベルを押す。
出てきたら何を言おうか、頭の中を整理しているが・・・・・。

「・・・・・・出てこない」

一分くらい突っ立っていたけど、何の反応もない。
・・・・・・まだ帰ってきていないか？
まだ学校に行っている・・・・？
洗脳されているかもしれないとはいえ、かなり毛嫌いされた翌日に？
・・・・・・・・・・・・・・・気はひけるが、まぁ仕方ないか。

――――ここが高町家じゃなかったら、不法侵入だな。

それは言うな、イザナギ。
裏手に回って塀に飛び乗ってから、続けて飛び降りる。
・・・・・・・小さい頃はよくこの方法で入り込んでいたものだ。
久しぶりにやった所為か、ドスンっと音を立ててしまった。

「うにゃっ！？え、なになに！？」

案の定、感づかれた。
だが中からなのはの声が聞こえたので、家にいたようだ。

「く、空也！？ど、どしてここに！？」
「友達に様子見てこいと強制された、以上」

制服についた埃をはらいつつ、なのはに歩みよる。

一方のなのはは戸惑ってはいるが、くすっと笑って、

「にゃはは、もう・・・・空也じゃなかったら警察に電話だよ？」

「む・・・・スマン」

一瞬黙った後、思わず二人で笑ってしまった。

なのははまだこみ上げてくる笑いを抑えながら、

「ふふっ・・・・・お茶とコーヒーどっちがいい？」

「お茶、緑の方な」

「うん」

縁側に座ると同時に、なのはが家の中へ入っていく。

久しぶりに見る高町家の庭と道場を眺めながら、ぼーっとしている

ことにした。

閑話休題。

なのはが入れてくれたお茶をすすりながら、何を話そうかをまた考

え始める。

そう言えば、今日は学校にいったのだろうか・・・・・・。

聞いてみることにした。

「・・・・・今日、学校にいったか？」

「・・・・・・・・いってない」

なのはの表情が若干曇ったのを見てしまった。

慌てて慰めの言葉をさがしてみるが見つかりそうにない。

・・・・・・・。

「・・・・・そっか」

結局、それだけしか返すことが出来なかった。
なのはは困ったように笑う。
俺もつられて、口角を上げてしまった。

「・・・・・大丈夫か？」
「・・・・・多分」

今度は自嘲気味に笑いながら、なのはが返す。
・・・・・そういえばさっきから笑ってばっかりだが、大丈夫なのだろうか？

「・・・・・・泣かないのか？」
「自業自得だもん、泣けないというより泣いちゃダメ」

そういって、寂しそうにうつむく。
・・・・・何か言ってやりたかったが、また何も見つからなかった。
気まずい気持ちで、ぬるくなったお茶を飲んだ時。

ぽたり

思わず隣を見た。
かなり驚いている様子の表情から、大きな水滴がぽたぽた落ちている。

「・・・・・あ・・・・・・・れ・・・・・・・・？」

一方の彼女は、ただ呆然として落ちたそれを見ていた。
手に落ちたそれを見つめた後、両手で拭う。
もちろんそれだけじゃ止められない。

「あれ？・・・・・・あれ・・・・・・・？」

何度も何度も拭う。
それでも涙は止まらない。

「・・・・・・・・・」

いつのまにか、無言で抱きしめていた。
宥めつつ、頭を撫でる。
流石に叫びはしなかったが、感情が爆発したらしく、そのまま声をあげて泣き出した。
必死に声を押し殺して泣きじゃくる。
・・・・本人の為にも、このことは見なかったことにした。

「なんか・・・・・ごめん」
「別に、気にするな」

大分落ち着いたなのはは、目を真っ赤にして謝ってきた。
もちろん服が濡れた程度で気にするほど神経質なつもりはない。
完全に落ち着いたのを見計らってから、昨日彼女が眠っている間にあったことを教える。

「それって、転校・・・・・・・だよね？」
「そうなるな、一応士郎さん達はお前の意見を聞いてから決めたいらしい」

なのはが考え込む。

「ま、決めるのは高町家だから、俺はとやかく言わんぞ」

そろそろ帰らなければならない時間なので、その場を後にすることにした。

「あ、送ろうか？」
「いや、向かいだからいい」

見送りを断ってから、来た時とは別に玄関から出て行く。
縁側から出て行く時なんとなく振り返ってみると、考え込んでいるなのはが見えた。

第六話一段落（後書き）

というわけで転校フラグ回でした。
なのはさんは人間なんだから、もっと泣いても言いと思うんです。
そんな『お返事の部屋』いきまっせー。

謎様
お久しぶりです。
またまた毒舌なご感想ありがとうございますｗ
自分でも投稿したあとにあの展開はないなーっと思って、洗脳フラグを立ててみました。
ここだけの話、離脱はしませんよｗ？スカ側にもつきませんし六課にも一応参加させようかなっと思ってます。
ただその場合、彼女に若干（というか、かなり）変化が見られることになりますが、それはまた別のお話と言うことでｗｗ

三毛猫ヤマト様
初めまして、さばくです。
この小説を書こうと思った切欠が４だったので、所々参考にしてます。
シャドウが語る日ごろの鬱憤と言うか、不満と言うか、そういうものがしっかり描写できてるといいと思います＾＾；
空也のペルソナは『イザナギであってイザナギではありません』
アルカナもありませんし、ワイルドも名前は同じですが、違った内容になります。
本作のシャドウ対面についてですが、４で例えるとそんな感じになるでしょうね。
まぁ、彼女の場合、多少抵抗しつつ受け入れそうな感じがしますｗｗ

Ｖｅｒｉｔａｓ様
今日の俺は紳士的だぁ、楽ぅ～に返信してやるぅぅぅ。
・・・・・・・・ごほんっ！↑
前回の後書きでも述べたと思うのですが、わたしが書きたいのはキャラクターではなく人間なので、ぶっちゃけ、アニメみたいなきらっきらしすぎるような展開は期待しないほうがいいですｗｗｗ（えＴＯＶのほうも同じ理由でそんな感じだったりします。
またぶっちゃけてしまうと、ＴＯＶのほうでは『関係が酷くなることもあるけど、仲間っていいよね』ってのをかきたくて、こっちでは『人間は醜いときもあるけど、素晴らしい時もあるんだよね』って言うのを書きたいんです。
さて、次回はついに空也のグループになのはが加わります、けど・・・・・？
それでは。

第七話転校（前書き）

まんまタイトルどおりですｗｗ

３／１８：修正。

３／２４：後半を書き直し。

第七話転校

月白中学校、三年五組。
クラスメイト達がいつになく騒いでいる。

「転校生がくるってさ」
「こんな時期に？運悪いなそいつ、この後にあるイベントっつったら期末くらいだろ？」

その転校生が誰かって？
分かる人には分かるだろうから何も言わんぞ？

「しずかにしろー」

チャイムが鳴って、担任が入ってきた。
いつもよく思うのだが、やる気なさげな声だ。
まぁ、そういうのがうちの担任である『御坂智紀（みさかともとし）』なわけだが。
・・・・・・・ちなみに某レールガンとは一切関係ないのであしからず。

「あー、知ってる人もいると思うが、このクラスに転校生が来ることになった」

またざわざわするみんなを宥めて、

「転校にも事情ってものがあるから、期末が近いから可哀想とか、余計なことは思わないように」

考えていたことを当てられて、苦笑いしたり笑顔が引きつったりす

る奴がいた。
またまたざわついたクラスが静まり返るのを待ってから、扉の方に顔を向ける。

「それじゃあ入って来い！」

言われて入ってきた人物に、クラス中が沸いた。
・・・・・・主に男子が。

「今日からここに通うことになりました、高町なのはです、よろしくお願いします」

若干の緊張が見られたが、噛まなかったので大丈夫だろう。
たまたま空いていた俺の隣の席に座った。
小さく手を上げて挨拶する。
彼女は、照れくさそうに小さく笑って返してくれた。

その直後の休み時間。
案の定、なのはは質問攻めにされていた。
こいつの名前、聖祥と反対方向にあるここまで轟いていたからな。
・・・・・・おもに美人の意味で。

「ホントにあの高町なのはなんだよね！？」
「美人の秘訣って何！？」
「何人に告られた！？何人フッた！？」
「急な転校だよね、なんでこんな時期に？」
「あ、えと・・・・・！」

容赦なく質問されて、たじたじになっているなのはを見ているのは、結構面白かった。

「とゆーわけで！月白中にいらっしゃーい！！」

いつもの屋上。
騎子がいつも以上のハイテンションで、購買で買ってきたジュースを上に突き上げた。
その横でなのはは、戸惑いつつも嬉しそうに笑っている。

「はいじゃあ自己紹介！槍馬からねー！」
「え、俺？」

騎子の進行で、槍馬に話が振られる。
槍馬は面倒くさそうに顔をしかめたが、小さくため息をついた。

「・・・・・伊達槍馬、二年一組でそこのハイテンションの双子の兄」
「でーあたしは伊達騎子！ソーマの双子の妹ね！」
「わたしは狂咲由香、学年もクラスもソーマ君達と一緒だよ」
二年組みが挨拶を済ませたようなので、今度は俺達三年組みの番だ。
「俺は鷹宮弓成、空也とは同じ三年五組で、この学校の生徒会長をやってるよ」
「久しぶり・・・・・なのかな？わたしは剣ヶ原刀子、この学校の副生徒会長だから、弓成の右腕みたいなポジションだね」
「初対面組みじゃラストか・・・・・同じく三年五組東雲幽斗、生徒会役員でもなんでもないけど、ま、よろしく」
三年組みも握手を交わす。
・・・・・手を握る時、なのはが一瞬震えたように見えたんだが・・・・・・大丈夫だろうか？
・・・・・・・・今は詮索するだけ無駄、か。
自己紹介が済んだ後は、他愛ない話や、聖祥での思い出話などを語り合った。
と、幽斗が何か疑問を思い出したらしく、全員を見回したあと、なのはに目をやる。
「そういや・・・・何かトラウマ掘り起こすようで悪いけど、なのははもう一人の自分を受け入れたんだよな？」
その問いかけに、なのははほんの少しだけ表情を暗くする。
だがそれもつかの間、

「・・・・うん、そうだよ」

精一杯に作り笑いして、答えた。

幽斗は申し訳なさそうに笑い返してから、

「だったら、俺たちと同じように、ペルソナ使えるようになってるんじゃねーの？」

「ぺるそな・・・・・？」

彼女にとっては聞きなれない単語らしい。

まぁ、当たり前っちゃ当たり前なんだが・・・・・。

首をかしげるなのはに刀子が説明を入れる。

「ペルソナって言うのは、簡単に言っちゃえば、自分の奥底に眠っているもう一人の自分のことだね」

「普段抑圧しているそれを自我が制御することによって、自分を護る武器になる『力』のことだよ」

「な、なるほど・・・・」

弓成が入れた補足を聞きながら、頷くなのは。

この流れだと、見せたほうがいいだろうな。

俺はそう判断して、軽く目を閉じる。

思考内容は、ペルソナの召喚。

一呼吸おいて目をゆっくりあけると、一枚のカードが手のひらの上にあった。

こっちに気付いたなのはは、興味深そうに俺の手のひらを覗き込んでいる。

「これがペルソナを召喚するときに使うカード、持ち主本人が叩くなりなんなりして破壊することによって、ペルソナを呼び出すこと

が出来るんだ」
「へぇ・・・・・」
なのはがさわってもいいかと聞いてきたので、カードを渡した。
俺以外には破壊できないカードなので、損傷の危険はない。
まじまじとカードを見つめる彼女に、由香が身を乗り出して、
「なのはちゃん、召喚やってみたら？」
由香のいきなりの提案に、思わずポカンとしちゃってて。
「・・・・・・・ふぇ？」
次の瞬間には、そんな間の抜けた返事をしていた。
「そーだね、出さないままでもどんな子かは弓成が調べられるけど、やっぱ実際に見たほうがいいと思うよ？」
騎子が由香に賛同する。
その隣にいた槍馬も黙って同意していた。
「え、でも、どうすれば・・・・・・」

やっぱり初めてだと何していいか分からないし、その・・・・・こんなところでもし失敗しちゃったら、みんなに迷惑かけちゃうし・・・・・。

どうしようか、悩んでると、

「簡単だ、召喚したいと思えばいい」

「そ、そうなの？」

「ああ、そしたらカードが出てくるはずだから、それを割るんだ、素手でも出来るし、今後使う機会もあるかもしれないから、今やっておいて損はないと思うが・・・・・？」

うだうだ悩んでいるわたしを見かねたのか、空也がアドバイスをくれた。

召喚したいと、思うだけ・・・・・・・・・。

「・・・・・・ん、わかった」

姿勢を正して目を閉じ、集中し始める。

わたしの中にいる、もう一人の『わたし』に意識を向けて、来てくれるように、力を貸してくれるように願いながら、集中する。

・・・・・・・・・・いつまでたっても、手にカードの感触が出てこなかった。

段々息が苦しくなって、思わず咳き込んでしまう。

体がだるくなって、若干吐き気もしてきた。

刀子ちゃんが、背中をさすってくれる。

「なのはさんごめん、無茶しなくていいから、そのままじっとしてて？」

途中弓成くんが、刀子ちゃんと一緒に背中をさすってくれてから、一歩後ろに下がって、カードを出した。

「ロビンフッド、アナライズ」

――りょーかい！任せな、相棒！

弓成くんがカードを割ると同時に、迷彩柄のコートを着た人のようなものが現れた。

『ロビンフッド』っていうらしいその『人』は、両腕がボウガンになっていて、顔はカメラみたいな左目と犬みたいな耳以外、何も付いていない。

そのカメラみたいな左目をわたしに向けて、レンズを動かしていた。

・・・・・気のせいかな？刀子ちゃんが助けてくれた時一緒にいたあの女の人と、雰囲気が似ている。

これが、ペルソナ・・・・・？

――・・・・・嬢ちゃん、ちょっとやっかいなことになってんぜ？

「・・・・・え？」

――いやな、ペルソナは確かに生まれてんだけど、外に出られないみたいだ

外に、出られない・・・・・？

「何か枷を付けられてるみたいな感じだね、けど、どんな子かはだいたい分かった」

「そうなの？」

そう聞いたわたしに頷く弓成くん。

「ペルソナって普通はアルカナっていうのに属しているんだ」

「ちなみにアルカナってのはタロットカードの分類ね、人間が生み出せるのは、愚者から死神までの十三だって言われてる」

「そう、けど、俺たちのはちょっと変わってて・・・・・」

タロットカード・・・・なんだかマニアックな言葉が出てきたなぁ。というか、ちょっと変わってるって・・・・？

「愚者から死神どころか、どのアルカナにも属していないんだよ～」

由香がのんびりした声で、そう言った。

・・・・・・・何だかペルソナについて知ってる人が聞いたら、びっくりしそうなことをさらっと言った気がする・・・・・・。

「アルカナとは違う、別の分類に属しているんだ」

空也が、そう教えてくれた。

「俺は弓兵、騎子は騎兵、刀子は剣士、幽斗は暗殺者、由香は狂戦士、槍馬は槍兵、そして空也は道化師・・・・・」

弓成くんがその分類を教えてくれる。

すると今度は騎子が私の顔を覗き込んだ。

「ちなみにこの分類、道化師以外はあたしが前はまってたゲームと同じだから、ちょっと親近感沸いたりするんだよね～」

「今俺がロビンフッドを通して見た分類は『魔術師』・・・・これでその騎子がはまってたっていうゲームのクラスがそろったことになる」

説明することは一通り終わったらしくて、弓成くんはロビンフッドを収めていた。

「ま、難しい話はここまでだ！」

「そーだ！いっそアックスで二次会やらない！？」

真面目なお話が終わった途端に、幽斗くんと騎子のテンションがあがったのが分かる。

二人ともニコニコして、『二次会』についての話で盛り上がっていた。

・・・・それよりも、

「アックスって？」

「正式名称『アックスボリューム』、近隣にあるショッピングモールで、月白中生の寄り道として人気がある」

わたしの疑問に、空也が答えてくれた。

空也はため息をついて、

「まぁ、テンション高すぎて困るときもあるけど、それなりにいい奴等だから、大丈夫だ」

言い切った顔に、ちょっとだけ笑顔が浮かんでいた。

・・・・・ほんとに小さいものだったけど、わたしの貼り付けたものに比べたら、何倍もいいものだった。

・・・・・・・わたしも、こんな風に笑えたらいいな。

そういえば・・・・・・。

「空也達はどうやって覚醒したの?」

「ん?ああ、そうだな・・・・・・士郎さん達から、俺たちのことは聞いたか?」

・・・・・・それって、

「空也達が転生者ってこと?」

「ん、それと関係している」

空也は、一回息を吸ってから、

「自分の死を受け入れること」

昼休み終了のチャイムが鳴ったので、屋上での話し合いはお開きになった。

放課後、アックスボリューム。

今屋上にあるフードコートで『二次会』の名前を借りた・・・・・・。

「なのはちゃん、ここは？」
「そこはこれをこうね」
「えっと・・・・・・・・・わぁ、できた！」

勉強会をやっています。
いや、アックスボリュームに来たのはいいけど、期末が近いって話をしてたら、勉強会に摩り替わっていたというか、なんというか・・・・・。
でもテストが近いんならやっておいて損は無いと思う。

「ね、なのはちゃん、これ分かる？」
「どれ・・・・・あー・・・・・・・」

これは・・・・・・・・。

「ごめん騎子、わたし文系はダメなんだ」
「あー、ごめん、でもなんか意外」
「にゃはは、でもわたしにだって苦手なものあるよ？」
「それもそーだねー」

笑いあってから、また問題を解き始める。
会話をはさみながらやった勉強は、いつもよりはかどった気がする。
・・・・・・・・。
知識ががっちり固まった！

第七話転校（後書き）

※3／24なんだか色々つまってしまったので、後半を大幅に書き直し。
次回あたりはほのぼのを書きたいです。
それではお返事の部屋、いきまっせー。

三毛猫ヤマト様
修復させましたｗｗ
なのはから空也への呼び方についてですが、二人はご近所さんなのでちっちゃいころから兄妹みたいに育ってきたので、互いに『くん・ちゃん』付けせずに名前だけで呼び合っている次第です。
ペルソナは転生・・・・・っぽいことはすると思いますｗｗ

それではノシ

第八話夏スタート！！（前書き）

なんとか更新にこぎつけられました・・・・・。
さて、いよいよ夏休みです。

第八話夏スタート！！

「ばあさん、ちょっといいか？」
『あらあら、あなたから連絡なんて珍しいわねぇ？』

モニターの向こうで平和面しているばあさんを見ると、一気に脱力してしまう。
ずっと見てると本題を忘れてしまいそうなので、とっとと切り出すことにした。

「ばあさん、なのはについてちょっと頼みがある」
『・・・・・・・なぁに？』

今の間は何なんだろうか？
・・・・気にしてしまうといけない気がしたのでその考えは捨てる。
ばあさんに、先日のことを話した。

『その話なら弓ちゃんから聞いたわ・・・・・・それで、わたしはなにをすればいいのかしら？』
「・・・・・・なのはを、管理局から離してくれないか？」

ばあさんの目つきが、ほんの少しだけ鋭くなった瞬間を見てしまった。
不覚にも背筋がぞわっとなってしまう。

『・・・・・・確かにあの子達は上層部に頭をいじられている、それこそ、時に友人を裏切ってしまうほどにね』
「・・・・・・」

時空管理局・・・・・・・・表向きは正義の組織が聞いて呆れる。
というか、部下の頭いじくったり、人を人と思わない実験をしておいて、何が正義だ。

『なのはさんがその裏切られた側にいる今、遠ざけるのが得策でしょうね・・・・・・出来る限りのことはやってみるわ』
「・・・・・・ありがとう、じいさん達によろしくな」

いつのまにかばあさんの目は元の平和ボケした目に戻っていた。

剣を握り目の前の敵をにらむ。
奴は表情を読み取らせようとせず、考えていることも想像できない。
力だけでは叶わないことは重々承知している。
しかるべき知識を持ってして・・・・・・。

「何考えてんだ」
「いでっ！」

テスト問題を睨んでたらソーマにチョップされた。
地味に痛い・・・・・!!
ちなみにあたし達がいるのはアックスのフードコード。
期末の一日目が終わったので、みんなで答えあわせをしている。

「あうぅ・・・・・ね、理科の問題で『植物の根の成長過程を調査する為に用いられる紅い液体を答えなさい』ってのがでたんだけど、由香は解けた?」
「酢酸」

ちょっ!そんな七人全員で答えなくても!!
しかもタイミングぴったりな上に即答!?

「由香に答えて欲しかったなぁ!?」
「や、俺たちもこんなタイミングが合うとは・・・・」

うわあああん!?

「ちなみに騎子はなんて答えたの?」
「・・・・・・食紅」
「あー・・・・・」
「まぁ、なんてーの?当たらずとも遠からず?」
「だろうな」

ちくしょう・・・・・!
・・・・・あ、

「で、でも数学はいつもより解けたよ!?二次方程式はカンペキのはず!」

「そうなの？」
「そうそう！なのはちゃんの説明分かりやすかったし！」
「にゃはは・・・・」

誉められたのが嬉しいのか、なのはちゃんは照れくさそうにほっぺたをかいてた。

「そうだ、わたしもちょっと分からないところがあったんだけど・・・」
「どこ？」

そういうとなのはちゃんは鞄からテスト問題を取り出す。
教科は・・・国語だね。

「この古文を訳しなさいって問題、結局分からなくて飛ばしちゃったんだ」

お、ここなら！

「そこは『わたしは鬼だから、この田楽を全部いただきます』って内容だよ」
「へぇ、って、騎子分かるの？」
「おうよ！」
「こいつ、文系『だけは』学年トップなんだよな」

む、なんかイラっとする言い方・・・・。
とりあえずソーマの足を踏んでおいた。

「そういや、期末終われば夏休みだよな？」
答えあわせの最中、幽斗がそう切り出した。
「みんな予定とかあるか？」
「何で？」
何だって急に・・・・・・？
そんなみんなの視線を受けながら、幽斗は「いや、実は・・・・・」と鞄の中を探る。
「じゃーん！」
そして出てきたのは、何かのチケットだった。
よくよく見てみると飛行機のチケットのようだ。
行先は・・・・・！？
「沖縄！？」
「ってかそれどこで・・・・」
幽斗は自慢げに笑いながら、
「ばーさんがくれたんだよ、本人も同行するらしいからさ、なのは
も入れてみんなでぱーっとバカンスだ！」
「わっはー！やたー！」
「え・・・・いいの？」

手放しで喜ぶ騎子と違い、なのははどこか戸惑っている。

「だいじょーぶだって！ばーさんもお前と話してみたいっていってたし！」

幽斗がなのはの肩をバンバン叩いて、ヘラヘラと笑う。

なのはは未だ戸惑っているようだったが、小さく頷いてから、

「・・・・・うん、行くよ」

「よっしゃ！沖縄ー！！」

その隣で騒ぐ騎子を見て、みんなで笑った。

終業式も何事も無く終わって、夏休みにはいったんだけど・・・・・・。

今の気持ちを色で表すと青。
・・・・・・・・・・・・何でって？
だって今・・・・・・・・。

「・・・・・・・久しぶり、だなぁ」

管理局にいるんだから。
あの『わたし』と向き合った時におこったトラブルが原因みたい。
正規の局員から嘱託魔導師に格下げされることになった。
今は戦技教導隊の隊社でデスクワークをしている。
クロノくんリンディさん親子に挨拶っていうのも良かったけど、相手が相手なだけに、断念した。
・・・・・・・だめだね、最後の最後まで逃げてる。
『わたし』も、それに怒ったから出てきたのかな？

「よぉー！高町ぃ！」
「うにゃっ！？」

いきなり後ろからドンっと来て、びっくりしちゃう。
振り返ると、ぼさぼさの赤い髪が見えた。

「も、もう！アテナ部隊長！」
「あっはっはっは！悪いね！」

戦技教導隊のトップに立つアテナ・グレイガー部隊長。
豪快で時々だらしないけど、実力や教導はトップレベルと評判の女性。
わたしもよくお世話になった人だ。

「ところで高町、この後空いてるか？」

「あ、一応・・・・」
「うし、じゃあ付き合え！」
「ええ！？」

な、何をやらされるのかな？

「しっかし、あんたが嘱託に格下げねぇ」
「えと、すみません・・・・」
「まぁ、なっちまったもんはしょうがないさ、今日はあたしのおごりだ！」

えと、わたしとアテナ部隊長の二人で、なんでか居酒屋に来ています。
というかわたし未成年・・・・・・。

「可愛い部下の送別会・・・・つっても二人だけなんだけどな！」
「は、はぁ、あの、ありがとうございます」
「いいってもんよ！」

アテナ部隊長は言って、いつもみたいに豪快に笑った。
・・・・・・・・気付いたら部隊長との話がはずんでて、結構食べた頃。

「そういや、何があったのさ？」
「はい？」
「いんやねぇ、真面目に働いてるあんたが嘱託にだなんて、よっぽどのことがあったんだろうって」

・・・部隊長なりに心配してくれるのがよく分かる。
この人なら、受け入れてくれるかもしれない。
・・・・・・・・・・・・けど、

「・・・・・・すみません」
「ああ、いや、話したくないならそれでいいさね」

また突き放されるのが怖かった。
それっきり部隊長は何も聞いてこない。
・・・・・・・・帰る頃には外は真っ暗になっていた。

「どーしたどーしたぁ？机に突っ伏しちゃって」
「・・・・・・・・・」

ばあさん主催の旅行が近づいてきているので、夏季休暇の課題をいくつか片付けようって言う話になっている。
集合場所は何故か俺の家なわけだが・・・・・・。
そんな中、なのはが珍しく居眠りをしているようだった。
いや、学校じゃないだけいいと思うけど、これじゃ目標が達成できないというか・・・・・・。

「あれ？おーいなのはちゃーん？」
「・・・・・・・・・」

騎子が呼びかけているが・・・・・・。
うん、反応が無いな。

「昨日遅かったのかな？」
「だろうな、昨日何か用事があったみたいだし」
「用事？」

いったん頷いてから、

「どうも管理局にいっていたらしい、特に何も言われなかったみたいだが・・・・・」
「へぇ、何だったんだろうね？」

騎子は言いながら、寝ているなのはの頬をふにふにつついている。

「何だったんだろうね？」
「さあ？」

はてなを浮かべる俺たちを他所に、騎子が突然なのはの背後に回っ

た。
・・・・・・いかん、あの顔は明らかに何か企んでいる顔だ。
だが時既に遅し、両手が脇腹を掴んでいた。
そのまま脇を摩り始めた。
最初の数秒は無反応だったなのはも、流石にくすくす笑い出す。

「ほれ、ほれほれほれほれほれほれ・・・・・・！」
「・・・・・・・・く・・・・・・・・くくくくっ・・・・・・・・・っふふふふふふ・・・・・・・」
「あ、あの、そろそろやめてあげたほうが・・・・・・・・」

何だかノリノリになってきている騎子と、無意識下で笑っているなのはと、それを止めようとしている由香・・・・・・。

「こーいう状況を混沌（カオス）ってゆーんだろうな、世間様は」
「いや止めようよ」

呑気にそう言う幽斗は、刀子と弓成の生徒会コンビに突っ込みを入れられていた。
・・・・・・すまんなのは、俺じゃそのハイテンション娘を抑えられなかった・・・・・・。

閑話休題。

なのはは再び机に突っ伏している。
今度は眠気からではなく、笑いまくったことによる疲れからだが。

「大丈夫か？」
「・・・・・・若干腹筋が痛い」

起き上がってシャーペンを手に取り、再び問題を解きはじめた。
やっているのは・・・・国語か。

「今年は苦手なものから片付けときたいんだ」
「そうか」

ちなみに、騎子は後ろで槍馬にアイアンクロー喰らって悶えていた。

午後・・・・。
それぞれ課題が大方片付いたらしい。
麦茶を飲みつつのんびりしていると、なのはが『そういえば・・・』
といってこっちを見た。

「みんなが言ってる『おばあさん』ってどんな人?」

そういえばなのはには話してなかったな、ばあさんのこと。

「あたしらの生活の保護をしてくれてる人だよ、普段平和ボケしてる顔だけどいざと言うとき目が煌くんだ～」
「煌くって・・・・・・・・ちなみにその人、名前は？」

刀子は頷いてから、

「ミゼット・クローベル、なのはちゃんが勤めてた管理局にいるって聞いてるけど・・・・・・・なのはちゃん？」

・・・・・・・？
なのはがさっきから固まってるんだが・・・・・・・。
何があった？

「・・・・・・？なのはちゃーん？」
「おーい」

目を見開いたまま、なのはは固まったままだ。
しばらくその状態が続いて、やっと出てきた声は・・・・・・・・。

「・・・・・・・・・え？」

第八話夏スタート！！（後書き）

一歩進んで二歩下がるっ！
・・・・・えふんえふんっ！
今回ついに『おばあさん』について出てきましたが、まぁ気付いていた人は気付いていたでしょうから、何も語りませんｗｗ
では早速お返事の部屋あああああ・・・・・って行きたいですけど、感想がきてなかったので今回はお休みです。
次回は沖縄、それでは！

設定（前書き）

本編も大事だけど、設定も更新しよっかなっと。
各自のペルソナに関しては、戦闘シーンがあったり、台詞が出てきた奴のみを乗せています。

設定

『本小説におけるペルソナ』
ペルソナは老若男女全ての人間に存在している。
転生者の場合は自分の死を受け入れること、一般人の場合は自分の後ろめたい部分と向き合うことが覚醒の条件。
ただ、本作の舞台になっている『魔法少女リリカルなのは』の住民の場合は、すでに魔法という力が備わっている為、特に魔導師は目覚めにくい。
じゃあなのははどうなるんだって話になるのだが、それは別の機会ということで。

道村空也（１５・男）
身長：それなりに高い
体重：平均
ペルソナ：イザナギ
武器：日本刀
主な属性：雷撃
イメージＣＶ：宮野真守
詳細：市立の中学に通っている少年。
基本面倒くさがりだが、優しい一面もある。
制服の上に白いパーカーを羽織っている。
不良という認識が定着してしまっているが、成績はそれなりによし。
なのはとは幼馴染でご近所さん。
両親は既に他界。

イザナギ
属性：混沌・善
クラス：道化師（ジョーカー）

詳細：空也のペルソナ。
『ペルソナ４』本編との違いは、上着に青みがあることと、武器が薙刀ではなく細身の大剣であること。
応援団っぽいというか、番長っぽい格好に似合わず落ち着きのある性格。

鷹宮弓成（１５・男）
身長：かなり高い
体重：身長に比例
ペルソナ：ロビンフッド
武器：双剣、弓
イメージＣＶ：福山潤
主な属性：疾風・雷撃
詳細：空也と同じクラス。
生徒会長を務め、成績も優秀である。
責任感があり、ある程度の護身術も使えるので、まさに文武両道である。
実はネコ好きという一面もある。
生徒会長なだけに、制服もきっちり着こなしている。

ロビンフッド
属性：秩序・善
クラス：弓兵（アーチャー）
詳細：弓成のペルソナ。
迷彩柄のコートに両手がボウガンになっている亜人。
顔には狼のような耳と、カメラアイになった左目のみついた仮面をつけている。
陽気な性格。

剣ヶ原刀子（１５・女）

身長：女子の平均
体重：女子の平均
ペルソナ：アルトリア
武器：薙刀
主な属性：疾風・光
イメージＣＶ：吉川未来
詳細：生徒会の副会長。
弓成の右腕的存在で、半歩ひいたポジションからのサポートが上手。
大和撫子を思わせる雰囲気を纏っている。
戦闘では中衛に立つ。
弓成と同じく、制服はきっちり着ている。

アルトリア
属性：秩序・善
クラス：剣士（セイバー）
詳細：刀子のペルソナ。
スキルを使い、武器を見えなくすることによって間合いを読ませないようにしている。
青いドレスに鎧が装備された姿をしている。

伊達槍馬（１４・男）
身長：男子の平均より低め
体重：身長に比例
ペルソナ：？？？
武器：双銃
主な属性：？？？
イメージＣＶ：朴ロ美
詳細：空也の後輩。
物静かで、何を考えているか分からないときがある。
目上だろうが目下だろうが基本態度は変えない。

日常的にヘッドフォンをつけて音楽を聴いている。
お陰で、唇の動きが読めるという特技を身に着けた。
双子の兄。
通称『ソーマ』
以外と銃のプロ。

伊達騎子（１４・女）
身長：女子の平均より低め
体重：身長に比例
ペルソナ：???
武器：トンファー
主な属性：???
イメージＣＶ：堀江由衣
詳細：空也の後輩。
兄の槍馬と違い明るくテンション高め、成績はちょっと残念。
双子の妹。
制服はだらしなく着崩している。
トンファーの扱いが何故かプロ並。
通称『キコ』。

狂咲由香（１４・女）
身長：１４にしちゃ高め
体重：身長に比べたら軽い
ペルソナ：???
武器：斧
主な属性：???
イメージＣＶ：嶋方淳子
詳細：つねにぽやぽやっとしている天然少女。
クラスの人間からは『変わり者』と認識されているが、嫌われ者というわけでもない。

細い見た目とは裏腹に、かなり怪力。
学校では黒いラインが入ったソックスをはいている。

東雲幽斗（１５・男）
身長：それなりに高い
体重：身長に比べたら低い
ペルソナ：？？？
武器：短剣二刀流、その他飛び道具
主な属性：？？？
イメージＣＶ：森久保祥太郎
詳細：能力的には下でも上でもなく、あらゆる分野で並。
しかし、飛び道具の扱いに関してはプロ中のプロ。
体のあちこちに飛び道具を隠し持っている。
何でも先祖が忍者だったとか、そうでもないとか・・・・・。
制服は、ズボンにベルトを二本下げている。

設定（後書き）

イメージＣＶは某三つの国の無双６番目から持ってきたのが多しｗｗ
属性に関しては『ＦＡＴＥ』を参考にしました。
出てないペルソナに関しては全部出てからまとめて出そうと思ってます。
あと、お返事の部屋ですが、感想が来てないためお休みです。

第九話沖縄へ

跳田空港・・・・・。
待ち合わせ場所である受付前。
メンバーはあらかた集まり、あとはばあさんを待つだけとなった。
搭乗までまだまだ余裕はあるが、向こうが年寄りなだけに少し心配だ・・・・・。
何となく隣を見ると、かなり緊張している様子のなのはがいる。
思わず苦笑いがこぼれてしまった。
しかし、俺たちもこの間初めて知ったな。
管理局でそれなりに高い地位にいるとは聞いていたが、まさかそこまでとは。
なのはの話によれば、管理局開設に携わったメンバーの一人らしいし。
まぁ、俺にとってばあさんはばあさんだから、別に態度が変わるってわけでもないんだけどな。
ん、噂をすれば・・・・・だな。

「みんな久しぶりねぇ、待たせてごめんなさい」
「わー！ミゼばあー！」
「久しぶりー！」

真っ先に騎子と由香が飛びつき、衝撃でばあさんは倒れかける。
が、刀子が素早く後ろに回ったことで、転倒はまぬがれた。

「二人とも元気ねぇ、刀子ちゃんもありがとう」
「いえ、どういたしまして」

その間に槍馬と弓成がばあさんの荷物を持つ。

「ああ、いいわよ、自分で持つから」
「年配者の手助けも若者の仕事ですから」
にこっと笑う弓成につられて、ばあさんも笑っていた。
ここまで来て、もう一度なのはを見てみる。
・・・・・先ほどにも増して緊張しているようだ。
その隣で幽斗は苦笑いしている。
俺もつられてまた苦笑いした。

「初めまして、高町なのはさんですね？」
「あ、はい！初めまして！」

思わず敬礼しかけたなのは。
寸前で止めきれたものの、みんなで笑った。

「さあさ、はやく手続きを済ませましょ」
「はーい！」

閑話休題。

手続きも難なく終わって、今は出発ロビーにいる。
ばあさんと刀子たち三人は談笑をしていた。
俺を除く男子は売店に買い物にいっている。
なのははいまだに俺の隣にいた。
ばあさんと話してみたいようだが、どう切り出せば良いのか分からないといった感じだ。
・・・・・この際しょうがない。

「ばあさん、管理局でのなのはの評判はどんな感じだった？」
「うん？そうねぇ・・・・・・」
隣でなのはがあわあわ言ってるが無視。
ばあさんに話を振ってみる。
「あ、それあたしも聞きたーい！」
「わたしも気になる」
「えと、あの・・・・・・！」
慌てだすなのはを他所に、女子が盛り上がっていく。
ばあさんはふふっと笑ってから、
「色々聞いてるわよ？とても優秀な魔導師だとか、教え上手な教官だとか」
「そっ、そんな、わたしなんて・・・・・・」
上手く二人を話させることが出来た。
なのははわたわたしているものの、ばあさんとの話は弾んでいるようだ。
・・・・・魔導師になってからのなのはは、どこか遠慮がちな部分があったから、これをきっかけにもう少し年相応になってくれるといいが。
弓成達が帰ってくるのと、搭乗案内のアナウンスが流れるのは、ほぼ同時だった。

さて、今は飛行機の中にいる。
騎子はメモを片手に、由香と現地に着いたらやることを整理して、
槍馬はその隣で寝ている。
弓成と刀子は騎子達の会話に混じりながら、はぐれた時の処置等を
アドバイスしていた。
ばあさんとなのはは未だに話している。
様子を見る限り、かなり打ち解けているようだ。
幽斗はどうやら気圧にやられたらしい。
イヤホンで音楽を聞きつつ、具合悪そうにしていた。
アイコンタクトで、乗務員を呼ぼうかと言ったが、幽斗は頭を横に
振った。
確かに気分は悪いが、呼ぶほど悪いというわけでもないそうだ。
到着までまだ時間がある。
することは何もないので、俺も眠ることにした。

「くーや！」
「あ、なのはー！こっちこっち！」

・・・・・・これは・・・・・・・・。

「どこいくのー？」
「すごいところ！」

そうか、『俺』が『僕』だったころの・・・・・・。

「あ、めぇつぶってて！びっくりさせたいから！」
「うん、わかったの！」

『僕』はなのはと手をつないで、臨海公園の中を奥へ進む。
なるほど、あの場所を見つけたときの記憶か。
どうりでかなり幼いと思った。
なのはの手を引いて、『僕』はどんどん進んでいく。
やがて、周りが段々紅くなっていった。
『僕』の足が止まる。
目的の場所についたんだ。

「なのは、もういいよー！」
「う・・・・・・わぁ！」

この頃は『僕』もなのはもかなり無邪気で、目の前いっぱいに広がる紅葉に、二人してはしゃいでいる。
あと数年後に魔法なんてものに関わるとか、想像していなかったよな。
家に帰れば両親がいて、ただ一緒にいることが当たり前で。
自分が転生者だなんて思ってもいなかった。
・・・・・・・・それで、このすぐ後だったか。
こっちでの両親が死んで、『俺』が目覚めたのは。

「ミッチー、そろそろ着くよ？」
「・・・・んあ？」

騎子に起こされた。
どうやらもうじき着くようだ。
機内アナウンスに従って、ベルトをつける。
っと、

「騎子助かった、お陰で最悪な目覚めを迎えずに済んだよ」
「そりゃどーも」

降下するときに起こる、あの気圧に押さえつけられる感覚に叩き起こされるよりマシだな。
・・・・・・・・・普段の私生活が、ちゃんとしてなさそうな奴に起こされるのは、微妙な気持ちになるが。
何となく、ばあさんとなのはの方を見てみる。
しゃべり疲れてはいるようだったが、会話は途絶えていない。
・・・・・・・・思ったより早く仲が深まったようだ。
現地についたらまずは何をしようかと考えながら、ぼーっと前を見た。

「きたぜー！おっきなわー！」

いつも以上にテンションが高い騎子を、横目に見つつ、ばあさんが予約を入れたというコテージを目指す。
何となく視線をずらすと、なのはが辺りを見ていた。

「初めてか？沖縄」
「あ、うん、テレビでしか見たことないから、新鮮で・・・・・・」

そう言って、恥ずかしそうに笑う。

「誰だってそんなもんさ、別に恥ずかしがることじゃないだろ？」
「・・・・・・ん」

小さく頷いてから、みんなの後をついていく。

それから少しして、バスに揺られてついたのは、市街地から少し離れたコテージ群。
受付で鍵を受け取ってから、俺たちに宛がわれた一件に向かった。
観光地と言うだけあって、かなり綺麗に片付けられている。
男子と女子に部屋を別れて、荷解きをすることになった。

「そういえば、幽斗は大丈夫か？」
「ああ、バスの中でも寝てたからな、だいぶ良くなったよ」
「そうか、よかった」

幽斗の具合も回復しているし、このまま出かけても問題は無いだろう。
さて、荷解きも大体終わったし、いよいよ観光地めぐりだ。

「最初どこいくんだ？」
「ちゅらうみ」
「なるほど、大水槽か」
「・・・・・・人工尾びれもいなかったっけ？」
「イルカだろ？あれは確か亡くなったはずだ」

そう告げると、槍馬は残念そうにうつむいた。
そんな槍馬を慰めつつ、コテージの外に出る。
ばあさん以外の女性陣はまだ準備が終わってないらしい。
実際部屋の前を通る時、なにやら騒がしかった。
まぁ、修学旅行のようにきっちり時間を守れとは言わんが、待たされる側のことも視野にいれてほしいなっと。
そのことをばあさんに言ってみると、

「わたしはともかく、若い子達はおしゃれに気を使うからねぇ」

そう言って、ほっほっほっと笑っていた。

「で、結局のところどうなのよ？」
「何が？」

すると騎子は、『またまたぁ～』と言いながらわたしに擦り寄って

きた。
いたずらっぽい笑顔を見せながら、
「ミッチーのことに決まってんじゃーん?うちのクラスじゃ結構噂になってるよ〜?」
空也のこと?噂って・・・・・・・何が?
「知ってる、二人が付き合ってるんじゃないかってやつでしょ?」
「・・・・・・・・・ふぇっ!?」
え、ちょっ、なんでそんなことになってるの!?
「二人が幼馴染だからじゃないの?それなりにお互いを知ってるわけだから」
「そ、そんな・・・・・」
「で、噂はウソ?ホント?」
「教えてほしいな?」
刀子ちゃんの言葉に、騎子と由香は更に盛り上がってわたしに問い詰めてきた。
あー・・・・もう・・・・・・。
「別に、空也とわたしはそんなんじゃないよ、異性っちゃ異性だけど、あくまでお友達だから」
「うそだぁ!絶対何かあるって!」
「はいはい、そこまでね、おばあさん達待たせるのも悪いし」
ますますヒートアップしそうな雰囲気を刀子ちゃんが収めてくれた。
目でありがとうって言うと、いいよって返してくる。

後でなにかおごってあげようかな？

・・・・・・・・空也のことを好きか嫌いかって聞かれたら、好きって答えられる。

けど、それが友達としてなのか、恋人としてなのか、最近分からなくなってきた。

・・・・・・・・わたしなんか、友達としても、恋人としても、絶対に彼とはつり合わない。

今は居場所がないから寄生虫みたいに引っ付いているだけ。

だから、時々・・・・・・・・。

「なのはちゃんどしたん？」

「大丈夫？」

「顔色悪いよ？」

「ふぇ？・・・・・・・あ・・・・・・うん、大丈夫」

・・・・・・時々、みんなの優しさが怖くなる。

このままだと、いつかまた離れていっちゃいそうで・・・・・・・・。

バスを乗り継ぎ、目的地である水族館に着く。

入口のジンベイサメの銅像の前で記念撮影をしたあと、館内を見て回ることにした。

そしてここでも騎子はしゃぎまくっていた。
つられて由香や幽斗、そこから一歩はなれたところではあるが、槍馬までもテンションが高くなっている。
ばあさんも久しぶりにみんなといられて、嬉しいようだ。
なのはも笑顔が絶えない。
館内を一通り見終わった後、別行動をとることになった。
騎子、槍馬、由香、幽斗の四人はこのまま水族館に残るようで、イルカショーを見るんだと意気込んでいた。
弓成と刀子とばあさんは、名護にあるパイナップルの施設に行ってくるみたいだ。
さて、そんな中で俺となのははあぶれてしまったわけだが・・・・・。
どうしようかと考えていると、腹が減ったのを感じる。
ちらっと見ると、なのはも同じようだ。

「・・・・・・・何か、食べにいくか」
「・・・・・ん」

とりあえず、まずは腹ごしらえだな。

「何か、食べてみたいのはあるか?」
「んー・・・・・・・」

なのはは少し考え込んだ後、

「・・・・・・空也に任せる」
「いいのか?」
「うん」

・・・・・・・・一番困る返答だな。

だがなのはも女の子だ、何らかの恥じらいを感じたのかもしれない。
しかし任せる、か。
せっかく沖縄に来ているんだから、ここならではのものを食べてみたいよな。
選択肢は、ゴーヤチャンプルー、沖縄そば、豚足・・・・だろうな。
さて、どうしたもんか。
・・・・・・・ん。

「沖縄そば、なんてどうだ?」
「うん、いいと思う」

なのはも肯定してくれた。
とりあえず、移動だな。
幽斗から受け取っていたマップを頼りに、とりあえずそこで紹介されていた店にいくことにした。

しばらく歩いていると、人通りがやけに多い場所に着いた。
上を見上げると、でかでかと通りの名前が書かれた看板が立っている。
その大きさに圧倒されつつも、二人でそこをくぐった。
何とかはぐれないように進んで、目的の店に入る。
割と混んでいなかったのが幸いして、スムーズに席につけた。
目的の沖縄そばを注文して、二人してぼっと外を見ていた。

「・・・・・・・ね、空也」

「ん？」

なのはが、若干身を乗り出して話しかけてくる。

「空也は、いつペルソナを使えるようになったの？」

遠慮がちに、そう聞いてきた。

・・・・・・・・ペルソナ、イザナギが目覚めたとき。

あの時のことか。

「・・・・・・・・」

「あ、あの、いやだったら別に・・・・・・・・」

考え込んでいると、なのはがどこか申し訳なさそうにこっちを見ている。

俺はちょっとだけ笑ってから、

「いいさ、誰だって気になるだろ？そういうこと」

「・・・・・・・・ん」

ちょうど注文していたものが来たので、話はこれで中断。

郷土料理に舌鼓を打った。

「あ、見て見て！これ可愛い！」

昼ごはんも済んで、俺となのはは通りを歩いていた。
かなりの数のお土産屋が並んでいて、それぞれが声を張り上げている。
そんな中、なのはが一件の店に駆け寄っていく。
指差されたそれを見ると、いい感じにデフォルメされたシーサーが一組。
確かに可愛い。
黙ってそれを肯定すると、なのはは嬉しそうに笑った。
結果、士郎さん達へのお土産にそれを買うことにしたようだ。
それをもってレジに走るなのはを見送った。
今日は、小包を抱えたなのはと一緒にコテージへ帰ることにする。
その帰る途中、通行人からちらちらと視線を受けていた。
・・・・・・・・まぁ、なのはは美人だし、自然と一緒にいる俺にも矛先が向いているんだろう。
そういうことで別に気にとめなかった。

さっき店で見つけたシーサーのストラップを持って、コテージに戻ってるんだけど、その・・・・・・。

「ね、あの二人・・・・・・・」
「カップル？美男美女だよねー」

何か、周りの視線が・・・・・・・。
美女はともかく、美男って・・・・・・・。

ちらっと隣を見ると、空也が何か考え込んでいる。
・・・・・うん、今になってよく見ると空也もなかなか・・・・・
・って、ストップストップ！
空也は友達だってば！それ以上の感情持ってたとしてもわたしなんかが踏み込んじゃダメ！！
友達、友達、あくまで友達・・・・・・。

「なのは？どうした？」
「ふぇ、あ、うん、なんでもないよ！」

気がつくと、空也が顔を覗き込んできていた。
何だか、心配させちゃったみたい・・・・・・。
適当に大丈夫って返してから、みんなと合流することにする。

コテージ。
幽斗達はそれなりに楽しんできたようで、初めて生でみたイルカに、未だに興奮しているようだ。
ばあさん達はパイナップル園でお土産を買ってきたらしく、ばあさんは職場に、弓成達は生徒会に配るらしい。
俺達は？と聞かれて、沖縄そばのことと、なのはがお土産を買った通りのことを話した。
騎子と由香が興味を持ったようで、明日はそこにいくようだ。
それから、夕食はどうするかと話し合った結果、ばあさんが見つけたという店に食べに行くことにした。
帰りに朝食の材料を買うようだ。

幸いコテージにはキッチンが備え付けられているから、料理ができる。
何を作ろうかと話し合いながら、再び外に出ることにした。

晩御飯は特に何もなかった。
あえて何かいうなら、チャンプルーがおいしかったです。
みんなはもうベッドに入っていた。
今日散々はしゃいでた騎子達は、もうぐっすり寝ている。
寝顔を見てたら、何だか癒されちゃって・・・・・。
気がついたら顔を撫でていた。
そうやってたら、何だか微妙な気持ちになってくる。
何か、自分が年増になってる感じがして・・・・・。
ちょっと苦笑いしてから、ベランダに出た。
風が気持ちよくて、昼間の蒸し暑さが嘘みたい。
・・・・・景色を見ていたら、ため息が出た。
月白中に転校してから、この場面にフェイトちゃん達がいたらって思う自分がいる。
あんなに拒絶されたのに、まだ昔を捨てきれない自分がいて・・・・

・・・・。

思わず苦笑いがこぼれちゃった。

・・・・・・お別れはあんなだったけど、思い出だけは大切にしたい。

けど、思い出すたびに、何と言うか・・・・・・・体が痛くなって・・・・・・・・。

「・・・・・・・・・か・・・・・・・・・・・はっ・・・・・・・・・・・・・」

・・・・・・・っ急に・・・・・・・・・喉が・・・・・・・・詰まって・・・・・・・。

息・・・・・・・・・・・息が・・・・・・・・・・できなっ・・・・・・・・・・。

「っごほ・・・・・・・・・・」

空気・・・・・・・・・・・・苦し・・・・・・・・・・・。

「大丈夫!?しっかり!」

・・・・・みぜっ・・・・・・・・・・・。

・・・・・・・・・・っ。

わたし・・・・・・・・・・。

「起きた?」
「え、あ・・・・・・」
目の前に、ミゼット提督がいた。
外を見ると、若干白んでいる。
結局一晩ねちゃってたんだ・・・・。
って・・・・!

「す、すみません!何だかお手数おかけしたみたいで!!」
「いいのいいの、それよりも大丈夫?急に倒れたんだから驚いたわよ?」
「あ、はい、なんとか!」

ミゼット提督は、わたしの答えを聞いて満足そうに頷いていた。
というか、提督に看病させちゃうとか・・・・・。
とにかく!お礼いわないと・・・・!

「あの、すみません、ありがとうございました」
「はい、どういたしまして」

そこで会話が途切れちゃって、気まずい空気が流れる。
わたしが必死になって話題を探していると、

「・・・・・・悪いとは思ったけど、あなたのうわ言、聞いちゃったの」
「ふぇ?」

うわ言って・・・・・。

「そんなに、酷かったんですか？」
「・・・・・友達の名前とか、ご両親のこととか、何度も呼んで、泣いてたわ」

・・・・・・・・ダメだな、わたし。
弱味みせちゃうなんて。

「ごめんなさい、けどもう大丈夫ですよ」
「・・・・・・・・ほんとに？」
「はい、もちろん！」

・・・・・本当は、精神的にだるかったりする。
けど、弱音なんて吐いちゃいけないから。

「・・・・・そう、ならいいでしょう」

・・・・・・・・何だか騙しちゃった感があるけど、これでいいんだ。
これで・・・・・。

「・・・・・・・・くぁ・・・・・・」
「あ・・・・あの、もしかして寝ていないんですか？」
「ふふっ、夜更かしは老体にこたえたみたいねぇ・・・・・入っていいかしら？」

・・・・・・・・ええええええええええ！？
あ、で、でも寝てないって言うなら寝かせなきゃ！！

「あ、あのっ、ここでよければっ！」
「ええ、ありがとう・・・・・」

そういって、もそもそとわたしの隣に入ってきた。
今のわたしの顔、ガチガチに緊張してるんだろうなぁ・・・・・・。
上半身を起こしたまま固まって、その状態でじっとしていたんだけど、段々寝息が聞こえてきた。
ちらっと隣を見ると、ミゼット提督が寝ている。
・・・・・・・・・・・・。

「・・・・・・ごめんなさい」

自然と、そんな言葉が出ていた。

第九話沖縄へ（後書き）

何が書きたかったんだろう自分・・・？
まぁ、更新できたからいいのかな？
今回は沖縄話でした。
昨年修学旅行で行ったきりなので、記憶を搾り出しながらの執筆です・・・・！
空也達がいったところは、美ら〇水族館、国〇通り、名〇パイ〇ップル〇ークの三つです。
・・・・・・いや、一応伏字にしておこうかなっと。
ご感想、お待ちしています。
それでは。

第十話スイカ片手に（前書き）

今回も沖縄。

第十話スイカ片手に

「・・・・・ふっ・・・・・・・・ぐすっ・・・・・・・・・」

もう空も飛べない、歩けない。
昼間にそう告げられた事実が、悲しかった。
わたしの何もかもが痛くて、たまらなくて。
だけど、そんなことを言えばみんなを心配させちゃう。
でも、不安がいっぱいで・・・・・・・。
自分が・・・・・・・割れそう！

「・・・・・・・・」
「っ、誰！？」

な、なに？部屋に誰かいる！？

「・・・・・・・」

暗がりにいるから、よく見えない。
・・・・・・・・・・こ、怖いよ・・・・・・・・！！

「・・・・・・・・」

誰かがゆっくりこっちに近づいてきた。
や、やだ・・・・・。

「こ、こないで・・・・・・！」

するとその人は、明るいところに出てきて、止まった。

月の光に照らされて、顔が良く見える。
でもこの顔って・・・・・・。

「親戚、さん？」
「・・・・・・・ちがう、な」

お母さんにそっくり、だけど、違うって・・・・・・。

「・・・・・・・お前には呪いがかかっている」
「え？」
「いつか絆を失くす呪い、いつか業を背負っていく呪い、いつか仮面をかぶり続ける呪い」

なに・・・・・・それ？
いったい何が言いたいの？

「それでもお前は前に行くか？それでもお前は生き続けるか？」

「なのはちゃん、大丈夫なの？」
「うん？」

あれから、わたし達は海に来ている。
沖縄に来たからにはまずは海っていうことで、全員一致。
まぁなんやかんやで、けっこう楽しんでる。

「いや、おばあちゃんに昨日のこと聞いたから・・・・・」
「あ・・・・うん、平気」

・・・・・・だめだなぁ、わたし。
年下の由香にまで心配かけちゃうなんて。
・・・・・・もっとしっかりしないと。

「ミゼット・・・・さんが、看病してくれたから」
「そっか、あ、でも無理しちゃダメだよ？」
「うん、ありがとう」

思わず提督って言いかけて、苦笑いが出ちゃった。
由香もにこっと笑い返してくれる。
・・・・・よく言われる『無垢な笑顔』って、このことを言うんだろうね。

「そういやなのは、なんでパーカー着てるんだ？」
「ふにゃっ！？」

な、なんでそんな質問しちゃうかな、幽斗くん？
え、えーと・・・・・。

「ほ、ほら、あんまり日に焼けたくないから・・・・・」
「あー、女の子だもんな」

幽斗くんはあっさり諦めてくれた。
今はそれがありがたいけど、なんか彼の将来が心配に・・・・・・・・っ!!?

「おぉー、空色のビキニかー、健康的な色だね、これなのはちゃんのチョイス?それとも親?」
「ちょっ!騎子!?」
「おわっ、ばっか!さり気にはだけさせるんじゃねぇ!」

にゃあああああ!?
だ、だからパーカー着てたのに!?

「なのはちゃんスタイルいいんだから、恥ずかしがらなくてもいいのに」
「いや、あの、ちょっとぉ・・・・・!」

だ、誰か、助けて・・・・!

「ほっほっほっ、若いっていいわねぇ」

見てるだけですかミゼット提督!?

「大丈夫？」
「む、無理かも、精神的に・・・・・・」

騒動も落ち着いて、わたしはミゼット提督と一緒にパラソルの下でのほほんとしている。
・・・・・・・わたしの水着、お母さんとお姉ちゃんが選んでくれたんだけど、露出が高いというか、なんというか・・・・・・。
とにかく、恥ずかしかったからパーカー着てたんだけど・・・・・・。
というかいつのまに脱がせたの騎子？
わたしですら気付けないって・・・・・ある意味すごいよ？

「災難だったね、はい飲み物」
「あ、ありがとう、刀子ちゃん」

お礼をいってから、刀子ちゃんから受け取った飲み物をあける。
何となくラベルをみると『フェロモンシークヮーサー』って書いてあった。
・・・・・・・・フェロモンって何？

「ごめん、買いに行った自販機で、一番まともそうなのがそれだったから・・・・・」

そうやって謝ってくる刀子ちゃん。

・・・・・これがまともに見える自販機って、どんなラインナップなんだろう？
むしろ気になってきた。

「他のみんなは？」
「浜辺であそんでる、ほら、あそこ」

わたしが指差した先で、騎子達が槍馬を砂に埋めている。
・・・・・・・・・・・縦に。
あー、海水はかけちゃだめだよ、満ち潮になったときに余計出られなくなっちゃう。

「なんというか、相変わらず？」
「だねぇ」

・・・・・・あの底抜けの明るさが、時々・・・・・・・言い方は大げさかもしれないけど、救いになったりする。
最近色々考えてるから、余計に。
・・・・・・・って。

「空也は？」
「空也なら、ほら、あそこ」
「・・・・・・・・？」

なんか、人だかりが出来てる？
ビーチバレーかなにかかな？

「行ってみたら？おばあさんはわたしが見てるよ」
「・・・・・・・ん、分かった」

いつの間にか、ミゼット提督は寝ていた。
とりあえずお言葉に甘えて、人だかりに向かうことにする。
でも空也、あそこで何やってるんだろう？
近づくにつれて、すごい歓声が聞こえてきた。
思わず耳を塞いじゃうくらいのボリューム。
な、何が・・・・・。

「おおーっ！また割ったぁーっ！半端ない！半端無いぞ挑戦者ぁーっ！！」

聞こえてきたのは、実況と思われる人の声。
何とか背伸びして覗き込んだ先に、空也がいた。
・・・・・目隠しして、木刀を持った状態で。
周りには赤い塊と真っ赤な液体が飛び散った跡が・・・・・・・って。

「・・・・・・・スイカ割り？」
「さー面白くなってまいりました！チャンピオン危うし！！どう切り返すのか！？」

ぽかんとするわたしを他所に、実況の人は腕を振り上げる。

「決勝戦の前にもう一度ルールの確認だ！スイカ割りタイムマッチは、一定時間内にどれほどのスイカを割ることができるかと言う競技！割り切れなかった数はもちろんのこと、空振りした回数も減点対象に入るなかなかシビアなスポーツだ！」

へぇー、そうなんだ・・・・・・って、何で空也が参加してるの？
・・・・・暇、だったのかな？何だかいつになく楽しそうだし。
何となく視線がステージの方に行く。

・・・・・・うん、何も見なかったことにした。
見てないよ?ごつい顔と体で猫耳をつけた男の人なんて。

あの後、空也は優勝できなかったけど色々すっきりしたみたい。
昔から名誉とかあまり興味持たないもんね。
そういえば、将来の夢とかの話、聞いたことなかったかも。
・・・・・・ま、いいかな。

「おつかれさま」
「ん?ああ、見てたのか」

とりあえず、空也に声を掛けることにする。
空也は軽く手を上げて答えれくれた。
・・・・・・開いてるほうの手に何か握られている。

「それは?」
「これか?参加賞だと」

そうやって見せてくれたのは、スイカだった。
ネットに五つもはいってる。

「ミッチー！なのはちゃーん！」

後ろから騎子が声を掛けてきた。
みんなも集まっているし、何処か行くのかな？
とりあえず、合流することにした。

「うわ、なんだそのスイカ！？」
「景品」
「なんの！？」
「スイカ割り」

空也と幽斗のやりとりを見てると、刀子ちゃんがこっちに来た。

「おかえり、どうだった？」
「ん、楽しかったよ」
「それは・・・・・・・」

「で」と刀子ちゃんは急に声をひそめて、耳を貸すようにジェスチャーする。
何かな？と思いつつ、従うと、

「空也、惚れ直した？」
「にゃ！？」

ななな・・・・・・・何を言うのかな！？

「あれ？違うの？」
「ち、違うよ！？確かにかっこよかったけど違うよ！？」

何が、って言わなくても会話が成り立ってるのは仲良くなった証拠

なのかなって思いながら、笑っている刀子ちゃんをジト目で見た。
・・・・・・・・・刀子ちゃんって意外といじわるなのかな？

「ってゆーか、このスイカどうするよ？」
「・・・・・・・食べる？」
「これ全部？太りそうなんだけど」

げんなりとした顔で、スイカを見つめる騎子。
この分だといくつかは持って帰らなきゃいけないかもね。

「つか、俺達割と戦ってるほうだから、心配いらなくね？」
「それでも気になるのが女の子！」

「沖縄といえばパイナップルのイメージがあったんだけど」
「まぁいいじゃない？スイカもけっこうおいしいよ？」

コテージに戻ったわたし達は、スイカを食べている。
由香の言うことも一理あるけど、やっぱり暑い季節はスイカだと思うんだ。
なんとなく騎子と槍馬のほうを見ると、騎子が口の中で何かもごもごと動かしている。
・・・・・・・次の瞬間、スイカの種が凄い速さで撃ちだされた。

「へへー、これがホントのタネマ○ンガンってね」
「・・・・・・アホ」

うーん、ネーミングがそのまんまな気がする。
すると騎子のそれをみていた幽斗が、懐かしそうににやっと笑って、

「懐かしー、ポ○モンか」
「これも前世の？」
「ん、十年以上も人気なゲームシリーズだ」
「十年も！？」

こっちの世界にそんな売れてるゲームってないよね？
・・・・・・・・すごいなぁ・・・・・。

「確かに懐かしいね、俺もそのシリーズ結構やりこんでたな」
「そうなの？」
「うん、俺が生きていたころは種類が五百超えていたよ」
「わぁ、集めるの大変でしょ？」
「そーれーが！ポケ○ンの醍醐味なのよ！」

騎子が話に入ってきた。
別にいいけど、せめて口元をふいてからにしなさい。

「ボールなげてもつかまらない！自分の手持ちの属性が偏ってて、弱点突かれ出すと全滅する！バッジもってないと先に進めない！」

さ、さっきからよくな部分しか上げてない気が・・・・・・。
けど、騎子は「しかーし！」と、指を上に上げる。

「レベルが上がったり、新しい技覚えたり、進化して立派な姿になったりするとめちゃめちゃ嬉しいっていうか、楽しいって言うか！」
「自分が戦わない分、そういう喜びが大きかったよな」
「なんか、すごく楽しそうだね」
「お、興味持った？」
「うん！」

その後も、他愛ない話で盛り上がった。

日も暮れて、また風が涼しくなってきた。
潮の香りが混じってて、思わずため息がでる。
・・・・・ちょっとだけ、肩の荷が下りた気がした。
わたしの今後の身の振り方とか、ペルソナのこととか、狙ってくる転生者のこととか、最近詰め込みすぎてる感覚がする。
・・・・けど。
なんとなく、後ろを振り返ってみる。

「ソーメンがあるなら、蕎麦でもチャンプルーできると思うんだ」
「できると思うけど、一人で挑戦しような？」
「あれ？ねぇ！網とコンロどこやった？」
「あ、ご、ごめん！邪魔になると思って、動かしちゃった！」
「ならいいや、準備終わったら持ってきて？」

みんなそれぞれ寛いだり、バーベキューの準備をしたりしてる。
・・・・・醜い部分があったり、至らなすぎるわたしを受け入れてくれるみんながいる。
不思議と、何が起こっても大丈夫って思える。
・・・・・それもなんとなくだけど。
もし神様がいるなら、というか、空也達が会ったらしいから、いるんだよね？
わがままの一つや二つ、聞いてくれてもいいと思うんだ。

もう少しだけ、もう少しだけ、ここにいさせて。

「なのはちゃんは蕎麦でチャンプルーってどう思う？」
「んー、どうだろ？でも面白そう」
「あはっ、向こうに戻ったら早速試してみよ！」
「にゃはは、うん」

第十話スイカ片手に（後書き）

スイカの種でマシンガン、誰だってやったことがあると思うんです。
あとポケ○ンの話に花を咲かせてみました。
今回で沖縄は終わりですが、夏休みはまだまだ続きます。
それでは、ご感想お待ちしていますよｗ

第十一話世界の『鍵』（前書き）

私自身がこんがらがるので、今回から『ｓｉｄｅ～』が復活です。

第十一話世界の『鍵』

「フフフフ、お久しぶりですねぇ」

ここは、っていうかこの人・・・・・・・。
確か・・・・・・・・えと・・・・・・・。
・・・・・・・だめだ、鼻しか出てこない。

「そういえばあなたには名乗っておりませんでしたな、わたしの名前はイゴール、このベルベットルームの主をしております」
「あ、はいよろしくお願いします、わたしは・・・・・・」

名乗り返そうとすると、すごい鼻の人・・・・・イゴールさんは手を上げて止めた。

「存じ上げておりますぞ、高町なのは様、幼い頃より戦地に赴かれた歴戦の勇士、一度は死線を彷徨ったものの、再び前線に復帰した不屈のエースオブエースにして・・・・・・」

いわれた情報は全部当たっている。
どっ、どこで知ったのかな？
イゴールさんは一旦言葉を切ってから、にやっと笑って、

「世界の『鍵』」

・・・・・・・・はい？
かぎ？鍵ってあの開け閉めするやつだよね？
わたしがそれだっていうの？

「細かく言えば、この世界の均衡を保つ楔、ですがね」

楔・・・・・止め具ってこと？

・・・・・・・・・・・ちょっと分からないかな。

「思うところもございましょうが・・・・率直に申し上げましょう、あなたは今、狙われております」

「・・・・・・・・・え？」

狙われてるって・・・・・どういうこと？

わたしが狙われるのは、俗に言う『原作キャラ』だからじゃないの？

「世界の要である『鍵』は、その世界のあり方を護る為に存在するもの、ですがあなたを狙っている者達は、『全てを叶える願望機である』と、間違った方向にしか解釈していません」

一呼吸おいてから、

「『鍵』であるあなたに何かあれば、それだけで世界のバランスは崩れてしまいます」

「・・・・・・・・」

・・・・・・・でも、わたしじゃ・・・・・・・・・。

「わたしじゃ、転生者に対抗は・・・・・・・」

『原作キャラ』・・・・・この世界に元々いる人たちじゃ、転生者には太刀打ちできないって事実が・・・・。

中には決定的に経験不足な転生者もいるけど、それでも倒すことが出来るなんてごくまれ。

持ってる能力が反則すぎるから・・・・・・。
そんな人たちに、わたしが対抗できるわけ・・・・・・・。

「できます、ペルソナさえ目覚めれば」
「・・・・・・っ！」

けど、わたしのペルソナはっ・・・・・・・・・・。

「心配はございません、きちんと目覚めます」

そういったイゴールさんの目は、ちょっとふざけているところがあったけど、真剣で。
・・・・本当にそうなる気がした。
思わず、ため息がでる。

「それと・・・・・あなたは孤独ではないことを、決してお忘れにならないよう、それでは」

意識が、遠くなっていく。

side　空也

「ここ、この公式でいいよね？」
「大丈夫、でもここの計算忘れがちな人がいるから、注意してね？」
「おっけー」
「ここは加熱、だよな」
「ああ、それで出来る物質は・・・・・・」

俺たちは、昨日沖縄から帰ってきた。
近い内に地元で開催されるでかい夏祭りがあるので、それまでに課題を一気に片付けようという話が出た。
そういうことで、また俺の家で勉強会を開いている。

「ふぃー、今なん・・・・・・ってもうお昼じゃん!?どーりでお腹減るわけだ」
「あぁ！ほんとだ!?」

時計に目をやると、確かに時計の針が両方とも十二をすぎている。
現在時刻、十二時五分・・・・・・。
何か作るか。

「昼ごはん、何がいい？」
「なんか夏バテに効きそうなの」
「りょーかい」

夏バテに効くものと言えば、辛いもの、か。

何かあっただろうか・・・・・・・。
冷蔵庫と戸棚をあさると、麻婆豆腐の材料が出てきた。
・・・・・・・これでいいか。

閑話休題。

「いただきまーす！」

八人分にしちゃ少し多い気がするが、食欲あるのがいるし、大丈夫だろ。
みんな舌鼓打って、食べてくれている。
・・・・・・何かこう嬉しいものがあるな。
俺もスプーンを取って一口食べてみる。
ん、我ながらいい出来だ。
若干もう少し辛くてもよかったけど、問題は無いな。
これはこれでいける。

「あ、そだ、今度の夏祭りみんな何着ていくんだ？」
「もち浴衣！」
「夏祭りっていえば浴衣だよね」
「確か開催は・・・・・・」

と、槍馬は部屋にあるカレンダーを見た。

「ん、八月の中ごろだね」
「だ・か・ら！それまでに課題終わらせないと」
「おー！」

ｓｉｄｅ　なのは

家、自分の部屋。
わたしは空也の家から帰った後、自室にいた。

「・・・・・・・・・」

イゴールさんとの会話があってから、わたしなりにペルソナ召喚の練習をしている。
・・・・・・といっても、その召喚に辿りつけてないけど。
・・・・・・・けど、

「カード、出すまでは出来るんだよなぁ・・・・・・」

わたしの手の中に、空也達が使うものと同じカードがある。
ここまでは出来るんだけど・・・・・・。

「・・・・・・・・っ」

思い切って握りつぶそうとしてみる。
・・・・・・・・・・・・痛みしかこなかった。

っていうか、シワ一つよらないってどれだけ頑丈なのこれ？
手を見てみると、カードが強く当たった部分が赤くなっていた。
・・・・思わず、苦笑いしてしまう。

「あーあ、結局出来ず仕舞いか・・・・・・・」

でも、あと少しで出来る感じがしてきた。
まだ赤い手を見て、握る。
・・・・・・・・・・きっと強くなれる。
『鍵』、とか、まだよく分からないけど、それでも・・・・・・・。

「迷惑とか、心配とか・・・・・・かけちゃいけないもんね」

――――ごめんなさい。

――――あなたはわたしを受け入れようと必死なのに。

――――わたしは何も出来ない。

――――がんばれ、しか言えない。

――――ごめんなさい。

――――ごめんなさい。

――――ごめんなさい。

「・・・・・・・・・・？」

そのまま寝ちゃってたみたい。

外はまだ夕方みたいだけど、だいぶ暗くなっている。

「・・・・・・ふぅ」

体がだるい・・・・・・・。

・・・・・・いっそまた寝ようか・・・・・・っ。

「・・・・・・・・・っ！？」

この反応・・・・・・・そんな・・・・・・・まさか・・・・・・・

！？

「ジュエルシード！？」

side　？？？

「こんなんで本当に来るのか？」

《そうさ、何せ彼女にとっては因縁の品だからね》

ふぅん・・・・・・そういやそうだったたな。

魔法に目覚める切欠もこれだったたんだっけ？

《分かっているな？『鍵』は我々に・・・・・・》

「わーってるよ！そのかわり報酬は・・・・・」

《ああ、こちらで十分な量を用意させてもらう》

本当だろうな・・・・・・？

おっと、

「やっこさんが来たからもう切る」

返事を待たずに通信を切って、『お客人』を見据える。

「黄泉路一直線コースへようこそ、高町なのはさん？」

ｓｉｄｅ　なのは

「レイジングハート！距離はあとどれくらい！？方角は！？」

《Ｉ　ｕｎｄｅｒｓｔａｎｄ　ｔｈｅ　ｆｅｅｌｉｎｇ，ｂｕｔ　ａｔ　ｆｉｒｓｔ　ｐｌｅａｓｅ　ｃａｌｍ　ｄｏｗｎ　ａｎｄ，ａｓ　ｆｏｒ　ｔｈｅ　ｄｉｓｔａｎｃｅ，ｉｎ　０．６ｋｍ　ｍｏｒｅ，ｔｈｅ　ｄｉｒｅｃｔｉｏｎ，ｉｓ　ｎｏｒｔｈｗｅｓｔ　ｆｒｏｍ　ｈｅｒｅ．（お気持ちは分かりますがまずは落ち着いてください、距離はあと０．６ｋｍ、方角はここから北西です）》

「っわかった！」

レイジングハートの指示通りの方向に向かうと、魔力反応が強くなってきて、同時に人影もまばらになってきた。

「結界が張られている・・・・・？」

あたりを警戒しながら見渡してみると、若干赤っぽい。

「やっぱり、隔離用の結界だ、でも誰が・・・・・」

「黄泉路一直線コースへようこそ、高町なのはさん？」

上のほうから声をかけられて、思わず見上げる。
月をバックに、こっちを見下ろしている人が、そこにいた。
外灯に立っていたその人は、銀色の鎧にオールバックの黒い髪といった格好をしている。

「誰、ですか？」

いつでも起動できるように、レイジングハートを握った。
銀色の鎧の人は笑顔を見せて、

「別に恨みはないんだけどさ、お前を拉致って欲しいって頼まれてるから・・・・・」

彼の脇の空間が歪んで、出てきたのは変わった形の武器だった。
分類としては剣なんだろうけど、刀身が円柱状になっているのは始めて見るよ・・・・・。

「・・・・セットアップ」
《ｓｔａｎｄｂｙ　ｒｅｄｙ，ｓｅｔ　ｕｐ.》

気休め程度にしかならないだろうけど、何もしないよりはマシだと思ったので、バリアジャケットを纏う。
けど、相手は笑顔を絶やさないまま武器を振り上げた。

「とりあえず、確認な？俺が勝ったら大人しく拉致られてもらう、あんたが勝ったら・・・・・・」

そういうと、ポケットに手を入れて、何かを・・・・・・・・・・というか、忘れるはずの無いものを取り出した。

「ジュエルシード、ロストロギア保管所からパクって来たもんだけどさ、返すよ」

思わず、飛び出していた。
体を強化して拘束移動、続けてレイジングハートを振り下ろして攻撃する。
相手は刀身で受け止めたけど、間髪いれずにスフィアを四つ生成。
回転をかけて打ち出した。
相手は鍔迫り合いをすぐに切り上げて、武器を振りスフィアを消す。
続けて裏拳を繰り出してきた。
何とか体を屈めて避けて、後退。

「ディバインッバスターー！！」

カートリッジを装填して砲撃を撃つ。
一方の相手は手を前に突き出す。
するとまた空間が歪んで、花みたいなシールドを展開。
難なく防いでいた。
・・・・・・・ジュエルシードは、わたしが力を手にするきっかけになったものであり、フェイトちゃん達と友達になる発端でもあり、わたしが何をしたいかがはっきり決まる始まりでもある。
あれと出会ったことでわたしの全てが始まった。
ここまでいったら大げさと思われるかもしれないけど、それくらい因縁の相手だった。
だから、

「本当に、勝ったら返してくれるよね？」
「おいおい、信用されてねぇなー」

相手は苦笑いしたけど、急に目が冷え切った物になる。

「ま、お前ら(原作キャラ)が俺に(転生者)勝てるわけでもないから、ぶっちゃけ細かいこたぁどうでもいいけどな」

やっぱり転生者だったか・・・・・！
するとまた空間が歪んで、そこに手を突っ込んだ。
そして引きずり出されてきたのは、鎖。
見た目は何の変哲も無い、けど威圧感は凄まじい。
相手は、またにやりっと笑う。
突然、体が動かなくなって、空に上がった。
さっきの鎖に縛り上げられているんだ！
動きが見えなかった・・・・・・！

「もう一度言うけど、細かいことはどうでもいい」

武器を、胸元に突きつけられる。
刀身が回転を初めて、エネルギーをチャージする。
強さを増す赤っぽい光が、怖く感じた。

「殺すわけには行かないから、『抵抗できないくらいにズタボロ』って言う条件はこれ以上に無いくらい最高だぜ」

回転が速くなる、光が大きくなる。

「俺さ、前世では人を傷つけたくて傷つけたくてたまらなかったんだ、人の怪我とかみてると興奮する、自分もこういうことがやりたいって我慢できなくなるんだよ」

狂気的な笑顔が、目の前にあった。
臨界ぎりぎりまでの光を前にして考えるのは、生きていられるかど

うか。

「天地乖離す（エヌマ）・・・・・・・・・・」

次に考えたのは、ジュエルシードのこと。
鎖はびくともしないし、魔法を使う暇もないだろう。
・・・・・・・・出来れば、取り戻したかったな。
辛くても、痛くても、

「開闢の星（エリシュ）！！」

やっぱり、思い出は思い出だから。

ｓｉｄｅ　襲撃者

「ウケッ・・・・・・ウケケ

オモイッキリ、ヒトニボウリョクデキタ！！
・・・・・・・・ハテ？ハラニカザアナアイテナイッテコトハ、シンデナイ？
ナンデ？ナンデ？ナンデ？

「うっ・・・・・・・・ごほっ・・・・・・！」

・・・・・・・・・・・・・・・・確かに殺すってのは依頼内容に無かった。
けんど、エアの攻撃くらってもそれほどボロボロじゃないってどうよ？
ま、とりあえず十分な抵抗が出来ないくらいボコったからいいかもな？
さて、このままずらか・・・・・・。

「マハガルダイン！」
「マハラギダイン！」

ん、何かあつ・・・・・・？

「デュアルアビリティ！『火災旋風』っ！！」

うおおおおおおおおおっ！？

side　幽斗

あっぶねー！ペルソナが気付かなかったらやばかったな。

「サンキュ、サスケ」

――――・・・・・・・・。

相棒は喋らないけど、雰囲気で得意げにしているのが分かる。

なんたって、『我は汝、汝は我』だからな！

転生者の手から、なのはが離れたのを確認してから、由香と一緒に突っ込んでいった。

棒状の手裏剣を投げつけて、回し蹴り、続けて由香が重い一撃を脳天に食らわせる。

目を回している隙に後退しつつ、なのはを回収した。

つーかどんな攻撃食らったんだ？腹の辺りの服が全部吹き飛んでるじゃねぇか！？

ぐったりしているなのはを横にしてから、相手に向き合った。

・・・・・・・・んー、ぶっちゃけた話。

「ギルガメシュの色違い？」

「だねー」

いや、銀色な分目に優しいけど、やっぱ派手だな。

もってるのは乖離剣か・・・・・・。

天地乖離す開闢の星（エヌマ・エリシュ）が怖いぞ。

とりあえず、要注意ってな。

相手のギルガメシュもどきはこっちを睨んだまま、乖離剣をいつでも振るえる様にしてるみたいだし・・・・・正直、やっかいだ。
その昔、混沌としていた世界を天と地に別けたと言われる、乖離剣エア。
そんな物を相手に、無事で・・・・・すむかぁ？

「とりあえず、お前はいつも通り突っ込め、俺が後ろからちまちま援護する」
「わかった、それじゃあ・・・・・・」

とん、とん、とんっと軽快なリズムを立てているが、その間に宙にいる敵に接近してるんだから、割と怖い。
もちろん相手もかなり驚いて、動きを一瞬止めた。
結局、人間って生き物だし、まぁそうなるのも無理は無ぇか。
そんで、由香にとっては最大のチャンスっと・・・・・。

「タルカジャ、やっとくか」
――――・・・・・・。

サスケは小さく頷いてから、腕を振る。
すると、由香に緋色の光が宿った。
腕力（まぁ、所詮攻撃力ってやつ）が上がった証拠だ。

「そぉーれっ！」

ズドンっと、次の瞬間にはギルガメシュもどきが地面に叩きつけられていた。
・・・・・・・・・・相変わらずの馬鹿力だよな。
うん、味方でよかった。
・・・・・って、

「だらぁっ！」
「おっと！」

ギルガメシュもどきの突きが襲ってきたので、クナイでいなしてからなのはを抱えて脱出。
奴は方向転換の為に右足を軸にして回転。
けど、次の一手は既に俺のもんだ！

「っ！？がああああ！！」

ワイヤーがはずれる音がして、後ろから棒状の手裏剣が襲い掛かる。
背中に何本か突き刺さっているのが確認できた。

「この、いつのまに・・・・・！」
「ブービートラップってな！」

小石とかにワイヤーとかを仕掛けて、動かした時に仕掛けが動く仕組みの罠だ。
主に戦場で使用されたらしい。
ちなみに『ブービー』ってのは英語で「アホ」とか「間抜け」とかいう意味・・・・だったと思う。

「ガルダイン！」
「・・・・・っ」

真空の刃がギルガメシュもどきを攻撃して、新たに血を流す。
けんど、相手も諦めてないらしい。
乖離剣をこっちに向けた。

「天地乖離す開闢・・・・・・・・」
「ベンケイ！デスバウンド！！」
――――ぬぅらぁっ！

恐れてた天地乖離す開闢の星が撃たれる寸前でのところで、由香が間に入った。
そしてカードを斧で叩き割り、ペルソナ『ベンケイ』を召喚した。
義経の部下として有名な『武蔵坊弁慶』そのままの姿をしているそいつが薙刀を振り下ろすと、黒い衝撃が周囲全体に広がって、相手の動きを止めた。
ついでに天地乖離す開闢の星を阻止して、ダメージを与える。
なのはを由香に預けてから、奴に接近してサマーソルトを食らわせる。

「こっの・・・・・・・・・なんで・・・・・・・・」

ボロボロになりながらも、こっちを睨みつけるギルガメシュもどき。
ってか、

「なにが、なんで？」
「決まってるだろぉ！！そいつは『鍵』だ！願いを叶える願望機だ！なんで人として扱うんだよ！？」

・・・・・・・おいおい。

「なんで？」
「はぁ？」
「いや、なのはは人間だろ？つかかぎって何さ？」

すると、ギルガメシュもどきは突然笑い出した。

何がつぼったんだ?めちゃめちゃ笑ってるんけど・・・・・・あ、咳した。

「っくくくくくくく・・・・・・・・人間?おまっアホだろ?何も知らないのか?さっきも言ったろ、そいつは世界の鍵、なんでも願いを叶える願望機だ」

「それに」と続ける。

・・・・・んー、俺としちゃそろそろ自重するのをおススメするんだけどなー。

さっきから背中が冷たくて、熱い。

「ただの登場人物、キャラクター、所詮俺達(視聴者)に好き勝手される存在だ、それを今更人間扱いとか、マジ・・・・・・・・・」

あ、キレた。

つーか、どうするよ、この後始末・・・・・・・。

「・・・・・なのはちゃんは人間だ、意志を持って、ちゃんと動いている」

由香が振り下ろした斧を持ち上げると、勢い良く血と透明な液が噴き出して、流れる。

うわ、さらに後始末が面倒になった。

・・・・・・人が目の前で死んでるのに、考えるのがこんなことって・・・・・俺も堕ちたかねぇ?

にしてもだ、

「それをキャラクターとか願望機とか・・・・・・いい加減にして」

キレた由香、久しぶりに見たわな。

ｓｉｄｅ　なのは

何かに揺られている感触がする。
確かわたしは・・・・・・っ！

「そだ・・・・・・ジュエルシード！！」
「おおぅ！？」
「ふにゃっ！？」

な、なになに！？わたし、担がれてる！？
だだだだっ誰・・・・・・って、

「幽斗くん！？」
「あー、頼むから耳元で騒がないでもらえますー？」
「っ、ごめんなさい・・・・・・」

でもどうしてここに？由香もいるし・・・・・・。

「ペルソナが気付いてくれたんだよ」

「わたし達は全然気付かなかったんだ、すごい高度な認識阻害の結界だねー」

・・・・・・まだ整理できてない部分があるけど、この二人に助けてもらったってことであってるみたいだね。
お礼、言わなきゃ。

「あの、ありがとう・・・・・」
「いいってことよ！」
「うん、友達助けるのは、当たり前！」

二人そろって、無邪気に答えてくれた。
嬉しくなると同時に、悔しくなる。
わたしがやらなきゃいけないことだったのに、また助けてもらって・・・・・。

「あ、もういいよ、自分で歩けるから・・・・・」
「そっか？あんま無理すんなよ？」

下ろしてもらってから、すぐに戻ろうとした。
はやくジュエルシードを回収しないと・・・・・！

「ってちょっと待て！」
「どこに行くの？」
「決まってるじゃない！ジュエルシードを探しに行くの！」

あれは願いを歪んだ形で叶える危険なもの。
だから放っておいたら・・・・・。

「ジュエルシードってこれ？」

「そうそれ！それを回収に・・・・・・・・・っ！？」

びっくりして、振り返る。
由香が握ってるのって、ジュエルシードだ！

「それ！渡して！」
「おいおい！まず落ち着けって、なんか思い入れあるのはわかったから！！」

幽斗くんに羽交い絞めされてから、はっとなる。
由香を見ると、少しおびえた表情をしていた。
・・・・・・・・・。

「ごめん、ちょっと興奮してたみたい・・・・・」
「いいよ、大事なものなんでしょ？」
「・・・・・・・・・ん」

由香が差し出したそれを受け取ってから、封印処理を施した。
これでもう大丈夫のはず。

「・・・・・けっこう因縁あったりする？」
「うん・・・・・・・・・・・わたしが、魔導師になる発端であると同時に、フェイトちゃん達と、友達になるきっかけでもあったもの、なんだ」

きっと今のわたしは、一言一言噛み締めて発言したんだろう。
同時に泣きそうな顔もしているはずだ。

「二人とも、今日はありがとう、ごめんね」
「あっ・・・・・・」

だから、二人から顔をそらして、返事を待たずに帰ることにした。

第十一話世界の『鍵』（後書き）

頭蓋骨は脳みそを守る為にその中を体液で満たしているそうですよ？さばくです。
もうでないと思われたイゴールさんの登場。
今後もちょこちょこ出てくるかも・・・・・。
あと、世界の鍵のこと。
鍵があるということは・・・・・・？
そして幽斗と由香のペルソナが登場。
設定は後日。
それではお返事の部屋～。

Ｖｅｒｉｔａｓ様
そういうことですｗ
その後主人公と生徒会長に発掘されました。
誰だってやると思うのですよ、スイカの種でマシンガンｗｗ

次回は夏祭りでもやろうかなっと、あとおそらく急展開です。
それでは。

第十二話大怪我と後悔（前書き）

予告どおり、急展開、かもしれない？

第十二話大怪我と後悔

「っがぁ！！」

衝撃、直後に空也の体が木の葉のように吹き飛ぶ。
そのまま地面にたたきつけられ、うめき声を上げた。
彼愛用の刀はへし折られ、無残な姿をさらし、制服はところどころ派手に破け、出血している。
一案負傷が激しい右腕を押さえながら、空也は上を見上げた。
そこにいるのは、長い銀髪に紅い目、闇溶け込むような黒いコートといった出で立ちをしている。
極めつけは、彼の背後に存在する。

「・・・・・・・・・・・色違いの、・・・・・・・イザナギっ・・・・・・・！」

途端に敵は、にやっとその口角を上げた。
馬鹿にしたようなそれに、空也は珍しく憤りを感じて、声を荒げた。

「何者だ！？なぜイザナギを持っている！？」
「・・・・・・ふふっ、やだなぁ、忘れちゃったの？」

敵はまた笑って、両の手を広げる。

「僕だよ？『兄さん』？」
「・・・・・・・・・・まさか、お前・・・・・・・・！？」

笑顔を変えないまま、敵は自身のペルソナに号令をかける。
赤や黒といった、禍々しい色合いのイザナギは、その武器を振り上

げて、空也に斬りかかった。

ｓｉｄｅ　なのは

目覚ましに起こされて、まだ眠い眼をこする。
昨日は色々あったからなのか、まだ疲れが残っているみたいだったと、ケータイが振動しながら、メロディーを発する。

「・・・・・着信？騎子から？」

通話ボタンを押して、耳に当てた。

『たっ、たたたたた大変！！大変だよ！！』
「～～～～っ！」

突然大声でしゃべられて、思わずケータイを耳から話した。
一呼吸おいてから、また耳にあてて、

「落ち着いて、何があったの？」
『み、ミッチーが！大怪我して、病院に担がれたって・・・・・・！！』

頭の中が、一瞬で真っ白に変わる。
今、なんて？
空也が？病院？大怪我？
するり、と、電話が手から落ちるのが分かる。
だんだん遠ざかって、足元に落ちる、騎子の声。

『ちょ、ちょっと！？なのはちゃん？なのはちゃん！？』

海鳴大学病院。

「騎子！」
「なのはちゃん！」

人目を気にせず、病院の中を走り抜けて、みんなと合流した。

「空也は！？空也は！？」
「お、落ち着いて！」
「そうだよ！まずは冷静に！」
「・・・・・っ」

思わず騎子の肩を鷲づかみにして、激しく揺らしていて。
由香に言われて、はっとする。

「・・・・・・ごめん」
「いいよ、すごい心配なんでしょ？」
「・・・・もう、大丈夫？」

刀子ちゃんが、そう聞いてきたので、頷いてこたえた。
幽斗くんが口を開いて、

「全身に切り傷があって、出血が酷いんだと、でも一応命に別状は無いそうだから、明日には目覚めるらしい・・・・・・」
「・・・・・・・・」

なんで、どうしてこんなことに・・・・・・・！

「にしても、なんで空也が大怪我を？」
「一番大きい可能性、っていうか、絶対転生者の襲撃でしょ」

双子が口をそろえて言ったことに、みんなが頷いた。
・・・・・・・けど、

「ちょっと待って！襲撃されたのって、わたしだけじゃないの！？」

昨日、ジュエルシード以外の力は感じなかった。
わたしが、落ち着いた思考ができなかったって言うのも、あるかもしれないけど・・・・・・。

「少なくとも、相手の目的はわたしのはずでしょ！？」

『鍵』のこともあるし、少なくとも相手はそれが目的のはず。

「だろうね、でもなおさらおかしくなるよ？なんで空也も襲撃した？」
「なのはが狙いなら、なのはだけ狙えば良いだろ」
そう考え込む弓成と槍馬。
「単純にこっちの戦力削りたかったんじゃないの？なのはが欲しい、けどあたしらが邪魔、だったら一人だけでもって」
「そうなら、何で空也なんだ？俺ならアナライズを持ってる弓成や、強力な回復の術を持ってる刀子を狙うぞ？」
騎子が仮説を述べると、幽斗くんがそう意見を言う。
確かに、狙うならやっかいな能力を持った弓成くんや、刀子ちゃんが妥当。
いったいどうして・・・・・・。
そんな中、さっきから黙り込んでいた由香が、ぼそっと、
「・・・・・・結果的に、なのはちゃんが目的って見えているだけなんじゃないかな？」
「・・・・・・・・・え？」
「あ、えっと、その・・・・・・わたしが言いたいのは、始めから空也が目的で、なのはちゃんは囮・・・・・・っていう可能性はないかなって」
その直後に慌てて「ただの推測だよ！？」と断る由香。
「それだと、何て言うんだ？俺たちが全く気づかなかったっていうのも頷けるけど・・・・・・」
「つか、そもそも何でなのはちゃんの方に気づいて、空也の方は全く気づけなかったわけ？少なくとも弓成は分かったはずでしょ？」

「それが、ロビンフッドのアナライズに引っかかったのは、なのはちゃんの方だけで・・・・・・まさか空也も攻撃されているなんて思わなかった」

――悪いな、俺の失態だ・・・・・・。

弓成くん胸のポケットから、ロビンフッドのカードがちょこっとだけ出てきて、申し訳なさそうに言った。

ちなみにまだ朝早いので、周りに人はいない。

「いや、ロビンフッドの所為じゃないだろ？」

「さすがのあんたでも、察知できないものもあるって」

――すまねぇ、ありがと。

「でも」と話を切り出したのは、刀子ちゃん。

「ロビンフッドのアナライズは相当なスペックだよ？それを掻い潜るって・・・・・・どんな人？」

場の空気が、重くなる。

「まずは本人から話を聞かないと、目覚めるまで待とう？」

とりあえず今後の方針は、空也からの事情聴取ということで纏まった

――――ごめんなさい。

――――わたしは気づいていたの

――――あの人が危ないって、分かっていたの

――――すぐにでも教えてあげたかった。

――――だから何度も声を上げて、あなたが気づくように頑張った。

――――無駄って分かっていても、あなたに届けばよかった。

――――でも、ダメだったね

――――教えて上げられないどころか、あなたを危険な目にあわせて・・・・・・！

――――どうして何もしてあげられないんだろうね？

――――わたしは、本当に、いらない子なのかな？

side　？？？

「その後兄さんはどうしてる？」
「予想通り、病院に運ばれた様です」
笑顔が浮かんだのが、自分でも分かる。
こうも事が進むとかえって怖い気もするけど、今はそれがありがたい。
「『鍵』はそのことを知ってるよね？」
「もちろんでございます」
「よし、いい感じに進んでいるね」
っく、ふふっ・・・・・・・。
何年もかかってしまうけど、確実にやるためにはやむを得まい。
さぁ、せいぜい踊ってもらおうかな？
僕の目標のために、ね。

ｓｉｄｅ　空也

翌日。
俺が目を覚ましたのは、病室のベッドだった。
近くの看護師に聞くと、どうやらあの後すぐにここへ運ばれたらし

い。
友人たちが心配していたと聞かされて、少し申し訳なく思った。
出血が酷かったので、ゆっくり休むようにと言われる。
やることは他にも無いので、従うことにした。
ベッドに入って、ぼんやりしていると、

――――起きたな
（・・・・・イザナギ）

口に出して会話するわけにも行かないので、互いに心で会話をする。

――――覚えているか？昨日・・・・と言っても、正確には一昨日だが。
（ああ、同じ転生者と、赤いイザナギ・・・・・それに負けたんだったな）

さらっと言ってはいるが、結構悔しかったりする。
本能と言うか、何と言うか・・・・・とにかく、俺も男だ。
負けた、ということに、少しばかり苛立ちというか、嫌悪を感じた。
・・・・・それよりも、だ。

（あいつ、俺のことを『兄さん』って呼んだ）
――――そうだな・・・・・まさかとは思うが・・・・・・・・。
（・・・・・正直、その予想は当たっていそうだ）

いつの間にか、ため息をついていた。

（なんでここに・・・・・・？）
――――さぁな。

戦った『あいつ』について考える。
・・・・・・・・・・間違っていなければ、あいつは・・・・・・・・・・。

「お前も来ているのか？レイト・・・・・・・・・」

ｆｒｅｅ　ｓｉｄｅ

同じ頃、海鳴市の臨海公園では、大きな夏祭りの準備が進んでいた。
二日間に渡って行われる巨大なそれは、毎年多くの観光客で賑わう。
メインイベントは花火で、量と質が自慢らしい。
今年はなのはの実家、喫茶翠屋も出店する予定で、アイスコーヒーとジュース各種、カスタードの変わりにアイスを入れたシュークリームを売り出すらしい。
そういうことで、高町家および仲良しメンバーは、その準備をしていた。
なお、空也は未だ入院中である。

「助かるわ、若い子達も、あんまり店を空けていられないから」
「友達のよしみってやつです」

ダンボールを運んでいた桃子がうれしそうに言うと、刀子が笑って返す。
そこから少し離れたところでは、士郎と男子三人が屋台を組み立てていた。
テントを立ち上げ、その下に器具を並べていく。

「だ、大丈夫なの？」
「はい！」
「にゃはは・・・・」

そこへ荷物を運んできたのは、なのは、美由紀姉妹と、由香だ。
美由紀は由香の怪力っぷりにかなり驚き、なのははそれを見て苦笑いしていた。

「今年初なんだよね？」
「うん、お店も余裕が出てきたから、ちょっと新しいことに挑戦してみようって」
「そうなんだ」

テントの下で荷物を広げながらの会話。
その通り、翠屋は初出店なので、地元では結構話題になっている。
桃子に呼ばれた二人は、荷解きをひと段落させてから向かう。
女三人でテーブルを広げて、布巾できれいに拭いた。

「よし、こんなもんかな？」

明るい笑顔で満足げに頷いた桃子につられて、二人も笑う。

そんな中、弓成のケータイに着信。
弓成は士郎に一言断り、離れた場所で電話に出る。
始めの一瞬は暗い表情だったのが、すぐに明るくなった。
通話を終えた弓成は、明るい声でみんなに知らせる。

「空也の意識が戻ったそうだよ！！」

ｓｉｄｅ　空也

ぼんやりとしていると、なのは達が病室に乱入してきた。
俺が目覚めたと聞いてすっとんできたという。
あいさつや喜びもほどほどに、会議が始まった。
幸いこの病室には、俺以外の入院患者がいないので、堂々と話ができる。

「早速だけど、襲撃してきたやつ、どんなのだった？」

槍馬にそう聞かれて、あのときのことを思い浮かべる。
銀髪に紅い目であることと、イザナギそっくりのペルソナを使役していたことを伝えた。

「イザナギそっくり！？」
「色違いって、どこの〇ケモンだよ！それ！」

案の定、みんな驚いている。
だが幽斗よ、俺に突っ込みを言われても困るぞ。

「物理と魔法を両方反射されてな、結構一方的な戦いだった」

手も足も出ないとは、あのことを言うんだろうな。
もう一度言うが、俺だって男だ、負けていい気持ちはしない。

「物理も魔法も反射って・・・・・・・もろチートじゃん！反則じゃん！」

槍馬の隣で騎子が騒ぎ、なのはも不安そうにしている。

「反射・・・・・・少なくともテトラカーンとか生ぬるいもんじゃなさそうだな」
「物理も魔法も反射って・・・・・・・何かあったけ？」

幽斗と刀子が

「少なくとも、転生者である空也にダメージを通したんだ、もしかしなくても転生者だよ」

「それも」と、緊張した面持ちで、弓成は重々しく口を開いた。

「俺達転生者ですら対抗できないくらいの力を引っさげた、只者じゃない奴と断定していいと思う」

空気が、一気に落ち込んだ。
・・・・・・転生者の素性については、伏せることにする。
まだ推測の域を出ないし、何より、

避けられるのは、嫌だ。

誰に、とはあえて言うまい。
と、重苦しい空気の中で、由香が唸って、ポツリ。

「物理も魔法も反射？・・・・どこかで聞いたような・・・・・・・・」

あの後少しばかり質問攻めにされた由香だったが、結局本人も思い出せずじまい。
日も傾いてきたので、みんな帰っていくが、なのはは一人残っていた。
何か用事でもあるのだろうか？俺には心当たりが無いんだが・・・・？

「・・・・・・・・ごめんなさい」
「・・・・・・・・は？」

いきなり何だ?
何を謝って・・・・・・・?

「わたしの、せいで、こんなに怪我して・・・・・・」

ああ、そのことか・・・・・・。

「別に大丈夫さ、お前だって結構ピンチだったんだろ?じゃあしょうがないさ、それにお前こそ大丈夫か?後遺症とか、残っていないといいが・・・・」
「わたしは全然!幽斗くん達が助けてくれたし・・・・・・」

またしゅんっとなるなのは。
・・・・・・これは、けっこう気にしてる?
・・・・・しょーがない。

「あっ・・・・・・」
「俺もお前も生きていたんだ、大丈夫、何とかなる」

とりあえず、頭を撫でてみた。
彼女は目を閉じて、されるがままにしている。
・・・・・んー、まだ暗いな。
っていうか、

「何でお前がそこまで気にする?」
「・・・・・・だって、わたしが・・・・・・転生者相手に、手も足も出なかったから、幽斗くん達の手を煩わせて、それで空也の方には、誰も助けに来ないで・・・・・・!」
「俺としては、お前が無事なら別にいいんだけどな」

「わたしはよくない！」

突然の大声に、反射で肩が跳ね上がる。
一方のなのはも、今のは思わずだったらしく、口を押さえて震えている。
互いに何も言わないまま、なのはは俯いて、

「・・・・原因は私かも知れないんだよ？そんなの、よくないよ」

・・・・・・・なんというか、背負い過ぎだろう。
今さっきの絶叫だって、ためていたものを吐き出したという感じだし。

「・・・・・・・・別に、お前が気にする必要はないだろ」
「・・・・・・・気にする」

こいつは・・・・・・・・。
なんというか、こんなところでも頑固を発揮か？
何でそこまで・・・・・・・・。
考えていると、なのはが静か過ぎるのに気付いた。
もう帰ったのかと、隣を見てみる。
・・・・・・・彼女はそこに突っ立ったまま、黙って泣いていた。
って、何で泣く！？
何だ！？何かまずいことでも言ってしまったか！？

ｓｉｄｅ　なのは

何で泣いてるのか分からない。
けど、目の前の空也を見ていたら、ただ悔しさだけがあふれてきて。
何でわたし、こんなに弱いんだろ、何で、転生者じゃないんだろ。
そしたら、空也のことに気付けたかもしれないのに、転生者に遅れを摂らないのに。
原作キャラは、何をしてもダメなの？絶対に転生者には勝てないの？
・・・・・・幼馴染を助けることも、できないの？
・・・・・・・・・・・・・・分からないよ。

「なのは？おい、なのは！」

空也、こんなわたしなのに、構ってくれて、受け入れてくれて、心配してくれて・・・・・・・。
ペルソナを持っている人って、どんな人でも受け入れられるのかな？
本当に優しい人・・・・・・・・。
・・・・・・・ああ、だからなんだ。

「大丈夫か？何かまずいことでも言ったか？」

環境が変わっても、この人は変わらない。
自分を作らなきゃ生きていけないわたしと違って、この人は自分のままで、立っている、進んでいる。
だから、

「あの、もしもしなのはさん？何か言ってくれないと・・・・・・・・っ？」

この人が好きになったんだ。

第十二話大怪我と後悔（後書き）

あえて何も言いませんです、はい。
強いて言うなら、純粋な恋心は最高だと思います、サー！
お返事の部屋は今回お休みです。
誤字脱字あらば感想へどうぞ～。
次回は・・・・・どうしよっかな？↑
それでは。

第十三話夏の祭り（前書き）

恋愛物を書いているみなさんって、どうやって羞恥心を制しているのだろうか・・・・・？

第十三話夏の祭り

ｓｉｄｅ　桃子

八月下旬、某日。
日が少し傾いた空に火矢が放たれ、大きな音を響かせる。
それが、夏祭り開始の合図だった。
それぞれの屋台が臨戦態勢に入り、客が来るのを今か今かと待ち構えている。
それは喫茶翠屋の屋台も例外ではなく。
わたしとなのはは、そろって商品の在庫を調べていた。
在庫が十分ということを書類と照らし合わせて確認し、満足そうに頷いたなのはを見て、わたしは複雑な気分になる。
隣にいたからか、分かりやすい顔をしていたからなのか、、そんなわたしになのはは気づいて、「なぁに？」と聞いた。
わたしは少し笑ってから、

「よかったの？友達と遊ばなくても」
「・・・・・・うん、刀子ちゃん達には悪いけど、うちは人気の喫茶店だしね！人手は多いほうがいいでしょ？」

そう、明るく笑った。
・・・・・やっぱり、明らかに無理してるわね。
多分原因は、空也くんが入院したこと。
最近のなのはは、前より明るく笑うようになった分、落ち込みが随分激しい。
空也くん達が受け入れてくれた結果と考えれば、それはそれでいいのかもしれないけど。
自分のこととか、フェイトちゃん達のこととか、見た目以上に悩ん

でいるはず。
それでも何も言わないのは、この子が、色々と抱え込んじゃう癖があるから・・・・・・。
親のわたしがしっかりしないといけないのに、これじゃ駄目ね・・・・・・。

「あ、お母さんお客さん！」
「分かったわ」

とにかく、今はこの子を少しでも支えることを考えなきゃ。

ｓｉｄｅ　なのは

屋台が開店して、一時間くらい。
人の流れは落ち着いているけど、忙しいのに変わりは無くて。
お母さんとお父さんも、お姉ちゃんも、わたしも、対応に追われている。
やっと一息つけたのは、辺りがすっかり暗くなってからだった。
奥の方で思わず椅子に座り込んで、ため息をついていると、

「なのはちゃーん！」

この声は・・・・・・騎子？
重い体を何とか動かしてカウンターにいくと、浴衣姿の騎子達がいた。

「やっほ、からかいに来たよ！」
「冷やかし目的じゃないだろ」
明るい顔で冗談を言う騎子に槍馬が突っ込んで、みんなで笑う。
いつもの光景がそこにあって、どことなく安心した。
「なのはちゃん、大丈夫？すごく疲れているみたいだけど・・・・・・」
「にゃはは、大丈夫だよ、さっきまで休憩してたから！ありがとう、由香」
心配してくれた由香に、命いっぱいの笑顔で答える。
わたしに出来ることっていったら、これくらいだし・・・・・・。
「大丈夫なら、お祭り見て周らねぇ？せっかくの夏祭りだしさ」
そう、幽斗くんが誘ってくれた。
けど、まだまだお客さんは来るだろうから、迂闊に屋台を離れるわけには・・・・・・。
「いいよ、なのは」
「お父さん！」
「せっかくのお誘いだ、楽しんできなさい」
で、でも・・・・・・。
お母さんとお姉ちゃんを見てみると、二人ともお父さんと同じように『いいよ』って言ってくれた。
・・・・・・・・・・・・。
「じゃあ決まり！行こ行こ！！」

「あ、わわっ！」

そのまま騎子に手を引かれて、お祭り会場を周る事になった。

閑話休題。

「そういや、空也くんって退院はいつ？」

みんなでクレープを食べていると、刀子ちゃんが切り出した。

すると弓成くんが、口の中のものを飲み込んでから、

「明日だそうだよ」

「え、結構早くない？」

「骨折も見受けられないし、出血が酷いのも太い血管を中心に攻撃されていたからであって、傷はそんなに大きくないしね」

『なるほど～』と、由香と騎子は納得して、再びクレープにかぶりついていた。

・・・・・メインイベントの花火まではまだ時間があるし、一日の終わりにやるのが、恒例。

だから、明日には空也を交えたみんなで見られるんだけど・・・・・。

・・・・・なんとなく昨日のことを思い出していたら、思わずむせた。

「むせたの！？しっかり！」

気を使ってくれた由香が、背中をさすってくれる。

うん、将来は良いお嫁さんだね。
・・・・・現実逃避はやめよう。

「だいじょーぶ？」
「なん、とか・・・・・・」

まだ、喉がヒリヒリする・・・・・・。

「っていうか、いきなりむせるとか、何事よ？」
「ううん、なんでもない」
「真顔なのがむしろ怖い」

あぅっ、そんな顔してた！？

「・・・・・さては、昨日なにかあったな？主にこっち方面で」

ああ、やばい。
騎子はいたずらっぽい顔で、小指を立てている。
この子、こういうのにはずば抜けて鋭いんだから、困ったものだよ・・・・・。
もう・・・・・どう切り抜けようかな・・・・・？
・・・・・あ、電話！
相手は・・・・・お姉ちゃん！ナイス！！

「はいっ！もしもし！」
『なのは？今大丈夫？』
「もちろん！」

後ろで騎子が何か言ってるけど、聞こえないもん！
悪いけど、無視を決め込むよ！

『じゃあ、今から屋台に戻ってこれる？お母さんが用事あるって？』
「お母さんが？・・・・・・うん、わかった、それじゃあ」
電話を切ってから、みんなの方を見て、
「ごめん、そういうわけだから、ちょっと戻るね！」
「何がどういうわけだかさっぱりだが、戻らなきゃいけないのは理解した」
「もー、いい具合に逃げやがって！あとでたっぷり聞かせてもらうからね！！」
そんなみんなの声を聞きながら、走ってその場を離脱した。
・・・・・逃げてなんかいないよ？戦略的撤退だよ！？

翠屋の屋台。
戻ってみると、お母さんが待っていた。
けど、なんでエプロンをはずして・・・・・？
「来たわね、じゃあ、わたしはしばらく抜けるから・・・・・・」
「はい！お気をつけて！」
いつの間にか、お店の人たちが来ていて、お父さん達と一緒に接客している。

っていうか、

「お母さん、用事って何?そもそもお仕事は・・・・・・」
「いいの、それよりなのは、一旦帰るわよ」

・・・・・え?

「な、なんでいきなり・・・・・・!」
「浴衣に着替えるの」
「え、えぇっ?」

あれよあれよという間に、わたしはお母さんに連れられて、家に帰っていった。

side　空也

俺がいる部屋が高い位置にあるからか、それとも周辺の建物が低いからか。
病室から、臨海公園の夏祭りが良く見える。
・・・・・まさか病室で花火を見るかもしれない日が来るとはな。
明日には退院できるとは言え、少々複雑な気持ちだ・・・・・。
そういえば、と、ケータイの電源を入れる。
騎子か幽斗あたりから、何かメールが来ているかもしれない。

メールボックスを開いて、新着メールの受信を起動させると、一通の受信があった。

差出人は・・・・・・なのは？

――――これからそっちに行くんだけど、何かほしいものはあるかな？連絡、お願いします。

これからこっちに来る？店も大変だろうに。

しかし、何か欲しい物、か。

断ると言う選択肢もあるが、相手の好意を無下にするのも何なので、ここは好意に甘えることにする。

とりあえず、

――――たこ焼きで頼む

・・・・・・いや、夏祭りと言えばたこ焼きだろ？

そういえば、他に来る奴はいないんだろうか？

・・・・・・・・男女が二人きりと言うのも、いささか気まずくて・・・・・・気まずくて・・・・・・・・・。

・・・・・・

・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

――ありえないくらい柔らかったな
「ああ、人間とは思えな・・・・・・〜〜〜〜っ！！」

昨日のことを思い出して、がっと頭を抱え込んだ。
と同時に後ろの壁に後頭部をぶつけて、悶え苦しむ。
ぼっ、煩悩退散！ああ、あれは事故だ！そう、事故なんだ！！
落ち着け、今ならっ今ならもれなくジオダインをっ・・・・・・！

――落ち着け
「・・・・・・わかった」

よし、ここは冷静に行こう、何事も落ち着きが肝心だ。
でないと出来る判断も出来なくなる・・・・・・。
嗚呼、でもやっぱり気まずいものは気まずい、よな。
・・・・・・どうしたもんか。

閑話休題。

外をぼっと見ていると、扉が開く音が聞こえる。
恐る恐る振り返ってみると、

「あ、あの、来たよ？」

浴衣姿のなのはがいた。
藍色の生地に、ススキの模様が映えているシンプルなデザインだ。

「・・・・・・ああ、うん、いらっしゃい」

いかん、一瞬呆けた。
というか、俺はこんなキャラだったか？

・・・・・・まぁ、いいか、考えるのも面倒だ。

「あ、たこ焼き・・・・・・」
「ああ、ありがとう」

ベッドに備え付けられているテーブルを広げて、その上に買ってきてもらったたこ焼きを乗せた。
・・・・・駄目だ、話題が見つからん。
気まずい、気まずすぎる、昨日のことがあるから余計に・・・・・・！
な、何か話題は・・・・・・。
そう焦っていると、なのはが遠慮がちに自身の浴衣を指差して、

「その、どう、かな？」
「あー、うん・・・・・・似合ってる」

・・・・・やべっ、かなり恥ずかしい。
なのはもそれは同じなのか、下を向いている顔が真っ赤になっていた。
なんだか目を合わせづらい所為か、さっきから視線が窓の外に逃げてしまう。

「あ、あの・・・・・・」
「うん？」

なるべく冷静に、口を開いたなのはと向き合う。
・・・・・いや、話すときくらい相手の顔見ないと、失礼だろ？

「昨日の、こと・・・・・・」
「・・・・・ああ」

何かを必死に伝えようとしているなのはは、肩を震わせている。

「その、ごめんなさい・・・・・・」

「・・・・・・」

なんて声をかければいいのか分からなくて、黙り込んでしまう。

なのはもそれっきり何も言わなくなって、静かになった。

静寂が痛い、だが話題が見つからない。

「・・・・・・気がついたらね」

ぽつり、なのはが語り始める。

「気がついたら、あなたのこと考えてて、あなたの隣に居たくて、あなたともっと一緒に居たいって思ってた」

「・・・・・・ああ」

きっとこれは、なのはが漏らす数少ない本音。

だから否定せず、黙って受け入れることにする。

「でも、わたしみたいに、弱くて、足手まといになりそうな子が居たんじゃ、邪魔になるって分かってたから、今まで気づかなくて、ずっと黙ってた」

「・・・・・・ああ」

「本当に気がついたのはつい昨日で、自分でも本当にびっくりしているの」

「・・・・・・俺だってあれは驚いた」

「・・・・・・ごめんなさい」

謝るなよ・・・・・。
そう思ったら、自然を頭を撫でていた。
なのはは少しの間受け入れてから、ゆっくりと俺の手を離す。

「その、分かったばっかりで、正直、すごく混乱していて、わけが分からなくて・・・・・でも、その・・・・・・・」

これはなのはが自分の口で言うべきだと思った。
だから、その先が分かっていても、あえて指摘しない。

「・・・・・・――」

ちょうど花火が始まったらしく、外で甲高い音が響いた後に、爆発音。
なのはの言葉はかき消されたけど、言いたいことはなんとなく分かって、

「・・・・・・・・・っ」

二度目、触れ合わせるだけのそれをかわした。

第十三話夏の祭り（後書き）

深夜のテンションって不思議ですよね。
見てるこっちが恥ずかしい話書いてても、なんとも思わないっすから。
きっと何かの補正がかかってるんだろうね！！うん！！
しんやの　ちからって　すげー　！！　▼
次回は・・・・さーて、どうしよっかなー？

第十四話花火（前書き）

タイトルは、何となくです。
意味はありません

第十四話花火

「えーそれでは・・・・・・」

翌日、アックスボリューム。
いつも八人がたかっているテーブルで、一人、弓成がジュースを片手に立ち上がっている。

「空也が退院したのを記念して！」

――――かんぱーい！

それを合図にして、一斉にそれぞれのアルミ缶をぶつけ合った。

「っていうか、出血多量だったのに三日で退院って大丈夫なの？」
「ああ、多量といっても、重要な血管を中心に攻撃されていたし、何より傷口自体が小さかったからな」

テーブルに並べられたスナック菓子を食べながら、会話を交わす。

「ただし、絶対安静ね？」
「分かってる」

じっとそれを見ていたなのはは、いつも道理の光景にほっとした表情を浮かべた。

「まぁ、問題はまだあるんだけど」
「色違いのイザナギだろ？確かにそうだけど、今はいいじゃねぇか！ほら、飲むぞー！」

「親父くさっ・・・・・・」

幽斗に絡まれ、げんなりした表情をする槍馬。
そうこうしているうちに、話題は夏祭りに変わる。

「今日も行くよね？夏祭り！」
「もちろん、なのはちゃん今日は大丈夫？」

刀子の問いかけに、なのはは頷いた。

「本当は今日も手伝う筈だったんだけど、お客さんが予想以上過ぎて、学生にはきついだろうって、シフトを変更してくれてたの」

「本音を言えば今日でもよかったけど」と、なのはは控えめに笑った。

「いや、さすがに学生で働きたいって、どうよ？」
「だって、元管理局員だもん」

「あー・・・・・」と、妙に納得した様子で、全員が頷いた。
気を取り直して、騎子はぐっと握りこぶしを作り、気合十分なことをアピールしながら立ち上がる。

「よーし！昨日は普通に私服だったから、今日は女子全員浴衣ね！」
「女子限定？」
「もちろん男子も甚平だよ！？」
「へいへい」

誰もその提案に異議はなく、いったん解散となった。

閑話休題。

時間は進んで、夕方。
臨海公園入り口。

「お、どうやらお出ましみたいだ」
「やっと来たか・・・・・・」
「遅い」
「まぁ、女の子はおしゃれに気を使うしね」

そうこぼしながら女性陣と合流する。
そして、少なからずの感嘆の声を上げた。
目の前にいるのは、普段とは一味違う姿の四人組だった。
由香は水色に金魚模様の浴衣、肩まである長い髪を結い上げて、簪で止めている。
刀子は青色に朝顔の模様の浴衣、長い髪は首のあたりでリボンで結んでいた。
騎子は黄色に白い菊模様の浴衣、前髪はピンで留めていた。
なのははは先日と同じ藍色にススキの浴衣、だが亜麻色の髪はポニーテールでまとめていた。

「えぇ、なにあの子達!?」
「うっわ、全員レベル高ぇ!」
「か、彼氏とかいるのかな!?」
「ナンパのしがいがありそうだ・・・・・・!」

浴衣を着ていることもあってか、四人そろって注目を集めている。
そのどれもが彼女らを賞賛していて、男性陣は一緒にいていいのだ

ろうかと苦笑いをした。

「どーよ！あたし等の浴衣！」

「似合ってるんじゃね？ってか、俺としてはそろそろ移動したいんだが・・・・・・」

「・・・・・・？何で？」

「あんたら、注目浴びすぎ」

指摘されて初めて気がついたのか、今度は女性陣がそろって苦笑いをする。

「それじゃ、夏祭り周ろうか？」

「おうよー！楽しむぜー！！」

八人そろって、会場に足を踏み入れた。

「祭りと言えばたこ焼きでしょ！」

「お好み焼きも捨てがたいよ？」

「どっちでもいいから、自腹で買ってくれよ？」

「カキ氷も鉄板だよね」

「〜〜〜っ頭にきた――ッ！！」

「ああ、ほら、そんなに早く食べるから・・・・・・」

「さすが弓兵（アーチャー）、百発百中だな」

「そういう幽斗だって、確実に当ててるじゃないか」

「俺の場合は無駄に集中できてるってだけだよ」

「翠屋の方、どうなっているかな？」
「結構混んでるよね、士郎さん達大丈夫なんだろうか？」
「大丈夫だろ、翠屋は日常的に込み合っているから、対応には慣れているはずだ」

「よっと！」
「おぉ！やるな、お嬢ちゃん！」
「えへへー！」
「上手なのはいいけど、その金魚どうするんだ？」
「・・・・・・あっ」

「『スーパーボールすくい』なんてあるんだ」
「そう、金魚すくいよりも簡単だから」
「コップを突っ込むだけだからね～」

「なんだ、その狸？」
「あれ？可愛くない？」
「可愛いっていうより・・・・・・」
「・・・・・・ブサ可愛い？」

ひとしきり楽しみ、夕日がほとんど沈んだ頃。
はた、と、槍馬が気づいた。

「・・・・・・空也となのはは？」

「あれ？そういやいない・・・・・・・」

臨海公園の奥。
なのはと空也はゆっくり歩きながら、あの紅葉の場所を目指していた。

「・・・・・・二人で、あの場所に行くのも久しぶりだね」
「・・・・・・・ん」
「ね、覚えてる？初めてここに来たときのこと！」
「覚えてる、俺が先に見つけて、なのはを案内したんだよな」
「うん！それでね・・・・・・・」

二人とも、知らないうちに笑顔で会話を交わしていて。

「魔法のこと打ち明けたとき、空也はしっていたの？」
「普通じゃない力についてはな、さすがに魔法があるとは思わなかった」
「そうなんだ」

だんだん紅くなっていく周囲。
この季節にあるはずのない紅葉（もみじ）が、はらはらと、風に踊り、落ちて

いく。
会話がはずみ、開けた場所に出た。
空也は腕時計に目をやって、少し微妙な顔になる。
「ちょっと早かったな花火まで結構時間がある」
「そっか、じゃあその間暇になっちゃうね」
二人で苦笑いを交わして、ゆっくりと座った。
「・・・・・・ねぇ」
「ん？」
話題を振ってきたなのはは、それっきり黙り込んだ。
空也がどうしたのかと、隣を見ると、俯いているなのはがいた。
――何かを聞きたいが、躊躇われる。
そんな顔をしている。
空也はふっと笑って、
「聞きたいことがあるなら、遠慮しない方がいい・・・・・・幸い、騎子達はいないしな」
「・・・・・・」
それからもうしばらく黙っていたが、やがて決心のようなものがついたらしく、顔を上げた。
「その・・・・・・空也がペルソナに覚醒した切欠って、何かなって？」
「・・・・・・どうして、そう思った？」

ぴくり、と、空也の眉毛が動いた。
表情は、よろしくない。
そんな空也の質問に答えるべく、なのはは片手を見つめて、目を閉じる。
一瞬、淡く発光。

「・・・・・・それは」

出てきたのは、ペルソナのカードだった。
だが、本来ペルソナの姿が描かれている面は真っ黒だ。

「・・・・・・みんなの足手まといになるのは、嫌だから、それに・・・・・あなたが怪我するのも、嫌」

なのははカードを両手で抱いて、震える。
彼女なりに、追いつこうとしているのだろう。
『原作キャラ』と呼ばれる人々が、『転生者』に勝てないのは何故か？
答えは簡単、彼らがその世界に無い技術を持っているからである。
次に、こちらが能力について詳しく知らない代わりに、転生者は自分の能力やこちら側の能力まで把握している。
持っている情報に差があるため、対策が立て難いというのが一番大きい。
さらに、転生者の持つ能力は様々だが、基本反則的なものが半数以上だ。
単純な情報と、火力の差。
これが、原作キャラが転生者に勝てない所以。

「ダメ、かな？」

だから、なのはは少しでも力を得たかった。
自身が俗に言う原作キャラだというのなら、おそらくこれから得る能力も把握されているはず。
ならば、それ以外の力を以ってして対抗するしかない。
それ以上に、空也がペルソナに目覚めた切欠は、『死を受け入れたから』だというが。
それ以外にも理由がある気がしていた。

「・・・・・・いや、いつかは話さなきゃいけないことだ」

そんななのはの意思を汲み取れたのは、幼馴染ゆえか。
空也は、ぽつり、ぽつり、と語りだす。

「俺が目覚めた切欠は・・・・・・お前だ」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・ふぇ？」

ぽけっとするなのは。
空也はそれを微笑ましそうにくすっと笑ってから、続けた。

「・・・・・・俺とお前が、一時期仲違いすることがあっただろ？その切欠になった、あれだ」
「・・・・・・・・・・あっ」

思い出すのは、一年前。
自身が不良に攻撃されて気絶し、その合間に空也が誤解を受けた、あの騒動。
まさか、あれが切欠だったとは・・・・・・。

「さすがにお前を守りながらは辛くてな、撤退も、攻撃も出来ない

ような状況だった・・・・・・だから、つい願ったんだよな、『力が欲しい』って」

「そしたら」と、空也は手にカードを出現させる。
なのはのものとは違い、イザナギの姿が描かれていた。

「けど、覚醒したてじゃ意思疎通出来ない上に、コントロールも不可能だからな、でも勢いに任せて、あいつらに重傷を負わせてしまった」

脳裏に蘇る、あの時の映像。
初めて力を手にした時のことだ、忘れたくても、忘れられなかった。

「・・・・・あの、まさか」
「いや、運がいいことに死者は出てない」

不安がはずれて、ほっとするなのは。

「けど、さすがにあれはやりすぎた・・・・・そんなこんなで、俺は自業自得で誤解され、嫌われ者になりましたとさ」
「・・・・・」

だがすぐに表情を暗くして、俯いた。
空也はまた苦笑いしてから、なのはの頭を撫でる。
するとなのはは、少し安心したように笑って、

「・・・・・昔からそうだよね、空也って」
「うん？」
「よくわたしの頭を撫でる」
「む、そうか？」

「そうだよ」

すくすくと笑いながら、笑顔をみせて、

「自分だって子どもなのに、『いいこ～いいこ～』ってさ」

「・・・・・・そうか」

空也はどこか照れくさそうに、うなじをかいた。

なのははまた笑顔を浮かべて、

「また、一緒に遊ぼうね」

「・・・・・・もちろん」

自然と二人の手が重なり、握り合う。

その姿は、長年連れ添った夫婦のようで。

二人はただ、互いを見て笑いあっていた。

甲高い音の後、爆発音。

夏祭り最後の花火が始まったようだ。

単調な色合いの夜空を、鮮やかに染めながら、一瞬で散っていく。

まるで人間の人生を表しているようで。

見つめていたなのはの顔が、不安で翳った。

そして以前にも増して、失くすことを怖がっている自分に気づく。

無意識のうちに、握っている手に力を込めて、離れないようにした。

無駄なことだというのは分かっているが、そうでもしなければ安心できないのだ。

そんななのはに対し、空也は黙って手を握り返す。

不安を隠すためとはいえ、強く握った手は、若干痛かった。

第十四話花火（後書き）

浴衣っていいですよね、自分着ませんけど。
それではお返事の部屋。

緑異様
毎度ご感想ありがとうございます。
この小説では、ペルソナとは感覚は共有していませんが、情報なら共有しています。
例えば、足の小指を角にぶつけた時、本人は痛がってのた打ち回りますが、ペルソナは、『ああ、足の小指をぶつけて痛がってるな』ってくらいです。
それと、自分ハーレムものは苦手って言うか、何ていうか・・・・・。
この人一筋！っていうのが好物ですので、空也はキタローや番長みたいにならないのは確かです。

次回は夏休みも終わって、二学期に入ります、が。
ここでちょっとみなさんに質問、『体育祭はやるべき？それともスルーすべき？』
お返事待ってます。

第十五話土曜日（前書き）

今回、急・展・開っ。

第十五話土曜日

「うがーっ！何で二学期早々テストかなぁ！？」
「学力を保つためじゃない？」

アックスボリューム、いつものテーブル。
先日二学期を迎えた八人は、そろってテスト勉強に所為を出していた。
なのはに理数系を習っていた騎子は頭を抱え込み、一緒に習っていた由香は苦笑いする。
その様子を見て、なのはは黙って微笑むだけで。
平和なひと時をすごしていた。

「なぁ、あれ・・・・・・・」

ふと、そんな声が聞こえて、何となく視線をずらしてみる。

「・・・・・・・っ」

思わず目をそむけてしまった。
そこに居たのは、かつで自分が通っていた学校の制服。
男子のものとはいえ、忘れられないものだ。

「高町だよな、それに向かい合ってるの、道村じゃねぇか」

向けられている視線が、段々鋭くなって突き刺さる。
何とか平常を保とうと必死になるが、手が少し震えている。

（何で・・・・・・どうしてここに、聖祥の人間がいるの・・・・

・・・！？）

必死に無視を決め込むものの、聞こえてくるものは聞こえてしまう。

「あんなに美人なのに、もったいないよなー」

「ああ、まさか友達裏切るとか、ないわー」

何にも知らないくせに、と思う反面、半端無い罪悪感で、頭がぐちゃぐちゃになってくる。

混沌としたそれが、怖くなって、震えが止まらなくなって、

「・・・・・・・っ」

喉に異物が詰まる感覚。

呼吸が苦しくなってくる。

かすれるような、蚊の鳴くよりも小さい声で、呟いた。

――――ごめんなさい。

「つーか何で月白に・・・・・・・っ！！」

どっと、風が吹き抜ける。

陰口を叩いていた聖祥の男子は黙り込んで、手や額にびっしょりと汗をかいた。

気がつくと、今まで勉強を教えあっていたはずの一同が黙り込んで、なのは達のいる一角だけ、静まり返る。

何があったのかと、みんなを見渡していると、空気が重苦しく感じた。

そこで、なのはは気がつく。

（みんな、殺気を出している？）

刃のような鋭いそれを、的確に聖祥の男子に打ち込んで、集中するためにペンを止め、ただ黙り込む。
そうやって、どれくらいの時間が経ったのだろうか？
我に返った男子生徒は、そそくさとその場を逃げていった。
音が無くなっていた世界に、喧騒が戻ってくる。

「大丈夫？なのはちゃん」

刀子が、なのはの顔を覗き込む。
束の間呆けていたなのはは、すぐに再起動。
笑顔をつくろい、精一杯笑った。

「大丈夫！ごめん、何か変な顔してた？」
「変なっていうか、顔色が悪い」

槍馬が指摘して、全員が頷いた。

「もう帰りなよ、あとは弓成あたりにでも聞くから！」
「そうだよ、体壊したら元も子もないよ！」

騎子や由香もなのはを気遣い、帰るように促す。

「え、でも・・・・・・」
「俺もここで帰る、なのはを送るから」
「ちょっと、空也・・・・・・！」

空也が徐に立ち上がり、荷物をまとめ始めた。
なのはは、まるで帰ることが決定事項のような扱いに、異を唱えようとするが、

「帰るよね？」
「うん、帰るよ！」

刀子に一睨みされ、荷物をまとめ始めた。
向けられたのは笑顔だが、何故か異様な圧力を秘めていて、とても逆らえそうになかったからだ。
刀子は満足そうに頷く。

「ちゃんと守ってやんなよ？」
「分かってる」

幽斗は少しからかうような口ぶりで空也に軽口を叩き、空也もそれに答える。

「それじゃー、お大事にね！なのはちゃん」
「うん、ごめんね」

苦笑いしてみんなに手を振ってから、空也と共にアックスボリュームを出た。

ｓｉｄｅ　なのは

「大丈夫か？」

帰り道。
二人で歩いていると、空也が振り返って、話しかけてきた。
さっきのことを心配してくれてるみたいで、珍しく顔が暗い。

「大丈夫！ごめんね、ありがとう」

もちろん嘘だ。
心配させたくないし、襲撃者のこともあるから、これ以上負担はかけたくないし・・・・・・・。
だから精一杯作り笑いして、ごまかした。

「・・・・・・・無理はするなよ」

けど、空也は分かっちゃったみたい。
だけど何も言わずにいてくれた。
・・・・・・むしろ心配させてる気がするけど、迷惑はかけちゃだめだから。

「そだ、土曜日あいてる？」

もう一度無理やり笑顔を作って、予定を聞いてみた。

「？あいてるが？」
「よかった、じゃあちょっと付き合ってもらえないかな？」

「何に？」と聞いてきた空也に、父の日の贈り物を探しに行くことを伝える。
参考意見をくれたらっていう事を話すと、二つ返事でＯＫをくれた。
笑いかけてから、また明日！と言うと、空也も笑い返して、手を振ってくれる。
少しずつ、前の関係に戻れている感じがして、とても嬉しかった。

ｓｉｄｅ　空也

課題テスト最終日。
現在地理のテスト中だ。
あれほど授業で出るといわれた部分が出てきていないことに、いくらかの憤りを感じながらペンを進ませる。

問２－（４）
世界で一番深い海溝はどこか、また、世界一高い山エベレストと比べると、どちらが大きいか、記号で答えよ。

一番深い海溝はマリアナ海溝で、エベレストと比べると、海溝の方が深かったはず。
さらさらと、対応する記号を選んだ。
・・・・・・これはあっている気がする！

問３－（２）
この図の中にある地形の特徴は何か？名前を答えよ。

これは一発だな、扇状地だ。

問５－（１）
この地図の中には、何種類の地図記号が入っているか、答えよ。

これから探すのか！？結構な作業ものになるぞ・・・・・・・。
・・・・・・なんとか記号を数えて、解答欄に書き込んだ。
取りこぼしがないか不安だ・・・・・・・。

ｓｉｄｅ　なのは

今回のテストも無事終了。
やっぱり文系が不安だけど、それなりに頑張ったので自信はある。

「えーっと、じゃあ次、理科の問３の『深成岩の成り立ちはどのようなものか』って問題」
「『地表から深いところで、長い年月を掛けて冷え固まる』・・・・・・でよかったと思う」

刀子ちゃんと答えあわせをしながら、苦い表情したり、笑ったり。

ちなみに火山岩はその逆、地上に出たマグマが急激に冷えて固まることにより出来た岩石・・・・・・のはず。
・・・・・・あれ、そういえば、

「空也達は？」
「弓成くんは生徒会のお仕事、幽斗くんは受け損ねたテストを受けにいって、空也くんは買出しがあるとかで、もう帰ったよ」
「そっか」

そう言えば幽斗くん、今日は遅刻してきたね。

「っていうか、刀子ちゃん生徒会は？」
「わたしの分はもう終わらせちゃったし、それに、今日のは会長しかサインできないものばかりだから」
「なるほど」

生徒会って、結構大変なんだな～・・・・・・。

「で、答え合わせはこれでおしまい？」
「うん、あー、国語の結果が怖いよぉ・・・・・・・・」
「あははっ、何というか、頑張って！」

弱音を吐くと、刀子ちゃんが笑って。
ぐっと、親指を突き出して、励ましてくれた。
今日のところは、ここで帰ることにする。

ｆｒｅｅ　ｓｉｄｅ

そして、土曜日。

「・・・・・・む、そろそろか」

待ち合わせの時間になり、空也は準備を始める。
藍色のデニムの上に、黒のＴシャツを着て、さらにその上からグレーのジャケットを羽織る。
最近いくらか肌寒くなってきたとはいえ、暑いことに変わりは無いので、ジャケットの袖は捲り上げた。
ウエストバッグを腰につけて、珍しく姿見で確認してしまう。
がらにもないことをやっている自分に対して、思わず苦笑いがこぼれたが、どこもおかしいところは見えないと判断し、満足そうに頷いた。

――お年頃ってやつだな

イザナギが何か行っているが、あえて無視し、空也は玄関に向かう。
それから門の前に出て、辺りを見渡す。
どうやらなのははまだ準備中らしく、大人しく待つことにした。

side　騎子

「さー殺ってみようかー！？」
「字が違う！」

あたしと槍馬は今、ミゼばあの計らいで、訓練スペースを使わせてもらっている。
もちろん、銘柄は三提督のプライベートスペースとなっているから、ミゼばあ達以外に誰かが入ってくることはまずない。
つまり、思いっきり暴れられるってこと！
テストも終わったし、久しぶりに体も動かしたいしね！
・・・・・・別に、テストのできが今一だったからって、槍馬に八つ当たりするんじゃないよ？本当だよ？

――何言ってるんだい・・・・・・ほら、始まるよ！
「おうよ！」
「はぁ・・・・・・いこう、クーフーリン」
――ひゃはぁ！腕がなるぜぇ！！

あたしはトンファーで、槍馬は拳銃で。
相棒が納まっているカードを破壊して、叫ぶ。

「いっくよー！ケンタウルス！！」
――おらおらおらぁー！！ぶっちぎりで行くよ！！
「来い！クーフーリン！」
――心臓・・・・・・は取れねぇけど、ぶっ飛ばしてやんよ！！

あたしの傍には、上半身が人、下半身が馬の格好をしたペルソナ『

ケンタウルス』が。
槍馬の傍には、青いタイツの上に、白い装甲を纏って、禍々しい紅い槍を持っているペルソナ『クーフーリン』が現れた。

「時間制限なし！」
「待ったもなし！」

どちらかが力尽きるまでの、一本勝負！

「いざ・・・・・・・・」
「尋常に・・・・・・・・」

思いっきり地面を蹴り飛ばして、接近。

「「始めっ！！」」
「ケンタウルス、タルカジャ！」
「クーフーリン、スクカジャ！」

あたしは攻撃力、槍馬は神経を研ぎ澄ませて、打ち合いを始める。
・・・・・・・さすが槍馬、銃身を巧みに使って、あたしの攻撃を防いでいる。
けど、所詮遠距離用の武器！
正真正銘の近接武器には、ちょいと劣るね！

「そらっ！」
「・・・・・・・・っ」

うまく拳銃を跳ね上げて、片手をがら空きに。
そこへ容赦なく、

「ブフーラ！！」

氷を叩き込む！

「っクーフーリン！」

――ただで済むかよぉっ！！

むむっ、ガルをうまく利用して、防いだね？

「次はこっちだ！」

銃口をこっちに向けて、乱れ撃ち！

一応練習の時はゴム弾にしてるわけだけども、やっぱり痛い物があたると痛いのよ。

というわけで、何とか避けて槍馬を捕らえる。

「まだだ！疾風ハイブースタ発動！」

うっげ、火力上げてきたぁっ！？

こりゃぁ・・・・・・。

――来るよ！

「分かってる！」

「マハガルダインッ！！」

咄嗟に防御。

左袖が持っていかれたけど、幸い身体的ダメージは無し。

まだまだ！！

「お返し！ケンタウルス！」

――おうよぉっ！氷雪ハイブースタ！

ケンタウルスが構えた盾に、冷気が集まる。

「マハブフダイン！！」

そしてそれを一気に解放。

けど、向こうもうまく防いだみたいね。

さーて、オープニングアタックはここまでかなー？

それじゃあ、

「本気、出しちゃう？」

「当たり前」

笑いあって、突っ込んでいく。

ｓｉｄｅ　空也

門の前で待つこと数分。

なのはが出て来た。

いつもサイドアップにしている髪は下ろして、首の辺りで一括り。

大人っぽさが際立っているが、桜色のスカートをはいているお陰か、

いくらか印象が幼くなっていた。
目が合うと、なのはは照れくさそうに笑い、つられて俺も笑う。

「行こうか？」
「うん」

とりあえず、街に繰り出すことにする。

「ところで、何を贈るつもりなんだ？」
「ん、うちは喫茶店だし、とりあえず仕事中でも邪魔にならなさそうな、アクセサリーとか」
「無難だな」
「にゃはは・・・・・・・」

駅前商店街にあった、アクセサリーショップに入り、色々と物色中である。

「こういうのとかは、どうかな？」
「あえてこんなものという選択肢もあるぞ？」
「あー、でも、お菓子作ってるときとか、ボウルの中に入っちゃいそう」
「ふむぅ・・・・・・」
「ね、これは？」
「ああ、いいけど・・・・・・・俺としては、もう少し小さいサイズがいいと思う」
「そっか、どこだろう？」

閑話休題。

「ありがとうございましたー」

結局、なのはが購入したのは一組のブレスレットだった。
その気になれば、桃子さんと二分できるし、作業の邪魔にもならないしな。
さて、それよりもだ。
思ったより早く目的を達成してしまった。
若干日が傾いてきているとはいえ、帰るには早すぎる。
折角だからもう少し外にいたいところ。

「これからどうする？」

「んー・・・・・・一旦家に帰って、これを置いてから、また別

のところにいかない？折角だし、遊ぼうよ」

普段に比べて、無邪気に笑うなのは。
提案を断る気はなかったので、素直に従うことにする。
一緒についていこうかと思ったが、ここで待っていてくれと言われた。
一人で大丈夫だと告げて、返事も待たずに去っていく。
・・・・・・・他にやることも無いので、大人しく待つことにした。

ｓｉｄｅ　なのは

手早く部屋に小包をおいて、急いで空也のところに戻る。
二人で出かけるなんて、何年ぶりだろう？
そう考え出すと嬉しくて、思わず走り出した。
しばらく進んで、やっと空也が見えてきて、

「くう・・・・・・・っ！」

突然右手を掴まれて、振り向いた。
そして、そこにいた子に、背筋が凍る。

「待てよ」

ヴィータちゃんは、ものすごい顔で、わたしを睨んでいた。

第十五話土曜日（後書き）

日常辺は一時中断。
次回より、展開が激しくなっていく予定・・・・・・。

第十六話影、再び（前書き）

しばらくかなり長くなるかも・・・・・・。

第十六話影、再び

「っは・・・・・っは・・・・・・っは・・・・・・」

何とか手を振り払った後、人ごみを掻き分けながら逃げる。
何度か人にぶつかってしまったけど、謝ってる暇はない。
後ろを向く、ヴィータちゃんが追いかけてきている。

「・・・・・・っ！！」

何とか人気の無いところに行って、隠れようと考える。
けど、その選択は間違っていたことを、後で深く後悔することを知らないで・・・・・・。
必死になって、ヴィータちゃんから逃れる術を考える。
空也も待たせているから、なるべく早く撤きたい・・・・・・！
我武者羅に、走って走って、走って。
気がつくと、臨海公園に逃げ込んでいた。

ｓｉｄｅ　空也

「・・・・・・遅い」

あれからなのはを待っているわけだが、一向に待っても戻ってこない。

もう大部日も傾いて、現在夕方。
そろそろ帰らないと・・・・・・。

――――――

・・・・・・？

（何か言ったか？イザナギ）
――いや、私は何も・・・・・・・
（何だって？）

じゃあ誰が・・・・・・・？

――――――

・・・・・・これは。

「呼んでいる？」

嫌な予感が・・・・・・。
どうしても気になってしまったので、声が聞こえた方向に走り出す。

ｓｉｄｅ　なのは

「はっ・・・・・・はっ・・・・・・はっ・・・・・・っ！」

あれから臨海公園の中を逃げ回って、何を狂ったのか、行き止まりに飛び込んでいた。
柵の向こうに海が広がっている。
なんとかここから出ようと、後ろを振り返ると、

「・・・・・・っ！」
「もう観念しろ！！」

グラーフアイゼンを構えたヴィータちゃんが、そこにいた。
いつの間に展開したのか、初めて会ったあのときと同じ結界が出現している。

「ヴィータ！」
「無事か！？」

どうやら逃げている最中に連絡したらしい、はやてちゃんやフェイトちゃん、シグナムさんが、降りてきている。

「裏切り者、見つけたよ？」
「ここで成敗してくれよう」
「大丈夫、苦しむのは一瞬やで？」

みんながみんな、怒っているとか、そんな生易しい言葉じゃ足りないくらいの怖い顔をしていた。
思わず後ずさり、だけどそのうち柵にぶつかって、それ以上動けなくなる。
・・・・・・・・・・・・怖い、みんな怖い・・・・・・・！！
みんなどうしちゃったの？何でそんな顔をするの？

「ずっとあこがれていたのに、期待していたのに、あっさり裏切りやがって」
「そんな子は、いらないよね？」
「ち、ちが・・・・・・」
「違わないでしょ？だって、わたし達をつけたのは、単なるわがままでしょ？」

怖くなる、何をすればいいのか、分からなくなる。
頭の中がぐちゃぐちゃになって、どうすればいいのか混乱しちゃう。
・・・・・・・・・・・・・・・みんなを傷つけたくない、けど、逃げられない。
いい方法が浮かばない・・・・・・・！！
その時だった。

――――許せない

体に異物を打ち込まれた気がして、硬直する。

――こいつら、さっきから何よ、この子がどんな思いをしてきたか知らないくせに

ただでさえ走りまわって上がっている息が、さら苦しくなる。

――もう我慢の限界、でも今のわたしじゃこの子の力にはなれない

どうしよう、何とかしてこの子を抑えなきゃ、大変なことになる気がする・・・・・。

――――一体どうすれば・・・・・・・・・・・・そうか

くすくすと笑う声が、耳元で聞こえる。
それから、意識がごっそり持って行かれる感覚。
これは・・・・・・だめだ、やめて！

「諦めたか？遺言は無いのか？」

レヴァンティンを片手に、近寄ってくるシグナムさん。
だめ、近寄っちゃだめ、だめ、危ないよ！！
っぐぅ・・・・・・！
だめだ、みんなが危ない、殺され・・・・・・ちゃ・・・・・・！

「・・・・・・っ」
「・・・・・何だ？」

意識が・・・・・・・・・・・・も・・・・・・だ・・・・・・。

・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・逃げて」

搾り出せたのは、その言葉だけで。
意識が、完全に途切れた。

free side

レヴァンティンを振りかざし、なのはを斬ろうとするシグナム。
周囲の人間は、笑っていた。

―――そうだ、裏切り者は消えればいい

―――管理局に害成すものは、死を

―――管理局の法こそ、全て

ゆがんだ笑顔で、結末を見守る。
・・・・・・はずだった。

「・・・・・・・・・・・・ぐはっ！？」

何が起こったのか、はやて達も、シグナム本人も、理解できなかった。
シグナムは力が抜けた手からレヴァンティンを落とし、腹を見る。
突き刺さる刃、噴き出す鮮血。

「・・・・・・」

そしてそこには、金色の瞳の、『なのは』がいた。
一気に同様が広がり、臨戦態勢に入る一同。
『なのは』は薙刀になったレイジングハートを、シグナムが刺さったまま振り回し、ついでに地面に叩きつける。
足元に衝撃波が広がって、シグナムはぴくりとも動かなくなった。
全員、一緒に驚愕の表情を浮かべる。
だが続いてあらわにした感情は、怒りだった。

「てめえええぇぇぇ――――っ！！」

ヴィータの雄たけびを合図に、全員が飛び掛る。
一方『なのは』は動揺する様子を見せず。
ただ、シンプルに一閃。

「っわあああああ！！」
「きゃあああぁっ！？」

それだけの攻撃で、全てを薙ぎ払った。
地面に強く打ち付けられ、動きが鈍くなる。
『なのは』は、薙刀についているシグナムの血を振り払って、構えた。

――嗚呼、慈悲にあふれた貴女

――裏切った相手にすら、『逃げて』の一言を言うなんて

――やっぱり優しい子ね

――だからこそ、今は眠ってちょうだい

――大丈夫、貴女が眠っている間に全て無かったことにしてあげる

――何もかも、夢だってことを教えてあげる

――わたしは貴女、貴女はわたし

――故に、わたしは貴女の為に動くわ

side　空也

くそっ、まるで歯が立たん！
あれから臨海公園にたどり着き、結界が張られていることを確認。
弓成達にも連絡して、いざ進入しようとした途端、結界の気配というか、雰囲気が変わった。
警戒しつつも進入を試みるが、いつまで経っても穴は開かなかった。

「ミッチー！」
「空也！」

後ろから、みんながやってきて。
さっそく弓成がアナライズを発動、結界の解析を始めた。

「入れないの？」
「ああ、さっきから進入を試みているが、まるでだめだ」

苦い顔で、結界を睨みつける。
・・・・・先ほどからなのはと連絡が取れない。
まさかとは思うが、この中にいないといいけど・・・・・。

「何が起こってるんだ？ばあさんもここの異常に気づいてさ、さっき転生者の可能性もあるから、調べてきてくれって言われてきたんだ！」

やはりばあさんも気づいていたか。
弓成ばかりに解析を任せるのも何なので、結界周辺を捜索することにした。
ほら、結界の要が札や人形などの物理的なものだったら、俺達でも

何とかできるからな。

少年、探索中・・・・・・。

「（こちらアーチャー、結界のほころびを見つけたので、至急集合お願いします）」

結局それらしきものは見つからず。
弓成から、結界のほころびが見つかったと連絡を受けた。

「（こちらジョーカー、了解）」
「（ライダーも了解だよ！）」
「（セイバー、ただちに向かいます）」

ちなみに俺達は、通信ではなるべくコードネームで名乗るようにしている。
上記の場合、ジョーカーは俺、ライダーは騎子、セイバーは刀子で、アーチャーは弓成となる。
事態の収拾は早い方がいい。
急いでみんなと合流することにした。

「すまん、俺が最後か？」
「大丈夫、それより突入するよ！」
「了解！」

周囲と違い、少しだけ色合いが変わっている部分。
おそらくこれが結界のほころびなんだろう。
俺達は腕に『収めていた』各々の武器を取り出す。

「それじゃあ・・・・・・」

自然と、刀を握る手に力が篭る。
なのはが巻き込まれていないことを、巻き込まれていたとしても、
間に合うことを祈りながら、

「ゴー！！」

みんなと一緒に突っ込んで行った。

ｆｒｅｅ　ｓｉｄｅ

「フェイト、おいフェイト！！」

ハラオウン邸。
先ほどから音信不通となったフェイトに何度も声をかけるのは、彼女の義兄クロノ。
数えるのも億劫になるくらいに、声を張り上げている。

「っくそ！どうなっているんだ！？」
「分からない！予めヴィータちゃん辺りが張っていた結界に、術式が上書きされた感じ・・・・・みたいだけど！」

クロノの隣、エイミィが機器を駆使して、何とか状況を探ろうとしていた。

「補足できるのは魔力反応だけ、とりあえず一つも減っていないから、みんな無事って言うことになるんだろうけど・・・・・っどういうこと！？」
「今度は何だ！？」

エイミィの叫び声に、クロノが飛んでくる。
彼女は若干震えながら、

「・・・・・・・・・・・・なのはちゃんを除いた、全員の反応がっ・・・・・・・」

指差された画面を見る。
確かに、なのはを除いた全てのリンカーコアの反応が、弱まっていた。

ｓｉｄｅ　？？？

エモノに突いた血を振り払って、見渡す。
目の前には、虫の息となっている裏切り者達。
中には未だにこちらを睨んでいる者もいるが、あの傷ではもう動けないだろう。
嬉しくなって、口角が釣り上がる。
あの日、戸惑いつつも受け入れてくれたなのは、それを最低な言葉で切り捨てた裏切り者。
忘れない、忘れるはずがない、忘れるわけがない。
次は誰を××そうか？いや、さきにこいつらに止めを刺そう、そうしよう。
集中して、魔力を込める。
シャドウとして現れた影響なのか、出てくるオーラは赤黒いけど。
まぁいいや、気にすることはないでしょう、どうせ全部壊すんだし。

「・・・・・マハラギダイン」

指を鳴らして、全部焼こうとしたとき。

「いくよ！槍馬！ケンタウルス、マハブフダイン！」

「分かってる！クーフーリン、マハガルダイン！」

ペルソナを召還した、見覚えのある双子が立ちはだかって、

――――デュアルアビリティ！絶対零度・零！！

炎すら凍てつく冷気が、辺りを嘗め回した。

ｓｉｄｅ　槍馬

何とか間に合った・・・・・・。

目の前にはなのはであってなのはでは無い者。

おそらく、自らのペルソナに体を乗っ取られたんだろうね。

じゃなきゃ、ぼろぼろになった相手に追い討ち掛けるようなことしないし。

負傷している人たちに関しては、弓成と刀子が治療に当たっている。

さっきの攻撃から推測して、どうやらこいつらを殺そうとしていたみたいだしさ。

・・・・・・・・・・・俺としては、なのはを切り捨てた奴らが死んだって、別になんとも思わない。

けど、見捨てるのは寝覚めが悪いからね。

悪いけど、治療が完了するまで、

「ここは通さないよ」

「大丈夫よ、無理にでも通るから」

それと、これもさっき確認したことなんだけど、おそらくタチの悪い方向に暴走しているんじゃないかな？
スキル使っていたときも、俺らが使うような青いオーラじゃなくて、赤黒いものだったし。
だとしたら、

「（早く沈静しないとやばいかもしれない、おそらく・・・・・・）」
「（なのはちゃんごと暴走してるって？）」
「（そう、それ、体にも相当な負担もかかっているはず、早く収めないと）」

なのはの命が、危険だ。

ｓｉｄｅ　空也

遅かったか・・・・・・いや、一応間に合いはしたものの、もしかしたら最悪な状況かもしれない。
あの時のシャドウと同じあの目、不平不満は撒き散らしていないみたいだが・・・・・・暴走しているのは間違いなさそうだ。
ったく・・・・・・まさかこの後の展開まで最悪とは言わないよな？
しかし、再びシャドウが暴走するなんて・・・・・・一番傍にいたくせに、気づかないとは。
不甲斐ない。

「空也、くるよ！」
「・・・・・・分かった」

珍しく、騎子が俺のことを『ミッチー』ではなく『空也』と呼んだ。
このときの騎子が、色々と真剣になっている証拠だ。
刀を握って、『なのは』を見据える。
狂気が篭った金色の瞳を静かに向けていた『なのは』は、一呼吸置いた後。

「・・・・・・っ！」

接近してきた。

ｆｒｅｅ　ｓｉｄｅ

「マハジオッ！」

まずは牽制。
空也が手を払うと稲妻が走り、『なのは』の周囲を焦がしていく。
『なのは』はそれを避けていくと、空也に一閃。
細い腕から出たとは思えない、重い一撃が、空也の刀に圧し掛かる。

「ケンタウルス！突撃！」
――――跳ね飛ばすっ！！

すかさず騎子がペルソナを召還し、『なのは』を空也から退かせる。

「コンセントレイト」

赤黒いオーラが『なのは』の腕に吸収される。
危険と判断した一同はバックステップ。

「マハガルダイン」

予想通り、強烈な突風が吹き荒れた。
一通りの治療を終えた弓成は、ロビンフッドを召還。
白黒の双剣を構えて、戦闘に参加する。

「ロビンフッド！」
――ハマ！

真っ白な札が『なのは』の周囲を取り囲み、張り付く。
一瞬動きが止まったその隙に、

「ベンケイ！」
「アルトリア！」
――キルラッシュ！
――一閃っ！

刀子と由香が、一撃を加えた。

「やったか！？」

短剣を構え、様子を伺う幽斗。
だが弓成はロビンフッドを通じて相手を探り、叫ぶ。

「まだだ！警戒を解くな！」

どっと、衝撃波。
その中心に、幾らか傷を負っている『なのは』の姿があった。
『なのは』は埃を払って、赤黒いオーラを出し、

「ディアラマ」

みるみる傷がふさがっていく。
さすがに衣服は修復できなかったらしいが、全快したのに変わりはなかった。

「嘘だろ、治癒術も使うのかよ！！」

焦った様子でそう叫ぶ幽斗。
しかしすぐに平常心を取り戻して、空也に合図。
空也もそれを了承して、二人同時に突っ込む。

「はっ、だっ、ちぇりゃあああっ！！」
「ふっ、はっ、せい！っらぁ！」

男二人分の怒涛の攻撃。
だが『なのは』はそれを涼しい顔で見切り、交わし、弾き返していく。

「（予想以上のスペックじゃねぇか！？つーか、なのはって近接戦できたか！？）」
「（いや、近接もできないことはないらしいが、どっちかって言うと苦手だな）」

「ちなみに本人談だ」、と付け加えて、渾身の一撃を二人同時に放った。
『なのは』はそれをも、薙刀をシーソーのように上下させて弾き返す。
再び距離を取る空也と幽斗。
それぞれのペルソナを呼び出して、

「マハガルダイン！」
「マハジオダイン！」

――――デュアルアビリティ！タイフーン！

プラズマを纏った暴風が、『なのは』を飲み込んだ。
距離を取って、風が晴れるまで待つことにする二人。
しかし、

「プラズマランサー！」
「宿木の枝、銀月の槍と成りて、撃ち貫け！！」

空也のものとは違うプラズマと、白い槍が暴風に降り注いだ。
もちろんそれなりの威力があったため、暴風は打ち消される。

「だー！何やってんのさ！？」
「・・・・・治療とかしないで、放置した方がよかったかな？」

あからさまに怒りを露にする騎子と、静かに怒りを口にする刀子。
他のメンバーも、口にこそしないものの、怪訝そうな顔をしていた。

「すみません、お手数をおかけしました」
「治療、感謝します」

どうやら真っ先に目覚めたらしい。
はやてとフェイトが、デバイスを構えて空から降りてくる。
弓成は眉間にしわを寄せて、

「だったら邪魔しないでもらえませんかね？」
「それは失礼しました、ですが、管理局員として見過ごせません」

淡々とそう告げると、様子を伺うこともせずに突っ込んでいく。
二人がかりで攻撃するフェイトとはやて。
だが長くは続かず、一閃で吹き飛ばされていた。

「マハンマ・・・・・・」
「っだー！もう！猪かてめーらはあああ！？」

幽斗が絶叫しながら歩法を使い、はやてのフェイトの首根っこを引っつかんで回収。
入れ替わるように、槍馬と由香が『なのは』の元に向かい、斬り合いを始めた。

「な、何を・・・・・・！」
「邪魔す・・・・・・」
「こっちの台詞じゃあああああ！！」

ゴツっと、拳骨を脳天に食らい、フェイトとはやては痛さに頭を抱えて悶えた。

「馬鹿だろ！？エリートに見えて実は馬鹿だろ！？」
「っどういうことや！？」
「どうもこうもねぇって！ちったぁ頭使えよ！未知数の敵に考えな

しに突っ込むアホがどこにいるんだよ！？」

説教を始めた幽斗の後ろで、槍馬と由香のサポートに専念するメンバー。

頃合を見計らいながら、的確に強化スキルを入れていく。

すると今度は、

「ラケーテンハンマー！」

「紫電一閃！」

「・・・・・・っ」

「ちょっ！？」

「またかぁっ！？」

説教を中断し、叫ぶ幽斗。

次に復活したシグナムとヴィータは、ハンマーと剣による攻撃を開始。

もちろん槍馬と由香と、『なのは』の間に割り込んで、である。

さすがに歴戦の勇士、はやてやフェイトのように苦戦はしていないようだったが、

（こいつ、何でこんなに捌けてるんだ！？）

（おかしい、なのはは近接は苦手としていたはず）

そんな思考が割り込んでしまい、隙が出来る。

『なのは』はそれを見逃さず、今度は薙刀を地面に突き刺した。

「八十神の猛り！」

「がぁっ！？」

「ぐっ・・・・・・！」

予想以上のダメージに、二人は退かざるを得なかった。

ｓｉｄｅ　なのは

・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・

「・・・・・・つぅん・・・・・？」

意識がはっきりしてきて、目を開けてみる。
周りは暗くて、だけど何故かはっきり見えた。
目の前に、背中を向けている人。
その人はわたしに気づいたのか、ゆっくりとこっちを振り返って、

「っどうして・・・・・・!?」

すごく驚いた顔をした。
けど、その人よりびっくりしたのは、多分わたし。
だって、顔が瓜二つだったから、けれど目だけは金色で、だからこそわかっちゃった。

「どうして、ここに?『わたし』」
「・・・・・あなたの体はダメージを受けた、だから今は『わたし』が変わって応戦しているの」

応戦って・・・・・・!

「まさか戦ってるの!?フェイトちゃん達と!?」
「・・・・・・・・・ええ、そうよ、大丈夫心配しないで、裏切り者は必ず・・・・・・!」

そう言って『わたし』は、にやっと笑った。
・・・・・だけど!

「そんなのダメ!今すぐやめて!」
「・・・・・・何で?」

何でって・・・・・・!

「怪我したら大変だよ！お願いもうやめて！逃げようよ！そしたらフェイトちゃん達も・・・・・・」
「その優しさを向けた奴らは、何をした！？」
「っ・・・・・・！」

『わたし』の顔が、すごく怒っていた。
思わず体を跳ね上げて、一歩後ずさってしまう。

「寂しいから、独りは嫌だからって理由もあったけど・・・・・・本気で助かって欲しかったから、必死になって声をかけたのに・・・・・！」

・・・・・これは。

「友達だって思ってた、この人達のためなら独りも我慢できるって思ってたのに・・・・・・・・・・・・あいつらはっ・・・・・・！！」

これも、わたしがためていた、本音？
この子がずっと、背負っていたの？
『わたし』は、目の前で泣き崩れた。
・・・・・・でも、

「それでも、傷つけちゃいけないよ、あなたが『わたし』なら、分かるでしょ？」

友達だったなら、なおさらだよ。
裏切られても、わたしは、フェイトちゃん達を傷つけたくない。
・・・・・・・・・・・・そういう思いを込めて、そう伝えたんだ

けど・・・・・・。

「・・・・・・ごめんなさい」

「え・・・・・・・っ？」

突然鎖が現れて、わたしを拘束する。

「な、何を・・・・・・！」

「これだけは譲れない、いくら『わたし』を受け入れてくれたあなたでも、我慢できない」

『わたし』はわたしに近づいて、じっと目を見つめられた。

「大丈夫、体の主導権があなたに戻る頃には、全部終わっているから」

そう言った『わたし』の笑顔は、酷く怖くて・・・・・・。

『わたし』がまた背中を向けたとき、外の景色が見える。

『わたし』の攻撃を何とか防ぎながら、攻めあぐねている空也達が見えた。

ｓｉｄｅ　空也

「・・・・・・っち！」

さっきから――テスタロッサ達が復活してから――ただでさえ通らない攻撃が、通らなくなってきた。
さすがにそのことを俺達の所為だというほど堕ちていないらしいが、正直、邪魔だ。
まぁ、他はともかく、俺はしょっちゅう敵意向けられてたから、邪魔されて当然かもしれないが・・・・・・。
ぶっちゃけ、度が過ぎているぞ？さっき幽斗に説教されたことは生かしていないのか？
『なのは』が俺に飛び掛ってきて、薙刀を振り下ろす。
それを避けた俺は、刀を逆手に持って、一閃。
利き腕に傷を負わせることに成功した。
・・・・・・このやっとのことでつけた傷も、

「ディア」

すぐに消されるんだけどな。

ｓｉｄｅ　なのは

『わたし』は、わたしに外の映像が見えていることに気づいていないらしい。
ただじっとこっちに背中を向けて、微動だにしない。

――――っぐあっ！！

「・・・・・・・っ！」

い、今・・・・・・・・・今、空也が・・・・・・！！

空也だけじゃない、刀子ちゃんも、幽斗くんも、弓成くんも、槍馬も、騎子も。

フェイトちゃんも、はやてちゃんも、シグナムさんも、ヴィータちゃんも。

みんながみんな、目も当てられないくらいぼろぼろでっ・・・・・・！！

「メギドラオン！」

――――――っ！？

もう言葉にすらならない悲鳴が、耳元で聞こえた。

同時に視界が真っ白になって・・・・・・。

色が戻ってきたとき、見たのは、

「・・・・・・あ・・・・・・・・・・・・・・・あぁ・・・・・・・・・っ！」

どうしよう、どうしようどうしよう！？

みんなが危ない！わたしの所為で、死にそうにっ・・・・・・・・！！

誰か、シャマルさん、アルフさん、ザフィーラさんでもいい！！誰かここに来て！わたしはどうなってもいいから、みんなを・・・・・・みんなを助けて！

・・・・・・神様、神様お願い！もうわたしはどうでもいいの！だ

から、だから・・・・・・！

「・・・・・・あ」

でも、どうすれば、どうすれば、みんなを・・・・・・！

・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・そうか、そうだよね。

原因がいなくなれば、みんなが助かるんだよね？

わたしが・・・・・・・。

足元に落ちていたそれを見つけて、決心した。

怖いけど、もうこうするしか・・・・・・。

ｓｉｄｅ　空也

ぼろぼろになり、うずくまっている俺達。

『なのは』はこちらを満足そうに見下ろして、止めを刺そうとした。

その時だった。

「・・・・・・・・・・・・・・・っぐ・・・・・・・・・な、何を・・・・・・・・・！？」

腕の動きがぴたりと止まり、続けて『なのは』の動きが鈍る。
一同が不思議そうに見つめる中、『なのは』は自身の左手を押さえた。
が、左手はまるで自立した意思があるように、体を動かして、地面に転がっていたあるものを拾い上げた。

「な、なのは？何をする気？」

震える声で、そうこの場にいない者に問う『なのは』。
すると、『なのは』は突然左目を抑えた。
苦しそうに呻いて、うずくまった後、ゆっりくと顔を上げる。
両目ともに金色だった瞳は、左目だけが、彼女本来の瞳の色だった。

「・・・・・なのはか？」

俺は我に返って、『なのは』、否、なのはに話しかける。
なのはは黙って笑い、テスタロッサ達の方を見た。

「・・・・・・・・・・ごめんね、痛い目にあわせて・・・・・・・
でも、もう大丈夫だよ！」

明るく笑っているはずなのに、陰りが指している。
・・・・・・何故だ？何故あいつが拾い上げた物に目が行く！？

「わたしが何とかするから、逃げて」

優しく微笑んで、拾い上げた物を、折れたレヴァンティンの切っ先を、自身の胸に向けた。
・・・・・・って、

「おい！何してる！？」
「・・・・・ごめんね、でも、これ以上生きてたら、みんなに迷惑掛けちゃう」
「迷惑くらい掛けてもいいよ！だからそれだけはダメ！！」

必死になって思いとどまるように説得を続ける。
テスタロッサ達は、ただ呆然としてなのはを見つめていた。

「ありがとう、でも、やっぱりダメだ」
「なのは・・・・・・！」
「だって、攻撃方法は遠距離だけ、仮にもSランクなのに、転生者相手に何も出来ない、友達だって、幻滅させちゃった・・・・・・今だってそうだよ、みんなを傷つけて・・・・・・！」

今までこらえていたらしい。
なのはの目から、涙がぽろぽろ落ちている。
涙をぬぐわずに、なのははまた無理矢理笑って、

「もうこれ以上、どんな迷惑も掛けられない・・・・・・だからこれは、

――――――人生最後のワガママ

side　『なのは』

――やめて

――何をする気なの？

――ダメ、それだけは絶対ダメ・・・・・・！

――独りが怖かったんじゃない！寂しいのは嫌だったじゃない！

――だったら、やめてよ

――こんな悲しいことって、無いでしょ？

――お願い、やめて・・・・・・！

――なのっ・・・・・・！！？

side　空也

―――――無音。

本当に無音だった。

風の音、みんなの呼吸の音、自身の鼓動さえ、聞こえない。

目の前のなのはは、何をした？

拾い上げたそれで、一体何をした・・・・・・！？

なのはは、口元から紅い液体をたらしながら、ゆっくりと倒れる。

一呼吸おいて、全部の音が、戻ってきた。

・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・～～～～～～っ！！？

「なのはぁっ！！」

がらにもなく、大声を上げた。

おそらく、転生者だと自覚してからは、これが初めてだろう。
体の傷が再び開いたが、そんなことはどうだっていい。
なのはが・・・・・なのはが・・・・・・！！
急いで駆け寄って、なのはを抱き上げる。
刃はご丁寧に胸の中心を貫いていて、迂闊に触れば、大量出血でどっちみちあの世行きだ・・・・・・！！
っくそ！！

「何で、何でこんな！？」

弱々しくなる呼吸の下で、なのはは物悲しそうに、ただ笑うだけ。
その姿が、とても哀れで、もろくて・・・・・・！！

「・・・・・・・・・・・・・くー・・・・・・・・・・・・・・や」

・・・・・・・・・・蚊の鳴くような声。
――最期の力を振り絞って、なのはが手を伸ばしてきた。
彼女の無駄に体力を消費させたくなかったので、急いでそれを掴み取る。
だいぶ出血している所為か、ぞっとするほど冷たかった。

「・・・・・・・ぁ・・・・・・・・・・・・・・す・・・・・・・」

ゴホっと、血を吐いて。
なのはの力が、抜けていった。

side　???

ばかだなぁ、『鍵』がこの程度で死ぬわけ無いじゃん。
重要な楔、下手にいじれば世界を変える代物だよ？
そこまで柔なはず、ないよねぇ？

――――ドクンッ

ほーら、ちゃんと聞こえたでしょ？
第二幕の、開園だ。

第十六話影、再び（後書き）

絶対零度・零と書いて、アブソリュート・ゼロとお読み下さい、食器野さらです。

今回の話は書きたかったシーンの一つでもあるので、筆がすらすら進みましたｗｗ

とりあえず、しばらくはシリアスというか、ぶっ飛んだ展開が続くと思われます。

誤字脱字あらば、ご感想へどうぞ～。

それでは。

第十七話幾千の・・・・（前書き）

十七話。
いけるところまでいきまっせーｗｗ

第十七話幾千の・・・・

――――どうして？

――――何でこうなったの？

――――わたしは、ただ・・・・・・・！

――――ただ、助けたかっただけなのに

――――恩返しをしたかっただけなのに

――――・・・・・・・護りたかったのに

――――助けたかったのに・・・・・・・・・・！！

ｓｉｄｅ　空也

思わず、呆然としてしまった。
全身の力が抜けて、胸の中身がなくなった様な感覚を覚える。
誰に言われなくても分かる、自分がまさに看取ったのだから、嫌でも分かる。
ぐったりとしている彼女は、死――――

「っ空也！まだ終わってない！！」
「・・・・・・っ！？」

背後で弓成が叫ぶと同時に、寒気。
本能的になのはをその場において、離れる。
次の瞬間、

「・・・・・・・・・・・・・」

無言のまま、何事も無かったように、なのはが立ち上がった。
そして、突然赤黒いオーラが噴出す。
なのは――いや、おそらくもう『なのは』だろう――は肩をわなわなを振るわせ、顔を跳ね上げて空を仰ぎ、

「あああああああああああああああアアアアアアアア■■■■■■■■■■■ああ■■■アアア■■■■■■■■■■■■あああ■■■■■■■■■アアアアア■■っ！！！！！」

どっと、土煙が、吹き荒れた。

free side

『それ』は、自ら土煙を振り払って現れた。
蛇のように長い身体、頭にあたる部分には、レイジングハートの待機状態を思わせる真っ赤な宝玉が据え置かれている。
そしてその上に、下半身を埋めるようにして、なのはが存在していた。
結い上げている髪の毛は解け、垂れ下がり、表情を見えなくしている。
が、彼女から感じる生気は、とてもとても弱々しいものだった。
一同は思わず身構え立ち上がり、個々の武器を構える。
皆が皆、『それ』を目にしたときに、思ってしまった。

（わだかまりとか、そんなものを気にしていたら、殺られる・・・・・・！）

全員が警戒をむき出しにする中、なのはに動きがあった。
だがそれは自分で動いているというより、動かされているという感じのもの。
ミシミシっと、気味の悪い音の後、『本体』が現れる。

「――――――っ！！」

まるで産声を上げるがごとく、なのはの背中を『突き破って』その姿を現した。

肋骨を思わせる胴体、顔はツル ハシのように細長く、下半身は背骨のようになっている。

『本体』はぶるぶるぶるっと震えた後、なのはを抱きしめるように身体を抱え込んだ。

「――――我は影、真なる我」

次に、両手を広げて、空也達を指差した。

「コワス！コロス！ナノハキズツケルヤツ！ゼンブケス！！」

金切り声を上げて、精神を集中させる。

「メギドラオン！！」

先手を奪い、真っ白な光を撃つ。

ｓｉｄｅ　フェイト

何が起こっているんだろう？

なのはが突然強くなって、わたし達を圧倒したと思ったら、いきなり自殺して、そしたら今度は暴走して、

「――――っ！！」

バケモノになっていた。

威圧感が半端無くて、本当に勝てるのかどうか、分からなくなる。

けど、ほっといたら絶対に近隣に被害が出る。

何とかして、食い止めないと・・・・・・・・！

「アルトリア！」

――ガルダイン！！

「刃持て紅に染めよ、穿て！」

「コメートフリーゲンッ！」

はやては真っ赤な短剣を、ヴィータは鉄球を。

そして鎧を纏った女の人は、見えない武器を振りかぶって風を起こす。

けど、

「アアアアアッ！！」

なのはが同じくらい、いや、それ以上の風を起こして打ち消した。

勢いは凄まじくて、耐え切れなくなり、飛ばされる。

なんとか宙で体制を立て直してホバリング、バルディッシュに命じてカートリッジを装填。

「トライデントッ・・・・・・・・・！」

目標は・・・・・・・・・あの『本体』！

「スマッシャアアァァ――――ッ！！」

三叉槍の形をした砲撃が、一直線に『本体』に向かう。

これで・・・・・・・・・！

「ヤダ・・・・・・・・・ヤダヤダヤダヤダヤダァ――――ッ！！」

――――八十神の砦！！

ドンっと、爆発が起きて。

撃ったはずの砲撃が、わたしに向かって、一直線に襲い掛かってきた。

何とか避けたけど、余波の所為で脇腹に傷を負う。

痛みを感じる、でも、まだ負けられない・・・・・・・・・！

「シネェッ！！」

――――悪魔の審判！！

巨大な鎌が、二振り。

シグナムの背後を取って、襲い掛かってきた！！

ソニックムーブで・・・・・・・・・！

「すまんテスタロッサ！助かる！」

「構いません！今は・・・・・・・・・！」

「分かった！」

シグナムと頷きあって、『本体』に斬りかかった。

「持ってけ！タルカジャ！」
「スクカジャ！」

短剣を持った男の子と、銃を持った男の子が強化魔法を行使して、
能力を底上げしてくれる。
途端に体が軽くなって、力も増した気がした。
これなら・・・・・・・・・いける！！

「ハーケンセイバー！」
「飛竜一閃！」

刃を飛ばして、連結刃で斬り付けて。
強力な一撃が入ったと、確信した瞬間。

――――ゾクッ

ｓｉｄｅ　幽斗

「持ってけ！タルカジャ！」
「スクカジャ！」

あの二人が攻撃を仕掛けるらしいので、とりあえず強化スキルを掛
けておく。
・・・・・・・・・言っとくけど、あくまでなのはのためだからな？

今は協力した方がいいから、そうしてるだけだ。
つーかぶっちゃけ、もーこいつらとは共闘したくねぇー！
自分ら中心に動いているし！まぁ、色々と頭をいじくられてるってんなら納得できるけど！？
もっとましな思考回路は持ってないのかよ！？

「言いたいことは分かるけど、とりあえずここは我慢！」

由香が斧を構えたまま、そう叫んで。
このままむしゃくしゃしたままというのもなんだったから、深呼吸をすることにする。
そんな時だった。

――――ゾクッ

「――――――ッ！！？」

なんだ、今のは・・・・・・・・・！！
なんつーか、背筋をなぞられながら、ガラス同士をこすり合わせたあの音を聞かされたような感覚に陥る。
そして次の瞬間、

「■■■■■■■■――――――ッ！！」
「っテスタロッサ！！」

ポニーテールの剣士が、金髪で鎌を構えた女子を突き飛ばして、身代わりになった。

ｓｉｄｅ　フェイト

体全体に衝撃が走って、地面に叩きつけられる。
何が起こったのかわからなかったけど、とにかく急いで戻ろうと顔を上げて、

「・・・・・・・・・あ」

敵の真ん前、シグナムがわたしを突き飛ばしたらしい。
こっちに押し出す形で片手を伸ばしたまま。

――幾千の呪言!!

もろに攻撃をくらった。
体をくの字にまげて、吹き飛んでいくシグナム。
わたしと同じように地面に叩きつけられて、

「っぐ・・・・・・・・おおおおおおおおおおおおああああああああああああああっ!!!!!」

ｓｉｄｅ　シグナム

な、なんだこれは！？

頭の中で、直接響いて・・・・・・・・・っ！

や、めろ

やめろ

やめろ

やめろ

やめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろ
やめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろ
やめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろ
やめろやめろ・・・・・・・・・っ！

やめっ

――いて

side 空也

「弓成！シグナムは無事なのか！？」
「ああ、命に別状は無いけど・・・・・すぐ戦闘に復帰は出来ない」

何だ、今のは！？
何かの砲撃を撃ったと思ったら、シグナムが頭を抱えて気絶した。
となると・・・・・・・。

「精神にダメージを与えるのか！？」
「だろうね」
「それ、限りなく厄介じゃん！！」

だが、何だ！？あの砲撃は！？
下手をしたら、彼女本来の切り札であるスターライトブレイカー以上に厄介かも知れんぞ。
というか、防御を上から打ち抜く砲撃を『何となく』で作り上げたことといい、シャドウを暴走させそれ以上の砲撃をぶっ放すとか・・・・・。

「冷静に考えたら、つくづくおっかないな！！」

ｓｉｄｅ　ヴィータ

――――敵の攻撃をもろにくらって、シグナムがやられた。
テスタロッサはシグナムが庇ったお陰で無傷だけど、こっちの戦力が削られたのは痛い。
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
何でだ？
何でなんだ？

「・・・・・・・っ」

目の前の敵から、目を離せない・・・・・・！

「――――――ッ！！」

あいつがまたあの攻撃の準備に入った。
狙いは明らかにこっち・・・・・・！
・・・・・・っ！

「やらせねぇ！！」
「ヴィータ！！」

後ろの声は聞こえない。
・・・・・・・・こいつが。
こいつがシグナムを・・・・・・！！

「アイゼン！」
『Ｚｅｒｓｔｏｒｕｎｇｓｆｏｒｍ！！』

もう許さねぇ、手加減してやんねぇ・・・・・・！
裏切った上に家族まで奪おうたぁ・・・・・・！

「上等だ！！おらあああああああああっ！！」

推進器とドリルが付いた、リミットブレイクを振り上げる。

「――――――ッ！！」

ヤツは鳴き声を上げた後、防御の体制に入った。
あたしのハンマーを受け止めようってか？
・・・・・・・・・やれるもんなら！！

「やって見やがれ！！」

カートリッジを大量消費。
全身のバネを利用して、振り下ろした。

ｓｉｄｅ　空也

ヴィータの渾身の一撃が、振り下ろされた。
さしものシャドウでも、これなら流石に・・・・・・・・・。

――――なんて、さっきまで思っていたさ。
目の前のシャドウは、外見とは裏腹に、結構な怪力の持ち主らしい。
それも、由香に引けをとらないくらいのもの。
で、なのはだったものは何をやったかというと。

「・・・・・・っ！！」

ヴィータのハンマーを、いとも簡単に受け止めていた。
あれのどこから、あんな力が出てくるのだろうか？
下手したら、由香以上の謎になるかも知れない。
・・・・・・いかん、思考回路が妙な方向に向かってしまった。
目を閉じる、深呼吸して、現実を見ることにする。

「・・・・・・・・・っ！？」

ちょうど、ヴィータがあの砲撃をくらっている所だった。
防いでからのカウンター・・・・。
本当に厄介極まりない。

「がああああああああああああっ！！？」

ヴィータは頭を抱え込み、地面をのた打ち回る。
束の間そうやって、ぱたっと、動きを止めてしまった。

ｓｉｄｅ　はやて

残った味方は、うちとフェイトちゃんだけ。
頼みのシグナムとヴィータもやられて、絶望的な状況になる。
けど、ここは何とかせな・・・・・・・・・！！
ヴィータの一撃は易々と受け止められてた。
だったら・・・・・・・・・！！

「これなら、どうや！？」

動けるようになったらしいフェイトちゃんと一緒に空に飛んで、デバイスを振り上げる。

「響け！終焉の笛！！」
「雷光一閃！プラズマザンバ――ッ！！」

夜天の書を開いて、魔力をチャージして。
照準を合わせる。
狙いはもちろん、あの『本体』っ！！

「「ブレイカー！！」」

白と金色の砲撃が、一直線に向かう。
・・・・・・・・実は軌道上に空也達がおったんやけど。
まぁ、大丈夫や――――――

「――――っ！？」

ｓｉｄｅ　フェイト

隣にいたはやてが、堕ちていく。
『本体』はさっきの砲撃で、多少のダメージは受けたらしいけど、
わたし達の勝利は絶望的だった。
あの砲撃が直撃して、はやてが堕とされる。
これで、残ったのは、わたし一人――

「・・・・・・・・・」

『本体』が、わたしをじっと見ている。
空也達の攻撃をものともせずに、ただじっと見つめている。
・・・・・・・・・・・・・・・・・・っ！！

「あ、アルカス・クルタス・エイギアス！」

どこまでも無機質なそれに、本能的な恐怖を覚えた。
杖を掲げて、詠唱を紡ぐ。
これだけ・・・・・・・・これだけの巨大な魔法なら！！

「サンダー・・・・・・・・・！！」

バルディッシュを握る手に、自然と力が篭る。

「フォールッ！！」

そして、勢いのまま、振り下ろして――――

――――天使の審判！！

「なっ！？わあああああああああっ！！」

魔法を放つ寸前のところで、先手を打たれてしまった。

一組の鉄槌が、わたしを殴りつけて、地面に叩き落す。

「あっ」

痛みを感じる余裕すら、与えてくれないらしい。

起き上がると同時に、あの砲撃が、直撃してしまった。

まるで荒れた海の中にいる気分だ。

呼吸がし辛く、耳元でごうごうと轟音が鳴り、うるさい。

――――痛い

――――寂しい

―――助けて

―――どうして

―――やめて

―――悲しい

―――憎い

―――怖い

感情が、なのはの感情が、直接頭に叩き込まれてくる・・・・・・・

・！！

・・・・・・・・・・・・・・・・や、やめろ・・・・・・・・！

！頭が・・・・・・・・・・・・・・・・割れる・・・・・・・・

！！！

―――え

違う！わたしは悪くない！！なのはが悪いんだ！！
人の気持ちを踏みにじったなのはが・・・・・・・！！

――――いぇ

だめだ、やめろ！！
痛い！！痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
痛い痛い痛い痛い痛い痛いいいいいぃぃっ！！！！！！

――――にぇて

わたしがわたしで無くなる！！
記憶が飛んでいく！！
やだ、やだ！！やめろ！！
た、助けっ・・・・・・・・！！

――――逃げて！！！

突然音が、痛みが、止まった。
真っ赤になっていた視界に、一筋の光。
そこから手が伸ばされてくる。
助かりたい一身で、無我夢中で掴み取って、はっとなった。
また、なのはの感情が流れ込んでくる。
けど、さっきまでのものとは全くの別物だ。

――ごめんなさい

――ごめんなさい

――幻滅させてごめんなさい

――裏切ってごめんなさい

――役立たずでごめんなさい

――心が汚くてごめんなさい

――迷惑をかけてごめんなさい

――危ない目にあわせてごめんなさい

――ごめんなさい

――ごめんなさい

――ごめんなさい

さっきまでとは違って、ただただ静かに、謝罪の言葉が聞こえてくる。

我に返って、握った手の、その先を見ると――――

黙って泣いている、なのはがいた。

今まで、自分を縛っていたものが、派手に壊されたような感覚。
そして、気がついてしまった。

――あの時、わたしは何を言った？

――あの時、わたしは何を考えていた？

――あの時、わたしはどうした？

――あの時、わたしは何をした？

――あの時、わたしはなのはに・・・・・・・・っ！！

――――今さら、本当に今さらだった。
なのはが、わたしの手を引いて、黙ったまま抱きしめてくる。
また、流れてくる感情。

――死なないで

――傷つかないで

――わたしはどうでもいいから

――自分の心配をして

――無茶しちゃいやだ

――殺すのはいやだ

――戦うのは、いやだ・・・・・・・・・！！

・・・・・・・・昔から、そうだったじゃないか。
なのはは、ただ真っ直ぐで、優しくて、悲しいことは放っておけなくて。

――この手の魔法は、打ち抜く力

――涙も、痛みも、運命も

そんななのはが・・・・・・・・・どうしてわたし達を裏切る？
それこそ、有り得ない話じゃないか。
・・・・・・・・・謝らなくちゃ。
とにかく、謝らないと・・・・・・・・・！
許してもらえなくてもいい、罵倒されてもいい。

それ以上に、残酷なことを、わたしはっ・・・・・・・・！！

「・・・・・・・・っ」

意識が、現実に引き戻される。

離れたところで、空也達と戦うなのは。

「アアアア■■■アア■アア■■■■■■ッ！！！」

今になって見ると、あの声が泣いているようにしか聞こえない。

「・・・・・・・・ぁ、の」

手を伸ばす、もちろん届かない。

でも、そうしなきゃいけない気がして・・・・・・・・。

「・・・・・・・・」

意識が遠のいていく。

伸ばした手が、ゆっくりと下ろされていく。

――ブツンっと音を立てて、わたしの記憶はそこで途切れた。

第十七話幾千の・・・・（後書き）

今回は、魔導師のみなさん中心の視点だったため、空也達は空気に・・・・・。

一応戦ってますよ?必死に『ペルソナァーッ!!』してるんですよ?

あと、さらに暴走した『なのは』について、勘のいい方は、何が元になっているのか、分かるんじゃないでしょうかw?

それでは、ご感想お待ちしています。

第十八話召喚（前書き）

かーなーり難産ですた・・・・・。
さーて、山場もクライマックスですよ～。
７／１３：誤字発見、修正。

第十八話召喚

「む？いかんな、テスタロッサ以下数名のコントロールが解除されている」
「何？それでは・・・・・・・・・」
「ああ、アリサ・バニングスと月村すずかのも同時に解除されたな」
「はぁ・・・・・・手間が省ける分、これだから連鎖型は・・・・・・・・」
「なってしまったものはしょうがない、直ちに『掃除』に向かわせよう」
「そうだな、まずは現場の魔導師および転生者からだ、一般人はあとからでいいだろう」

「ちょ・・・・・・これ・・・・・・・・・」

周囲には、全滅したテスタロッサ達。
俺達はただ呆然と見ることしか出来ない。
このままにしておくと、戦闘に巻き込まれる可能性があるな。

「槍馬、幽斗」
「分かってる」

弓成も同じ考えだったようで。
槍馬と幽斗に合図すると、二人は負傷者を一箇所に集めた。

「刀子はまた治療を、騎子と由香は流れ弾からみんなを守って！残りは引き続き『なのは』の相手！！」

指示を飛ばして、再び戦闘が始まる。
女性陣が後方に下がり、俺達男性陣は武器を握って、『なのは』に突っ込んでいった。

「マハンマオンッ！！」
「スラッシュ！！」

――――デュアルアビリティ、偽（エクス）・約束された勝利（カリバー）の剣！

槍馬のクーフーリンが槍を大きく振ると、少しにごった星の光が『なのは』に直撃した。

「クルナァァァァァァッ！！」

――――淀んだ空気

が、『なのは』はそれすら受け止め、腕を振るう。
直後に瘴気のようなものが辺り一帯に充満した。
視界が若干悪くなっている・・・・・・・これは警戒を強めた方がいいな。

「アアアアアアッ!!」

――――ガルダイン!!

「がぁっ!?」

っづ・・・・・・・・後ろか!?

「っジオ!!」

攻撃が来た方向に雷を飛ばすが、反応はない。
もう移動したか・・・・・・・・!!
気がつくと、視界がさっきより悪くなっている。
これでは、どこに味方がいて、どこに敵がいるか分からないじゃないか・・・・・・・・!!

「（全員迂闊に動かないように!視界が悪くなって、敵味方の区別がつかない可能性がある!!）」

弓成からの通信に注意しながら、辺りを警戒する。

side　なのは

あ、れ・・・・・・・・・？

・・・・・・・・・死んでない？

意識がある？

どうして？だってわたしは・・・・・・・・・・！！

「――――――――――ッ！！！」

「・・・・・・・・っ！？」

前の方で叫び声がして、反射的に顔を上げる。
頭が一気に目覚めて、ぼやけていた視界もクリアになった。
そして、その中央に、

「――――――――――ッ！！！」

言葉にならない、言葉を吐き続けている。
『わたし』がいた。
肌は真っ青になっていて、体の所々が歪な形をとっている。
たったそれだけなのに、本能的に恐怖を感じるようなオーラというか、気配を纏っていた。
これが、わたし、内側に秘めている、本当のわたし・・・・・・・・・。

『わたし』を見て嫌悪しそうになるわたしをさらに嫌悪して、立ち上がる。
いつのまにか、わたしを縛っていた鎖は無くなっていた。
『わたし』に近づくほどに、言葉が聞こえてくる。

――あの時ユーノを見殺しにしていれば

――あの時お父さんが怪我しなかったら

――お前らに何が分かる

――わたしが恋なんて、おこがましい

――いっそあの時に朽ち果てていれば

誰に吐いているのか分からない、呪いの言葉を吐き続けていた。
さっきから体がちくちくする。
多分、目の前の『わたし』の所為なんだ。
証拠に、さっきまで暗くて紅かったけど威厳があったこの空間は、
黒くて怖い空間に変わっていた。

――嗚呼、醜い醜い、なんて醜いわたし

――誰か殺してくれないか

――裏切り、つくろい、押さえ込み続けてきたんだ、解放されたい

――でも助けを求める権利は無い

ずっと、わたしが思っていたこと。
体がいくらか軽いのは、きっと感情の半分が『わたし』にいっているから。
・・・・・・・・嗚呼、わたしは本当に大馬鹿野郎だ。
『わたし』にこんなに背負わせているなんて。
外では、空也達がぼろぼろになっている。
映像はもう見えないけど、分かるんだ。
わたしに追い詰められて、フェイトちゃん達なんかもう全滅している。
――独りぼっちが怖いのは確か、だけど

それで誰かが傷つくのなら、いっそ独りの方がみんなの為になる。

頭を抱え込んで、しゃがんでしまう。
もう誰でもいい、誰でもいいの。
わたしはいいから、誰か、『わたし』を助けて。

ｓｉｄｅ　空也

「・・・・・・・・っ！」

瘴気の向こうから尾が迫ってきて、間一髪でそれをよける。
尾は地面に打ち付けられて、鞭のような音を立ててから、ずるずるとまた瘴気の向こうに消えていった。
そして少し離れたところから、誰かの悲鳴。
声の高さからしておそらく女性陣の誰かか・・・・・・・・。
思わず舌打ちし、なんとかこの状況を打破する方法はないかと思考を巡らせる。

「マハスクカジャ！」

その過程で生まれた結論として、味方全体に強化スキルを行使し、回避性能を上げることにした。
再び刀を構えて、周囲を警戒する。
そのとき、

「――――――ッ！！！！」

ドカン、と。

体当たりにしてはいささか派手すぎる音がして、俺は吹き飛ばされた。
いつのまにか瘴気が薄くなっていて、目の前にはこちらに体当たりを当てたらしい『なのは』。
地面をバウンドしながら転がってしまったが、何とか体制を立て直して、体のバネを利用し立ち上がる。
刀を構えなおして、『なのは』に斬りかかった。

「タルカジャ！」
「ラクカジャ！」

仲間達が強化スキルを掛けてくれて、耐久力と腕力が上昇したのを感じる。
刀を振り上げて、『なのは』に突き立てる。
が、水晶部分は思ったより頑丈で、呆気なく弾き返されてしまう。

「ヤメロォォォォッ！！」
「・・・・・・・・っぐ！」

衝撃波。
今度はうまくバランスを取れず、地面に叩きつけられた。
痛みで、思わず蹲ってしまい、動けない。
『なのは』がいる方向からは、生き物が這いずり回る音。
っしまった・・・・・・・！
これはさすがに詰んだ・・・・・・・・！！
反射的に、衝撃にそなえて目を閉じる。

「ッギャアアアアアッ！！！」

「・・・・・・・・っ！？」

顔を跳ね上げて、上を見た。

『なのは』の『本体』が温床にしているところ、すなわちなのは。

その両肩から、まるで噴水のように血が噴き出していた。

・・・・・・・・何でだ？どういうことだ？

まさか、何か下手をうってしまったんじゃ・・・・・・・・・！！！

焦りで思考が単調になってきてしまう。

落ち着け・・・・・・・・落ち着け・・・・・・・・・！！

――――――

「・・・・・・・・・！？」

今度は何だ？

何か、声が・・・・・・・・・。

――――――あ　え

聞こえない・・・・・・・・。
耳に神経を集中させて、拾い上げた音は、

――――――――たすけて

これは・・・・・・・・・！

「なのはか!?」

問いかけに返事は来ない。
だが、確かになのはの声だ・・・・・・・・・！

――――――――『わたし』を助けて

――――――――もう楽にしてあげて

ぼそぼそと、蚊の泣くような声。
それでもしっかりと聞こえてくる。

――――――――わたしはもういいから

――――――――死んでもいいから

――――――――だから、『わたし』を助けてあげて

・・・・・・・・自分のペルソナにすら、慈悲を与えるのか。
お前だって、辛いはずなのに。
今だって、ほら、また血が吹き出た。
本当にボロボロじゃないか、限界じゃないか。
それなのに、まだ他人の心配を・・・・・・・・・！！
手のひらに鋭い痛みが走って、血がにじむ。
それを見つめて、握り締めて、刀を持ち直した。
・・・・・・・・なのは。

「今、楽にしてやる・・・・・・・・」

そう呟いて、駆け出したとき。

「ちょっとちょっと！まさかマジで殺すとかないでしょうね！？」

後ろから、声。

振り返ると、騎子が仁王立ちして立っている。

「空也！！泣いてる子のそういう台詞は、本気にしないほうがいよ！！本心隠して、そういってるだけなんだから！！」

「助けるべきなの！」と、こっちを指差す騎子。

・・・・・・・・にやっと、口角が上がるのを自覚しながら、『なのは』と向き合う。

「知れたことを・・・・・・・・！」

叫び、刀を構える。

ｓｉｄｅ　なのは

――――もう、必要とされていないんじゃないか？

・・・・・・・・管理局に入ったのも、単に独りぼっちが嫌だったから。
同じ力を持っているからこそ、置いていかれたくなかった。
あのままじゃ、将来も決まっていない、空っぽな存在になっていたから。
それが嫌だったから、わたしはフェイトちゃん達の背中を追いかけた。

・・・・・・・・・・・・・・でも、わたしのシャドウを見られて、思いっきり拒絶されて・・・・・・・・。
今まで胸を埋めていたものを、一瞬で押し流された感覚。
たとえるなら、それなりに発展していた町が、地滑り等で、一瞬で無くなるような。
男の人と女の人、赤ん坊からお年寄りまで、悪人善人区別なく、全部かっさらっていったような感じ。
今度こそ、本当に空っぽな存在になってしまった。
今までは空也達のお陰でなんとかごまかしきれていたけど、もう潮時だね。

――――あなたにこんなこと頼むなんて、最低だよね。

刀を握って、こっちに突進してくる空也。
ああ、もうすぐで終わる。
こんな空虚感から解放される。
目の前にいた『わたし』をなるべく優しく抱きしめて、囁く。

――――もうすぐだよ

――――もうすぐで、あなたは自由だよ

そう、わたしが消えれば、この子は自由。
思うがままに生きて、好きなときに笑って、泣きたいときに泣いて。
ずっとわたしに振り回されて、束縛されてきたんだもん。

――――ごめんね

もう、大丈夫だよ。
あの人達は優しいんだもん、ちゃんとあなたを護ってくれるから。
お父さんや、お母さんだって、きっと――――

side　空也

走る、走る、走る。
力が、わきあがってくる。
刀を下げて、カードを出現させる。

「イザナギ！！」

なのはと『なのは』を、助けるために。
ずっと自虐して、ずっと献身的な態度を取って、ずっと不屈を演じ

てきたんだ。
もう少し、自分を許せよ、もう少し、自分を労われよ、もう少し、助けを求めろよ。

「――――昇華ッ！！」

絶望に膝を折ってもいい、お前だって人間だもんな。
我侭でもいい、そうやって自分を殺してきたんだろ？
恐ろしく醜くてもいい、だって一番怖がってるのはお前だから。
そんな、お前だから――――

――――――伊邪那岐大神（イザナギノオオカミ）

真っ白なコート、真っ白な剣。
仮面をかぶり、威厳ある姿になった、俺の半身。
なのは『達』を見据えて、ただ悠然と佇んでいる。

――――――そう言えば神話の俺（イザナギ）は、おぞましい姿になった妻（お前）を、見捨ててしまったんだっけか？

「幾万の・・・・・・・・・」

ならば、誓おう。
俺はそんなこと、絶対にしない。
どんなに血にぬれても、どんなに恐ろしい姿になっても。
お前自身が変わっていないのなら、受け入れよう。
力になろう、隣に居よう。
それで、寂しいなんて思わせないくらいに、たくさん笑うんだ。
仲間達と一緒に、ずっと寄り添い続けるんだ。
だって、そうだろ？

「・・・・・・・・・真言ッ！！」

独りぼっちは、寂しいもんな。

ｓｉｄｅ　フェイト

意識がはっきりしてくる。
頭がくらくらするけど、記憶ははっきりと思い出した。

文字通り頭を叩いて、無理矢理にでも目覚めさせようとする。
覚悟は、出来てないけど・・・・・・・・・罵られるのは、当たり前の気持ちで。
とにかく、謝らないと、土下座してでも、『ごめんなさい』を言わないと・・・・・・・・・・！

「・・・・・・・・・・ぁ、のは」

自然と、口から名前がこぼれる。
あの日頑なだったわたしに手を差し伸べてくれて、友達になろうって言ってくれて。
はたから見れば対したことは無いんだろうけど、わたしにとっては、すごく重要なことだから。
クリアになった視界に、空也に抱きかかえられたなのはが見える。
どうやらあの状態は相当体に負担がかかっていたらしい。
体の所々に、痛々しい傷や、血が付いていた。
顔が真っ青で、唯一安心できることっていったら、息をしていることくらいだろうか。
ボロボロでぐったりして、ぴくりとも動かなかった。
胸がいろんな感情でいっぱいになって、思わず飛び出した時。

「・・・・・・・・・ッ！！」

魔力で体を強化して、空也の後ろに一瞬で移動。
飛んできたそれを弾き飛ばす。
地面に突き刺さったのは・・・・・・・・・針？

「仕留め損ねたか」
「ッ誰！？」

バルディッシュを構えて、突然現れた人と向き合う。
真っ黒なコートに、仮面。
両手には何も持っていないけど、恐らく、袖の下か何かに隠しているんだろう。

「目標を確認、これより任務を開始する」

淡々とそう言ったその人は、どこからかナイフを取り出して、飛び掛ってきた。
振り下ろされたナイフをバルディッシュで受け止めて、弾き返す。
蹴りも防いで、右ストレートもいなす。
バルディッシュを振るけど、ひらひら避けられて、当たらない。
これは・・・・・・相当特殊な訓練を受けている!?

「・・・・・・・・ッぐぁ!!」

唐突に足を蹴り上げられて、もろに顎に入ってしまう。
予測できなかった・・・・・・!
それに考え事なんてしてたら、やられる!!

「・・・・・・・わっ!?」

ふら付いていたところに、銃弾が来た。
なんとか直撃は免れたけど、腕にかすった・・・・・・・・!!

「・・・・・・・はずしたな」

もう一人いたの!?っくそ!気づけないなんて・・・・・・・・・!!
二人分の攻撃をなんとかいなして、いったん退いた。

「ふむ、それなりにやるようだな」
「そうだな、これでは予定時刻を過ぎてしまうかもしれん」
「っあなた達は何者!?」

とにかく、このままじゃラチが明かない。
なんとか情報を引き出さないと・・・・・・。

「我等は時空管理局暗部」
「転生者特別部隊（トリッパー）」

・・・・・・・っ!!?

「管理局!?どうして管理局がわたし達を!?」
「決まっている、使えない駒は捨てるのみ」
「さぁ、もうやめよう、手始めにその舌引っこ抜いてくれる」

二人はそれぞれ武器を構えて、突っ込んで・・・・・・って、速っ!?

「っくぅ・・・・・・・!」

バリアとバルディッシュを組み合わせて、何とか防いだけど・・・・・きつい。
さすがに二人分は無理だったかも・・・・・・・!
始めのうちは互角だったけど、段々押されてきて、後ずさりしてしまう。
だめだ、ここで耐えないと・・・・・・・・・・・・なのはが、みんなが・・・・・・・!!

「っバースト!!」

「・・・・・・・・っ」
「・・・・・・・・！」

咄嗟にバリアを爆発させて破棄。
ついでにまた二人を離す。
でもこのままじゃ、ただの鼬ごっこになっちゃう。
どうすれば・・・・・・・どうすればいいの・・・・・・・・！？

「・・・・・・・もういいよ、フェイトちゃん」

・・・・・・・っ！！！？
肩が叩かれると同時に、聞き覚えの有る声がする。
後ろを振り向くと、

「なのは！！動いちゃだめだよ！！」
「大丈夫」

まだ回復しきっていないじゃない！顔も真っ青で、全然大丈夫そうには見えない！！

「わたしがなんとかするから、さがって！！」
「・・・・・・フェイトちゃんこそ、さがって」
「っなのは！」

なのはは黙って笑うと、前に出る。
ふらふらしてて、絶対にあの二人に敵うようには思えなかった。

「ほう、自ら始末されに来たか」
「こちらの手間もはぶけるな」
「・・・・・・・」

二人の言葉を無視して、なのははこっちに背を向けたまま、少し俯く。
声が聞こえる・・・・・・・何かとしゃべっている？

ｓｉｄｅ　なのは

目の前の二人を見据える。
多分、空也たちと同じ転生者で、敵。
『前までの』わたしだったら、絶対に敵いっこない相手だけど・・・・・・。

「・・・・・・・」

息を細く吐いて、少し集中して、カードを出現させる。
今まで真っ黒だった面には、『わたし』の姿がはっきり描かれていた。

「・・・・・・分かってる、わたしを捨てたフェイトちゃん達が、憎かったのは確かだもん」

だけどね。

「それでもやっぱり、大切だから、友だちだから・・・・・・心

配させたくない、迷惑をかけたくないって気持ちは、あなたも同じでしょ？」

カードが、薄くポッと光る。
わたしは笑ってから、

「あなたは気に食わないかもしれないけど、わたしにとっては大切な友だちなの・・・・・・・・」

一呼吸置いてから、もう一度二人の敵を見た。

「・・・・・・みんなわたし『達』の所為で、危なくなってる、わたしはそれを助けたい」

だから、お願い。

「――力を、貸して」

――しょーがないわね

くすりっと笑う、『わたし』の声。

――こうなったら、一肌脱ぐわよ？

「・・・・・・うん」

青白い炎を宿したカード。

――ペ

それに微笑んで、一旦空に掲げる。

――ル

それから、両手で包み込んで、

――ソ

祈るように、願うように、

――ナ

カードを、割った。

第十八話召喚（後書き）

というわけで、覚醒しました。
ちょーっと展開が速かったかもしれんです・・・・。
そして空也のペルソナが転生っぽいことを・・・・・・ｗｗ

金色の戦姫様
ご感想ありがとうございます。
はい、後者でした（笑）
『闇』が何なのかはちょっと分かりませんが、とりあえずご想像にお任せします。
『魔法』も『絆』も、一応対価じゃないんですが、広い意味で言えば、『絆』の方が対価になっちゃうかもです・・・・・・。

次回、ついに覚醒したなのはさん！ペルソナの名前と設定は、後日
後悔、否、公開！！
それでは。

第十九話『彼女』の名前（前書き）

短くなっちゃいました・・・・・。
あと、みなさん感想のほうで、なのはさんのペルソナを予想していただいているようですが、果たして・・・・・・・・ｗｗ？

第十九話『彼女』の名前

ｓｉｄｅ　フェイト

風が巻き起こって、思わず腕で顔を庇う。
まとわり付く髪の毛を振り払って、なのはの方を見ると、

「何、あれ・・・・・・・・・！？」

ｓｉｄｅ　なのは

全身を隠す、藍色のローブ。
顔も仮面と覆面で隠す徹底っぷりで、自分を隠してきたわたしには、ぴったりの『わたし』。
今までのわたしだったら、嫌われることを嫌って、絶対に口にしなかったであろう、その名前を呼ぶ。

「・・・・・・・・・イザナミ・・・・・！！」

――初陣ね！行くわよぉ！！

レイジングハートを槍に変えて、二人に向かって走る。
・・・・・・・・・・正直、まだ身体は辛いけど。
でも、みんなが頑張ってくれたんだから、今度は、わたしが・・・・
・・・!!!!

「マハガルーラ!!」

辺り一帯に風を起こして、相手を攻撃。
真空になった空気が、針を武器にしている人に直撃した。
・・・・・・・・・・ように見えて、防がれていた。
腕についてるアーマーには、魔力攻撃を防ぐ加工もしてあるみたいだね。
正直、やっかいです・・・・・・・・・!!

「・・・・・・・・ふっ」
「っわ!」

足元に銃弾。
何とか踏みとどまったけど、ちょっとかすった。
やっぱり病み上がりじゃ・・・・・・・・・。
・・・・・・・・・だめ、まだ頑張らないと。

「っイザナミ!!」
――派手にいくわよ?メギドラオンッ!!

光が舞い降りて、直後に爆発。
二人にダメージを与えるけど、わたしもちょっと余波を受ける。
当たり前だけど、自分の攻撃も受けるんだね。
まだ慣れてない部分があるし、練習あるのみかな・・・・・・・・。

・・・・・・・・・っ！

『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ』

衝撃。

見てみると、銃を武器にする人がこっちに銃口を向けていた。

そしてそっちに気を取られている間に、もう一人が針を飛ばしてきて・・・・・・・・・。

っだめだ、こっちは防御が間に合わない。

回避も駄目だ・・・・・・・・・！

覚悟を決めて、目を閉じる。

「バルディッシュ！！」

『Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ』

はっと目を開けると、フェイトちゃんがわたしの前に立っていた。

「なのは無茶しないで！わたしが前衛に立つから・・・・・・・・・二人でなら、やれる！！」

フェイトちゃんは、こっちを振り向かなかったけど、でも。

「・・・・・・・・うん！」

背中が、すごく頼もしかった。

「メシアライザー！！」

――――そーら、受け取れ！！

光が湧き上がって、わたしやフェイトちゃんや、みんなの傷を癒す。

「次っ！」
――マハラクンダ！タルカジャ！
体が軽くなったのを感じながら、相手の耐久力を下げて、フェイトちゃんの攻撃が通りやすいようにした。
フェイトちゃんは元々、「鋭く研ぎ澄ますこと」を得意としている。
だから、ちょっと相手の耐久力を下げて、火力を上げるだけで、
「やっ！」
「・・・・・・・・っ！」
「ぬぅっ！」

side　空也

隙あらば援護を、と考えていたが、目の前の戦いを見ていると、どうもそういう気になれなかった。
フェイトが前でなのはを守り、なのはは後ろでフェイトを守る。
洗脳という他人の手が入っていたとしても、確かに培われて来た信頼がそこにあって。
割り込むことが、非礼極まりないことのように思えたから。
だから俺達にできることと言えば、流れ弾の処理くらいだった。
「イザナミ！」
――はいはい！

なのはが目覚めさせたペルソナ――イザナミは、どうやら後衛型のペルソナのようだ。
フェイトを的確に強化したり、援護射撃を行ったりしている。
今のなのはは幾らか弱っているので、全快の時の威力などを考えてみると・・・・・・・・。
うん、かなり頼もしいな。
なのはの一閃が針の奴を捕らえて、怯ませる。
その後ろから銃の奴が狙っていたが、すかさずフェイトが弾丸を弾き返し、慣れた手つきでバルディッシュをブーメランのように飛ばす。

「なのは！」
「うん！」

名前を呼び合っただけで、何かの合図ができたのか、二人は同時に二方向へ飛び立った。
続けざまに二人がそれぞれの武器を回転をかけて投げ飛ばす。

「全力全開！」
「疾風迅雷！」

――――N&F中距離斬撃型コンビネーション！

なのはがフェイトの、フェイトがなのはの武器をしっかり握って、魔方陣を展開。
地面に、深く突き立てた。

――――空間攻撃・ブラストカラミティ！

魔方陣が震えて、光が立ち上る。
目を潰さんばかりのそれを防ぐために、咄嗟に腕を顔の前にやると、

「・・・・・・・・・っ！？」

安心した表情で、倒れるなのはが見えた。

ｓｉｄｅ　由香

次元航行艦『アースラ』
あれから何時間か経って、わたし達はいったん治療を受けることになった。
特になのはちゃんは重傷で・・・・・・・・・今手術を受けているらしい。

「・・・・・・・っし、これで大丈夫」
「ありがとう、えっと・・・・・・・・」
「エイミィ、エイミィ・リミエッタ」
「あ、はい、ありがとう、エイミィさん」

包帯をまいてくれた人――エイミィさんにお礼を述べてから、みんなを見渡して見た。
騎子や槍馬、刀子さんや空也、さらにはなのはちゃんの友だちまで。
みんなボロボロになっている。

――みな、手酷くやられたな
「しょうがないよ、なのはちゃんが相手だったし、戦いにくいところもあったから・・・・・・・」

わたしのペルソナ『ベンケイ』をいたわりながら、怪我をしているみんなを見渡した。
なのはちゃんの友だちの、ポニーテールの人なんか、肋骨と片腕を骨折したみたいで。
しばらくはお仕事ができないみたいだ。
――普段、治療なら刀子さんに頼めばいいんだけど・・・・・・・・・。
ちらっと、ベッドに横たわっている刀子さんを見る。

――スキルは精神力を消耗するからな

「それに今回すごく頑張っていたから、あまり無茶はさせないほうがいいよね」

ほとんど怪我人を守っていたんだし、休憩はきっちり取らないといけないし・・・・・・・・。

・・・・・・・・でも、

「誰も死なないで、よかったね」

――――うむ

ｓｉｄｅ　？？？

ふぅん、目覚めたんだ。

まぁ、最近色んな転生者に狙われてたんだし、『鍵』としての本能が働いた結果かな？

どちらにせよ、ことが上手く運んでくれて助かったよ。

ボクの計画のためにも、すぐにやられてもらっちゃ困るもんね。
『混沌の楔』高町なのは、君にはもうちょっと強くなってもらわなくちゃ。
でもその前に・・・・・・・・・。

「月詠」
「ここに」
「例のシステムは？」
「完成しました」

うん、よし。

「一年後、『宣言』を行う、メンテナンスをきっちり行うように」
「御意」
「・・・・・・・・・っふふ」

さーて、来年が楽しみだ。

第十九話『彼女』の名前（後書き）

というわけで、まさかのオリジナルペルソナでした（ウワナニヲスルヤメ（ｒｙ
みなさん色々想像していただいていたようなので、この場を借りて謝罪をば。

三毛猫ヤマト様
ご感想ありがとうございます。
からかいネタ・・・・あると思います！！（（
おまけとかで、その辺のネタかけたらなっと思ってます。

緑異様
その五千円わたしがもらった！！（（
イルルヤンカシュは、ネットの画象で拝見させていただきました。
確かにかっこよかったですが、今回出てきたなのはのペルソナは前々から暖めていたやつなので・・・・・。

金色の戦姫様
なるほど、あの子ですね！
確かに一部は『闇』に似ていますよ～ｗ
紹介してもらったペルソナは全てチェックしてきました、サー！（（
確かにどれもよかったのですが、なのはのペルソナは元から決まっていたので・・・・。

さーて、実は今回で中学生編はおーしまいっ！
次回から新章突入でございまーす！
それでは。

設定その2（前書き）

残りのペルソナのみなさんと、なのはさんのシャドウの設定。

設定その2

サスケ
属性：中立・中庸
クラス：暗殺者（アサシン）
詳細：幽斗のペルソナ。
無口で寡黙な忍者。
典型的な忍者の格好に仮面、両手は小太刀という姿、ちなみに髪はボサボサ。
日常的に無言な上に仮面をつけているので、感情が読み取りにくい（本体である幽斗は別、本人曰く『雰囲気で分かる』らしい）。

ベンケイ
属性：混沌・狂
クラス：狂戦士（バーサーカー）
詳細：由香のペルソナ。
誇り有る武装僧侶。
背中には『七つ道具』と呼ばれる、様々な種類の武器を装備している。
容姿は、伝えられている『武蔵坊弁慶』そのままの姿をしている。

ケンタウルス
属性：混沌・善
クラス：騎兵（ライダー）
詳細：騎子のペルソナ
いけいけ暴走族気質な姐御。
上半身が人、下半身が馬で、両手には突撃用の槍と、盾を装備している。
口調、行動ともに豪快で、人情に厚い。

クーフーリン
属性：秩序・中庸
クラス：槍戦士（ランサー）
詳細：槍馬のペルソナ。
ハイテンションな性格。
容姿は、『ｆａｔｅ』のランサーをペルソナっぽくした感じ。
無礼に見えて、礼儀はきっちり心得ている立派な戦士。

イザナミ
属性：混沌・善
クラス：魔術師（キャスター）
詳細：なのはのペルソナ。
面倒見のいいお姉さん。
全身を覆うローブを纏っており、顔もフードと仮面と覆面で隠している。
なのはを妹のように扱う。

なのはさんのシャドウ

なのはの影
初登場話：第五話
詳細：なのはが押さえ込んでいた一面が暴走した姿。
歪な龍の形を取っている。
本編内では物理攻撃が目立ったが、どちらかと言うと魔法行使が得意。

歪んだ不屈（ネガ・レイジング）
初登場話：十六話

詳細：本体であるなのはがヴィータ達に追い詰められた際、中途半端に目覚めていたペルソナが怒りに任せて暴走。
主導権を乗っ取っての暴走のため、身体はなのはそのまま。
レイジングハートでの近接戦闘と魔法を行使する。

自己後悔（リグレット）
初登場話：十七話
詳細：歪んだ不屈がさらに暴走した姿。
龍のような身体で、頭に当たる部分にある水晶に本体がある。
ここまでくるとなのはの身体は限界を超えてしまっているため、戦闘中はずっと崩壊が進んでいた。

設定その２（後書き）

ペルソナだけじゃ凄く短くなったので、なのはさんのシャドウの設定も乗っけてみました。
それではお返事をば。

金色の戦姫様
イザナミでしたｗｗ
ペルソナ４のものとは全く別物ですが・・・・・。
確かに『空×なの』は確定ですが、そう簡単に幸せにしてあげませんぜｗｗ（（

緑異様
ストレートに行けばよかったんですｗｗ
この小説に出てくるペルソナは全部オリジナルなので、４以外のものも出てくるっちゃでてきますよ～。

次回からは新章『Ｓｔｒｉｋｅｒｓ編』に突入でございまーす。
あの人がむちゃくちゃ性格変わって・・・・・？
それでは。

プロローグ（前書き）

連続投稿。
プロローグなので短め。

プロローグ

雪が、降っている。
雨のように音を立てるわけでもなく、ただただ無音で降り積もる。
この世界に存在するのは無機質のみ、ゆえに雪もすぐに積もっていくが。
とある一角だけは、違った。
鮮やかな赤が飛び散っており、熱を持っているのか、そこに落ちた雪は片っ端から解けていく。
その赤の中心に、白い点があった。
白は、灰色を抱きしめて、声を殺して涙を流している。

――ごめんなさい
――ごめんなさい
――ごめんなさい

呪文のように、それを続けていた。
実際、白は己の無力を呪っていた。
どれだけ力を手に入れても、いざと言うときに役立たずな自分が、この上なく腹立たしかった。
しかしその感情をぶつける術を忘れてしまっているので、ただ声を殺して、涙するしかできない。
灰色はまだ生きている。
だが、白は離れようとしなかった。
少しでも離れれば、雪のように消えて無くなるような錯覚を覚えて、

怖くて離れられないのだ。
故に、白は灰色にしがみついたままだった。
熱を失った赤の上に、雪が降り積もっていく。
白の肩や灰色の背中にも雪がたまるが、彼女はそれをはらおうともしない。
ただただ、腕に力をこめるだけだった。

――――全ての者よ聞け

――――これより、『鍵』を優勝商品としたバトルロワイヤルを開催する

――――参加は自由、ただし、一度参加すれば後戻りはできない

――――願いがあるなら、さあ、立ち上がれ

――――己の欲望のために武器を取れ

――――そして存分に

――――殺しあえ

背後で響いた声を、白は黙って睨みつけ、心に刻み込む。
そして、一つの歪んだ決意を胸に抱きしめ、自身を殺しにかかった。
――雪は何事も無く降り注ぎ、積もっていく。
命をも奪うその冷たさは、白の心を徐々に冷やしていった。

新暦００７５年３月。
古代遺失物管理部、「機動六課」本部隊社。

「うがぁ――っ！！なしてやあああああっ！！」

新設された部隊内で、その絶叫は響き渡った。

「ど、どーしたですか！？はやてちゃん！」

部隊長室の中を、絶叫の発信源――機動六課の部隊長である、八神はやてのもとに、見た目１０歳ほどの、文字通り『小さな』少女がふよふよと飛んで駆けつける。
はやてはその少女を涙目で見つめながら、頭を抱えつつ、開いていたウィンドウを見せた。

「いきなり一大事やリイン！教導を頼んどった人が、来なくなった！」

「・・・・・・・えぇっ！？何ですって！？」

リインと呼ばれた少女は、危うく落としかけた書類を持ち直しながら、ウィンドウを覗き込む。

「で、でも！この間ちゃんと来れますよって、ＯＫもらいましたよね！？」

「それが、実は手違いで古い資料を手渡してしもうとったらしくて、せやから頼んどった人はすでに退職しとったんよぉ・・・・・・・」

そう言って、はやてが情けなく机に突っ伏し、リインがおろおろし

始めたとき。

『――おやおや、もしかしなくてもお困り？』

「ふぇ？・・・・・・っし、失礼しました！！」

『っほっほっほ、いいのよ、そんなに硬くならなくても・・・・・・それで、何に困っているのかしら？』

突然通信が開き、ウィンドウに三提督の一人――ミゼット・クローベルの顔が現れる。

はやてはすぐに飛び起きると、背筋を伸ばして敬礼をした。

ミゼットはのほほんとした笑みを崩さないまま、はやてに問いかける。

はやては、始めは渋っていたものの、きちんと今までの経緯を説明した。

するとミゼットは再び「ほっほっほ」と笑うと、

『ちょうどよかった、あなたのところに受け入れてほしい教導官がいて、今あなたに直談判しようとしてたところなの』

「っ本当ですか！？」

『ええ、あなたさえよければ、すぐにでも異動命令を出すけど・・・・』

はやてはここで、思考をはさむ。

いくら相手がよしと言っているとはいえ、こうも甘えてしまっていいのだろうか？と。

だが、教導官がいないのは事実、戦力として抱えるメンバーは皆新人ゆえに、それを育てる人間がいないままなのは痛い。

（背に腹は抱えられんね・・・・・・）

うん、と頷いてから、

「それでは、お願いします」

『わかったわ・・・・・・ちなみにその子、あなたが受け入れる予定の二人の試験官を担当しているから、その折に紹介するわね』

「はい！ありがとうございます！」

互いに一礼しあってから、はやては通信を切った。

プロローグ（後書き）

中学生編を書き終えてから気付いたのですが・・・・・。
『リインフォース？出てなくね？』
ああっ石を投げないで！！

第一話独白と試験（前書き）

というわけで、ＳＴＳ編です。
今回、あの子も若干変わってます。

第一話独白と試験

――――変な子。

それがあたしに対する周りの評価だった。
別に、身体にアザがあるってワケでもないし、頭の中がメルヘンちっくなわけでもない。
性格はむしろ明るいほうで、人付き合いもそれなりに出来ると自負している。
じゃあ、どうして変な子かって？
・・・・・・・それは、

あたしには、俗に言う『前世の記憶』があるから。

気付いたのは、『今の家』に来たとき。
ふと、難しい本や文字を読めたときに、気付いたんだ。
家族には思い切って相談した。
そのときは当然のように受け入れてくれて、思わず泣いてしまったのを記憶している。
けれど、同時にそれが恐ろしくもなってしまった。
家族は受け入れてくれても、周囲の人間はどう思うか？

個性が大切にされている時代とはいえ、『異端』は徹底的に拒絶されるもの。
話したのは家族だけだけど、それがもし、赤の他人に漏れたら？それが原因で、家族が危険な目にあったら？
考え出すと止まらなくなって、頭を抱え込んでしまった。
そしていきついた結論は、『自分だけでも、他人に関わらないようにしよう』って言うもの。
学校では、図書室の奥の方で難しい本を読み漁って、外にはあまり出ないようにして、話しかけられても、曖昧な返事で流して。
とにかく徹底して、人と関わらないようにしてた。
そりゃ、ちょっとは人恋しい時もあったよ？
でも、受け入れてくれた家族のことを思ったら、耐えられた。
そうやって壁の花を決め込んでいた所為か、周りの人間からの評価は『勉強も運動も出来る子、だけど人と関わりたがらない変な子』っていうものになっていた。
クラスメイトも、必要なとき以外は喋りかけてこなかったし、こちらとしては結果オーライなので、別に何も思わなかった。

あの人に、出会うまでは。

公務員であるお父さんを訪ねて、地方から首都圏に来たときのことだ。

着陸した空港で、姉と逸れてしまい、探し回っていると、大きな爆発音が響いて、人や荷物が吹き飛ばされていた。
本当に突然のことで、何が起こったのか分からないうちに、あたしも吹き飛ばされた。

気がついたら、あたりはまさに火の海。
あまりの熱気に、何度も咳き込んだ。
一瞬別の世界に飛ばされたことも考えたけど、見覚えのある柱や窓ガラスを見つけて、自分がまだ空港にいるってことに気付いた。
とにかくここは危険だって思って、とにかく出口を探そうと思って、まだ痛い足を動かしながら歩き出した。
途中、物と一緒に燃えている人間も目撃しちゃって、何度も戻しかけた。
蒸し風呂以上に熱い中、吐き気を抑えながらの前進。
ダウンしないほうがおかしかった。

「・・・・・・・・・・・・お父さん・・・・・・・お姉ちゃん・・・・・・」

開けた場所で、膝を付いてしまう。
熱気が、どんどん体力を奪っていく。
涙が、ぼろぼろとこぼれてきた。

「痛いよ・・・・・・・・・怖いよ・・・・・・・・こんなのやだよ・・・・・・！」

口から漏れる、数少ないあたしの弱音。
小さい頃から、あたしは弱かった。
痛いのとか、怖いのとかが嫌で、泣く事しか出来なくて。

「帰りたいよ・・・・・・・！」

女神像の前で手をついて、情けなく泣くしかなかった。

「・・・・・・・誰か・・・・誰か助けて・・・・・・・！」

その時、前の方で、ミシミシと何かが圧迫される音。
ばっと顔を上げると、女神像が倒れ掛かっていた。
しかも、あたしの方に。
神様は、自分を殺したがっているんだと思った。
前世の記憶を持っているから、いつかお父さんたちに迷惑をかけるから。
そうならないために、あたしを殺そうとしてるんだと、そう思っていた。
『あの人』が現れたのは、そんな時だった。

――――魔法が発動する瞬間に聞く、済んだ音。

顔を上げると、倒れ掛かっていた女神像が、桜色のリングで固定されている。
その後ろの方にいる、白いバリアジャケットの、『あの人』。

「よかった・・・・間に合った・・・・・！」

かなり急いでいたのか、手を前に突き出したまま、肩で息をしていた。

『あの人』は、真剣だけど安心させるような表情であたしを見つめて、

「助けにきたよ・・・・！」

長い亜麻色の髪が翻ったと思うと、『あの人』はあたしの目の前に佇んでいた。

そしてあたしの頭に手を置いて、いっぱいに笑ってから、

「良く頑張ったね、偉いよ・・・・・もう大丈夫だからね」

「・・・・・あ・・・・・・・・・っ！」

優しい言葉に、また涙が溢れてくる。

『あの人』はもう一度笑ってから、杖を天上に向けた。

「安全な場所まで、一直線だから！」

その姿は、とてもかっこよくて、今まで臆病だったあたしなんかとは大違いで、

『Ｉ　ｃｏｎｆｉｒｍ　ｕｐｗａｒｄ　ｓｅｃｕｒｉｔｙ（上方の安全を確認）』

相棒らしい杖が声を発すると、『あの人』は魔方陣を展開。

『Ｉ　ｒｅｍｏｖｅ　ａ　ｆｉｒｅ　ｒｉｎｇ　ｌｏｃｋ（ファイアリングロック、解除します）』

「一撃で地上まで行くよ！」
『ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ，Ａ　ｒｏａｄ　ｃａｒｔｒｉｄｇｅ』
集束していく光、『あの人』は杖をしっかり持って叫ぶ。
「ディバイン・・・・・・！」

――――バスター！！

その後のことは、少し曖昧だ。
ただ、あたしを抱えている『あの人』が、笑いかけてくれたのは、はっきり覚えている。
街の光の所為かも知れない、はたまた目下で起こっている火災の所為かも知れないけど、それでも。
その笑顔がとてもまぶしくて。
だから、

――いいなって、この人みたいに、強くて優しい人になれたらなって。

――本当に単純なことだけど、

――心から思ったんだ。

新暦００７５年４月、ミッドチルダ。
臨海第８空港近隣、廃棄都市街。
その一角に、二人の少女がいた。
一方はボーイッシュな雰囲気の少女。
素手での素振りを行っていることから、戦闘スタイルは格闘であると取れる。
もう一方は、橙色の髪を二つに結い上げた少女。
自身の銃に弾を込めながら、不備がないかを見ていた。
と、ここでその少女が、素振りを行っている少女に顔を向けて、

「スバル、あんまり暴れてると、試験中にそのオンボロローラー逝っちゃうわよ？」
「うぇー・・・・ティア、やなこと言わないでー、ちゃんと油も差してきた！」

ボーイッシュな少女――スバルは素振りを中断させると、不安げな表情で、ツインテールの少女――ティアナに反論した。
ティアナは素っ気無く「そう」と返し、再び作業を再開する。
スバルも、どこか納得いかないような表情で、ストレッチを始めた。
あらかた終わったのか、ティアナはウィンドウを開き、時間を確認する。
すると、何かベルのような音が響いて、ティアナの時計とはまた別の、大きなウィンドウが開いた。
二人が反応し目をやると、１０歳ほどの幼い女の子が写っている。
だが、少女らが普段纏っている服装をしていることから、二人は背筋を伸ばした。

「おはようございます！さて、魔導師試験受験者さんニ名、そろってますか？」
「はい！」

二人が返事をすると、モニターの向こうの少女は、書類を手に取り、

「確認しますね、陸士３８６部隊所属の、スバル・ナカジマニ等陸士と・・・・」
「はい！」
「ティアナ・ランスターニ等陸士！」
「はい！」

威勢のよい返事に、少女は笑ってから、

「所有している魔導師ランクは、陸戦Ｃランク、本日受験するのは、陸戦Ｂランクへの昇格試験で間違いありませんね？」
「はい！」
「間違いありません」

すると少女は書類をしまい、背筋を伸ばして、

「はい！本日の試験監督を務めますのは、私リインフォース？空曹長です、よろしくですよー！」

「よろしくお願いします！」

二人は、リインフォース？に敬礼を返した。

一方その頃、試験会場上空。

「お、早速始まってるな？リインもちゃんと試験官してる」

ヘリコプターから身を乗り出して、三人の様子を見ている女性がいた。

「はやて、ドア全開だと危ないよ？モニターでも見られるんだから」

「はぁい」

満足そうに微笑む女性の後ろから、声がかかった。

身を乗り出していた女性――はやては苦笑いしながら、返事をして、座席についた。

はやてに声をかけた女性――フェイトは、モニターを開き、続けて資料も開く。

「この二人が、はやてが見つけた子達だね？」

「うん、二人ともなかなか伸び代のある、ええ素体や」

「今日の試験の様子を見て、いけそうなら正式に引き抜き？」

「うん、直接の判断は、教導官に任せてるんやけどな」

「そっか・・・・・・うん？」

そこまで会話して、ふと、フェイトは疑問を浮かべる。

「どうしたん？」

「いや、六課にくる教導官のこと、何も聞いてないなって思って・・・・」

「あぁ・・・・・・・・」

はやては、ばつが悪そうに後頭部をかいてから説明を始めた。

「実は、うちも何も聞いとらんのよ」

「・・・・・・・・え？」

ぽかんとするフェイト。

はやては再びばつが悪そうにしてから、

「書類の手違いで、教導官が来なくなってしもうたって事態は、もう知っとるやろ？」

「うん、でもミゼット提督のお陰で難を逃れたんだよね？」

「せや、けど、その教導官本人の希望で、素性は全く明かされとらんのよ」

「そうなの！？」

驚きのあまり身を乗り出すフェイト。

はやてはそれを制して、

「今日、リインと一緒に試験官してるらしいから、多分会えると思うんやけど・・・・・・・」

と、モニターに目をやった。

同時刻、廃屋の一角。

『Ｔｈｅｒｅ　ａｒｅ　ｎｏｔ　ａ　ｌｉｆｅ　ｒｅａｃｔｉｏｎ，
　ｔｈｅ　ｒｅａｃｔｉｏｎ　ｏｆ　ｄａｎｇｅｒｏｕｓ　ｍａｔｅｒｉａｌｓ　ｉｎ　ａ　ｒａｎｇｅ（範囲内に生命反応、危険物の反応はありません）』

「・・・・・・」

『Ｉｔ　ｉｓ　ｔｈｅ　ｃｏｕｒｓｅ　ｃｈｅｃｋ　ｅｎｄ（コースチェック終了です）』

「・・・・・ご苦労」

ウィンドウを操作していた女性は、モニターを開いてコースの情景を映し出す。

「観察用のサーチャーも、攻撃対象のオートスフィアも設置完了」

――じゃあ、わたし達は全体を見てましょ？

「・・・・・ああ」

「・・・・・・撃に気をつけつつ、制限時間内にゴールを目指してくださいです、何か質問は？」
「えっと・・・・・・ありません！」
「同じくありません！」

リインの問いかけに、二人ははっきり返事をする。

「では、スタートまであと少し、ゴール地点で会いましょう！ですよ！」

ウィンドウが消えると同時に、合図をしめす画面が出現。
二人は、構えた。

「始まったな」
――ええ、活きのいい二人よ

モニターを見つめ、意見を言う声が二つ。
だが見える人影は一つだけだ。

「・・・・・・」
――あら、この子あの時の・・・・・？

黒い制服を纏った女性は、モニターの向こうで開始の合図を待つス

バルを見つめ、目を細めた。

「・・・・・・随分見違えたな、スバル」

ぼそっと、呟いた声は、甲高く響いたブザーに消される。

「うりゃ！ていっ！はぁっ！」

スバルは建物の中で、ティアナか建物の外から。
効率よくターゲットを破壊していく。
非破壊対象をうまく避けつつ、確実に破壊対象を攻撃。
しばらく爆発音が響いていたが、やがてそれも止み、二人は曲がり角で合流した。

「いいタイム！」

「当然！」

――面白い子達ね
「だが立ち回りに隙が見える、改善すべき点が山積みだな」
――だからこそ育てがいがあるんでしょ？
「・・・・・・・・」

女性はだんまりを決め込んだが、もう一つの声はくすくすと笑い。

――我は汝、汝は我よ？そのくらいお見通し
「・・・・・・・そうか」

女性はため息をついて、再びモニターに目をやった。

「だが、難関はまだ続くぞ」
――そうねぇ・・・・・

女性が手を振ると、もう一つウィンドウが開いた。

「特にこれが出てくると、受験者の半分以上は脱落することになる」
――試験の最終関門、大型オートスフィアね
「そうだ、今の二人のスキルだと、普通なら防御も回避も難しい、中距離自動攻撃型の大型スフィア」
――どう切り抜けるか、知恵と勇気の見せ所よ

廃棄都市を駆ける、スバルとティアナ。
前方には、敵の大群がいる。
だが二人の顔に見えるのは、むしろ余裕で、

「いける？」
「もちろん！」

怯むことなく、挑みかかる。

第一話独白と試験（後書き）

まさかのスバルが転生者。
なので原作より少し大人しめです。
まぁ、根っこはほとんど変わってないけどな！！
次回、順調にターゲットをクリアしていく二人の前に、大型スフィアが立ちふさがる！
そして名前が出てきていない、教導官は誰？
また次回っ！
それでは。

第二話試験２（前書き）

またまた連続投稿。
７／１９：タイトルちょびっと加筆。
８／７：誤字修正。

第二話試験２

スフィアから浴びせられる、集中攻撃。
スバル、ティアナの両名は物陰に隠れている。
ティアナはアンカーガンを、スバルは左手に装備していた小型の弓を構えて、確実にスフィアを撃ち落していた。

「ティア、大丈夫？」
「問題ないわ？スバルこそいける？」
「当たり前！」

二人して笑いあって、同時に撃った。

「よし、全部クリア」
「この後は？」

背中を預けあい、各々のデバイスにカートリッジを込めていく。

「このまま上、上がったら最初に集中砲火が来るわ、オプティックハイド使って、クロスシフトで瞬殺！やるわよ？」
「りょーかい！」

両腕にカートリッジを込め終えたスバルは、親指を立てて笑った。

スフィアが漂う上の階。
ズドンっと音を立てて、ティアナのアンカーガンから放たれたワイヤーが天上に突き刺さる。
それに反応したスフィア達は、狙いを定めると同時にチャージを開始。
ワイヤーが巻かれていくと同時に、光の密度が大きくなる。

――――ガチッ

ワイヤーが巻き取られて、無機質な音が立ったとき、魔力弾が容赦なく浴びせられた。
が、

「あっ・・・・・」

攻撃をくらっているのは、ティアナではなく、そのアンカーガン。
では二人はどこに?と、はやてとフェイトが探している頃、廃屋にいた女性は、今まさに刻まれている軌跡を見ていた。

――――5

見えない影に、スフィアが次々と破壊される。

――――4

死角から何かを撃ちこまれて狂ったように動き回り、やがて機能を停止させる。

――3

すると景色の一部がぼやけはじめ、人の形を取る。

――2

人影――スバルはナックルにカートリッジを装填し、大きく右手を引いた。
同じくして、彼女を感知したスフィアが攻撃を開始。
スバルはそれらを避けながら、前を見据える。

――1

「っふ！」

跳躍。
スバルは宙に飛び上がり、十分にスフィアを『引き付ける』。

――0

「クロスファイヤー！」
「リボルバー！」

姿を現したティアナと、スバル。

――シュート！ッ！

二方向から放たれた魔力弾が、ターゲットを一掃した。

「なるほど、これは確かに伸び代がありそうだね」
「やろ？」

ヘリの中、フェイトは感心の表情ではやてに微笑んだ。
はやても微笑み返してから、モニターに目を戻す。

――新人にしてはやるじゃない？ますます鍛えるのが楽しみになってきた！
「これで残るは最終関門だな」

廃屋に佇む女性は、目を細めて、モニターを凝視した。

「よっし！さすがだよティア！一発で決まったね！」
「ま、あんだけ時間があればね」

スバルは残ったターゲットを破壊し、ティアナは囮に使ったアンカーガンを回収している。

「普段はマルチショットの命中率あんまり高くないのに、やっぱティアはすごいなぁ」
「うっさい、さっさと片付けて、次に・・・・・・・っ！！」

突然ティアナの言葉が中断。
スバルは何があったと思わず身構える。

「スバル、防御！！」
「・・・・・っ！！」

ティアナに促され飛び退くと、さきほどまでスバルがいた場所に、黒い焼き跡が刻まれた。
どうやら先ほどの攻撃で、捕らえ損ねたスフィアがあったようである。
ティアナがスフィアを目で追いながら、狙いを定めた瞬間。
足元から、嫌な音がした。

「・・・・・っづあ！」

体制が崩れるものの、何とか立て直して物陰に隠れる。

「ティア！っこの！くらえ！」

スバルが魔力弾を飛ばすのと、ティアナが弾丸を飛ばすのはほぼ同時だった。

一方の魔力弾はスフィアに命中、もう一方は――

ヘリの中。

「なんや？」

「サーチャーに流れ弾が当たったみたいだけど・・・・？」

廃屋。

「・・・・・・・だめだな」

――完全に壊れたわね

「・・・・・・・・・・・はぁ」

――このさいしょーがないわよ、一度様子見に行きましょ？

「ティア！」

「騒がないで！何でもないから・・・・・・！」

うずくまるティアナに駆け寄るスバル。

若干のうろたえが見えた彼女にティアナが一喝する。

「嘘つけぇ！明らかにやばい音が鳴ったよ！？捻挫したでしょ？」

「だから何でもないって・・・・・・っ」

スバルの言うとおり、足を痛めたらしい。

立ち上がろうとしたティアナは、すぐにふらつき座り込んでしまった。

「・・・・・・ごめん、完全に油断してた」

「あたしの不注意よ、あんたに謝られると、かえってむかつくわ」

自分の足をじっと見ていたティアナは、諦めたようにため息をついてから、

「・・・・・・走るのは無理そうね、一最終関門は抜けられない」

「・・・・・・ティア」

スバルは暗い表情で、ティアナを見つめていた。

「あたしが離れた位置からサポートするわ、そしたら、あんた一人ならゴールできる・・・・・」

「ティア・・・・・！」

「うっさい！」

ティアナが、声を張り上げた。

「次の受験の時は、あたし一人で受けるっつってんのよ！」

「次って・・・半年後だよ！？」

「迷惑な足手まといがいなくなれば、あたしはその方が気楽なのよ！わかったらさっさと・・・・・・っ」

また立ち上がろうとするティアナ、しかしまだ痛むのか、また座り

込んでしまう。
スバルは、まだ暗い表情で彼女の背中を見つめていた。

「ほら！速く！」
「・・・・・ティア」

それに気付き、ティアナは振り返ると苛立った声で促すが、スバルは口を開いた。

「あたし、前に言ったよね？弱くて、情けなくて、誰かに助けて貰いっ放しな自分が嫌だったから、管理局の陸士部隊に入ったって」
「・・・・・・・」

何かスバルの意図を掴んだのか、ティアナは黙って聞いている。

「魔導師を目指して、魔法とシューティングアーツを習って、人助けの仕事についた」
「知ってるわよ・・・・聞きたくもないのに、何度も聞かされたんだから」

ティアナは、そう言っている割にはあまり嫌な表情をしていない。

「・・・・・・ティアとずっとコンビだったから、ティアの夢とか、魔導師ランクアップとか昇進に、どれだけ一生懸命かも、よく知ってる・・・・・・！」
「・・・・・だから、何？」

そう振り返ったティアナから視線を逸らすこと無く、スバルは言葉を紡いだ。

「あたしの目の前で、それを躓かせるのだけは、絶対にいや」
「じゃあどうするのよ!?走れないバックスを抱えて、残りちょっとの時間で、どうやってゴールすんのよ!?」

するとスバルの口元が、ほんの少しいたずらっぽく上がった。

「・・・・・・裏技、反則取られるかもしれないし、出来るかどうかも、曖昧だけど・・・・うまく行けば、二人でゴールできる!」
「・・・・・本当?」

問いかけるティアナ。
スバルは途端に自信なさ気に明後日の方向を見ながら、

「いや、結構難しいし、ティアにもちょっと無理させるかも知れないけど・・・・よく考えると、無茶っぽいかも・・・・・・」
「・・・・・・・・・・〜〜〜〜っ」

うじうじと考え事を始めてしまったスバルに、ティアナは堪忍袋の尾が切れた。

「っだーもう!鬱陶しい!何でこういう時にうじうじすんのよ!?」
「ふにゃっ!?」

続けてスバルの胸倉を引っつかみ、威圧するように顔をぐいっと近づける。

「はっきりしなさい!やるのか、やらないのか!?」
「・・・・・・・・・」

ぽかんとするスバル、だがもう一度いたずらっぽく笑って、

「二人でならやれる、手伝って、ティア」

「・・・・・・・残り時間、３：４０」

ティアナは胸倉から手を離し、時間を教える。

そしてスバルを見つめた。

「プランは？」

「・・・・・・・うん！」

――おぉっ、出てきたわよ？

モニターが、道路を走る人影を認識する。

だが女性は人影の数と、周囲の状況を見てから、

「・・・・・・だが一人だ」

某所。

最終関門である大型スフィアが人影――ティアナを補足し、ロックオン。

間髪いれずに、攻撃を放った。

魔力弾は真っ直ぐにティアナに向かうが、彼女は反応が遅れる。
案の定、攻撃が着弾した。

「あぁ！直撃！！」

ヘリの中、思わず身を乗り出すはやて。

「いや、違う」

しかしフェイトは冷静に、モニターを見つめていた。
画面の向こう、ティアナは以前走っている。
スフィアは次々と攻撃を放つが、ティアナはうまく避けながら進んでいく。

「高速回避？いや、ちゃうな・・・・・」
「あの子、ティアナは――」

思考をめぐらせるはやてに、フェイトは解説をいれた。

――囮ね
「ああ、そして・・・・・・・」

攻撃が、再びティアナに直撃。
だが次の瞬間、４～５人ほどのティアナが出現した。

「・・・・・フェイクシルエット、これ、滅茶苦茶魔力食うのよ？・・・・・あんまり、長く持たないんだから」

物陰、本体のティアナが魔方陣を展開し、集中していた。

「（一撃で決めなさいよ？でないと、二人とも落第なんだから！）」
「・・・・・・分かってる」

ビルの屋上。
ベルカ式の魔方陣を展開し、スバルは目の前を見据えていた。

――――あたしは、空も飛べないし、ティアみたいに器用じゃない、
遠くまで届く攻撃ならあるけど、限界はある

出来るのは、

――――全力で走ることと、クロスレンジでの一発だけ！

「だから！」

魔方陣の光が強くなり、ナックルのリボルバーの回転も激しくなる。

「・・・・・・決めたんだ、『あの人』みたいに、強くなるって」

閉じていた目を開けて、顔を上げて、

「誰かを、助けてあげられるような、強い自分になるんだって！」

拳を振り上げて、地面を殴りつける。

――――ウィングロード！

瞬間。
『道』が伸びて、スフィアの背後の壁に突き刺さる。
スフィアが反応して、攻撃準備に入るが、そこにティアナの幻術が

出現。
次々現れるそれに注意が向けられる。
スバルはナックルのカートリッジをロード。
ローラーにありったけの魔力を込めて、

――――突っ走る！！

「うおおおおおおおおおおっ！！」

雄叫びを上げて、壁を破壊。
勢いそのままに、スフィアを殴りつける。
障壁に阻まれるが、さらにカートリッジを消費して火力を倍に。
さすがに耐え切れなかったらしく、障壁は粉々に砕け散った。
一度スフィアに反撃されるものの、スバルはそれを避けきって、再び突っ込む。

「一撃、必倒！！」

魔方陣の上に立ち、さらにリング状の魔方陣を展開して、魔力を集束。

「ディバイン・・・・・・！！」

大きく振りかぶって、

「バスターッ！！」

容赦無しに、撃ちこむ！！

ゴール地点前。

「お！来たですね！」

リインが見つめる方向、土煙を上げてこちらにくる人影がある。

「あと何秒！？」

「１６秒！まだ間に合う！！」

スバルに答えると同時に、ティアナは残りのターゲットを全て撃つ。

「はい！ターゲット、オールクリアです！」

目の前で最後のターゲットが壊れたのを確認し、リインはオールクリアを宣言した。

――――力んでいるのか、急いでいるのか、いささかスピードがありすぎるような？

「ちょっとスバル！止まる時のこと考えてるでしょうね！？」
「うぐっ・・・・・・大丈夫だ、問題しかない！」
「何よそれ！？」

不安すぎるスバルの返答に、ティアナは声を荒げた。

「あ、何かちょいやばです」

リインも、苦い表情を浮かべている。
そうこうしている間に、二人はゴールラインを通過。
しかしスピードを殺しきれないらしく、勢いそのままに、壁に激突しかけた。

「・・・・・・アクティブガードとホールディングネットだな」
――そうね

女性が手を上げると、桜色の爆発が発生した。

「ちょぉ待ちい！あの光！！」

ヘリの中。
二人を助ける為の魔法を発動しようとしていたはやてが、その光を目の当たりにして、驚愕する。

「・・・・・・・・・うぇ？」

スバルが目を覚ますと、世界がさかさまになっていた。
一瞬混乱したが、直前の記憶を思い出し、飛び起きる。
周囲を探すと、サンゴのような柱にうまく引っかかっているティアナを発見した。

「二人とも！危険行為で減点です！！」

ほっとするのも束の間、叱咤の声が上から聞こえてきたが――

「頑張るのはいいですが、怪我をしたら元も子もないですよ！？」

呆けてしまった。
あのティアナですら、ぽかんとしている。

「そんなんじゃ、魔導師としてはダメダメです！」
（・・・・・・・・ちっさ）

階級的には上とはいえ、そう思わざるを得なかった。

「・・・・・その辺にしておけ」

凛とした、それでいて何か威圧しているような声。
スバルがそちらに目を向けると、真っ黒なバリアジャケットを纏った女性が、空にいる。
彼女はゆっくりとこちらに向かって降下し、リインの隣に降り立った。

「最後のは確かに誉められたものではないが、叱咤は後にまわしておけ」

今度は、その場の全員が驚いていた。

ティアナもリインも、ヘリにいるはやてとフェイトも、そしてスバルも。

「まずはお疲れ様、と言っておく・・・・・・・試験は終了だ」

全員が固まっている中、誰かがぽつりと呟く。

「・・・・・・・・なのは、さん？」

第二話試験２（後書き）

さーて、という訳でなのはさんの登場ですた。
誤字脱字、突っ込みがあれば、ご感想へどうぞｗｗｗｗ

第三話『機動六課』（前書き）

バリバリ上げるぞっ！
７／２１：ちょびっと加筆。

第三話『機動六課』

あたしがあこがれた『あの人』は、すっかり変わっていた。
普段はサイドアップで、バリアジャケットの時はツインテールにしているはずの髪は下ろしていて。
バリアジャケットのカラーも、あの時みたいな真っ白じゃなくて、黒。
アンダーはかの有名なシグナム二尉と同じ構造の物に、スパッツと黒いブーツを履いていて、胸のリボンも無くなっていた。
杖の形になっているはずの愛機は、実態の刃が付いた槍になっていたけど、カラーリングは変わっていない。
表情はとても厳しくて、何か威圧しているような、威嚇されているような、そんな雰囲気だった。

「ランスターニ士」
「え、あ、はい！」
「負傷していただろう？見せてみろ」
「は、はい・・・・・」

口調もすっかり変わっている。
・・・・・・・四年の間、『あの人』に――なのはさんに、いったい何があったんだろうか？

「あ、あの・・・・・・・」
「何だ？ナカジマニ士」

射抜くような視線を向けられて、一瞬怯んでしまう。
だけど、思い切って、話しかけてみた。

「お、覚えていませんか？四年前、空港で助けて・・・・・」
「知らん」

・・・・・・・え？

「人助けなど日常茶飯事でな、一々覚えていられない」
「そ・・・・・・そう、ですか・・・・・・」

・・・・・・・・覚えていないのなら仕方ないんだけど、でも・・・・・・。

「これで大丈夫だが、しばらくは安静にしていろ」
「はい・・・・・・」

何と言うか、素っ気無さすぎる気が・・・・・・。

「ランスター、ナカジマ両名は、休憩後、ミーティングルームに集合しろ」
「は、はい！」
「了解、しました・・・・・・」

なのはさんは小さく頷いてから、踵を返して戻ろうとする。
けど、その先には、あの八神はやてニ等陸佐と、フェイト・T・ハラオウン執務官がいた。
二人も、かなり驚いている。
どうやらなのはさんの変化は、親友の二人もしらないところで起こったらしい。

「・・・・・・・・話すことは無い、彼女等を引き抜くかは、自分達で判断しろ」

なのはさんはどこか威圧感のある声で二人にそう言うと、その場を去ってしまった。

――事情が事情とはいえ、ちょっと素っ気無さ過ぎない？

「・・・・・あの子らはまだ若い、巻き込めない」

――そうね

『にしても！』と、声がなのはに嬉々とした様子で話しかける。

――さっきのバスター見た！？あれ、あの時使った技よね！？

「・・・・・そうだな」

――嬉しいわぁ、覚えててくれたんだ！もうすっかり見違えちゃって！

「・・・・・そうだな」

声に対しても素っ気無く返しながら、なのはは机に付くと、試験映像を照らし合わせつつ、採点を始める。

side　スバル

「・・・・・・・・あのさ」

あれから。

休憩室で休んでいると、ティアが話しかけてきた。

「なのはさん、どうしたの？あんたから聞いてた性格とまるで逆っぽいんだけど・・・・・・」

そう言われて、もう一度さっきのなのはさんを思い浮かべる。

全身真っ黒で、視線もきつくて、誰も近寄らせないような雰囲気のなのはさん。

ティアの怪我を見てくれたから、一応優しさはあると思うんだけど・・・・・。

「・・・・ごめん、分かんない」

「・・・・・・・そう」

そりゃ四年も経てば、ちょっとくらい性格は変わるかも知れないけど、でも・・・・・・。

どう考えても、変わりすぎだと思う。

一体、何があったんだろ・・・・・・？

「スバル、そろそろ・・・・・・」

「ん？」

ティアに促されて時計を見る。

集合までまだ時間はあるけど、ティアはさっきまで怪我してたんだ。

その辺を考えて、早めにミーティングルームに行くことにした。

ティアと二人で、八神ニ佐とハラオウン執務官から新部隊の誘いを受けていた。
話を聞く限り、ロストロギアの探索と確保が主な任務になるっぽいけど・・・・・。

「すまない、取り込み中だったか？」

さっきも聞いた、威圧するような声。
振り向くと、なのはさんが立っている。

「いえ、大丈夫ですよ」

八神二佐がそう返事をすると、なのはさんはこちらに歩いてきた。
今身に着けている制服は、教導隊のものの青い部分を黒に変えたもの。
っていうか、なのはさん教導隊所属じゃなかったの？

「まずは試験の結果だ、二人とも技術は問題無し、だが危険行為や報告不良は、見過ごせるレベルを超えているな」

あちゃー・・・・・・やっぱりまずかったか。

「自分とパートナーの安全や、規則を護れない魔導師が、人を護るなどおこがましい」

・・・・・・・・そりゃ、そう、だよなぁ。

「残念ながら、二人とも不合格だ」

淡々と告げられた事実に、あたしもティアも、俯くしか出来ない。
やっぱり、やめておくべきだったかなぁ、あれ・・・・・。
けど、なのはさんは『しかし・・・・』と話を続ける。

「二人の能力や技術的に考えると、次までの半年間Cランクのままというのはいささか危険だ・・・・・というのが、わたしと試験官の共通見解」
「で、です！」

リイン曹長はまだ今のなのはさんに慣れていないみたい。
目を向けられて怯んでいたし・・・・・。
一方のなのはさんは、あたし達に二つの封筒と一つの紙を渡してくれた。

「特別講習の参加申込と、推薦状だ、これを持って、本局武装隊の三日間の特別講習を受ければ、四日目には再試験をうけられる」
「え、えっと・・・・・・」

あたしもティアも、ちょっと困惑気味だ。
そんなあたし達を見て、なのはさんは小さく息を吐いてから、

「一度厳しい環境に揉まれて、安全を一から学んで来い、そうすればBランクなど容易い」

・・・・・・やっぱり、根っこは変わっていないのかもしれない。目の前のなのはさんは未だに仏頂面だけど、なのはさんなりにあたし達のことを考えてくれているのが、なんとなく分かった。

「ありがとうございます！！」

ティアと一緒に、頭を下げる。

すると八神ニ佐が、

「合格までは、試験に集中したいやろ？わたしへの返事は、試験が済んでからってことにしとこうか？」

「す、すみません！恐れ入ります！！」

思わず二人で立ち上がって、敬礼した。

閑話休題。

「・・・・・でさ、新部隊の話、ティアはどうする？」

中庭で一休みしていたあたしは、隣にいたティアにさっきのことを聞いてみる。

「あんたは行くんでしょ？もしかしたらなのはさんがいるかもだし、すごいラッキーでしょ？」
「んー、まぁ・・・・・・」
「でも、遺失物管理部の機動課って言ったら、普通はエキスパートとか、特殊能力もち揃いの生え抜き部隊でしょ？そんなとこにいてさ、今のあたしが、ちゃんと働けるかどうか・・・・・・」
ティアにしては珍しく、ちょっと弱気な発言だ。
・・・・・・よし、ここは一つ。
「・・・・・・何よ？」
「んふふ～・・・・・ここは一つ『そんなことないよ！ティアは出来るよ！』って、言って欲しいんだろ～？」
一瞬で、むっとした表情になるティア。
次の瞬間、攻撃が飛んでくるっ！！
「なーによ！それ！そんなことないわよ！バカいってんじゃないわよ！」
「いだいいだいだいだいだいだい！！痛いってティア！ギブギブギブ！！」
思いっきりつねられた後、ティアが手を離して、倒れこんでしまった。
うぅ・・・・・まさかお尻をつねられるとは・・・・・・。
まだ地味に痛い・・・・・。
「・・・・・ね、ティア」
「うん？」
「あたしは知ってるよ？ティア口では拗ねたこと言うけど、本音は

違うってこと」
「・・・・・・そう」

ふいっと、ティアは顔を逸らしちゃったけど、あたしはまだ続ける。

「フェイト執務官にも、内心ライバル心メラメラでしょ～？」
「ラ、ライバル心とか、そんな大それたものはないわよ、知ってるでしょ？あたしの夢は執務官だから、勉強できたらいいなーってだけで・・・・・」
「だったら、やろうよ！あたしはとにかくいろんなことを吸収して、もっともっと強くなりたい！ティアは新しい部隊で、色んな経験つんで、自分の夢を、最短距離で追いかける！」

それに！

「当面はまだまだ二人で一人前扱いなんだからさ！まとめて引き取ってくれるの嬉しいじゃん！」

・・・・・・あれ？また寒気が。

「そーいうことというなぁっ！何が悲しくて、どこにいってもあんたとコンビ扱いなのよ！？」

こ、今度はほっぺたと腰ぃ！？
やめやめやめっ！息苦しいって！！

ｆｒｅｅ　ｓｉｄｅ

「なのはちゃん」

なのはが、上からスバルとティアナのやり取りを見ていると、後ろから声がかかる。
振り返ると、真剣な顔のはやてとフェイトがいた。

「なのはちゃん、４年も何やっとったん?何で連絡くれんかったの？」

「・・・・・何を聞くかと思えば、そんなことか」

はやてが一歩前に出て、質問をぶつける。
が、なのはは詰まらなさそうに踵を返して、切り捨てる。

「っそんなことやあらへん!どれだけ心配しとったと思うて・・・・・！!」

『どうやら全員集まっているようね?』

はやてが叫んだ時、通信が開き、のほほんとした笑顔が写った。
するとなのはは即座に敬礼し、一瞬出遅れたはやて達も敬礼する。

『まずは、試験官お疲れ様、と言っておこうかしら？』
「恐縮です、提督」
のほほんとした笑顔――ミゼットは、なのはに労いの言葉をかける。
それから、はやてを見て、
『・・・・・色々聞きたいことはあるでしょうけど、まずは再会を喜びなさいな』
「は、はい・・・・・・・」
「・・・・・・・・・提督、ご用件は？まさか労いだけではないでしょう」
『ええ、そうよ』
ミゼットは一度ほっほっほっ、と笑ってから、
『高町なのは一等空尉、あなたには異動してもらうわ、行先は、そこの八神はやてニ等陸佐が指揮する、古代遺物管理部『機動六課』ですよ』
「・・・・・・・・は？」
やっぱり、とはやてはどこか複雑そうな表情をしたが、なのはは一瞬目を見開く。
「・・・・何も聞いていませんよ？」
『今言ったもの』
それから眉間に手をやった。
ミゼットは、笑いながら続ける。
『それと、これは決定事項、だから拒否できないわよ？』

「・・・・・・なにしてんだ、ばあさん」

なのはは頭を抱えてしまった。

『だって、わたしの手元にいる教導官といったら、あなただけだもの』

再びほっほっほっ、と笑うミゼット。

なのはは盛大にため息をつき。

「・・・・・・関わりたくないって、あれほど言っていただろう・・・・・・・!?」

『だからこそ、よ』

しばらくにらみ合いを続ける、なのはとミゼット。

だがなのはがもう一度ため息をついたことで、それは打ち切られる。

「・・・・・・了解しました、ミゼット提督」

『それでいいのよ』

最後にまたほっほっほっ、と笑って、通信画面が消えた。

その夜、廃棄都市。

「出現の頻度、数、増えてきてんな？」
「うん、それに、動きも段々賢くなってるね」

管理局の制服を纏った男女が三人。
そのどれもが、なのはが纏っていた制服を身に着けている。

「でも、この程度ならまだ俺達でも抑えられるな」
「ああ」
「しょーじき、ド新人に任せるにはめんどい相手だけどなぁ・・・・」
「しょうがないさ、いずれ俺達だけじゃ、手が足らなくなる」

三人そろって、ため息をついた。
すると、男の一人が、そういえば、と切り出す。

「なのは、新設される部隊に配属になったらしいぞ？」
「それって、八神ニ佐の・・・・」
「そう、機動六課！」
「・・・・・何も、起こらなければいいんだけど・・・・・」

第三話『機動六課』（後書き）

なのはさん激変な三話でしたｗｗｗ
それでは、お返事の部屋～。

緑異様
そりゃぁもう、１８０度がらっと変えてみましたｗｗｗ
イザナミはみじんも変化なしですよ～。
強がっているかどうかは、今後をお楽しみにっ！

金色の戦姫様
別人２８号ｗｗｗｗ
口調は確かにシグナムさんっぽいですが、バリアジャケットはシュテルさんじゃないですよ～。
能力関係は、ちょっと変更が・・・・・。

次回、集結するエース達、そこにはなのはの姿もあった・・・・。
それでは。

第四話ガジェット（前書き）

キーワードも二つ追加しました。

第四話ガジェット

新暦００７５年４月。
遺失物対策本部、機動六課隊舎。

「うふふー、このお部屋もやっと隊長室らしくなりましたねぇ～」

部隊長室にて、専用の机とイスに座ったリインが、嬉しそうに回転する。

「そやね、リインのデスクも、ちょうどええのが見つかってよかったなぁ」
「はい！リインにぴったりサイズですー！」

それにはやては微笑んで返し、リインもますますはしゃいだ。
と、そこへ来客を告げるブザー。
はやてが入ってくるよう返事をすると、ガスが抜ける音とともに扉が開き、二人の人物が入ってくる。

「おっ！お着替え終了やな！」
「お二人とも素敵です！」

はやて達の言葉に、ニコニコするフェイトに対し、なのはは仏頂面のまま無反応。
三人は苦笑いをしたが、すぐに表情を引き締めて、

「本日ただいまより、高町なのは一等空尉」
「フェイト・Ｔ・ハラオウン執務官」
「両名とも、機動六課へ出向となります」

「どうぞ、よろしくお願いします」

背筋を伸ばし、敬礼をした後、フェイトとはやては笑いあったが。
なのはは一礼すると足早にその場を去ってしまった。
その時、ちょうど部隊長室に入ってきた青年とすれ違うが、目もくれずに去っていった。
しかし青年はかなり驚いているようで、思わずなのはを目で追っていた。
それでも挨拶だけはきちんと行うようだ。

「グリフィス・ロウラン准陸尉であります！」
「すごい、グリフィスすごい成長したね、前はこんなに小さかったのに」
「その節は、どうも」

折り目正しく、グリフィスは一礼し、少し表情を曇らせてから、

「あの、先ほど出て行かれた方は・・・・・・」
「・・・・・高町なのは一等空尉や」
「やはり・・・・・何と言うか、変わられましたね」

グリフィスの一言に、はやてとフェイトは、何とも言えないような表情で、俯く。

ロビー。
はやてが挨拶しているが、いつくかの視線はなのはに向かっていた。

――あれ、高町教導官じゃないか

――雰囲気も随分変わって・・・・一体何があったんだ?

はやての挨拶を邪魔せず、かつ、ひそひそと言う声が響かないように努力しながら、隊員達は噂し合っている。
そんな隊員たちの様子を、スバルは複雑そうな表情で見つめていた。

「テスタロッサ」

はやての挨拶の後。
フェイトと廊下を歩いていた女性――シグナムが立ち止まる。

「何ですか？シグナム？」
「・・・・・なのはのことだが」

そう切り出した彼女の表情はどこか真剣で。
フェイトも思わず身構える。

「あの制服、おそらく『懐刀』のものだ」
「っえぇ！？」

シグナムの口から出た単語に、フェイトは思わず叫んでしまった。
咄嗟にフェイトの口を塞いだシグナムは、あたりに人がいないことを確認して、ほっとため息をつく。

――――『懐刀』
近年になって設立された、三提督直属の部隊。
人員はたった八人だが、一人ひとりが強力な力を備えているという。
メンバーが公表されていない上に、人数があまりにも少ないので、幻のエリートチームと囁かれている。

「二年ほど前、その構成員を見たという人物から話を聞いてな、なのはの制服が情報と一致していた」
「じゃあ、四年も音信不通だったのは・・・・・」
「・・・・・・・・・おそらく、そこで何かあったんだろう」

早速訓練を始めるために、フォアード四人はなのはについていっている。
四人ともなのはの厳しい雰囲気に、少し圧倒されているようだ。
すると、そのなのは突然こちらを振り向いた。

「確認していなかったが、四人とも自己紹介は？」
「名前と、経験やスキルの確認はしました」

なのはの雰囲気に呑まれ、返事に詰まってしまったスバルをフォローするようにティアナがそう答える。

「あと、部隊分けと、コールサインもです！」

ティアナに続けるように、赤毛の少年――エリオ・モンディアルが返事をし、隣にいた少女――キャロ・ル・ルシエも頷く。
なのはは小さく、「そうか・・・」と答えると再び移動を開始した。

閑話休題。

訓練施設前。
白地に黒という何ともシンプルな制服を着て、なのはは海を見つめていた。

――いいところね、海鳴にも雰囲気が似てるし
「・・・・・・ああ」
海を見つめながら、なのはは呟くように返事をする。
――顔見知りもたくさんいるし・・・・護らないと
「・・・・・・・・・・・当たり前だ・・・・・・！」
表情を険しくして、鋭い視線をより鋭くして、虚空を睨みつける。
「なのはさーん！」
そこへ後ろから声がかかった。
振り向くと、スーツケースを持ったメガネの女性が、こちらに駆け寄ってきている。
「・・・・・・シャーリー」
「はい！お久しぶりです！」
シャーリーと呼ばれた女性は、ニコニコしながら一礼した。
ふと、なのはが視線を横にずらすと、こちらに向かって走ってくるフォアードが見えた。
なのはは小さく頷いてから、四人を訓練スペースへ案内する。
それから、四人にデバイスを手渡してから、
「今返したデバイスにはデータ記録用のチップが入っている、丁重に扱え」
「それと」と、なのははシャーリーに視線を向けて、

「メカニックのシャーリーから、一言」
「えー、メカニックデザイナー兼、機動六課通信主任の、シャリオ・フィニーノ一等陸士です、みんなはシャーリーって呼ぶので、そう呼んでね！」

シャーリーは一旦微笑んでから、

「みんなのデバイスを改良したり、調整したりもするので、時々、訓練を見せてもらったりします、デバイスについての相談とかあったら、遠慮なく言ってね！」
「それでは、早速訓練に入る」

もう一度人懐っこく微笑んで締めたのを確認してから、なのはは彼女にシステムを動かすよう指示。
シャーリーは元気良く返事をすると、ウィンドウを開いてパネルを操作する。

「機動六課自慢の訓練スペース！教導隊完全慣習の、陸戦用空間シュミレーター！」

嬉しそうに、ウィンドウのメッセージを押すと、海上に鎮座する何もない鉄の板から、ビルが出現した。

「わぁー！」
「すごい・・・・」

何もないと思っていたところが、都市に変わったのを見て、フォアード達は感嘆の声を漏らす。

「呆けている暇はないぞ、来い」

そんなフォアード達になのはが声を掛け、先行してスペースに入っていく。
それを見て、彼らも慌ててついていった。

「お前は参加しないのか？」

同じ頃。
屋上では、シグナムとヴィータが話をしていた。
シグナムの問いかけに、ヴィータは『否』を答えてから、

「四人ともまだよちよち歩きのひよっ子だ、あたしが教導を手伝うのはもう少し先だな」
「そうか」
「それに、自分の訓練もしたいしさ」

何処か真剣な表情で、ヴィータはこちらに背を向けているなのはを見る。

「同じ分隊だからな・・・・あたしは空でなのはを護ってやらなきゃいけねぇ」
「頼むぞ・・・・・だが、なのはもなのはで、かなり腕を上げたらしい」
「・・・・・・・ああ」

ちょうどフォアード達のアップが終わったようで、なのはに次の指示を仰いでいるのが見える。

「・・・・・・・・・何があったんだ、なのは」

ｓｉｄｅ　スバル

『・・・・よし、全員聞こえるか？』

「はい！」

耳元で、なのはさんの声が聞こえる。

いよいよ訓練本番・・・・・頑張らないと！

『じゃあ、早速ターゲットを出していく、まずは八体から』

通信の向こうで、なのはさんとシャーリーさんの会話が聞こえた後、

カプセルのようなロボットがあわられた。

『わたし達の仕事は、捜索指定ロストロギアの保守・管理、そのために戦うことになる相手だ』

胴体部分の中央にはレンズが付いている。

多分、攻撃方法はレーザー、かな？

『自立行動型の魔導機械、これは近づくと攻撃してくるタイプだ』

ホログラムだって分かってるのに、やっぱり気が引き締まってくる。

『攻撃は結構鋭いぞ・・・・・それでは、第一回模擬戦訓練、逃走する目標を破壊、あるいは捕獲、１５分でやれ』
「はい！」

『それでは・・・・・』と、なのはさんが一旦区切って、

『ミッションスタート！！』

時空管理局本局。
一角の、とあるオフィス。

「レリック？」
「そそ、古代文明の時代、何らかの目的で作られた超高エネルギー結晶体」
「見た目こそただの宝石だけど、暴発したときの破壊力はかなりのものだよ」

数人の男女が、開いているウィンドウを中心に会話している。

「過去に四度発見されて、その内三度は周辺を巻き込む大災害を起こしてる・・・・・ってさ」
「んで、その内二件では、製造プラントらしき施設が発見されてる

と・・・・」
「ってことは、主犯は技術者か、それに明るい人間ってか？」
問いかけられた女性は、コーヒーを一口飲んでから、
「だろうね、しかもそれらは災害が起きた後、まるで痕跡を消すようにして破棄されてるから」
「広域次元犯罪の可能性が高いっと・・・・・」
「さらに、そのレリックを収集しようと動き回ってるのが」
コーヒーを飲んだ女性とはまた別の女性が、新しいウィンドウを開く。
「ガジェット・ドローンだっけか？」
「ん、特定のロストロギアの反応を捜索し、それを回収しようとする、自立行動型の自動機械」
「めんどうなのが出てきたなぁー」
そこへ、コーヒーを飲んだ女性と瓜二つの男性がせんべいなどのお茶菓子が入ったトレーを持ってくる。
「にしても、なのはちゃんとこのフォアードって、新人ばっかでしょ？大丈夫なの？」
「というか、バックヤード、隊長、副隊長共にS超えてんのに、なんでフォアードだけ新人？」
「だからこそ、フォアードが新人なんだよ、エースぞろいの隊長達に、エリート揃いのバックヤード、そこにやり手のフォアードを入れてしまえば、明らかに過剰戦力だ」
「それに、新人達に関しては教導官資格持ってるなのはがいるし、その気になれば短期間で使い物になる、だから大丈夫だろ」

「ふーん・・・・・」
女性二人は感心した様子でせんべいをほおばった。
「てか、その資料どこで手に入れたんだ？」
「無限書庫にハッキングして、コピーしてきた」
「え」
「貴重な資料とか収めてるのに、こんなんでいいのかな？」

ｓｉｄｅ　スバル

「うおおおおおおおっ！！」
手始めに、ターゲットであるロボット――ガジェットに向けて、ナックルから衝撃波を撃ってみる。
けどあいつらはそれを易々と避けて、逃走を続行した。
ってか、
「何これ、速っ！」
このスピードだと、今のあたしじゃ矢を当てるのはきついかなぁ・・・・。
と、ガジェットの進行方向に、エリオがいた。

「でりゃあああああっ！！

エリオはレーザーを避けてから飛び上がると、ストラーダを振って斬撃を飛ばす。

けど、ガジェットはそれすら避けて、逃げていった。

ふわふわ避けるし、結構厄介な相手だなぁ・・・・・もう！

「（前衛二人、分散しすぎ！ちょっとは後ろのこと考えて！）」

「（あ、はい！）」

「（ごめん！）」

しまった、攻撃に集中しすぎて、ティア達のことが頭になかったよ・・・・。

エリオと一緒に追跡してると、ティアの魔力弾がガジェットに撃たれた。

パッと見た感じ、強化されてるみたいだ。

これならさすがのあいつらも・・・・・・。

けど魔力弾は、ガジェットに当たる寸前に消える。

・・・・・・・って、えぇ！？

「バリア！？」

「違う、フィールド系！」

魔力が消された！？

『そう、ガジェット・ドローンには少し厄介な性質があってな、攻撃魔力をかき消す《アンチマギリンクフィールド》、ＡＭＦ・・・・・』

なのはさんが説明を入れてくれてるけど、そうしているうちにもガジェットは逃げていく。
っ逃がしてたまるか！
ウィングロードを展開して、追いかける！

「（バカ！危ない！）」
『それに、ＡＭＦを全開にされると・・・・・』

進行方向に伸びているウィングロードが、消えていく。
っしまった、ウィングロードが！！
宙に投げ出されてビルに叩きつけられたけど、何とか着地。

『飛翔や足場作り、移動系魔法の発動も困難になる』

あいたぁ・・・・・・説明最後まで聞くんだった。

『ナカジマ、大丈夫か？』
「はい、なんとか」
『まぁ、訓練中では、みんなのデバイスにちょっと工夫をして、擬似的に再現してるだけなんだけどね、でも、現物からデータを取ってるし、かなり本物に近いよ』

そうなんだ・・・・・。

『対抗する方法はいくつかある、迅速に考えて、迅速に行動しろ』

対抗する方法・・・・そう言えば、ＡＭＦって発生した効果までは消せないんだっけ？
例えば、天候操作魔法で作り上げた雷とか、魔力で撃ち出した小石とか・・・・・。

だったら・・・・・！

「（スバル！いくつか試したい方法があるの）」

「（あたしもある、エリオ！あいつら逃がさないように先行して、足止めできる？）」

「（あ、えっと・・・・・）」

「（試したいことがあるの、ティアも何か考えてるから、時間稼ぎ！）」

「（・・・・やってみます！）」

「へぇ、みんな良く走りますね」

「・・・・・危なっかしくて叶わん」

「あ、はは・・・・・」

シャーリーも、未だに今のなのはになれないらしい。

ドスの聞いた呟きに、苦笑いしてしまう。

「・・・・・デバイスのデータは？」

「あ、はい！いいのが取れてます、四機ともいい子に仕上げますよ～」

「そうか」

素っ気無い返事に、シャーリーがまた苦笑いしたとき、通信が入った。

なのはがウィンドウを開くと、シグナムが写っている。

「・・・・・烈火の、どうした？」
『折り入って頼みがある』
「・・・・・何だ」
『新人達の訓練が終わってからでいい、わたしと模擬戦をしてくれ』
黙ったまま、何故？と聞いてくるなのはに、シグナムは、
『４年も音信不通だったんだ、実力がどのくらいか見てみたい』
それと、
『仮にも味方なんだ、手札の一つくらい明かしてくれないと、どう動けばいいのか分からない』
しばらく考え込むなのは、やがて小さく頷き、
「・・・・・わかった、だがあまり期待はするな」
『ありがとう』
ガジェットを、エリオと一緒に追い詰める。

エリオはストラーダに命じて、カートリッジをロード。
頭上で回転させて、その勢いで足場を斬り付ける。
破壊されたコンクリートの破片がガジェットに落ちて、土煙が上がった。
そこからガジェットが二体逃げていく。
でも、そう簡単に、

「逃がさないよ！！」

まずはカートリッジを消費して、いつも通りガジェットに殴りかかってみる。
案の定、ＡＭＦが発動して、威力が出ない。
魔力での強化を良く使うあたしとしちゃ、厄介なことこの上ないけど・・・・・・。

「ふっ！」

後ろにいたガジェットを足で捕らえて、地面に叩きつける。
そしてナックルを打ち付けて、ギアを回転させる！！

「うりゃあああああああっ！！」

いくらガジェットでも、こんな至近距離じゃ、ＡＭＦを発動する暇ないよね！
と、別の方向から爆発音。
魔力からして、多分キャロがつれてたフリード・・・・・だっけ？
それだと思う。
見てみると、熱の余波でガジェットの動きを止めたみたいだね。

「我が求めるは、戒めるもの、捕らえるもの、言の葉に答えよ、鋼

鉄の縛鎖・・・・・！」

キャロの詠唱が聞こえてくる。
これは・・・・・何かを呼んでる？

「錬鉄召喚！アルケミックチェーン！！」

魔方陣が展開されて、鎖が伸びてきた。
なるほど、無機物操作と組み合わせてる感じ？
ティアと同じく、器用な子だなぁ。

「（スバル！上から落とすから、そのまま追ってて！）」
「おう！」

そのティアから指示だね！
さって、いっくよー！！

「魔力弾？ＡＭＦがあるのに？」
――いいえ、通用する手段があるわよ
「・・・・・・ああ」

『二人』の言葉に、シャーリーは画面を除いて経過を見守る。
――――『二人』？

「あの、なのはさっ・・・・・・」

問いかけるシャーリーだが、こちらに背を向けたまま威圧するなのはに気圧され、諦めた。

ティアがいるところを通り過ぎるとき、一瞬魔力を薄い膜でコーティングしているところが見えた。
フィールド防御を突き抜ける、多重弾核射撃だね。
さすがティア！ＡＡのスキルを使うなんてさ！！

「ヴァリアブルッシュート！！」

オレンジの弾丸があたしを追い越して、ガジェットを一気に三つも葬った！！

「ティア！ナイス！！」
「（うるさい・・・このくらい、とーぜんよ・・・・・・！）」

通信では相変わらずこっちに檄を飛ばしてくるけど。
多分向こうでは、結構疲れてるんだ。
うっし、残りはあとわずか。
そろそろあたしの試したいことも・・・・・・

「やりますか！」

弓の方のカートリッジをロード。

ＡＭＦは魔力は消すけど、結局はそれだけ。
発生した効果までは打ち消せない！（例えば、天候操作魔法で生み出された雷とか、魔力で打ち出された小石とか）
矢を撃たずに、そのまま地面に叩きつける！！

「茂みの、刺っ！！」

地面で発生する爆発。
ガジェットはＡＭＦで防ぐけど・・・・・・。
口元が上がるのが、自分でも分かる。
ガジェットに当たったのは、あたしが放った攻撃じゃなくて。

――――その攻撃で生まれた、コンクリートの破片ッ！！

あれから何とかターゲットをオールクリアして、重い体を引きずりながら集合場所に移動していると、シグナム副隊長とすれ違った。しかもバリアジャケットを着ているので、何事かと思ってしまう。

「あの、シグナム副隊長、どうしてこちらに・・・・・？」

エリオが恐る恐る聞いてみる。
するとシグナム副隊長は、どこか嬉しそうに振り返って、

「なのはと模擬戦をすることになった、この四年の間、どれだけ強くなったのか気になってな！」
「は、はぁ・・・・・」

・・・・・なんでだろう、内面ではすっごく楽しみにしてるっぽい。
戦闘狂ってみんなこうなのかな？
でも、なのはさんの模擬戦、かぁ・・・・・ちょっと興味あるかも。
と、そこへシャーリーさんが来て、

「みんな、なのはさんから伝言だよ！」

伝言？なんだろ・・・・・。

「『ちょうどいい機会だ、わたしはともかく、シグナム二尉は指折りの実力者、技術をしっかり見学するように』だそうよ」

模擬戦を見学！？やった！

なのはさん、どんな戦い方するんだろうなぁ・・・・・！

第四話ガジェット（後書き）

というわけで、原作三話でした。
前にも言いましたが、この小説でのスバルは転生者なので、原作より大人しかったり、賢かったりします。

緑異様
長期休暇にも入ったので、バリバリ元気です！！
シグナムとの会話の際には、区別付けられるよう頑張りたいであります、サー！！

金色の戦姫様
根っこはみじんも変わっていませんよｗｗ
空也達が局に入ったかどうかは今後に期待ということで。
それと・・・甘いな原作なのはさん！――闇夜のドレスッ！
ふはははははっ！この世界においてわたしに不可能なｄぐふあっ！
ばっばかな！？魔法も物理も通さぬ壁を貫通しただと！？
おのれ、管理局の白いエースはバケモノか！？

仮面なのは「・・・・・・・」
って、うちのなのはさん何でここに！？いかん、ＳＬＢが！逃げｔ
仮面なのは「・・・・・・・」バキィッ！
は、弾き返したぁっ！？
仮面なのは「・・・・・シグナムとわたしが無骨はどうかは、この際おいておこう、それと、確かにＳＬＢは火力も半端ないし、防御も突き抜けるが、それだけだ、力点をうまく利用すれば、この程度、容易い」
・・・・・・原作より、こっちの方がまお
――幾千の呪言！
アーッ！！

次回は、シグナムＶＳなのは。
それでは。

第五話模擬戦、ＶＳシグナム（前書き）

今回ちょっと短いかもです。
※８／２０：ちょっと修正

第五話模擬戦、ＶＳシグナム

ｓｉｄｅ　キャロ

わたしたちが、ガジェットとの戦闘を終えると、シグナム副隊長が訓練スペースに入ってきました。
何でも、あのなのはさんと模擬戦をするらしいんです。
なのはさんのことはあまりよく分からないんですけど、でも、スバルさんとかが話しているのを聞いていると、すごく強い人って言うのは分かります。
でも、シグナム副隊長もすごく強いらしいので、どっちが勝つのかは分かりません。
邪魔にならないように、訓練スペースの外、シャーリーさんの隣に立って見学することになります。
・・・・・いったいどんな試合が繰り広げられるんでしょうか？
ちょっと楽しみです。

ｓｉｄｅ　シグナム

「すまない、待たせたな」

新しく森林に設定しなおされた訓練スペースで待っていると、なのはが来た。

真っ黒なバリアジャケットをまとったその姿は、依然と違って気品のある雰囲気を纏っている。

レイジングハートも随分変わったな。

杖ではなく槍の形になっており、刃は魔力ではなく、実体で出来ている。

「構わん、始めよう」

互いに構えあって、開始の合図を待つ。

甲高いブザーの音。

それがなり始めるか、始めないかの内に、わたし達は斬り合っていた。

ｆｒｅｅ　ｓｉｄｅ

金属音が不規則に響き、それでいて美しい舞踏が繰り広げられている。

現在、シグナムが攻めてなのはが防いでいる状況。

縦、横、斜め、突き、払い、持てる全ての攻撃手段を持ってして、

シグナムは攻撃を加え続ける。

「やっぱり、接近戦じゃシグナムに分があるみてぇだな」

「ヴィ、ヴィータ副隊長！？」

スバルは、突然隣に現れたヴィータに驚き飛び上がる。

ヴィータは少し不機嫌そうな目を向けてから、目の前の試合を見つめた。

確かに、見た限りではシグナムが優勢のように見える。

が、

（なのは・・・・・明らかに強くなっている、攻撃が通らない！）

「っはぁ！」

鋭い突き、なのはは体を横にそらして避ける。

重い縦一閃、半歩バックステップされることで避けられる。

斜め一閃、レイジングハートを上に跳ね上げることで阻止された。

と、ここでなのはの胴体ががら空きになる。

（しめた！）

と言わんばかりに、シグナムはすばやくレヴァンティンを引くと、再び突きを繰り出す。

が、次の瞬間、なのはは片手をレイジングハートから離すと、拳底でレヴァンティンを打ち落とした。

レヴァンティンの落ちる勢いに引っ張られて、シグナムの体が傾く。

なのはの目が、細くなった。

「・・・・・っ！」

流れるような動作でレイジングハートを持ち直したなのはは、シグナムよりも、鋭く細やかな突きを繰り出した。
崩れた体制を立て直しつつ、シグナムはそれを必死で回避。
持ち直したレヴァンティンでも防ぐものの、なのはの猛攻はとまらない。
突きのみの単純な攻撃のみ、しかし、その全てが、

（左肩、右肩、両手、鳩尾、胸、太腿、足首・・・・・全て負傷すれば厄介な部分ばかりを狙っている！）

「・・・・・づっ！」

ここで、シグナムに傷が付いた。
非殺傷設定のためミミズ腫れになっただけだが、それでも一撃は一撃。

（思考すら、隙になるか・・・・・・！）

シグナムは思考を打ち切り、なのはの攻撃をいなすことだけに集中し始めた。

「どーなってんだ、見覚えあると思ったら・・・・・・！」

その光景を見ていたヴィータが、ぽつっと呟く。

「なのはの攻撃、殺すことに特化してる動きだ・・・・・・！」

一方、試合は空中戦に展開していた。
桜と紫が残像を退いて、宙で何度もぶつかりあう。

「紫電一閃！」

炎を纏った剣が、なのはに振り下ろされるが、

「・・・・・・ブフ」

ぼそっと、何かを呟いた瞬間。
派手な水蒸気が上がったと思うと、爆発が起こった。
視界が塞がれるのを防ぐ為、シグナムはそこから離脱。
しかしその先には、突きの姿勢で待ち構えているなのはが・・・・・。

「・・・・・・ぐぅっ！！」

シグナムは何とか弾き飛ばすと、なのはの手からレイジングハートが落ちてしまう。
素手となってしまったなのはに、シグナムは容赦なく一撃を入れた。
・・・・・・はずだった。

「なっ！？」

振り下ろされた剣は、合掌の形で受け止められていた。
所詮、白刃取りと言うやつだ。
一瞬呆けてしまったシグナムに、隙が出来る。
なのははそれを見逃さず、再び拳底を繰り出して、顎に命中させた。
大きく体制を崩した所に、今度は膝蹴りを見舞った。
それでは終わらず、最後に体をひねって、シンプルな蹴りを放つ。

だがそこでシグナムは姿勢を元に戻すと、レヴァンティンを下から上に薙ぐ。
なのはは体を逸らし、顔を跳ね上げてかわすが、髪が数本。
はらはらと落ちていった。
再びがら空きになるなのはの胴体。
シグナムは雄叫びを上げながら、容赦ない横一閃を繰り出した。
咄嗟に防御の体制をとるなのはは、腕にそれを受けて、地に落ちる。

ｓｉｄｅ　ティアナ

・・・・・・どうなってんのよ！？
確かスバルから聞いたなのはさんの戦い方って、砲撃中心だったはずよね！？
それが何でシグナム副隊長と互角で、しかも素手でも対抗出来てるワケ！？
雰囲気といい、威圧感といい、戦い方の激変といい。
スバルと再会するまでの間、何があったっての・・・・・・！？

ｆｒｅｅ　ｓｉｄｅ

地面に被弾したなのはに追い討ちをかけるべく、一気に急降下するシグナム。

大分薄れているものの、未だに土煙が登っている箇所に急接近する。
その時、

「『二人』とも、狙いを外すなよ？」
『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ，ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ』
――任せて！

煙と枝の間。
レイジングハートを構え、背後に何かの影を従えて、こちらに狙いを定めているなのはが見えた。
シグナムは咄嗟に急降下を中止、レヴァンティンに命じカートリッジを消費して、連結刃に変形させる。
刃それぞれに炎をともして、上から攻撃した。
一方のなのはは慌てる様子を見せず、レイジングハートを構えたまま、

「ドットアビリティ」
――フリージングバスター！！

ディバインバスターに氷属性が付与された砲撃が、連結刃を迎え撃つ。
高熱の炎と、凍てつく氷がぶつかり合い。

再び、水蒸爆発が起きた。
シグナムは煙に視界を遮られ、警戒し動こうとしない。

「・・・・・・エクセリオン」

レヴァンティンを構えたまま、なのはがいた方向を見つめると、

「ストライクッ！！」

レイジングハートが、投降されてきた。
あまりの速さと鋭さにシグナムはそれを防ぎ損ねて、叩き落される。
そして地上に落ちると同時に、

「・・・・・・・・っ！」
「・・・・・・」

なのはがシグナムに馬乗りして、首にナイフを突きつけていた。

ｓｉｄｅ　スバル

夕方。
ロビーで寛ぎながら、昼間の模擬戦を思い出す。

そりゃ、なのはさんとシグナムさんの戦いはすごかった。
・・・・・けど、気になったのは、ヴィータ副隊長の、

『殺すことに特化している』

っていう発言。
そういわれてみれば確かに、なのはさんの攻撃は急所を常に狙っていた。
急所とかじゃなくても、肩とか足とか、手首とか、負傷すれば戦いにくくなる場所を重点的にしていた気がする。
そんなところを怪我したら、誰だって動けなくなる。
動けるかもしれないけど、武器とか、普段の戦い方がやりにくくなるのは確かだ。
・・・・・・・なのはさん、四年の間にどんな経験をしてきたんだろ？
まるで、何かをやるために何かを捨ててきたような・・・・・。

――新人の子、みんないい手応えねぇ
「・・・・・・」

なのはの自室。
何かの書類仕事を行っているなのはの隣で、カードから半身を出した少女が、脇においてあった固形の栄養食品を頬張っている。

――みんな、立派になるといいんだけどね
「・・・・なるんじゃなくて、するんだ」
――ま、それがわたし達の仕事だし？

やがて作業が終わったのか、開いていたウィンドウを操作して厳重にロックをかけ、閉じた。
小さくため息をついてから、上着をソファにほっぽりだして、ベッドに倒れこむ。

――今日はないといいんだけどね、『襲撃』
「・・・・こちらの都合など考えんよ、あいつらは」
――それもそうかぁ

諦めたようなため息を『二人』してついて、完全に部屋の明かりを消した。
布の中に体を埋めて、目を閉じる。
安らかなそれは、どこかあどけないものを感じさせた。

小さい頃は一人でいる時間が多くて。

寝るときに誰かが側にいるなんてこと、まず有り得なかった。

だから、一人で寝るのは当たり前で。

今でも、それは変わらない。

大丈夫、独りぼっちにはなれている。

これまでも、これからも。

第五話模擬戦、ＶＳシグナム（後書き）

そんなこんなで、ＶＳシグナムでした。
なのはさん四年の間に『色々』あったんで、接近戦もやり手な設定。
さて、それではお返事の部屋。

栖こんぶ様
初めまして～ｗ
１８０度変わったなのはさんの戦い方は、とりあえずこんな感じになりました。
もちろんティアナの失敗やヴィヴィオにはバリバリ関わりますよ～ｗ
あと、指摘してもらった場所は修正しておきますね、ありがとうございました。

金色の戦姫様
はい、Ｐ３のニュクスアバターから取ってきましたｗｗ
仮面なのは「ちょっと待て、わたしはそんな技習得した覚えは無いぞ？あと、自分を受け入れておらん平行世界のお前が何故ペルソナを使う？」

さーて、次回の八つの仮面はぁ～？
スバル、ローラーを壊す。
フォアード、デバイスを手に入れる。
六課、初任務！
次回もお楽しみに～、うふふふふ。
・・・・某国民アニメ風にやってみたりｗｗ

第六話ファーストアラート（前書き）

書き上げたどぉーっ！

第六話ファーストアラート

新暦００７５年、５月。
ＡＭ５：４５。

「んーっ！」

機動六課、隊員寮。
目覚めたスバルは大きく伸びをすると、あくびを一つ。
同時に起きていたらしいティアナとともに、歯磨きをする。
そこへ、

「おはようございます」
「あ、おはよう」
「おはよ」

キャロが合流し、談笑を交えはじめる。
一方エリオはストレッチを行なっていた。
と、頭上からフリードが降りてきて、一人と一匹が挨拶を交わす。
四人が機動六課に配属されて二週間。
本出動はまだなく、朝から晩まで訓練付けの毎日である。

閑話休題。

そのころ、訓練スペース。
早くに目が覚めたらしいなのはは、パネルを操作してフィールドを作っていた。

決定のパネルに触れ、現れた空間を確認して、小さく頷く。

「おはよー！」

「おはようございます！」

スバル、ティアナ、キャロの三人はエリオと合流。

ここでも談笑しながら、訓練スペースを目指す。

「よし、整列！！」

なのはの号令に、四人が集まった。

全員服や顔に砂埃や泥をつけ、肩で息をしている。

なのはは、四人の息が整うまでの少しの間黙り込んでから、

「それでは、本日の早朝訓練のラスト一本、いけるな？」

「はい！」

少しばかり威勢がなくなっているものの、やる気を十分に感じさせる返事。

なのはは頷いてから、

「では、シュートイベーションを行う」

手にした愛機レイジングハートを構えて、自身の周囲にスフィアを展開した。

「わたしの攻撃を5分間被弾なしで回避しきるか、わたし自身に一撃入れればクリア」

「ちなみに」と、なのはは戦闘体制を取り、

「誰か一人でも被弾すれば最初からやり直しだ、気合入れろ」

「みんな！このボロボロの状態で、攻撃全部裁ける自身は！？」

魔力弾の嵐を掻い潜りながら、ティアナが声を張り上げる。

「ない！」

「同じく！」

それに、起動力を活かして避けるスバルとエリオが即答した。

「じゃあ、なんとか一発いれよう！」

「はい！」

「全員、撤退回避！」

ティアナが号令を飛ばし、四人とも別方向に散る。

全員がなのはの視界から消え去る。

なのはは慌てる様子を見せず、周囲を警戒。

動きは、すぐにあった。

「うおおおおおおっ！」

後ろから猛スピードで迫るスバルを確認。
さらに離れたビルからは、ティアナがこちらに狙いを定めている。

「・・・・・アクセルッ！」

すぐに指を振り近くに待機させていたスフィアを発射。
二つともスバルとティアナを撃ち抜くが、手応えは無い。

「・・・・・・ティアナか、見事」

そう呟きながら、振り向きざまにシールドを展開。
本物のスバルの拳を受け止め、さらに先ほど放ったスフィアを再びスバルに撃つ。
スバルは間一髪のところで気付いて回避。
一度体制を崩すものの、立て直して逃走を始めた。
弓で牽制しつつ、ティアナに念話を飛ばす。

「（ティアナ、援護！）」

「（分かってる！）」

念話を受け取ったティアナはアンカーガンを構え、チャージを始める。
しかし、放つ寸前だったそれは突然掻き消えた。

「ちょっ、こんな時に・・・・・・！！」

苛立たしげにしながらも、空薬莢を捨て、新しいカートリッジを装填。
改めてチャージしなおし、弾丸を二つ、なのはに向かわせた。
なのはは追尾性能のあるそれを回避し、スバルを追っていたスフィアの動きが鈍る。

「っそこ！」

スバルは振り向いて、弓から魔力弾を発射。
追って着ていたスフィアを撃ち落した。
ティアナの追尾弾と、フリードの火炎放射を掻い潜るなのはは、こちらに狙いを定めているエリオとキャロを発見。
追撃すべく、接近する。

「エリオ、今！」

ティアナの叫び声を合図に、エリオが振りかぶる。

『Ｓｐｅｅｒａｎｇｒｉｆｆ』
「でやあああああっ！！」

ストラーダごと突進してくるエリオ。
それを見たなのはの口元が、少しだけ歪んだ気がした。

瞬間、爆音。

煙の中から離脱したエリオは、ビルに着地する。

「はずした！？」

思わずそう叫んだティアナだったが、

「いや、当たっている」

そう言って、なのはは自身の腕を指した。

「確かにバリアと通って、攻撃が当たった」

相変わらずの仏頂面だが、誉めてもらっているのは確かだ。
四人の表情が、明るくなった。

「それでは今朝はここまで、一旦集合しろ」
「はい！」

ジャケットを解除しつつ下りたなのはは、集合した四人に歩み寄りながら、

「大分チーム戦に慣れてきたな」
「ありがとうございます！」

もう一度仏頂面から出た誉め言葉に、四人の表情がまた明るくなる。

「ティアナの指揮も筋が通ってきた、指揮官訓練でも受けてみるか？」
「いや、その、戦闘訓練だけでいっぱいいっぱいです！」

なのはの誘いを、ティアナはやんわりと断った。
と、ここで、キャロの隣にいたフリードが、キョロキョロとあたりを見回し始める。

「何か、焦げ臭いような・・・・・・？」

エリオの発言で気が付いたティアナが、スバルの足元に目をやり。

「スバル！あんたのローラー！」

「え？あぁ！？」

なのはの視線を受けながら、スバルはローラーを外して、抱きかかえた。

「あちゃー、無茶させちゃった・・・・・・」

「オーバーヒートか？後でメンテナンスに見せておけ・・・・・・ティアナのアンカーガンも厳しいだろう？」

「あ、はい、騙し騙しです」

返事を受けてから、なのはは少し考え込み。

「・・・・・訓練になれてきたし、いい頃合だろう」

一人呟くと、顔を上げて、

「そろそろ、実戦用の新デバイスに切り替えよう」

「新しいデバイスかぁ・・・・・どんなものかな！？」

シャワー室に向かいながら、ティアナに話しかけるスバル。

「それ、何度目？もう少し落ち着きなさいよ」

ティアナはそれを呆れた様子で返しつつ、歩みを進める。

「でも、わたしも楽しみです！」

「でしょー！？」

ニコニコと笑いながら、キャロがスバルに同意。

ティアナは苦笑いしつつも、二人のやり取りを見守っていた。

そうしている内に、目的のシャワー室に到着。

中に入ろうとしたとき、ふと、話し声が聞こえた。

「・・・・・？」

「ティア？」

「どうかしました？」

突然立ち止まったティアナを、不思議そうに見る二人。

ティアナはそれにあえて反応せず、聞こえてくる声に耳を傾ける。

――新人達、いい具合に実力上げてきたじゃない！

「・・・・・そうだな」

――今日デバイス渡すんでしょ？あー、早くあの子らがセットアップした姿が見たい！！

「・・・・・・そう急がんでもいいだろう」
（・・・・・なのはさん？）
しかし、もう一方は聞き覚えの無い声だ。
――いいじゃない！いつの時代も新しいものってのは、見る瞬間までワクワクするのが当たり前なの！
「・・・・・・そうか」
もう一人入っているのかと、ロッカーを覗き込むが、カギが外れているのは一つだけだ。
頭にはてなを浮かべるティアナ。
（なのはさん、一体誰と・・・・・？）
ティアナが思考を始めた瞬間、
「ティア、先に行くよ？」
「へっ？」
スバル達二人が、もう衣服を脱いでシャワーに向かっているところだった。
一瞬呆けるティアナだが、すぐに再起動して、さっさと進んでしまうスバルを退きとめようと手を伸ばす。
――伸ばすの、だが。
「わっ！なのはさん！？」
スバルの驚いた声が聞こえた。

（・・・・・・遅かった）

なんてことを考えつつ、ティアナはスバルの元に駆け寄る。

「すみませんなのはさん！お邪魔しました！」

「・・・・・・・・いや、いい」

シャワーを止めこちらを振り向いていたなのはは、静かにそう答える。

「・・・・・・・・・・・わたしはもう出る、気にしなくていいから」

そう告げると、側にかけていたタオルで体を隠し、去っていった。

「・・・・・・・？」

その時ティアナは、なのはの鎖骨の辺りに白いものを見た。

スバル達とシャワーを浴びつつ、そのことについて考えていたが。

（もしかして、古傷・・・・・・？）

結論が出たのは、デバイスルームに移動している時だった。

「・・・・・・・何やろうな、この預言」
「わたし達も調査しているのだけれど・・・・・・まだ解明は出来ていないの」

聖王教会、騎士団騎士『カリム・グラシア』の執務室。
部屋の主であるカリムに呼び出されていたはやては、数枚の紙を見つめて唸っていた。
古代ベルカ語で書かれた文章は、こう綴られている。

――――――世界の鍵をめぐり、転生せし者達は戦う
――――――あるものは欲から、あるものは善から
――――――願望機と称される、鍵をめぐって殺しあう
――――――迎え撃つは鍵自身
――――――善きも悪しきも滅ぼす己を呪い
――――――鍵はただ仮面をかぶり続ける

「最初の三行については、今各地で起こっているらしい『バトルロワイヤル』で間違いなさそうやね」
「ええ・・・・・」

――――『バトルロワイヤル』。
新暦００７２年に突如勃発し、現在も続いている、転生者同士の殺し合い。
始まった当初は、一般人もを巻き込んだ激しい戦闘が行われていたが、現在は無人世界にその現場を移している。

どうやら、ルールに変更があったらしい。
何が目的かは不明だが、最近の調査では『鍵』と呼ばれるものをめぐった争いであることが判明している。

「特に、第４５管理外世界『レオンハルト』で起こった大戦は、惨いもんやった」
「そうね・・・・・・地域住民が何人も亡くなった、忌むべき出来事・・・・・」

当時の現場と映像を思い出しながら、苦い表情になる二人。
はやては振り払うように頭を振って、

「とにかく、今は目の前の問題をどうにかする！ガジェットの新型も出てきた見たいやし、気合入れんとな！」
「ふふっ、頼もしいわ」

ぐっと拳をにぎったはやてを見て、カリムは微笑を浮かべた。

ｓｉｄｅ　スバル

「悪い、待たせたな」

「なのはさん！」

あたし達がデバイスを受け取って、一通りの説明を受けた頃。
なのはさんがデバイスルームに入ってきた。
リイン曹長が飛び出して、なのはさんに文字通り飛びつく。
・・・・・・・うん、さすがに二週間もあれば慣れるもんだね。
あのなのはさんに躊躇無く飛びつくなんて・・・・・。
そのすぐ後に、改めてデバイスについての説明があった。
なんでも、今の段階では、出力リミッターがかかっているらしい。
段々ならしてから、フェイト、なのは両隊長と、シャーリーさん、
リイン曹長の判断で、ちょっとずつ解除されるんだって。

「出力リミッターっていうと、なのはさん達にもかかってますよね？」
「そうだな、ただ、わたし達の場合、デバイスだけでなく本人も、だが」

ティアの質問に、なのはさんが丁寧に答えてくれた。
・・・・・・っていうか、えぇっ！？

「何を驚く？ここの隊長、副隊長はみんなかかっているぞ」
「部隊ごとに保有できるランクの総計規模が決まっていますからねぇ・・・・」
「一つの部隊でたくさんの優秀な魔導師を保有したい場合、そこにうまく収まるように大きな出力リミッターをかけるですよー」
「まぁ、裏技っちゃあ裏技なんだけどね」

へぇ・・・・・・。

「隊長さん達ははやてちゃんの、はやてちゃんは直属の上司のカリ

ムさんか、部隊の監査役クロノ提督の許可がないと解除できませんし、許可は滅多なことじゃ出せないそうです」

・・・・・・それって、万が一の時に、咄嗟に本気を出せないってことだよね？

結構危険な気が・・・・・・。

「あ、スバルのリボルバーナックルと弓は、シンクロ機能もうまく設計できてるからね」

「ほんとですか！？」

「持ち運びが楽になるように、収納と瞬間装着の機能もつけといた！」

「わぁ！ありがとうございます！」

一々手動で脱着するのは手間がかかったから、その機能は正直助かる！！

心がわくわくしていた時だった。

甲高い音が響いて、一気に気が引き締まる。

「アラート・・・・・・！？」

「一級警戒態勢！！」

「ロングアーチ！」

真剣な表情になったなのはさんが叫ぶと通信が開いて、グリフィス准陸尉が出てきた。

「はい！教会本部からの出動要請です！！」

「状況は！？」

『こちらはやて！教会騎士団が追っていた、レリックらしきものが

見つかった！場所はエイリム山岳丘陵地区、対象は、山岳リニアレールで移動中！！』

『移動中って・・・・まさか・・・・・・！』

「ガジェットあたりに乗っ取られたな・・・・・・・！」

現在、ヘリで移動しながら、さっき受け取った情報を整理する。

山岳地帯を移動中のリニアレールは、ガジェットにコントロールを乗っ取られている。

車内にいるガジェットは、最低で３０、大型や飛行型の未確認タイプの可能性もあり。

あたし達の任務は、ガジェットを討伐して、レリックを回収すること。

いきなりハードな任務になっちゃったけど・・・・・・やるしかない！

「よろしく頼むよ・・・・・！」

さっき出会ったばかりの相棒を、握り締めた。

第六話ファーストアラート（後書き）

そんなこんなの原作４話でした。
それではお返事の部屋。

金色の戦姫様
こめかみに銃を突きつけるアレですね。
下手したら自殺行為に見えるんだから注意が必要だと個人的に思います。
あと、合体させたらなにがでるかな!?かな!?

栖こんぶ様
殺伐とした現場を潜り抜けてきたんですよ。
根っこは変わっていませんが、ここのなのはさんは押し込めまくってますから。
フェイトさんとも別部屋ですね。
あと、リミッターについては後日ちゃんと説明しますよ～ｗ

次回、とにかく暴れます。
それではｗ

第七話初任務（前書き）

お待たせしました、第七話です。

第七話初任務

――竜召喚は、危険な力

――人を傷つける、怖い力・・・・・・！！

ヘリの中。
緊張した面持ちで、初陣を待つフォアード四人。
なのはも先ほどから何も言わない。
ハッチ内部の手すりを掴んで、ただただ外を睨みつけている。
空気が引き締まり、ピンと張り詰めていた。
と、ここで、けたたましいアラートが再び。

「ロングアーチ！」
『はい！』

なのはが一声上げると通信が開き、アルトが顔を出した。

『航空型のガジェットが、現地捜索隊を捕捉！そちらに向かっています！』

「っち・・・・仕方ないか・・・・・・」

小さく舌打ちしたなのはは、操縦室に顔を向け、

「ヴァイス！わたしが出る、フェイト隊長と二人で空を抑える！！」

「うっす！お願いします！」

ヴァイスは親指を立ててにかっと笑い、ハッチを開けた。

風が吹き込み、髪が踊る。

なのはは臆することなく、ハッチに向かう。

「わたしは行くが、心配することはない、ガジェットくらい倒せるだろう、だが気は抜くな」

いつにも増して真剣な表情でそう告げるなのはに、三人が勢い良く返事をした。

キャロはワンテンポ遅れて、答える。

何か思うところがあるのだろうか、他のメンバーと比べて、いささか表情が硬い。

それに気がついたのか、なのはは束の間キャロを見てから、歩み寄った。

視線を合わせるためにしゃがみ、じっと見つめる。

「あ、あの・・・・・・」

「・・・・・・キャロ」

戸惑うキャロに対して、

「怖いか？」

そんな質問をぶつけた。

瞬間、キャロの目が大きく見開かれ、フリードを抱く手に力が篭る。

フォアード三人も、かなり驚いていた。

「あの、なのはさん！今はそんなこと言ってる場合じゃ・・・・・・！！」

「悪いが黙れ、わたしはキャロと話をしている」

ティアナの反論をバッサリ切り捨て、なのははもう一度、まっすぐキャロを見つめる。

「もう一度聞く、怖いか？」

「・・・・・・・・あ・・・・・・・・・の・・・・・・・・」

口には出さないものの、見るからに震えているキャロ。

恐怖していることは一目瞭然であるが、なのははキャロが口を開くまで待っていた。

「・・・・・・・怖い、です」

やがて、キャロは呟くようにこぼす。

「どうして？」

「・・・・・・・わたしは・・・・・・・・まだ・・・・・・・・フリードをうまく制御できないから・・・・・・・・・だから・・・・・・・！」

震えながら、ぼろぼろと涙をこぼすキャロ。
対するなのははため息を一つつくと、立ち上がって。
キャロの頭を、撫でた。

「それでいい」
「・・・・・・・・え？」

その時キャロは、なのはが一瞬だけ穏やかに笑ったのを見て、呆けた。
キャロが知る限り、高町なのはという人物は、仏頂面が基本だったはずである。
当の本人は、言いたいことを言ったからなのか、ハッチに近づいた。
バリアジャケットを纏い飛び出そうとして、「そうそう」と、再びこっちを見る。

「わたしも、たまらなく怖いよ」
「・・・・・・え？」

さらっとそう言い放ち、今度こそ飛び出していった。
『あの』なのはの意外な一言に、一同はしばらく固まっていた。

『同じ空は久しぶりだね、なのは』
『・・・・・・フェイト隊長、私語は慎め、任務中だ』
なのはが飛んでいると、フェイトから念話が飛んできた。
その間にガジェットに接触したので、次々破壊しながらそう指摘。
通信の向こうで、フェイトは苦笑いしているようだ。
なのはは慣れた手つきでレイジングハートを回転させ、その勢いで来るガジェット全てを向かえ撃つ。
フェイトも負けじと、カートリッジを消費。
鎌の刃を飛ばして、ガジェットを切り裂く。
「・・・・・・・あまり時間はかけたくない・・・・・・・・・っ」
ぼそっと、なのはが呟いた瞬間。
フェイトのものではないプラズマが走り、いくつかのガジェット編隊を簡単に破壊した。
「うおおおおおおっ！！」
バキンっと。
スバルが殴りつけたガジェットから、まずい音がして。

彼女が離れると同時に爆発する。
壁を走りぬけ、ガジェットに接近。

「リボルバー・・・・・・！！」

大きく拳を振りかざして、

「シュート！！」

叩き込んだ。
が、勢い余って爆風に呑まれ、外に放り出される。
しかし、彼女の新しい相棒――マッハキャリバーが一瞬煌くと、ウィングロードが展開した。
スバルは何とかそれに乗って、車両に着地する。
それから、感心したようにため息をついて、マッハキャリバーを見つめた。

「うはぁー・・・・・マッハキャリバー、お前すごいよ！加速とか、グリップコントロールとか、申し分なし！」

『Ｂｅｃａｕｓｅ Ｉ ｗａｓ ｃｒｅａｔｅｄ ｔｏ ｍｏｒｅ ｓｔｒｏｎｇｌｙ ｓｅｎｄ ｙｏｕ ｆａｓｔｅｒ（私はあなたをより強く、より速く走らせるために作り出されましたから）』

その返答にスバルはふっと微笑んでから、

「お前はＡＩとはいえ、心があるんでしょ？だったら言い方を変えよう――お前は、あたしと一緒に走る為に、生まれてきたんだよ」

『Ｉ ｆｅｅｌ ｉｔ ｆｏｒ ｔｈｅ ｓａｍｅ ｍｅａｎｉｎｇ（同じ意味に感じます）』

「もーっ！違うんだよ、色々と！！」

スバルは今度は苦笑いしてから、前に進む。

『スターズ1、ライトニング1、制空権獲得！！』
『スターズF、4両目で合流！』

なのはは、ロングアーチの管制を聞き、教え子達がうまく立ち回れていると悟って、ほっとする。
周囲を見渡すと、綺麗な青空が広がっていた。
しばらくじっと見ていたが、やがて顔を背けると、後ろに立っていたフェイトと向き合う。

「・・・・・・ねぇ、なのは」

どこか疑っているような表情で、フェイトが口を開いた。

「さっきの雷は何？なのは、魔力変換なんて持ってなかったよね？」
「・・・・・・・・」

だんまりを決め込むなのは。
フェイトは少し声を大きくする。

「あのペルソナって奴の能力なの？・・・・・・・・どうしてそんな

力使うの？それがなかったら、なのはは・・・・・！」
「少し、黙っててくれないか」

遮るように、なのはは言い放った。
鋭い視線は、フェイトを射抜いている。
一瞬怯むフェイト、だが一旦唇を噛み締めてから、

「・・・・・・なんで、四年も連絡くれなかったの？」
「・・・・・・」

依然、なのははだんまりだった。

「・・・・・なのはが、そんな性格になったことと、関係あるの？この間のシグナムとの模擬戦だって、ナイフとか使ってたし・・・・・！」
「・・・・・・・・・・・強いて言うなら」

瞳を閉じて、なのはが口を開いた時。

『ライトニングF、八両目突入・・・・・っエンカウント！新型です！！』

エリオとキャロの目の前、巨大な球体のガジェットが鎮座していた。
コードをくねらせ、ただじっとこちらの様子を窺っている。
そして、突然ベルトを伸ばしてきた。
二人はそれを飛んで回避、キャロはすぐに魔方陣を展開する。

「フリード、ブラストフレア！ファイア！」
「キュクーッ！」

迫るベルトに臆せず、キャロはフリードに指示。
フリードは火球を発射したが、ベルトがうねって弾き飛ばされる。

「おぉりゃあああああああっ！！」

次にエリオが攻撃。
ストラーダの刃にプラズマを纏わせると、渾身の力でたたきつけた。
が、

「か、硬っ・・・・・！」

装甲はかなり頑丈に作られているらしい。
エリオの斬撃をものともしない。
すると、ガジェットから何らかのオーラが湧き出てきた。
それはかなり広い範囲に広がり、二人が行使する魔法を打ち消す。

「ＡＭＦ！？」
「こんな遠くまで・・・・！！」

魔力を消されたとなれば、二人はただの子ども。
エリオはガジェットに押され、苦い表情を見せた。

「あ、あの・・・・・・！」
「大丈夫、任せて！」

心配そうに、キャロが声をあげる。
エリオは苦し紛れにそう答えるが、どう見ても大丈夫には見えない。
その時、ガジェットは彼に狙いを定めていた。

「・・・・・・・・っ！」

無機質なレンズが自分を捕らえていることに気付いたエリオは大きく跳躍。
同時に発射されたガジェットのレーザーも、彼を追って天井を焼き切った。

「っぐあ！？」

着地したところを狙われ、エリオはベルトで叩きつけられる。
壁に激突し、走る痛みに顔を歪ませた。

「・・・・・っ！」

不意に、キャロは過去を思い出す。

――――君は、どこに行って、何をしたい？

フェイトに引き取られた日、雪が降る中で、聞かれた言葉。

その質問に戸惑ったのを、良く覚えている。
自分の前にはいつも、自分が行っちゃいけない場所があって。
自分がしてはいけないことがあるだけだったから。

「うあああああっ！」
「・・・・・！？」

現実に戻る。
エリオがガジェットに捕らわれて、空に放り投げられる。
それを目の当たりにしたキャロは、

「・・・・・・・・っ！！」

ただ、飛び出していた。
思い出すのは、六課での日々と、先ほどなのはの言葉。

――――それでいい

いつも素っ気無くて、ちょっと近寄りがたいけど。
あの一言には、とても、勇気付けられた。
宙で、気絶したままのエリオを抱きしめる。

『ライトニング４、飛び降り！？』
『あんな状態からのリカバリーって・・・・・！』

通信の向こうで絶句するロングアーチの面々。
かなりの速度で飛ばしてフォアードの元にむかうなのはは、呆れたような表情をしている。

――それでいいのにねー
「・・・・・ＡＭＦは、発生源から離れるほどその効果も弱くなる」
――そそ、使えるわよぉ！キャロの、フルパフォーマンスの魔法！！

――護りたい

――優しい人を

――――わたしに笑いかけてくれる人たちを

――――――自分の力で・・・・・・・！

「護りたい！！」

キャロの叫びに反応したのか、はたまた別の要因か。
ケリュケイオンに、桃色のラインが走る。
グローブが光り、発生した光にキャロが包まれる。

「・・・・・・フリード、今まで不自由な思いさせて、ごめん」

主人の元によってきたフリードに、キャロはそう告げる。

「わたし、ちゃんと制御するから！！いくよ！！」

――――竜魂召喚！！

「はぁっ！だっ！でりゃぁ！！」
「バリアブルバレット！シュート！」

ティアナと合流したスバルは、怒涛の勢いでガジェットを破壊。
止め処なく爆音が響く。

「うりぃやあああああああ！！」

弓にカートリッジを装填。
左手を大きく振り上げて、壁を殴りつける。

「茂みのっ！刺ぇっ！！」

爆発。
壁に大きな穴が開き、破片がガジェットを粉砕。
と、その時。
その穴から光が差し込んできた。
桃色のそれに気がつき、二人は思わず外に飛び出す。

「蒼穹を走る白き閃光、我が翼となり天を駆けよ！」

清められていく空気。
魔方陣はいっそう輝きを増し、そこから一対の翼を出現させる。

「来よ、我が竜フリードリヒ！竜魂召喚！！」

――――グオオオオオッ！！

ｓｉｄｅ　スバル

『召喚成功！フリードの意識レベル、ブルー！完全制御状態です！』

うはぁー・・・・すごい・・・・・・。

「あれが、チビ竜の本当の姿」

「かっこいいー・・・・・」

一時はどうなるかと思ったけど、大丈夫みたいだね。

「ライトニングの二人は、救援はいらないみたいですね、さ、レリックを回収するですよ！」

「はい！」

「フリード、ブラストレイ！！」

キャロの魔力を吸収し、フリードは火炎放射を放つ。
だがガジェットは障壁でそれを乗り切った。

「やっぱり硬い・・・・」
「あの装甲形状じゃ抜き辛いよ、僕とストラーダがやる！」

不安そうにそう呟くキャロに、エリオは力強く答えた。
エリオはキャロが黙って頷いたのを見てから、構える。

「我が請うは聖銀の剣、若き槍騎士の刃に、祝福の光を！猛きその身に、力を与える祈りの光を！」

キャロの両手。
桜色の光りが灯り、輝く。

「っだあああああ！！」
「ツインブースト、スラッシュ＆ストライク！」

エリオが飛び出して、重力を利用し突っ込んでいく。
そこへキャロが放った光が宿り、力が漲るのを感じた。
危険と判断し、コードとベルトを延ばしてくるガジェット。
エリオは斬撃でそれらを薙ぎ払うと、着地。
カートリッジを消費し、突撃の姿勢を取る。

「一閃必中！！」

刹那、ガジェットすら反応できない速度で突っ込み、ストラーダを

突き刺した。
キャロの加護を受けた桃色の刃が障壁と装甲を打ち抜き、貫通する。

「でえええりゃあああああああああっ！！」

小さな体で、満身の力で、大きく斬り上げた。
背後には、切り裂かれたガジェット。
一瞬の間を置いて、爆散した。

「やった！！」

その様子を見届けたキャロは一人、うれしそうに笑った。

『車両内、および上空のガジェット、全て反応消滅！』
『スターズF、レリックを無事確保！』
『車両のコントロールも取り戻したですよ～！今止めま～す！』

通信を聞き、なのははため息をつく。

「・・・・・終わったな」
――――そーね・・・・・思ったより苦戦してなかったみたいだし

「・・・・・・ああ」

一人そう呟いて、後ろにいたライトニングの二人を見る。
エリオもキャロも、初めての任務成功に、少し無邪気にはしゃいでいた。

「・・・・・・・・」

そんな微笑ましい光景を見たからか。
気が付けばなのはの口角が上がり、穏やかな表情を見せていた。

『刻印ナンバー9、護送体制に入りました』
「ふむ・・・・・」
『追跡ガジェットを送りますか？』

暗闇。
多くのウィンドウを見つめ、一人佇む男。

「やめておこう・・・・・・レリックは惜しいが彼女達のデータが取れただけでも十分さ」

にやにやしながら、ウィンドウを開く。

「それにしても、この案件は実に素晴らしい・・・・・私の研究にとって興味深い素材が揃っているし・・・・・・・」

また新たなウィンドウ。

そこにはエリオとフェイトが写っている。

「この子達・・・生きて動いているプロジェクトFの残滓を、手に入れるチャンスがあるのだからね、それと・・・・・」

「もう一つ」と、男はパネルを操作。

もう一つ開かれたウィンドウに、プラズマを駆使してガジェットを潰すなのはがいた。

「『バトルロワイヤル』の渦中にあるこの人物も、実に興味深い・・・・・」

ただただ不気味に、男は嘲笑う。

第七話初任務（後書き）

この話で一番書きたかったのは、キャロとのやり取りだったり・・・・。

子どもには意外と優しいうちのなのはさんです。

第八話進展（前書き）

もうお気づきの方もいるとは思いますが、タイトルは原作から取ってきたのがちらほら。
これがぴったりだなって思ったり、単純に思いつかなかったり・・・・。

第八話進展

ｓｉｄｅ　なのは

訓練スペース。

――新人達、こないだの任務がいい発破剤になってるみたいねー

「・・・・・・・ああ」

訓練にも熱が入って、現在個別スキルの指導を行っている。

スバルは、ヴィータにバリアの扱い方と、前衛の立ち振る舞いを。

エリオとキャロは、テスタロッサ執務官に回避方法を。

そしてティアナは、

「次！」

「はいっ！」

わたしが撃ち出したスフィアを、正確に撃ち抜く。

今は性質ごとに色分けしているが、いずれは色を統一するつもりだ。

ティアナが対処している間に、さらに撃ちだす。

処理しきれなくなったのか、回避行動を取った。

だが・・・・・。

「そう動くと、あとが続かなくなるぞ！！」

ポジション――センターガードの行動としては誉められたものではないな。

ティアナはすぐに立ち上がると、クロスミラージュをリロード。

両手で狙いを定め、先ほど回避したスフィアを処理した。

「それでいい、立ち止まって、視界を広く」
「迅速かつ的確に指示を飛ばす！！」

わたしの言葉の続きを、ティアナが口にする。
・・・・・・さすが、理解が早いな。

「そう、それがわたしとお前のポジション、センターガードだ」

本局、とあるオフィス。

「・・・・・・・あ」
「ん？どったの？」

デスクでデータを閲覧していた少女が声を上げた。
それに気がついたもう一人の少女が、床を蹴ってイスごとその隣に来る。

「いや、今日本局に送られてきたデータを見たんだけど・・・・・・」

「レリックの？」
「うん」

「そしたら・・・・・・・・」と、少女はウィンドウを摘んで、見せる。

「あ、これ知ってる」
「何見てるの？」
「あ、つーちゃん」

二人の後ろから、ウィンドウを覗き込む女性。
イスの背もたれに乗っかっている少女は、画像を指差す。

「ほら、前なのはちゃん達が戦ったって言うガジェットの残骸」
「新型が出たらしいから、それ中心のデータなんだけど」
「ああ、そういえば局員達の間で話題になってたね」

女性はイスを持ってきて座り、一緒に画面を覗き込む。

「んで！添付されてた画像の・・・・・・ほら、ここ！」
「これ、内部構造の！」
「見せて・・・・・・・・・・・・っこれって・・・・・・・・！」

目を見開く女性。
手にしている画像には、菱形の青い宝石が埋め込まれている。

「ジュエルシード・・・・・・！」
「確か、なのはちゃんがちっちゃい頃に集めてたって言う古代遺物（ロストロギア）だよね？」
「ん、今は保管所で厳重に管理されてるはずだけど・・・・・・っ

ていうか、なして犯罪者の手に渡ってるのさ!?」

「どうしたセキュリティ!」と突っ込んで、少女はコーヒーを一口。
すると女性は何かに気がつき、画像の一点を凝視する。

「どしたん?」
「・・・・・ね、ここ拡大出来ない?」
「そこ?ちょっと待ってて・・・・・」

始めからウィンドウを閲覧していた少女がパネルを操作。
女性が指差した部分が拡大される。

「・・・・・やっぱり、人名が書いてある」
「なんて書いてあるの?・・・・・じぇ、じぇい・・・・・?」
「ジェイル・スカリエッティ」

背もたれに乗っかっていた少女が、さらっと綴りを読み上げ。
二人の顔が驚愕に満ちた。

「スカリエッティって・・・・・!」
「第一級捜索指定犯罪者・・・・・だね」
「その辺の分野の人達にとっちゃ、結構有名人みたいよ?生物学に長けている天才なんだけど、頭がアレだからさー」

「宝の持ち腐れよね」と、少女は意味無く口を尖らせる。

「けど、何かあからさま過ぎない?」
「その辺分かんないんだよなぁ、ジュエルシードはともかく、何で自分の名前を・・・・・」
「本人なら挑発、他人なら濡れ衣目的・・・・・とか?」

「なんにせよ、厄介な相手じゃん」

はぁーっと、三人そろってため息をついた。

ふと、女性は疑問を口にする。

「っていうか、このデータどこから？」

「「ハッキング」」

「ちょっと・・・・・・」

「だって暇なんだもーん」

「そう言えば・・・・・・・・」

昼時。

さっさと昼食を済ませ、移動していたなのはは、後ろから声をかけられる。

振り返るとスバルがこっちに手を振っていた。

続けてされた手招きを無視しようかとも考えたが、話をするのもいいかと思いとどまる。

「・・・・・・何だ？」

イスに座り、スバルを見据える。

スバルは少し口ごもってから、

「あの、なのはさんの故郷ってどんなところですか？」
「・・・・・・第９７管理外世界、現地惑星名称『地球』だ」
「いや、そうじゃなくって」
ティアナは苦笑いで突っ込みを入れ、
「雰囲気とか、その辺を聞いてみたいんですよ」
「・・・・・・その辺は、テスタロッサにでも聞けばいいだろう」
素っ気無く返事すると、なのはは立ち上がった。
「あの、どちらに・・・・・・？」
「自室だ」
オドオドとした様子で問いかけるキャロに、再び素っ気無く返して、なのはは去っていった。

某所。

「ホテルアグスタ？」
「はい、原作通りなら、そちらに『鍵』一行が来るのは間違いないかと」
「ふぅん・・・・・・・・・」
報告を受けた男は少し考え込んでから、
「・・・・・腑抜けてもらうのも困るしね、ちょっと緊張を持たせようか」
「それでは・・・・・・・」
「うん、出るよ」
「承知しました」
男に膝間づいていた少女は、一礼してその場を去った。
一人残された男は、くすっと笑って、
「君は逃げられないよ、高町なのは」
夜。
「よし、全員集合！！」

機動六課、訓練スペース。
なのはが号令をかけ、フォアード四人が集まる。

「これにて夜間訓練は終了だ、各自十分に休息を取るように」
「はい！」
「ありがとうございました！」

びしっと一礼して、四人は寮に引き返していった。
なのははそれを見送って、訓練スペースの後片付けを始める。

「おい」

再び背後から、声。
振り返ると、ヴィータが睨みつけていた。

「・・・・・・お前もちったぁ休めよ、こっちが冷や冷やする」
「・・・・・・善慮する」

素っ気無く返事して、中断していた作業を再開。
二人の間に、沈黙が降りる。

「・・・・・・なのは」
「・・・・・・何だ？」

それを破ったのは、ヴィータだった。

「あんまり、無茶やるなよ？・・・・・・あの時見たいなのは、ごめんだ」

なのはは振り返りもしなかったが、ただ小さく頷いたのは見えた。
現在のなのはは未知過ぎるゆえ不安もあるが、ヴィータの口元には自然と笑みが浮かんでいる。

「・・・・・・先に帰っていろ、わたしのはすぐにでも終わる」
「じゃあ一緒に戻ろう」
「・・・・・・好きにしろ」

相変わらずの素っ気無い返事。
それでも、ヴィータの口元から笑みは消えなかった。

「・・・・・・ん？」

男の端末に、着信。
画面を開いて内容を確認する。

「いかがなされましたか？」

そこへ少女がやってきて、男に問いかけた。

「・・・・・・いや、ちょっと面白い奴から頼まれごとでね、ちょうど僕らと同じ考えだったみたいだ」
「それでは・・・・・・・・」
「ああ」
男はパネルを操作して、返事を出す。
「まったく、『鍵』が腑抜けてないことを祈るよ」

第八話進展（後書き）

タイトルが『進展』なのに、特に何も進展してないっつぅー。
とりあえずフラグは立てておきました。
それではお返事の部屋あああああ

高天原Ａ様
初めまして～ｗご感想ありがとうございます。
この小説では、リリカルなのははともかく、ペルソナは原作知識無しでも楽しめるようにしてあるのでｗｗ
とりあえずなのはさんに何があったのかは後々のお楽しみになりますｗｗ
それと、誤字指摘ありがとうございます！
きっちり修正させていただきますね！

次回、警護任務を受けた機動六課は、ホテル・アグスタへと向かう。
そこでなのははとある人物と再会し・・・・・？
それでは！

第九話アグスタ・前編（前書き）

お待たせしました、九話です。
長くなりそうだったので、前編後編に別けました。

第九話アグスタ・前編

「・・・・・・何だ、これは」

某日。
なのはの機嫌は、少々悪かった。
唐突に部隊長室に呼び出されたと思えば、何かにやついた顔で出迎えられ。
手渡された袋を開けてみれば、明らかに余所行き用のドレスが入っている。
ぶっちゃけ、何がどうなってこのドレスを手渡すこととなったのか、わけがわからない。
眉間のしわをさらに深くして、無言で目の前の部隊長に問いかけてみた。

「お仕事着や！」
「わたしが馬鹿だった」

即答で自信満々に帰ってきた返事に、即答で呆れの言葉を叩き付けた。

それから数日後。
ヴァイスが操縦するヘリの中で、決まった方針と、任務の説明が行われている。

「で！今日これから向かう先はここ！ホテル・アグスタ！」
「・・・・・・・・・骨董品オークションの会場警備と人員警護、それが今日の仕事だ」

リインの言葉に、そう続けるなのは。
――心なしか、ただでさえバリエーションの少ない表情が、さらに鉄仮面と化している。

「取引許可の出ているロストロギアが多数出品されるので、その反応をレリックと誤認したガジェットが出てくる可能性が高い、とのことで、わたし達が警備に呼ばれたです！」
「この手の大型オークションだと、密輸取引の隠れ蓑にもなったりするし、色々油断は禁物だよ」

真剣なフェイトの言葉に、フォアード陣はよりいっそう気を引き締めた。
ふと、キャロの視線が、シャマルの足元にあるスーツケースに向けられる。

「現場には昨夜から、シグナム副隊長、ヴィータ副隊長他、数名が

警護に当たってくれてる」
「・・・・・・・・隊長陣は内部の警備に当たるので、前線は副隊長達の指示に従うように」
「はい！」
「あの、シャマル先生・・・・」
ここで、キャロが軽く手を上げてシャマルに問いかける。
「さっきから気になってたんですけど、その箱って・・・・・・」
「ああ、これ？」
途端にシャマルの表情が明るくなり、それとほぼ同時になのはは顔を外へ向けた。
本人としては今の顔を見られたくないのだろうが、雰囲気でバレバレである。
「隊長達の、お仕事着！」
「・・・・・・・・・」
瞬間。
なのはの気配が、明らかに不機嫌のそれへと変化した。

ホテル・アグスタ。

「いらっしゃいませ、ようこそ」

受付の男性が、にこやかな笑顔で来客者を迎える。
と、カウンターに管理局員の証明書が差し出され、思わず顔を上げる。

「こんにちは、機動六課です」

そこには、煌びやかなドレスに身を包んだ、三人の美女だった。

閑話休題。

「ほら、なのはちゃん！たまにはその仏頂面やめたらどうや？」
「そうだよ、せっかく綺麗なのに・・・・・・」

会場の警備状態を確認しながら、なのは、フェイト、はやての三人はホテル内を歩き回る。
とは言え、一般的な非常事態に対応できることは確認したので、不審な人間や物が無いかの見回りなのだが。

そんな中で、はやてとフェイトの二人は、未だ不機嫌なのはを宥めていた。
対するなのはは仏頂面こそ解かないものの、二人の話は聞いている様である。
ところで、先にも記述したが、今日は骨董品のオークションが行われる。
数多くの要人や骨董マニアが集まり、開始時間までの談笑を楽しんでいた。
なのは達三人も、見回っている間に数多くの集団を見かけている。
それぞれ見覚えの有る顔だったり、見知らぬ顔だったり、様々な人間がいた。
そんな中、ふとなのはがとある一団に視線をずらすと、

「――――――ッ！！？」

様々な感情が、体中を駆け巡った。

「・・・・・・？」
「なのはちゃん？」

突然立ち止まったなのはに、どこか心配そうな表情を向ける。
なのははそれに気付かず、食い入るように、集団の中心を見ていた。
そこにいたのは、銀色の長い髪の、どちらかといえば細身の体格の青年。
彼は柔らかい微笑を浮かべて、紳士淑女と会話している。
と、その血のような、宝石のような、真っ赤な目が、なのはを捕らえた。
途端に、なのはの体が、心が、戦慄する。
記憶が蘇り、怒りや悔しさと言った感情が、奥歯を噛み締める。
対する青年はこちらを凝視しているようでいて、しかし周囲との会

話は成り立っているようであり、余裕綽々だ。
その口元が、怪しい笑みに彩られて、動いた。

――――話なら後にしようよ

――――お友達が心配してるよ？

――――せっかく綺麗になってるのに、台無しだ

くすくすと小馬鹿にしたような笑い声が、聞こえた気がした。
なのはは必死になって無理矢理感情を押さえ込むと、踵を返して再び歩き出した。

「なのはちゃん・・・・・！」
「大丈夫？顔色、酷いよ？」

顔を覗き込み、心配そうに顔を曇らせる二人。
なのはは少しの間、俯いて黙った後、突然顔を上げて、

「・・・・大丈夫だ、すまない」

満面の笑みを見せた。

「・・・・・・・・・っ！？」
「・・・・・・・・・っ」

なのはが初めて見せた笑顔に、今度ははやてとフェイトが戦慄した。
何か、言いようのない威圧感を、強制的に読み取らされたような感覚を感じて、顔を強張らせる。

「・・・・・・・・裏手を見てくる」

瞬きの間に表情を戻し、なのはは小走りでその場を去っていった。

「・・・・・・・・・・っ」

建物の影。
顔を真っ青にしたなのはが蹲っている。

――――あいつ、何でここに!?

「・・・・・・・・・分からない」

先ほどから心臓が暴れており、呼吸も若干苦しい。
重く重く息を吐き出しながら、無理矢理それらを落ち着かせて、立ち上がる。

この場にいるのが独りだけだからなのか、脈打つ音と、呼吸音がやけに大きく聞こえた。

「・・・・・・・・・オークション開始まで、あとどれくらいだ？」

――――3時間27分、でしょ？

『ｙｅｓ』

大きく息を吐き終えて、確認を取り、室内に戻ろうとした時だった。

「こちらにいらっしゃいましたか」

「・・・・・・・・・っ」

振り返った先、先ほどの男と同じ銀髪を揺らした少女が佇んでいた。エリオやキャロとあまり変わらなさそうな外見だが、きっちり着こなしたスーツと光の無い瞳が、雰囲気を大人っぽく見せている。

「・・・・・・・・・ツクヨミ」

「はい、お久しぶりです、イザナミ」

「・・・・・・・・・なのはだ」

ツクヨミと呼ばれた少女は一礼すると、なのはを真っ直ぐに見つめて、

「主より言伝です、『話は後で、今は任務に集中しなよ』だそうです」

「そんなことといちいち言わなくていい！！」

苛立たしげに怒鳴りつけられても、平然とした態度を崩さないツクヨミ。

なのはは束の間睨みつけたが、もう一度大きく息を吐いて、

「・・・・・すまない」
「いいえ、身体、健康、ともに問題はありませんから」
「・・・・・・そうか」
「はい」

一旦、ツクヨミは言葉を切ってから、

「我々はあなたの任務の邪魔はいたしません・・・・・・が、主の案により、あなたが腑抜けているようであれば、即刻制裁を与えるように言われております」
「・・・・・腑抜けてはいない、心配無用だと伝えろ」
「あなたがそう言うのであれば・・・・・しかし、最終的な判断を下すのは主ですので、そのときはどうかご容赦を」
「・・・・・好きにしろ」

『この場にいたくない』と言わんばかりに吐き捨てて、なのははホテルの中へと戻っていく。
ツクヨミは後ろから、変わらない虚ろな目で見送った。

ｓｉｄｅ　スバル

オークション開始まで3時間半。
あたし達フォアードは、外の警備をやってる。
今のところ、不審な人や物は無し、異常も見られない。
けど、油断は出来ないよね、ガジェットがこないとも限らないんだし・・・・・・。
・・・・・あー、『原作』見とくんだったなぁ。
そしたら、ティアとか、なのはさんのこととか、もうちょっと助けられるのに。
それに、ガジェットが来るって分かってたら、対処法とか考えられるもんね。

「（でも、今日は八神部隊長の守護騎士団も、全員集合かぁ）」
「（そうねぇ・・・・・・あんたは結構詳しいわよね？八神部隊長とか、副隊長達のこと）」

んー、そりゃぁ、

「（父さんとかギン姉あたりから聞いたくらいだけど、八神部隊長が使っているデバイスが魔導書型で、名前は夜天の書っていうこと）」

それと、

「（副隊長達とシャマル先生、ザフィーラは八神部隊長個人が保有している特別戦力だってこと、で、それにリイン曹長を含めた五人そろえば、無敵の戦力ってこと）」

ま、八神部隊長達の出自とかは特秘事項だから、あたしも詳しくは知らないんだけど。

「（レアスキル持ちの人達はみんなそうよね・・・・・・なのはさんだって、魔力変換無いのに、風とか氷使うし・・・・・・）」

「（ティア、何か気になるの？）」

「（別に・・・・・・）」

「（そっか、じゃあまた後でね）」

今のところ異常は無いんだけど、任務に支障がでるのもアレなので、キリのいいところで念話を切り上げて、集中することにした。

ｓｉｄｅ　ティアナ

・・・・・・・スバルとの話を終えて考えてみる。

六課の戦力は、無敵を通り越して明らかに異常だ。

八神部隊長がどんな裏技を使ったのか知らないけど、隊長格全員がオーバーＳ、副隊長でもニアＳランク。

まだ１０歳になったばかりなのに、Ｂランクを持っているエリオと、レアな竜を召喚できるキャロ。

他の隊員達だって、前線から管制まで、未来のエリート達ばっかり・・・・・・。

相棒のスバルは、危なっかしいところもあるけど、潜在能力と、優しい家族のバックアップ、そしてレアな魔力変換『毒』を保有している。

――自分の凡人っぷりを、これでもかというくらいに、思い知らされた。

――けど、

そんなの関係ない・・・・・・兄さんの為にも立ち止まれない。

某所。

鬱蒼と生い茂る木々の間、二つの人影が見える。

体格のいい男性と、小柄な少女の二人だ。

「ここに、お前の探し物があるのか？」

「・・・・・・・・」

問いかける男性に、少女は無言で答える。

「・・・・・・何か、気になるものでもあるのか？」

「・・・・・・・・」

また無言、しかし今度はこっくり頷いた。

と、そこに、小さな、画鋲を思わせる虫が飛んできて、少女が差し出した指先に止まる。

虫は何かを伝えるように、羽を羽ばたかせていた。

「・・・・・・何か、あったのか？」

再び問いをぶつける男性に、少女は口を開いて、

「ドクターのおもちゃが、近づいて来てるって」

「・・・・・・・・・っ！！」

一人屋上でサーチャーを巡らせていたシャマルは、反応した。

何者か――――九分九厘ガジェットだろう――――の正体を探るべく、シャマルはオペレーターに通信をつなぐ。

『はい！来ました、ガジェットドローン陸戦？型！機影三十、三十二！』

『陸戦？型、２、３、４！』

前線メンバーに緊張が走り、全員の目つきが変わった。

『前線各員、状況は広域防衛戦です、ロングアーチ１の総合管制に

あわせて、わたし、シャマルが現場指揮を行います！』
「スターズ3、了解！」

この時、廊下を疾走し外へ向かうスバルは、言いようのない胸騒ぎを覚えていた。

「（やっぱり来たね、スカリエッティのおもちゃ）」
「（？型が三十以上と、？型が3～4機ほどです、如何なさいますか？）」
「（放っておきなよ、前線張ってる餓鬼共に任せておけばいいだろう）」
「（はっ）」

ツクヨミとの念話を終えた青年は、視線をずらす。
その先にいたなのはは、ガジェットが来たことを知ったのか、表情がより険しいものになっていた。
が、それが分かりにくくなっているのは、さすがと言うべきか。
青年は思わず鼻で笑い、前を見る。
ちょうど、無限書庫の司書長にして、考古学者であるという、自分と同い年くらいの青年が紹介されているところだった。

――君がどう変わろうと、もう逃げられない・・・・・生まれ

た瞬間から死ぬ瞬間まで、『鍵』からは逃げられないよ

うっすらと優しく微笑むその裏で、青年は嘲笑を蓄えていた。

第九話アグスタ・前編（後書き）

今回なのはと接触した少女、意外とキーパーソンだったり、そうでもなかったり・・・・・・。
誤字脱字あらば、感想へどうぞ。
それではお返事の部屋っ！

白眉様
ぶっちゃけ、自分で読み返すと、結構なのはさんをいじめてる感があったので、少々不安でしたが、そう言って頂けるととても励みになります！
とりあえず、ペルソナの口上を実際に小説で使っていいですか？
・・・・・・・いや、かっこよかったので・・・・・・（苦笑
？？？
「けれど、もう遅いんだよ
始まった時からずっと、強制的に終わらせ続けて
後戻り出来ない所まで来ちゃったから
この手はすでに汚れている、みんなと触れ合えば、それだけで迷惑になる
だから、もう後戻りはやらないの
・・・・・・・忠告ありがとう、『わたし』
だけど、ごめんね

本当にもう、手遅れなんだ」

さーて、次回は戦闘パート。
ガジェットを撃退すべく、ティアナ達が奔走する。
そして・・・・・・！
それではこの辺で。

第十話アグスタ・後編（前書き）

大変長らくお待たせしました、十話です。

第十話アグスタ・後編

大降りのアッパー、はっけい、タックル、左右のストレート、ハイキック。
まだ成長途中でありながらも、十分に鍛えられた体から怒涛の連撃が繰り出され、ガジェットを葬る。
弓での攻撃も加わっているそれは、まさに向かうところ敵なしといった状態だ。
そんなスバルの背中を見つめながら、ティアナは複雑な表情を見せていた。
スバルの立ち回りは、六課に来る前と比べて格段によくなっているように感じた。
なのはなどのベテランから見ればまだまだ穴だらけだろうが、少なくとも、ティアナ自身は今のスバルの実力を高く評価していた。
素直に、相棒として自慢したいくらいのものなのだが、反面、同じくらいに微妙な気持ちだった。

（やっぱり、スバルはすごい）

その背中を見つめるティアナは、援護を行いつつ、すっきりしない思いを抱く。

ｓｉｄｅ　なのは

（ガジェットか）

――――ねー

会場警備をしつつ、ロングアーチから定期的に入ってくる状況を整理、確認する。

今のところ、フォアード達はうまく立ち回れているようだが・・・・・。

――――なーんか嫌な予感すんのよねー

（・・・・・・そうだな）

・・・・・・杞憂に、終わるといいのだが。

「はあぁっ！」

大きく豪快に、レヴァンティンを振る。
灼熱の斬撃が辺りを嘗め回し、ガジェットを殲滅する。
さらに歩法を駆使して接近、陸戦？型の巨大な胴体を両断した。

「ておあああ――――っ！！」

一方のザフィーラは、雄叫びとともに魔法陣を展開。
楔を思わせる青白い魔力が、ガジェットを貫いた。
シグナムはレヴァンティンを鞘に収めて、周囲を警戒しつつ見渡す。
隣に降り立ったザフィーラも同様に、辺りを見渡した。

「粗方片付けたか？」
「そのはずだが・・・・・・・・っ！！」
「・・・・・・・っ」

二人同時に、振り返って、思いっきり舌打ち。

「新手か！？」
「しかも、ホテル付近に出現だと！？」

「我は請う、小さきもの、羽ばたくもの・・・・・・」

某所。
同行者である男性に、コートを預けて、少女が詠唱している。
足元に展開された陣の四方から、両生類の卵を思わせる触手が伸びて、のた打ち回っている。

「言の葉に応え、我が命を果たせ・・・・・・」

一瞬、煌き。

「・・・・・召喚」

バチュン、と触手が弾けて。
小さな虫の群れが姿を現した。
内の一匹が少女の指にとまり、彼女はそれに作戦を伝える。
『了解』と言いたげに、羽を動かしてから、虫たちはいっせいに飛び立っていった。

「・・・・・・・！？」

一方、ホテルアグスタ。
キャロは何かに反応して振り返り、感覚を研ぎ澄まして探る。
そしてそれが何なのかを理解してから、すぐさまティアナ達に通信をつなげた。

「（みなさん気をつけてください、増援、来ます！！）」

手短にそう伝えた瞬間。
魔法陣が展開し、そこから見慣れたカプセル型のボディ――ガジェットが来た。

「スバル！」
「分かってる！！」

レーザーを避け、木々を足場にし、スバルは飛び上がる。
カートリッジロード。
体をひねり、その勢いで右腕を前に突き出して、

「リボルバーシュート！！」

衝撃波を撃った。
放たれたそれは周囲の木をなぎ倒すものの、ＡＭＦに打ち消された

り、避けられたりして、ガジェットには通用していない。
スバルは苦い顔をして、一旦下がった。

「衝撃じゃだめかぁ～」
「魔力混じってんだから、当たり前でしょ！！」

苦笑した彼女に、ティアナが一喝。
スバルはもう一度苦笑いをして、再び飛び出す。
と、すぐ横をオレンジ色の魔力弾が横切っていった。
説明されなくても分かる、ティアナが撃ったものだ。
対ＡＭＦ用に魔力をコーティングされたそれを見て、ふとスバルは妙案を思いつく。

（といっても、単純なことなんだけどねぇ）

口角を少し吊り上げて、ガジェットの障壁を引っぺがし、一蹴。
勢いで隣にいた個体も蹴り飛ばそうとしたが、ひょい、とまた避けられた。
ここで、スバルはふと疑問を抱く。

「（ティア、気づいてる？）」
「（ええ、動きがよくなってる・・・・・！）」
「（遠隔操作か、何かだろうね・・・・っと！！）」

アクロバティックな動きで攻撃を避け、ウィングロードを発動し、宙を駆けながら、ガジェットの様子を観察。
ティアナの弾丸を、安々とかわしているのが見えた。
実は、召喚されてきたガジェットには先ほど少女が召喚した虫が取り付いているのだが。
小さい上に動き回っているゆえ、二人は気がついていなかった。

「（『毒』、使う？）」
「（名案だけど、ＡＭＦに消されるのがオチよ？）」
「（それなんだけど、ちょっと考えがある）」

首をかしげるティアナに、スバルは笑って見せた。

「っおおおおおおおおおおおおおお！！！」

レーザーを弾き返し、雄叫びを上げながら、スバルは弓のカートリッジをロード。
右手を添えて、照準を合わせる。
装てんされた魔力の矢に、もう一層魔力がコーティングされていく。

「（ティアみたいに、全部を覆うことは出来ないけど・・・・・・！）」

矢の形も変わる。
先端が極端なまでにとがっている。

「（貫通力プラス、全部じゃないけど、魔力のコーティング・・・・・・これなら！）っいっけぇ！！」

ガジェットに突っ込んでいき、カメラアイを狙って、

「矢尻のっ・・・・・・毒ぅっ！！！」

撃った。
矢はまっすぐ飛んで、障壁、続けてＡＭＦに接触。
激しい火花をちらして、競り合いを始める。

ＡＭＦが若干勝っているように見える、が、

「うおおおおおおおおおっ！！」

そこに、スバルが突進してきた。

強化魔法で威力が底上げされた拳が、杭を打ちつけるように矢を殴る。

派手な音を立てて、矢が貫通した。

一拍置いて、突然ガジェットが狂ったように動き回り、見境無くレーザーを撃ちだす。

スバルはそれを必死に避けていたが、成果は上々だった。

流れ弾が他のガジェットに命中し、破壊。

矢を撃ち込まれたガジェットは暴れるだけ暴れて、やがて静かに事切れた。

「（・・・・・・スバル、やっぱりすごい・・・・・・けど）」

レーザーを撃ち帰し、弾丸を撃ち続けるティアナは、表情を引き締める。

「わたしだって・・・・・・・・！！」

奥歯をかみ締めて、自身に一喝。

顔を上げて、スバルに伝える。

「スバル！クロスシフト、行くわよ！！」

「おうっ！！」

スバルはすぐさま応えて、再びウィングロードを生成した。

派手な動きでガジェットを引き付け、出来る限り破壊していく。
その隙にティアナは魔法陣を展開。
クロスミラージュを構え、チャージを始める。

（証明、するんだ・・・・・・）

脳裏をよぎるのは、今は亡き兄の顔。
そして、その死を貶した、管理局の上官達。

（特別な才能や、凄い能力が無くたって・・・・・・）

自分が受け継いだ、兄の技術。

（一流の隊長達のいる部隊でだって、どんな危険な戦いでだって・・・・・・！！）

無能ではないことを、思い知らせてやるために。

――――ランスターの弾丸は、全てを撃ち抜くんだって！！！

「クロスファイア・・・・・・・・！！」

照準、魔力のチャージ、ともに完璧。
後は、

「シュート！！」

撃つのみ！！
生成された三つの弾丸が突進し、ガジェットを次々と粉砕していく。
だが、それを制御しているティアナは、少し辛そうだ。
だからだろうか？
うちの一発が、スバルに向かっていることに、気づくのが遅かった。
スバルも反応したようだが、回避も防御も間に合わない。
最悪の展開を浮かべて、頭の中が真っ白になった瞬間だ。
弾丸とスバルの間に、赤い影が割り込んで打ち落とす。
そいつはティアナをにらみつけると、怒鳴った。

「何やってんだ馬鹿！！無茶やった上に味方撃ってどーすんだ！！？」

「ヴィ、ヴィータ副隊長！」

赤い影――ヴィータは、かなり立腹している様子だ。

「その、これもコンビネーションの一つで・・・・！」

「嘘つけ！明らかに直撃コースだったろ！」

スバルの必死のフォローを斬り捨てて、ヴィータは一旦言葉を切る。
そして息を吸い込んで、

「もういい！！お前ら、すっこんでろ！！！」

「ガジェットは全機撃破か」
――まぁ、『無事』がつかないのが、ちょっと残念だけど
時は進んで、ホテル・アグスタ内。
オークションも無事に終了し、制服に着替えなおしたなのはは壁にもたれかかって、先の戦闘の報告を閲覧していた。
――ティアナがミスショットか・・・・・・大丈夫かしら、あの子
「・・・・・・分からん」
そう、ため息をこぼした。
それから、壁から離れて、現場に向かおうとした時。

「なのは」

不意に、後ろから声をかけられた。
振り返って見ると、見覚えの有る金髪がそこにいる。

「・・・・・・・ユーノ」
「うん、半年ぶりだね」

ユーノはそう苦笑いして、なのはに歩み寄る。

「君がまだ無事なところを見る限り、まだ『負けて』はいないみたいだね」
「・・・・・・おかげさまでな」
「どういたしまして」

相変わらずの素っ気無い態度に、再び苦笑いしてから、ユーノは懐から端末を取り出した。

「はい・・・・・また関係ありそうな資料を見つけた、参考にはならないと思うけど、とりあえず目は通しておいて」
「・・・・・・すまない、助かる」

少しだけ、目を細めて。
なのははそれを受け取った。

「それではわたしはここで・・・・・後始末をしなければいけないのでね」
「分かった、それじゃ・・・・・また何か分かったら、連絡するよ」
「・・・・・・いつも悪いな、頼んだ」

小さく手を振って、二人は別れた。

現場の調査と後始末が終了し、なのははティアナを探して回る。
ちょっとした指導と、彼女なりの励ましを伝えるためだ。
・・・・彼女自身、柄にもないと思ってはいるが、仮にも自分はティアナの上司。
それくらいはやらないといけない気がした。
森にはいないことを確認してから、ホテルの裏手に行こうとした。
そのときだった。

「や、ごきげんよう？」

体が、硬直する。
続けて熱いものがこみ上げて来て、気がつくと、胸元に下げていたレイジングハートを武器のみ展開していた。

刃を、背後のそれに、振り向きざまに突きつけようとするが、

「どうかお鎮まりを、イザナミ」

それよりも早く、ツクヨミが二振りの剣を交差して、首に突きつけていた。

「あなたのその行動は想定内ですが、『優勝者』が出る前に、『優勝商品』を破壊するのは避けたい事態ですので」

「・・・・・・・・っ」

舌打ちし、ただ悔しそうになのははツクヨミが守っている人物を睨む。

人物ははははっと気の抜けた笑顔を見せて、

「物騒だなぁもう、もう少し抑えられないのかい？」

くすくすと笑うその声が、なのはのまともな思考回路を次々停止させていく。

今はツクヨミの剣があるとはいえ、少しでも油断すれば飛び掛っていきそうな勢いだ。

「ははははっ！まぁ、元気そうでよかったよ」

再び気の抜けた笑顔。

そこから、瞬きのうちに視線を鋭くさせ、なのはを射抜く。

「ボクが君の前に来たのはただ一つ、忠告さ」

「・・・・・・・」

とりあえず黙り込み、耳を傾けるなのは。
人物はくすくす笑って、続けた、

「・・・・・原作が起こっている間、バトルロワイヤルは一旦休止にする、この騒動が終わるまで、自分を鍛えるなり何なりすればいい」

ただし、

「再開したとき、少しでも腑抜けていたら、お仕置きだよ？お友だちを守りたいなら、誰にも心を許しちゃいけない、それが『兄さん』であってもだ、でないと、

――――君が大切にしているもの、『また』壊しちゃうよ？」

「・・・・・・・・っ！！！」

なのはの脳裏に過ぎる、白と紅。
それらを思い出すだけで、背筋が凍りつく。
人物はツクヨミを下がらせると、にっこり笑って、

「まぁ、君なら大丈夫さ、いつもどおり『いい子』にしてれば、何も起こらないんだから」

今度は無邪気に笑いながら、ツクヨミを伴って去っていく。

一人残されたなのはは、俯いたまま呆然としていた。
が、やがて思考が再起動し、思い出す。
「・・・・・・ティアナ、探さないと」
その足取りは、少しふらついていた。

第十話アグスタ・後編（後書き）

という十話でした。
誤字脱字、突っ込みがあれば、感想へどうぞ。
それではお返事の部屋！返信お待たせしてすみませんでした。

白眉様
つまりなのはさんはみんなに愛されてるってことですね、わかります（（
ペルソナの口上の件、ありがとうございます！大事に使わせていただきますね！
あと、借りたお金はきちんと返しましょう？部隊長ｗｗｗ
惑星直列・・・・・・冗談抜きで起こせそうだから、怖いｗｗｗｗ
？？？
「よかった、そっちはそれだけ心配してくれる人がいるんだね

・・・・・ちょっと、羨ましいかも

でもこっちの今は、わたしが選んだ現状だから、我慢しなきゃ、ね

・・・・・言いたいことは、なるべく言ったほうがいいと思うよ

でないと・・・・・・・。

さて、次回はついに・・・・・・・。
それではｗｗ

第十一話それぞれの・・・（前書き）

登校前にＵＰ。
アニメ本編を見返さずに書いたので、ところどころおかしいかもです・・・・。

第十一話それぞれの・・・

ｓｉｄｅ　ツクヨミ

「ツクヨミ」
「――――ここに」

主より呼び出し、要件が告げられるまで待機。

「今『あいつ』から連絡があってね――――ちょっと、困っているみたいなんだ」
「？、理解しかねます、それとわたしとどういった関係が？」
「襲撃したい時期があるんだけど、どうも詳しい日時が分からないらしくてね、探ってもらいたいんだってさ」

把握、つまり今度の任務は監視。

「そういうこと、ほんとうは僕がいくつもりだったけど・・・ほら、『ご老人方』がうるさいからね」

主、笑う。
今の微笑みは自嘲のものと確定。

「というわけだから、頼んでいいかい？」
「御意、もとよりこの身はあなたの駒、忠実な配下にございます」
「ふふっ、ありがとう」

主、再び笑う。
今度は喜びからきたものと確定。

「それでは、行ってまいります」
「うん、体には気をつけて」
「命令とあらば」

準備、および移動を開始する。
目標は――――――

ｓｉｄｅ　スバル

「――――――んあ？」

気の抜けた声が出てきた。
ぼやけた頭を叩いたり振ったりして、無理やり起こす。
いつもなら少し早く起きてるティアが、『はやく歯磨くぞー！』っていうんだけど・・・・。

「・・・・よい、しょっと」

ベッドから降りて、辺りを見渡して見る。
予想通り、ティアナはまたいない。
ベッドを除いて見たけど、もぬけの殻だし、やっぱり先に行っちゃったみたいだ。
・・・・・最近、正確にはホテル・アグスタの一件以来。
ティアはやけに早く起きて、自主練をやっているらしい。
――――よっぽど、悔しかったんだろうな。
ティア、よく自分のことを凡人だって言ってたし・・・・・・・あたしが思ってる以上に深く根付いていたのかも・・・・・・・・・・。
って、着替えないと。
朝練遅れるなんて洒落にならないって！！
時間も迫ってるし、もう行かないと。
洗面用具を持って、洗面所に向かう。

ｓｉｄｅ　なのは？

――――・・・・・だいじょーぶ？

「・・・・・とりあえず」

自室。

ベッドの上で体育座りをしたまま動かないなのはに、声をかける。

なのはは顔をうずめたまま、生返事を返した。

そのまましばらくじっとしていたけど、しばらくしてから顔を上げて、動き出す。

・・・・あれ以来、なのはの精神的なコンディションはガタ落ちで・・・・・・。

正直、いつ倒れるか心配で心配で・・・・・・・。

「訓練、行かないと」

――・・・・・今からででも、十分間に合うわね、でも、ちゃちゃっと準備しちゃいなさい

「・・・・・・ん」

ゆっくりベッドから降りて、パジャマを脱いだ。

髪をとき、歯を磨いて、着慣れた『懐刀』の制服に腕を通す。

それから最低限の化粧を施せば、機動六課付きの教導官に早変わり。

長い髪の毛は結んでもよかったんだけど、いつも下ろしてるわよね。

前は結んでいたけど、今はは絶対に結い上げようとしないし・・・・。

あの子なりの、意地があるんでしょう。

「・・・・・いこう」

――ええ

部屋の鍵を閉めて、訓練場へ向かう。

ｓｉｄｅ　ティアナ

――――４７、４８、４９、５０、５１・・・

光るターゲットに、銃口を向けて引き金を引く。
反応が出たら、また次のターゲットに銃口を向ける。
以降、ひたすらこれの繰り返し。
そうしながら思い出すのは、ホテル・アグスタでの一部始終。
――――あの時のあたしは感情に任せて、らしくないミスを犯してしまった。
下手をすれば、スバルを堕していたかもしれない・・・・そう思うと、自分の凡人っぷりが呪わしい。
もっと、正確に、もっと、するどく・・・・！
・・・・そういえば、ここまでやるのはもう一つ理由があったりする。
それは、その後におきた事だ。
裏の警護と称して、スバルを追っ払ったあと、森を彷徨っていたら、なのはさんに出会って。
なのはさんはどうやら、あたしの一件を聞いて、軽い指導をしに来たらしい。
といっても、その辺を探せばあるような文句を並べた後、あたしの反省を確認して、去っていった。
・・・・・たったそれだけのことだったのに、何でか無性に腹が立ってきて――――。
自分でもよく分かってないけど、どうやらあたしはあの人を見返し

たいらしい。
まぁどっちにせよ・・・・・凡人は死ぬ気で頑張らないと。
少しでも気を抜けば、またあの時みたいに、だから――――

ｓｉｄｅ　ヴィータ

「お、なのは！」

訓練場に向かってると、ひたすらパネルを操作してるなのはを見つけた。
声をかけるけど、なのははこっちに気づいていないらしくて、こっちを見ない。
・・・・・いや、意図的かもしれないなぁ。
証拠に、ほら、

「おい、おはよ」
「・・・・・・ヴィータ副隊長か」

六課に来たばっかのころの、近づくもん全部拒絶する目をしてやがる。
・・・・・分かりにくいかもしれないけど、六課に来てからのなのはは、少しずつ変わっていってたんだ。
さすがに口調とかは戻ってないけど、でも、設立当時に比べて、雰囲気が幾分か柔らかくなってたのは確かだ。

けど、こないだの――――ホテル・アグスタの任務後から、またあのピリピリした威嚇の雰囲気に逆戻りしていた。
・・・・・・音信不通だった四年間について、なのはは何も語らない。
言いたくないならそれでいいんだけど、ここまで拒絶されると、むしろ話してくれなきゃ、どうしてやればいいのか、分からなくなる。
・・・・・・何にも分からないけど、確実になにかあったのは間違いないだろう。
でなきゃ、明るくて、正義感が強くて、優しかったあいつが、こんな現実主義みたいなお堅い感じになるのはありえない。
――――――辛いなら、辛いでいいんだ。
言いたくないなら、あたしらも詮索しない。

「――――――――でも」

ちょっとくらい、甘えてくれたっていいだろ？
そりゃ、一度は裏切ったから、信用されてないのかも知れないけどさ。
それでも――――――

「おはよーございまーす！！」
「・・・・おっ、来たな！新人ども！！」

背負った荷物くらい、持ってやれるから、な。

ｓｉｄｅ　なのは

「おはようございます！なのはさん！！」
「・・・・・・ああ」

・・・・・・・やめて。

「あの、おはよう、ございます・・・・！」
「おはようございます！」

・・・・・・・やめて。

「・・・・・おはようございます、なのはさん」

・・・・・・・声をかけないで。

「全員、そろったな・・・・・それでは、早朝訓練を開始する」
――――はいっ！！

・・・・・そんな無垢な表情で、こっちを見ないで。

「それでは、キャロはわたしと・・・・」
「はい！よろしくお願いします！！」

・・・・・・純粋な目を、向けないで
人殺しだよ？近づけば必ず厄介ごとを持ってくる疫病神だよ？
わたしに近づけば、死んじゃうよ？
大切なものが、なくなっちゃうよ？

「それでは射撃訓練を行う、フリードに頼らず、シューターだけで
弾幕を凌げるだけ凌いでみせろ」
「はいっ！！」

・・・・・お願い、お願い、お願い・・・・・・・！
これ以上わたしを、腑抜けさせないで・・・・・！！

ｓｉｄｅ　はやて

「・・・・・ふぅむ」

グリフィスの報告を聞き終えて、ため息。
――――機動六課が始まってから、なのはちゃんと再会してから。
音信不通やった間のなのはちゃんの動向を、それなりに探って見てはいるんやけど・・・・・・。

「新暦００７２年からの足取りが掴めへんかぁ・・・・・・」
「申し訳ありません、こちらも尽力してはいるのですが・・・・」
「・・・・いんや、ええよ」

中学を卒業した後、管理局に戻ってきたのは確実や。
けど、それ以降の記録が閲覧出来ひん状態になっとる。
・・・・・トップシークレットちゅうことやろうけど、それでも、うちは知りたい。
六課にきてからのなのはちゃんは、最初の頃に比べると、柔らかくなっとる。

でも、ホテル・アグスタでの一件から、再会するまでの態度に戻ってしもうとるようや。
原因ゆうたら・・・・あの時、なのはちゃんが見とった一団やろうね。
あの中の誰かが、なのはちゃんが変わってしまう切欠やったんやろうけど・・・・・。
今となっては、よう分からん。
・・・・・・・それでもな、

「あ、いかんいかん・・・・・ありがとうグリフィス、下がってええよ」
「はい」

それでも、友だちやったから。
つっかえ棒くらいには、なってやりたいんよ。

ｓｉｄｅ　ティアナ

「ティーアっ！！」
「わっ！？」

早朝訓練を終えて着替えに向かってると、後ろからスバルが飛びついてきた。
衝撃で前のめりに倒れるけど、なんとか踏ん張って持ちこたえる。
・・・・・ったく、元気があるにもほどがあるっての。
あんなにしごかれて、まだ動けるの？
あたしはもうほぼ限界なんだけど・・・・・。

「っと、ごめん、大丈夫？」
「・・・・・別に」

あたしの疲労を察してくれたのか、スバルはすぐに離れてくれた。
無意識にスバルの方を見て、ふと、左手に目が行く。
――――スバルは、転生者だ。
だから、『毒』なんていうレアな魔力変換を持っている。
今は無いけど、左手に装備された弓は、いまどき珍しい木製。
何でもイチイと呼ばれる木を使うことで、威力が上がる能力らしい。
・・・・・他の転生者に比べたら、随分地味なんだろう。
けど、それを補うように武術を習得していて、弓との連携もばっちりで。
凡人のあたしからしたら、十分すごい。
・・・・・・だから、そんな相棒が、時折・・・・・・。

「ね、ティア！」
「・・・・・・何？」

・・・・・・あたし、最低だな。
一番の親友に、何抱いてた？
ああ、もう、ほんっとにいやだ。
・・・・・だから、かもしれない。

「自主トレ！あたしも付き合っていい？」
「・・・・はぁ？」

相棒の口からでた提案に、怪訝な顔で返してしまった。

「・・・・何でよ」

何とか顔を平坦に戻しながら、スバルがしゃべり出すのを待つ。
・・・・やっぱり、さっきの返事がだめだったみたいね。
少し、顔が曇ってた。
でもそれも束の間、すぐにぱっと明るくして、

「ティアナばっかり自主トレするの、ずるいもん！それにほら、Ｂランク試験のとき言ったでしょ？『あたしの目の前でティアの夢を躓かせるのはいやだ』って」

百面相して必死に訴えてくるスバル。
・・・・・・よーするに、

「危ない橋は一緒に渡ってくれるってこと？」
「そゆこと！っていうか、危ないかどうかは渡りきってからじゃないと分からないじゃん！」

そう言って、からからと笑ってくれた。
・・・・・目の前にいるのは、つい最近自分を落しかけた人だっていうのに、この子はもう・・・・・。
――――それでもまぁ、少なからず、こいつが一緒に居て安心出来るのは確かよね。
ったく・・・・・アホかと思えば、たまにかっこいいことをさらっというもんね。

「・・・・わーったわよ」
「わはーっ！やたー！」

承諾すると、スバルは手放しで喜んでた。
・・・・・・一人でうだうだ悩んでたのが嘘みたい。

――――――ちょっとくらいなら、人を頼ってもいいのかもね。

ｓｉｄｅ　なのは？

――これは・・・・・・

最近ティアナが、単独での過酷な訓練をやってるってのを知って。
動機とか、あたしなりに調査してたんだけども・・・・・・。

――あたしらとそっくりじゃん
「・・・・何が？」
――あら、いたの？

気がつくと、寝込んでると思ってたなのはがすぐ後ろにいた。
別に隠す理由もないので、調べたデータをなのはに渡す。
案の定、なのはは顔をしかめていた。

「・・・・・・兄のため、か」
――犯人取り逃がして亡くなったらしくてね、葬列で思いっきり罵られたらしいわよ？
「・・・・・・・」

・・・・・よっぽど、悔しかったんでしょうね。
将来の志望も、兄の夢だった執務官らしいし・・・・・・。
それだけ自慢のお兄ちゃんだった・・・・ってところかしら。

「・・・・・なんにせよ、どうにかしないと」
――ええ、このままじゃ危険ね

ｓｉｄｅ　スバル

ティアナとの自主トレを始めて数日。
今日の訓練は模擬戦で、今までの成果を試すにはうってつけの日。
相手はもちろんなのはさんだ。
・・・・・・こういうの、相手にとって不足なしって言うんだろうね。
勝てないまでも、せめて一撃は入れないと・・・・・・！！

「それでは、始めにスターズから・・・・・準備はいいな？」
「はいっ！！」

よーっし！やるぞー！！

ｆｒｅｅ　ｓｉｄｅ

スバルがウィングロードを展開したことにより、試合は開始する。
動き出そうとするなのはに、ティアナがすかさず魔力弾を撃ち込んで視界を奪い、姿を隠し、そこからさらに魔力弾の嵐を放った。
一方のなのはは手馴れた様子でレイジングハートを振るうと、魔力弾を弾き返し、撃ち落し、斬り捌く。
そうしているところへ、スバルが雄叫びを上げて突っ込んできた。
それを体をひねって避けたなのは。
一閃をスバルに浴びせるが、手ごたえは感じられず。
スバル『だったもの』は衝撃で掻き消えていった。

（幻術・・・・・ティアナか）

幻影に挟み撃ちにされては、流石のなのはもたまったものではないので、一旦空へ上がった。
ある程度上がったところで、ウィングロードを走るスバルを見つける。
レイジングハートに探らせ、実態であることを確認してから接近、斬りかかる。
スバルはナックルで受け止めると、開いた左手でストレートを打ち出した。
なのははそれをスバルごと弾き飛ばすことで回避。
バックステップで距離を取り、ティアナを探しだす。
すると再びスバルが突撃。
ナックルとレイジングハートがぶつかり、火花が散った。

「・・・・・スバル」

と、ここで、なのはが口を開く。

「積極的なのは構わんが、突撃しすぎると怪我するぞ」
「すみませんなのはさん！でも、ちゃんと避けますから！！」

互いに弾いて鍔迫り合いを切り上げ、ここでなのはが突然あさっての方向に構える。
カートリッジを幾分か消費し、ビルの一角に砲撃を撃ち込んだ。
爆発し、もうもうと煙を上げる廃ビル。
するとその中から、埃まみれになったティアナが飛び出してきた。
ティアナは着地すると、なのはめがけて2～3発撃ちだす。
なのはは飛行魔法と歩法を駆使して素早くティアナに近づくと、斬りつけた。
ティアナは咄嗟にクロスミラージュの銃口にダガーを生成。
交差させてレイジングハートを受け止める。

ギリギリと再び鍔迫り合いが始まったが、それも束の間。
なのはの背後からスバルが飛び掛ってきたことにより、すぐに切り上げられた。
ティアナは素早く散開の合図を送り、二人は別々の方向に走り出す。
宙に静止し、構えていたなのは。
と、背後から迫ってきた魔力弾に反応し、防御。
再びティアナと対峙し、互いに睨み合った。

「・・・・・・・ぁ」

そんな中で、ティアナはふと、何かに気がつく。
相手を真正面に見据える位置ゆえか、なのはの顔がよく見える。
その目を見て、

（――――――そっか）

銃口を向けたまま、少し、納得したような表情を浮かべた。

（アグスタの時からずっと気に食わなかったのは・・・・・その目なんだ）

なのはの、無感情であろうとしながら、無感情になれない目を見返して、ティアナは細く息を吐き出す。

（あたしと同じ、無力を知ってる目・・・・・なんだ、腹が立ったのって、ただの同属嫌悪だったワケ？）

ふっと、自嘲の笑みの浮かべてから、徐に発砲。
続けざまに閃光弾を撃ち込んで、なのはの頭上を取る。
流石のなのはも、少しくらい目を眩ましただろう。

前方からは、手筈どおりにスバルが突進していた。

（自主トレの中で編み出したクロスプレー・・・・・いける！！）

「っおおおおおおおおおおお！！！」

「だあああああああああああっ！！！」

二人同時に飛び出して、

二人同時に、素手で武器を受け止められた。

「・・・・・・・妙だな、訓練ではこういった戦術は教えていないはずだが？」

聞こえてきたのは、今まで以上に低く、重たい声。

それがなのはのものであるということを理解するのに、数瞬の間を必要とした。

スバルのナックルは突き出した左手で受け止められ、ティアナのダガーは右手で掴んでいる。

特に右手は刃で切れたのか、血が流れ出していた。

「別に自分なりの戦術を編み出すのは構わない、だが・・・・・・訓練中だけ言うことを聞いて、本番はそれを思いっきり無視するとは・・・・・肝が座っているな」

射抜くような眼差しが、二人を貫いた。

二人が怯んだ瞬間拘束魔法が展開し、逃げ遅れたスバルは両手を封

じられる。
なんとか逃げ出したティアナは、なのはの向かいのウィングロードに着地すると、クロスミラージュを向けて、再び対峙した。

「・・・・・それがどうしたっていうんですか？」

ありったけの感情を込めて、ティアナはなのはを睨み付ける。
そうしつつ魔法陣を展開し、砲撃のチャージを始める。

「・・・・あなたと違って、あたしは凡人なんですよ・・・・・・・死ぬ気でやらなきゃ、上手くいかない人種なんですよ・・・・・」

一方のなのはは、ティアナをじっと見つめるだけだった。
一応防御魔法の準備は出来ているものの、

（・・・・・・・わたしの力不足か、ティアナは間違いなく暴走している）

後悔しつつ、彼女が取った選択は、構えをいくらか解くことだった。
そうすることで、なのはなりにティアナのことを理解しようとしてみたのだ。

（・・・・正直、言葉にしたほうが伝わりやすいんだがな・・・・
この場合は致し方ないか）
――あの子の攻撃、受ける？
（ああ、レイジングハートも・・・・・・防御は最小限で頼む）
『Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ』

一旦俯いてから、もう一度ティアナを見据える。

「だから・・・・・もう誰も、傷つけたくないから、亡くしたくないからっ・・・・・・・強く、なりたいんです！！！」

ティアナは今にも泣き出しそうな顔で、ありったけの声で喚いて、照準のなのはの眉間に定めた。

「ファントム・・・・・・・・！！」

（・・・・・・すまない、ティアナ）

「あの、なのはさん？」

なのはが何をしようとしているのか。

それを少しだけ理解したスバルは、否定を求めて声をかける。

だがなのはは何も答えず、ただじっとティアナを見つめるだけだ。

「――――ブレイザアアアアッ！！！」

そうこうしているうちに、攻撃が放たれた。

見た目から判断して、砲撃に分類されるらしいそれを見つめたあと、なのはは目を閉じる。

（・・・・・・後でゆっくり、話を聞いてやるから）

覚悟を決めて、顎を引いた瞬間。

「（主の忠告を忘れましたか？イザナミ・・・・・・・腑抜けているようであれば、また傷つける、と）」

「――――――ッ！」

ドォンっと、空気が揺れた。
煙が立ち上り、なのはの姿が見えなくなる。
スバルも、砲撃を撃ったティアナも、呆然としていた。

「・・・・・・なのは、さん？」

恐る恐る声をかけたスバルに、答えるものはいない。
束の間硬直したあと、事態を最悪の方向に理解したスバルは、煙の中に駆け寄ろうとして、

「っうわ！？」

吹き飛ばされたスバルが見たのは、桜色に輝く魔法陣。
なのははその中心で腕を上げていて、その指先をティアナに向けている。
出来事の理解が遅れているスバルを他所に、重たい口を開いた。

「・・・・・ティアナ」

先ほど、攻撃を受け止められた以上に、畏怖の気配がこもった音。
リング状の魔法陣がなのはの腕を固定し、指先に魔力をチャージしている。
一方のティアナは呆然としたまま、防御も回避も行おうとしない。
それでも構わず、なのははチャージを続けて、

「少し・・・・・頭を冷やせ」

桜色の閃光が、ティアナを飲み込んだ。

ｓｉｄｅ　スバル

何もかもが急すぎて、どういうわけだか理解が追いつかなかった。

けど、足場から落ちていくティアを見て、すぐに再起動する。

「・・・・・・ぁ・・・・・・・・・・あ・・・・・・・・・・っ！！！！」

――――――――ティアアアアアアアアアッ！！！！！！

自分でもびっくりするくらいの大声を上げて、地面にまっさかさまに落ちるティアに駆けつける。

なんとか直下に潜り込んで、ティアを受け止めた。

腹で受け止めたから痛かったけど、そんなこと言ってられない。

「ティア！？ティア！！おきてよ！！ティアァッ！！」

ぐったりしたまま、動かないティアナ。

どうしよう、どうしようどうしよう！？ティアが・・・・・ティアが・・・・・・！！

「・・・・・・・模擬戦は、二人とも撃墜して終了だ」

後ろから、そんな声が聞こえて、首をひねる。
振り返ると、なのはさんがそこに突っ立ってて、模擬戦の終了を告げたみたいだった。
少しだけこっちを見つめた後、何事も無かったように去っていった。

「・・・・・・・・・〜〜〜っ！！」

思わず、怒りに任せてその背中をにらんだ。
――――今思えば、そのときのあたしが冷静だったら、気づいていたんだろうな。

なのはさんの目が今まで以上に虚ろで、目に見えて分かるくらいにすっごい動揺してたこと。

第十一話それぞれの・・・（後書き）

誤字脱字あらばご報告お願いします。
そういうわけで、別名『魔王降臨回』でした。
ここのなのはさんは、とりあえずなんとか穏便にすませたかったんだけど、邪魔が入っちゃった的な展開にｗｗｗ
それではお返事の部屋～

緑異様
お返事送れてすみません；
あの回更新しましたよ～ｗ
上でも言いましたが、ここのなのはさんは自分なりに穏便に済ませたかったんです。
好き好んで魔王になろうとは欠片もおもってなかったんですよ～。
あと、受験生だろうとなんだろうと、昔のわたしはアニメ三昧してましたｗｗ
だから大丈夫だと思います（キリッ

さーて、次回の『八つの仮面』はぁ～？
とりあえず、ガジェットが来ました。
それでは～ｗｗ

第十二話彼らが語る彼女の軌跡（前書き）

お待たせしました、十二話です。

第十二話彼らが語る彼女の軌跡

廊下を、ゆらゆらと歩いている影がある。
亜麻色の長い髪を揺らして、白と黒のシンプルな制服を着た影は、気がつくと洗面所にいた。
大きな鏡に映った自分を見つめて、ぼんやりと考える。
思い出すのは、先ほどの模擬戦。
自分なりに、ティアナと向き合おうとした矢先の、あの念話。

――――腑抜けているようでは、また傷つける

聞き間違えるはずのない、どこか無機質な声が、脳裏でずっと反響している。
――――力があるのに、何も出来ない。
証拠に、声にされるがままに、ティアナを力任せに叩きのめしてしまって――――

「・・・・・・・・・・っぁ・・・・・・・・・」

びちゃっと、口の中をすっぱくしながら、出してしまう。
苦しさに思わず、身をかがめた。

「かっ、ぁ・・・・・・・・・う・・・・・・・ぇ」

堰を切ったように、どんどん奥のほうから沸いて出て、簡単に止まりそうも無い。

「はぁ・・・・・・・はぁ・・・・・・はっ・・・・・・・・・げ・・・・・・」

はらわたがねじ切れると錯覚するくらいに、ギリギリと痛む。
次々出てくるものに呼吸が遮られて、苦しくなる。
誰も来ないようにと願いながら、それでも甘えたがっている自分がいることを自覚して、嫌悪し。
先ほどの模擬戦を思い出して、痛みはさらに増す。
あまりの痛みに、無意味と分かっていても手で腹を押さえて、何とか堪えようとする。
それでもやはり止まらず。
影は――――なのはは独り、必死になって痛みと戦う。

「・・・・・・・ぁのは!?」

唐突に真っ暗になった世界で、誰かの声が聞こえた。

ｓｉｄｅ　ティアナ

頭が、重たい。
起き上がってあたりを見渡すと、シャマル先生がこっちに気づいたらしくて、声をかけてきた。

「ティアナ、よかった！起きたのね？」

「あ、はい・・・・えっと、わたしは？」

理解が遅れていたから、何で保健室にいるのかを聞いてみた。

するとシャマル先生は少し、躊躇いがちに頷いてから、

「・・・・あなた、模擬戦でなのはちゃんに落されたのよ」

「――――あ」

・・・・だんだん思い出してきた。

確かあのあと、あたしの魔法が命中したあとに反撃されて、それで・・・・・・。

・・・・・・やばい、すっごく悔しくなってきた。

「でも、なのはちゃんの訓練用シューターは優秀みたいね、体のだるさ以外で、何か症状は？」

「あ、いえ・・・・大丈夫です」

あたしの返事を聞いて、シャマル先生は「よかった」と笑顔を見せた。

ホントはちょっときついんだけどね、精神的に。

だけど、さっき時計を見たらもう夜だったし、これ以上迷惑かけるわけにはいかないわ。

起き上がって、服のはずされていた部分を取り付けてから、立ち上がろうとしたとき。

隣のベッドから物音が聞こえた。

もしかして、スバルも落されたのかと思って、覗き込んで見ると、

「・・・・・なのはさん？」

そう、あたしを落して、勝利を収めたはずのなのはさんが、真っ青

な顔してベッドに横たわっていた。
不思議に思って、シャマル先生に聞いてみる。

「なのはちゃんも、あのあとすぐに倒れたらしいの」

・・・・・・なんで？
いやいやいやいや、あんだけあたしを容赦なく叩きのめしたんだから、ちょっとくらい元気があってもいいじゃない。

「・・・・・・・なんだか分からないけど、なのはちゃん、なんだか模擬戦が相当辛かったみたい・・・・・倒れてた場所に、戻したあとがあったって」

そんな考えが顔に出ていたらしい、いつのまにか隣に来たシャマル先生が教えてくれた。
っていうか、戻したって・・・・・魔法の当たり所が悪かったのかしら？
・・・・・・後で、お詫びの一つくらい入れておかないと。
そんな時、空気読めてないアラームが、六課中にこだました。

ｓｉｄｅ　？？？

「騒いでいる、な」

上空、俺の視線の先にはアラームがこだましてる機動六課が見える。

「・・・・・あっちにはガジェット・・・・原作どおりなら、『鍵』も出るはずだ」

そこへ俺が突っ込んで、ティアナをさりげなく慰めて・・・・・・ぐひひひひっ。

っといけねぇいけねぇ、今の俺はイケメンなんだから、クールにいかねぇとなぁ？

「・・・・・・今宵は満月が美しい、せめて早くに片付けるとしよう」

うっし、決まった！！

今の俺、ちょーかっこいい！！

ｓｉｄｅ　はやて

官製室のモニターには、上空を旋回するガジェット?型の群れ。

今のところは何も被害は出とらんみたいやけど・・・・警戒するにこしたことはあらへんな。

「失礼します、フェイト・T・ハラオウン、参りました」
「ヴィータ、参りました」
「うん」

スターズ、ライトニング両分隊の代表が来てくれた。
ちなみに、なのはちゃんが倒れとる今は、ヴィータがスターズの面倒を見てくれてる。
それはそうとして。

「二人は今回のこと、どう見る？」
「レリックを探してる風でもないし、様子見、じゃないのか？」
「うん、同意、多分こっちの手札を見に来てるんじゃないかな」

二人もそう思うとったか・・・・・。
せやったら・・・・・。

「それじゃあフォアード陣は待機、フェイト隊長、ヴィータ副隊長の二人で、ガジェットを撃墜してもらおうか」
「「了解！！」」

ｓｉｄｅ　なのは

「・・・・・・・・ん」

目が覚める。
束の間頭が回らなくて、ぼっとしたけど、すぐに飛び起きた。
確かわたしは、模擬戦をやっていて、二人が無茶な戦術をやって、
ティアナが暴走して、それで・・・・・・っ！！

「・・・・ティアナは？」

どうやらここは医務室らしい、シャマルもいないし、隣のベッドに
は誰もいなかった。
多分、寮にいるんだろう。
・・・・・・・ティアナ、大丈夫だろうか？

脱がされていたジャケットを着込んで、未だにすっぱい口を濯いで
から、医務室を出る。
窓から外を見ると、もうとっぷり日は暮れていて。
時計は夜の九時を指していた。
・・・ティアナも気になるが、まずは部隊長に報告だな。
昔から変わってないだろうし、多少の心配はさせてしまっただろう。
そう考えてから、部隊長室へ足を運んだ。
しばらく歩いていると、前の方から、誰かがゆらゆらと近づいてく
る。
まだぼやけた視界で、ぐっと目を凝らすと、スバルだということを
理解した。
脳裏で、先ほどの模擬戦を思い出し、罪悪感が沸いてくる。
・・・・・ティアナのこと、聞いてみるか。
声をかけようとして、

「・・・・・・・なのはか？」

思わずたじろぐくらいの、低い声が聞こえた。
周囲には、わたしとスバル以外誰もいない。
わたしの口は中途半端に開きっぱなしなので、自然と声をだしたのはスバルであるという結論が出る。
しかし、何があったんだ？
だいたい、今のスバルは何故殺意を出して――――

「死ね」
「・・・・・・・っ！？」

ドカン、と、つい今までわたしがいた場所に、クレーターが刻まれた。

「・・・・・・・お前が・・・・・お前が・・・・・・・！！っ畜生おおおおおおおお！！」

スバルは突然バリアジャケットを展開し、こちらに突っ込んでくる。
・・・・・何だ！？

「落ち着けスバル！！何が・・・・・・・！！」
「落ち着けだぁ！？笑わせんな！！ティアナが、ティアナは！！

――――お前に殺されたんだろうがっ！！！」
「――――――っ！！！！？」

・・・・・・今、なんて？
ティアナが、殺された？
・・・・・・・・・・わたしに！？

「お前が、ツクヨミの声が聞こえた程度で怖気づいて、保身のために殺したんだろうがぁあああああ！！！」
「す、スバ・・・・・・がっ、はっ・・・・・・！！」

思考が停止してしまって、スバルのナックルをもろに喰らう。
腹に衝撃波が来て、口から今度は血を吐き出す。
・・・・嘘だ、嘘だ。

「っ嘘だ！！！」

痛いのも構わず、ありったけの声で叫んで、スバルから逃げ出す。
そうだ、ティアナが死ぬはずないんだ！
そりゃ容赦無しにやってしまったが、魔法は確かに非殺傷だった！！
昏睡か気絶はしても、死ぬはずが・・・・・・！！

「この人殺しがぁっ！！」
「・・・・・うぁ！？」

通路の四つ角を抜けようとした途端、横ら鉄槌が襲い掛かってきた。
なんとか後ろに飛びのいて避けたが、続けざまに火炎が飛んできて、多少の火傷を負う。

「ティアさんは、あなたに殺されたんだ！！」
「転生者だけじゃなく、部下まで殺すか！？てめぇ、どこまで意地汚くなるつもりだ！？」

「っ、ち、ちが・・・・・・・・！！」

ヴィータとキャロの言葉を否定しようとして、

「違わないでしょ！？」

「あんたはそうやって、自分を甘やかしてきたんだ！！」

「っがあぁっ・・・・・」

胸を、二つの金色が貫いた。

乱暴に引き抜かれ、血が吹き出し、力が抜けて思わず倒れる。

それでも何とかすぐに立ち上がって、後ろを振り返った。

「本当は楽しかったんでしょ？」

「自分より弱くて頭の悪いやつらをさんざんいたぶって、快楽覚えたんでしょ！？」

「ち、違う！！そんなんじゃない！！」

また絶叫して、近くの階段から逃げ出した。

「あ、がっ・・・・・！？」

何とか下に降りて、今度は前から刃を突き立てられる。

「外道が、そうやっていつまで目をそらすんだ？」

シグナムが、ゴミを見るような目つきで、そう問いかけてきた。

「わ、わたし、はっ・・・・・・」

「言い訳するな、罪人め」

レヴァンティンを抜くと同時にわたしを突き飛ばして、再び振り下ろしてきた。
それをなんとか避けてから、また逃げ出す。
まもなくして、開けた空間に出た。
どうやらロビーらしい。
・・・・・・・本当に、ティアナを殺したのか？
わたしが？この手で？
見つめる手が、震えだす。

――――――隊員呼び出し、高町なのは一等空尉、ロビーにお客様です

無機質なアナウンスが流れて、視線を感じてそっちに目をやって、

「――――――――っ！！」

声にならない、悲鳴が上がった。
情けなくしりもちをついたが、今はそんなことどうだっていい。
ロビーの入り口、機動六課の玄関前。
ガラスに張り付くようにして、死体がうごめいていた。
――――どれもこれも、見覚えがある。
忘れるはずがない・・・・・だって、わたしが、確実に・・・・・・・・・。

「ころぃた、ぁろぉ？」

舌ったらずの口でそう続けられて、生きた心地がしなかった。
刹那、唐突にガラスが割れて、死体がなだれ込んでくる。
それらは真っ先にわたしにつかみかかってきた。
・・・・・・痛い、やめてくれ！！
違う、違うんだ！！

頼む、話を聞いてくれ！！

「話？ただの言い訳やろ」

「・・・・・・・・っ！！」

左肩を、打ち抜かれた。

そこをすかさず死体がつかんで、引っ張りだす。

・・・・どうやら、引き千切る気満々らしい。

「や、やめろぉ！！」

何とか逃げ出して、走って走って走って走って走って走って走って走って走って。

部屋に逃げ込もうとしたけど、どこも開かなくて。

だけど、一つだけ開いている部屋があったから、そこに逃げ込んだ。

扉を閉じて、内側から鍵をかけてから、気がつく。

確かここは――――――――霊安室だったはず。

扉に向けたままの顔を、何とか部屋のほうに動かして、

「――――――あぁ」

見つけてしまった。

三つあるベッドのうち、一つに遺体が横たわっている。

顔か隠されているのでよく見えないが、隙間から見えるオレンジ色の髪が、現実を教えてくれた。

・・・・・・・・みんなの言うことは、ほんとうだった。

わたしは、ティアナを・・・・・・・・・・！！

「・・・・・・・・・・なのはさん」

泣きそうになった瞬間、声が聞こえた。
この場で聞こえるはずの無い声に、顔を上げて、立ち上がる。
よかった、ティアナ、死んでなかっ――――

「殺人鬼め、死ね」

顔の半分が、えぐれていた。

side　シャマル

「あああっ！！！！！！！！」
「っなのはちゃん！？」

テスタロッサちゃんとヴィータちゃんの見送りにいく為に、医務室を出た瞬間。
なのはちゃんの悲鳴が聞こえて・・・・・。
戸締りしたのをもう一度開けてから、駆け寄る。

「あ・・・・・・・・・あぁ・・・・・・・・・あっ？」

起きていたなのはちゃんは、汗でぐっしょりしていて、目の焦点が定まっていない。
ただ呆然と自分の両手を見つめて、体はガタガタ震えていた。

「なのはちゃん！大丈夫？」
「あ・・・・・しゃ、まる・・・・さん？」

呆然としたまま、なのはちゃんはわたしを見てから、

「っいやぁ！！ティアナが！！転生者が！！」
「落ち着いてなのはちゃん！」

よっぽど悪い夢だったみたい。
今のこの子は、完全に錯乱してる。

「六課のみんなが！！殺しに来る！！」
「大丈夫よ！誰も何もしないから！」
「だって、わたしが、わたしが！！ティアナを！！」
「っなのはちゃん！！」

――――反射的に、頬を引っ叩いてしまった。
けど、なのはちゃんを止めることは出来たみたい。
・・・・ほんとうは、穏便に済ませるほうがよかったんだけど・・・・。

「大丈夫よ、落ち着いて・・・・・ティアナは無事よ」
「ほん、とに？」
「ええ」
「いきてる？」
「大げさねぇ、生きてるわ・・・・・やっぱりなのはちゃんは教

導官ね、訓練用の魔力弾は今でも優秀よ」

不安がっているなのはちゃんを、優しく抱きしめる。

ティアナが死んでしまう夢を見てしまったのね、それであんな・・・・・。

「悪い夢を見ていたのね、でも目が覚めちゃったならもう大丈夫・・・・・もう、怖くないからね？」

「・・・・・・・ぁ・・・・・・・・・・う・・・・・・・・・」

まだ震えてる手で、抱き返された。

その姿はまるで、怯えている子供みたいで・・・・・・。

――――もうしばらく、このまま抱きしめてあげよう。

不安なときは、誰かが傍にいるのが一番だし、ね。

ｓｉｄｅ　ティアナ

「・・・・・・上官の言うことを聞かない奴は、使えないってことですか？」

隊長陣が出動するにあたって、ヘリポートで見送りをしていたとき。

ヴィータ副隊長に、待機からはずれるように言われて。

気がついたら、そんな言葉を口にしていた。

「・・・・・そう言ってんのが分からないのか？」

ヴィータ副隊長は、じっとこっちを睨んでそう言った。

・・・・・やっぱりそうだ、凡人はいつだって、どこでだって。

ちょっと失敗すれば、すぐに厄介者扱い・・・・・！！

・・・・・・朝のことの所為？言うとおりにしなかったから？

・・・・鳴呼、これって制裁なんだ。

そうだ、きっとそうだ・・・・。

「・・・・・・・・っ」

感情が一気に爆発して、何を血迷ったのか、ヴィータ副隊長に突っ込んでいってた。

――――何をしたかったのか分からないけど、とにかく、何か痛手を負わせたかったのは確かみたい。

けど、

「ふっ・・・・・・！」

シグナム副隊長に、殴り飛ばされて。

そこで正気に返れた。

「・・・・・・・・」

シグナム副隊長が、何か言ってる。

けど、ヘリが飛び立つ音で、何を言っているのか分からない・・・・・。

「シグナム副隊長！！」

完全に風の音が消えたヘリポートで、スバルの声だけだ響く。

「・・・・・何かのために、誰かのために強くなるのは、いけないことなんでしょうか？」

起き上がると、シグナム副隊長に睨まれて怯えて、それでもはっきりものを言ってるスバルが見えた。

「自分なりの努力とか、そういうことも・・・・・やっちゃいけないんでしょうか！？」

「みんな！！」

スバルの疑問に反応したのは、シグナム副隊長じゃなくて。

「・・・・・もう、みんな不器用で・・・・・見てられない・・・・・！！」

シャーリーさんだった。

閑話休題。

あたし達フォアード陣は、ロビーに連れてこられて。
その一角のソファーに座っている。
向かいにはシグナム副隊長とシャーリーさんが座ってて。
副隊長は黙ったまま、シャーリーさんはパネルを操作して、資料を集めているらしかった。
しばらくそのままだったんだけど、おおかたそろったみたい。
顔を上げて、ゆっくりと、話し始めてくれた。

――魔法を知ったころのなのはさんは、まだ十歳にも満たなかったこと。

――魔法初心者でありながら、短い頻度で世界を巻き込みかねない争いに身を投じたこと。

――精神的にも肉体的にも未熟な体で、負荷のかかる魔法を駆使して、本人も知らないうちに、自分を追い詰めていたこと。

――そして、

――今から8年前、とある任務で、大怪我を負ったこと。

医者から、もう飛ぶことも歩くことも出来ないかもしれないって診断されて、すごく辛そうだったって。

地獄のようなリハビリにも何とか耐え抜いて、奇跡的に回復して。
それ以来、後輩に同じ思いをさせないのが、なのはさんの教導のモットーになったらしい。

「・・・・・なのはを堕とした負荷も、元々は想いを貫くためのものだった・・・・・・・・」

ここで、今まで黙り込んでいたシグナム副隊長が、あたしを見て、

「ティアナ、ホテル・アグスタの一件・・・・お前が無茶をするべき時だったか?己を削ってでも、やるべきことだったか?」

・・・・・・・・そう、よね。
あの時・・・・変に力まずに、いつもどおりにしてれば、ミスなんてしなかった・・・・・・・。
・・・・・・それになのはさん、ああ見えて、あたしらのこと気遣ってくれてるみたいだった。
今は、前に比べたらちょっと冷たいけど・・・・。

「なのはさん・・・・・今はどう思ってるのか分からないけど、でも、可愛い後輩達に自分と同じ思いをさせたくないのは確かだよ?」
「力は存分に吸収してもらって構わないが・・・・・無茶だけはするなよ」

そう言った二人の表情は、ほんの少しだけ笑っていた。
――――何だ、結局あたしが一人で空回っていただけじゃない。
・・・・・ちょっと、あほらし。
そう思って、くすっと笑顔をこぼした時。

「・・・・・・少し、違うな」

振り返ると、なのはさんがいた。

ｓｉｄｅ　スバル

「あ、なのはさん！！倒れたって聞いたんですけど、もう大丈夫なんですか？」
「ああ、一応は、それよりも・・・・・」

ちらっと、なのはさんはシャーリーさんを見る。
・・・あ、そっか、本人の許可なしに、過去話聞いちゃったんだから、さすがにいい気持ちはしないよね？

「・・・・・・どこまで話した？」
「あ、えっと！一応１１歳の頃に堕ちたってところまで・・・・・」

一睨みされて、シャーリーさんは縮みあがっている。
あー・・・多分、文句の一つくらい言われそうだな・・・・・。

「・・・・それ以降の話は、していないんだな？」
「うぇ？あ、はい」

・・・・・・・・あれ？
なのはさん、すっごい安心したような雰囲気だ。
・・・何か、話されたくないことがあったのかな？

「あ、あの！少し違うってどういうことですか？」

未だに縮み上がってるシャーリーさんが可愛そうになったのか。
キャロが遠慮がちにそうなのはさんに質問した。
なのはさんは一回頷いてから、あたし達を見渡して、

「・・・・先ほどシグナムが言ったように、力を求めるのはいいことだ、自分を磨くきっかけにもなるし、技術を向上させておいて損は無い」

「ただ・・・・」と、目を伏せたなのはさんの顔は、何か、苦い思い出を思い出しているようなものだった。

「新しい力を手に入れたいなら、まずは今持っているものを十分使い物にしてからにしろ」
「え？何でですか？」

エリオが身を乗り出して質問すると、なのはさんは顔を上げた。
そして、

「さもないと、わたしの様になるぞ？」

困ったように、笑ってた。
どういうことなんだろうと思って、口を開きかけると、

「またアラート！？」
「これ・・・・S級警戒態勢・・・・・ってことは！？」

転生者が来た！？なんでこんなときに！？

「っなのはさん！」

「指示を下さい！」って言ってるときには、もうなのはさんはいなくなってた。

第十二話彼らが語る彼女の軌跡（後書き）

本当はこの一話で済ませるつもりだったけど、あんまり長くなったので分割・・・・。
もう少しまとめきれるようになりたいっす。
それでは、お返事の部屋あああああ！

暗黒騎士　A様
ワアアアアナアアアアアビイイイイイイイッ！！
・・・・失礼。
それとなのはさん、気合の入った応援ありがとうございます！

緑異様
みんなの心が揺らいでいるのは、書いてて楽しかったです（キリッ↑
あと、ほどほどにしないとあなたのマーラ様がつぶれますよｗｗｗｗ（（（（（（

栖こんぶ様
追い込まれたなのはさんは、今回はシャマル先生に癒してもらいました。
ティアナとの関係を修復させたのは、原作どおり（？）シグナムさんとシャーリーにやってもらいましたｗｗｗ

次回、ＶＳ転生者っ！！
そして・・・・！
それではｗｗ
誤字脱字あらば、感想へ報告お願いします。

第十三話対戦、転生者（前書き）

いよいよ転生者との戦いです。

第十三話対戦、転生者

ｓｉｄｅ　転生者

よっ！みんなのオリ主、俺だぜ！
ガジェットの現場に『鍵』がいなかったから、機動六課にきたところ！
うるさいアラートがなってるけど、ま、気にするこたぁねぇだろ。
・・・・・うん？桜色の光がこっちに近づいて、
「――――って、うおぉ！？」

ｓｉｄｅ　なのは

「何の用だ？」
肉眼で確認した転生者に牽制のバスターを撃ち込み、レイジングハートの切っ先を相手に向ける。
転生者はにやにや笑って、両手を広げて、
「何って、迎えに来たんだぜ？優勝者は俺だからさ！！」
「アホか、お前に屈服した覚えは無い」
っていうか、あの人以外に屈服してたまるか。
「だから！迎えに来たっつったろ？・・・・・今から屈服させる

んだよ！！」

言うなり、突然奴の背中の服が爆ぜて、そこから真っ白な翼が顔をのぞかせた。
そして手に持っていた陣太刀を抜き放って、鞘を捨てると、

「斬岩剣っ！！」

勢いに任せて斬りかかってきた。
飛行魔法を駆使してそれを避けて、すれ違いざまに攻撃する。
が、思ったところに当てられず、衣服を僅かに破く程度にとどまった。
反撃を受け止めて弾き返し、一旦海面すれすれに急降下する。
もちろん奴もわたしを追って、ついてきた。
思惑通り、急停止したことによって発生した水しぶきが、もろに奴に掛かる。
――――ここで相手の所在など確認せず、考えなしに氷雪魔法を放っていればよかった。
こちらが氷雪魔法を繰り出そうとした瞬間、奴は突然方向転換。
まっすぐに機動六課に向かい始めた。

「っ待て！！」
「だったら追いついてみな！！」

翼を羽ばたかせ風に乗った奴は、かなりのスピードで。
このままでは、追いつくのは難し・・・・・！？
機動六課のほうに、何か見える・・・・・・あれは・・・・・・っ！！

「（フォアード！？何を・・・・・！？）」

「（すみませんなのはさん！でも、一緒に戦わせてください！！）」

代表してティアナが高らかに言うと、四人は散開。
各自のポジションについて、戦闘準備に入る。

「面白ぇ！けど・・・・ひよっこに何が出来る！？」

ｓｉｄｅ　スバル

「来た、みんな、気を引き締めて！」
『応っ！』

気合十分！
転生者相手なら、あたしの『毒』も使い放題だし。
あたし自身も転生者だから、ちょっとくらいは攻撃が通るかもしれない！
ティアも今回の要はあたしだって言ってたし、倒せないまでも、一矢くらい報いらないとね！
そう考えているうちに、相手が降り立ってきた。
真っ白な翼に、身長くらいある太刀を携えて。

「さあーて・・・・お手並み拝見だぁ！！」
「っおりゃあああああ！！」

真っ先にあたしが突っ込んで、左腕を大きく振り絞る。
弓のカートリッジを装填して、チャージ。

迫り来る刀を避けて、

「茂みのっ刺っ！！」

打ち込む！！

攻撃は狙ったところに上手く当たって、相手は一旦後退する。

だけど、これだけじゃ撃退はできないよね。

「まだ来るよ！」

「っはい！」」

エリオの返事を聞いて、あたしも気合が入ってくる。

構えを取って、再び突っ込んでいった。

「ツインブースト！ストライクアンドディフェンス！！」

キャロのブーストを受けて、力がわいてくるのが分かる。

胸の内で、短くお礼を言ってから、もう一回転生者に殴りかかった。

でっかい太刀で受け止められたけど、これで相手の武器は塞がった！

「でえええええやあああああああっ！！」

背後からエリオが飛び掛って、転生者を斬りつける！！

「うぉらぁ！！」

――――って思ったけど、あのコート、何か特別な素材で出来てるっぽい！

エリオの一閃受けてもびくともしてないし！

「（二人とも退いて！クロスファイア、撃つわよ！）」
「（はい！）」
「（おうよ！）」

ティアからの念話と受けて、後退した途端。
オレンジ色のスフィアが転生者に直撃した。
あたった箇所のコートが剥げているし・・・・もしかしていけるかも！！
思わず笑顔が浮かんで、表情を引き締めたときだった。

「・・・・・・・飽きた」
「・・・・・っ？」

転生者が、何か言った途端居なくなって。
次の瞬間、バリアジャケットに液体が掛かった感覚がした。
咄嗟に振り返ると、

エリオが、胴体を思いっきり斬られている。

「ティアさっ・・・・・・ああ！！」

続いて、キャロの悲鳴。
倒れるエリオを抱えたまま、そっちを見ると、

キャロも、フリードも、血を流していた。

「エリオ！！キャロォ！！」

っこ・・・・・・・！！

「・・・・・・のおおおおおおおおおおおおおおおっ！！！」

頭に血が上って、転生者に飛び掛る。

ｓｉｄｅ　なのは

奴が叫ぶのが聞こえて、刃が翻るのが見えて。
まだ幼いエリオとキャロは、真っ先にやられてしまっていた。
今スバルが善戦しているようだが・・・・・・時間の問題だ。

「っスクカジャ！」

回避率の上昇を利用してスピードを上げる。

だが、そうしているうちに、スバルもやられてしまった。
奴はティアナに標的を変えて、一目散に駆け出す。
・・・・また、守れないというのか？
また、目の前で・・・・・・傷つけるというのか！？

――――――――なのは・・・・なに、泣いてるんだ？

――――――――泣くなよ・・・・笑ってくれよ・・・・・。

・・・・・・・・・・っ！！！！

「ふっ・・・・・・・・ざけるなあああああああああああ！！！！」

そうだ！！こうならないために強くなったんじゃないか！？
今・・・・・・今それを発揮しないで、いつ発揮しろと言うんだ！？
限界まで魔力を使って、速度を上げる。
体中が悲鳴を上げているが、構うものか！！
あんな・・・・・・・あんな思いを二度としないで済むのなら・・・・
・・・腕の一本や二本、くれてやる！！
ティアナに刃を振りかざす転生者。
あと少し・・・・・・あと少しだ・・・・・・・！！

「っティアナアアアアアアアッ！！！！」

二人の間に割り込んだ瞬間、背中が酷く熱くなった。

ｓｉｄｅ　ティアナ

・・・・・もう、なにやってるんだろう、あたし。

転生者が六課に来てることを知って、なのはさんが交戦してることを知って。

ついさっきまで倒れてたらしいから、少しでも戦力になればって思って、飛び出したのはいいけど・・・・・。

結果は散々・・・・転生者、甘く見てたわ・・・・・・。

目の前の敵は、最後の一人になったあたしを見据えて、勝ち誇ったような、ざまぁみろと言いだけな目で、剣を振り上げていた。

・・・・・やっぱり、凡人じゃだめだったのかな・・・・・・。

「っティアナアアアアアアアッ！！！！」

次の瞬間に聞こえたのは、あの人の叫び声。

――――そしたら、いつのまにか強く抱きしめられていた。

ｓｉｄｅ　ヴィータ

「ロングアーチ！！現場の状況は！！？」
『ティアナ以外のフォアードのダメージも深刻！！ティアナ自身も、早くしないと・・・・・・っなのはさん！？』
「っどうした！？」

残り少なくなったガジェットをテスタロッサに任せて、新たに襲撃者が出たらしい機動六課に急行する。
現状を聞くためにロングアーチに通信をつなげると、そんな焦った声が聞こえた。

『なのはさん負傷！ティアナを庇って・・・・・っだめです！退いてください！！』
「・・・・・んの馬鹿！！」

速度を上げて、まっすぐ六課に向かう。

ｓｉｄｅ　なのは

「・・・・・・な・・・・・・っ！？」

多少傷は負ったが、その程度。
奴が怯んだ隙にレイジングハートを振り払って、後退させる。

「な、なのはさ・・・・！」

「ティアナは負傷者を頼む、ヴィータ副隊長がこちらに向かっているから、到着するまで今の指示を続行してくれ」
「・・・・は、はい！！」

スバルやエリオ達はこれで大丈夫だろう。
あとは・・・・・・。

「俺、商品に傷つけたくないんだけど？」
「ほざけ！！」

突っ込んできた一閃を、受け止める。
今はとにかく、六課から離れることが先決だな。
相手の力を利用して弾き返して、海の方に飛び出していった。

「追いかけっこか？つきあってやるよ！！」

背後で陣太刀が振り回される音。
直後、翼が動く音がして、気配が動いた。
横目で確認すると、ちゃんと付いてきている。
・・・・よし、

「（こちらスターズ１！これより転生者を引き付ける！スターズ２はその隙に負傷者とスターズ４を安全圏まで護送してくれ！！）」
『ちょ、なのはさん！無茶しないでください！』
「（そうだぞ！それにお前だって負傷者じゃ・・・・・！）」
「（この程度どうということはない！！それよりも子供らだ！！）」

言うだけいってから、強制的に通信を切った。
・・・・・流石にこれはなかったか？
だが、現状をどうにかしなければならないのも確かだ。

「悪いが、六課は諦めてもらおう」
「いいよ？狙いはお前だしｗｗｗｗ」

げらげらと相手は笑って、再び陣太刀を振り回し始める。
バリアやレイジングハートで受けながら、どうやって隙を作るか。
試行錯誤を始める。
わたしのことを『鍵』と呼び付きまとってくるあたり、参加者と見て間違いないだろう。
だったら・・・・・・・。

「おらぁ！！」
「・・・・・・・っ」

レイジングハートで・・・・・一番手っ取り早い方法だが、後始末が面倒だな。
疾風属性で・・・・・構わないが、耐性のないロングアーチスタッフにはきついだろう。
氷結属性・・・・・ここは海上で水気も多いし、やり方は多々あるが、完全に凍りつくまでタイムラグがある。
その隙に逃げられては意味がないな。
残るは火炎属性と雷撃属性だが・・・・・・・・。
・・・・・・・む。

――何かひらめいたわね？
「ああ」

鍔迫り合いを制してから、一旦距離を取る。
転生者は怯みはしたものの、すぐに立ち直って、間髪入れずに斬りかかってきた。

ナイフでそれをいなしてから、カードを出現させて、

「・・・・・・マハジオンガ！」

広範囲に稲妻を叩き落した。

「・・・・・おいおい、はずしたのか？」

小馬鹿にしたような顔で、こちらをからかってくるんだが・・・・・・。

まったく・・・外してやったことに気づいていないな？

「覚えておけ、水場での死因は溺死だけではない！！」

――インフェルノ！！

奴の鼻先で火花が散った瞬間。

連鎖するように爆発が起きて、あたりが火炎に包まれる。

ｓｉｄｅ　転生者

「はっ――――――」

こっちが何か言う前に、体が焼かれた。

肉が焦げる嫌なにおいを感じながら、落ちていくのを自覚する。

・・・・・・・・あんにゃろう、電気分解で水素と酸素を生成しやがった・・・・・！

そこに火種ぶち込むとか・・・・・神風にもほどがあるぞ！！

けど、今の爆発に奴も巻き込まれたはずだ。
アホめ、自分で自分の罠に・・・・・・っ！？

「・・・・・・・・・・・・自分が仕掛けた策くらい、対策は練っている」

・・・・・そりゃねぇだろぉ。
おおかた、防御を何重にも張って耐えたんだろうよ・・・・。
だから、思ったより火傷を負ってねぇんだな。
・・・・ったく『優勝商品』張るだけあるわ・・・・・さっき、明らかに防御展開する暇なかったろうに。

「恨むなとは言わん、だが、結末は受け入れろ」

・・・・・・・・・・・・はは っ。
でもこの野郎、左腕黒こげじゃねぇか。
・・・・・・・・ざまぁ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

ｓｉｄｅ　ティアナ

シャマル先生がスバル達を治療しているのを横目に、あたしは海の方を見ていた。
この向こうでは、なのはさんが転生者と戦っている・・・・・はず。
というのも、あの人が飛び出した直後から機器がジャミングを受けて、音声含めた映像が映らなくしってしまったらしい。
だから、あたしもロングアーチも、なのはさんが帰ってくるのをただ待っているしかなくて・・・・・。
・・・・・本当は、あたしも後退するように言われたけど。
下手に飛び出して、みんなを怪我させちゃったから。
せめてシャマル先生を守る砦として立つ許可をもらって、ここにいる。
――――なのはさん、大丈夫かな？
さっき海の方で爆発が起こってたし、怪我をしていないといいけど・・・・・。
なんて考えていると、海の向こうから何かが近づいてきた。
ぐっと目を凝らした、ちょうどその時、ロングアーチから通信が入る。

『システム回復しました、現在六課に接近しているのは・・・・・・スターズ１とライトニング１です！！』

・・・・・よかった！なのはさん、無事だったんだ！
そう思うと、自然と笑みが浮かんだ。

side　フェイト

ガジェットを駆逐してから、なのはが転生者と戦っているらしい現場に向かうと、突然唇がべたついた。
同時に、何か生ものが焦げたような匂いがして、思わず顔をしかめる。
それでも、なのはがここにいるのは間違いないみたいだ。
魔力を感じるし、何より、その残り香があたりに充満している。
爆発で発生したらしい煙の中を探して回ると――――

「っなのは！！」

いた。
背中にはティアナを庇って付いた傷、左腕は爆発でやられたのか、すごく焼け爛れている。
そしてそれがダメージになっているらしい。
なのはの飛行魔法はかなりふらふらしてて、おぼつかないものになっていた。

「なのは！しっかり！」

あと少しで海に落ちそうなところを、直前でキャッチ。
なのははは酷く消耗しているみたいで、聞こえる呼吸は荒かった。

「・・・・・フェイト隊長か、ガジェットは？」
「そんなことよりなのはだよ！大丈夫なの！？大分ボロボロじゃない！！」
「・・・・・・・・わたしは、別に・・・それよりもフォアードだ・・・・・・スバルが、エリオが、キャロが・・・・・・」

うわごとみたいにそういうと、なのははわたしから離れて、またふらふらと飛行を始めた。
方向からして六課に戻るつもりなんだろうけど・・・・・！

「駄目だよ！なのはだって怪我してるじゃない！」
「・・・・わたしよりも、あいつら・・・・・・・」
「なのは！？」

がくっと落ちかけたなのはを、何とか抱きとめた。
一瞬死んでしまったんじゃないかと不安になって、脈と呼吸を見てみると、

「・・・・・・・す・・・・・・・・す・・・・・・・・・」

ゆっくり呼吸しながら、眠ってしまっていた。
なのはがまだ無事なことにほっとしつつ、横抱きに抱いてから気が付く。
――――体が、すごく華奢だった。
鍛えられているからかもしれない、四年の間に、こんなに変わったことが原因かもしれない。
それでも、少しだけつらそうな寝顔を見れば。
何か、辛い目にあったのは確かみたいだった。
・・・・・・模擬戦のあと、倒れていたなのはを保護したのはわたしだ。
お腹の中を戻したらしいなのはの、真っ青とした顔は忘れたくても忘れられない。

「・・・・・・・・・・・なのは」

あの時は、拒絶しちゃったけど、だけど。

――――――今度は、絶対に守るから。

――――――あの時なのはが向き合ってくれたみたいに、今度は、わたしが・・・・・・。

第十三話対戦、転生者（後書き）

転生者に関して、ネギまを見ておくべきだったと後悔している自分がいたり・・・。
とりあえず、なのはの絶叫が書けて満足！↑
誤字脱字あらばご報告お願いします。
それではお返事の部屋！

一般兵　高天原　A様
作品の壁うんぬんに関しては問題ありませんよｗｗｗ
すみませーん！防壁、お願いしまーす！
？？？「登場人物ごときが作品の壁を越えようなど不可能だと、何故分からない？」

栖こんぶ様
本当の気持ちが伝わるのはもう少し先になりそうです。
あと、シャマルさんは医務官なので、カウンセラーの知識と経験を持っててもおかしくないんじゃないかなーって思ってｗｗｗｗ
はい！亀更新ではありますが、完結まで見守っていただけるとありがたいです。

さて、次回。
戦いから一夜明けて・・・・・。
それでは！

第十四話ひととき（前書き）

転生者も退けて、ひと段落です。

１１／１：誤字修正

第十四話ひととき

――――・・・・・・っふ・・・・・・・・うぅ・・・・・・・！

誰かの、声が聞こえる。

――――・・・・・・・えっ・・・・・・・・っく・・・・・・・っ

どこか聞き覚えのあるそれは、どうやら泣いているみたいだ。

――――・・・・・・・ふぇ・・・・・・・・・うえぇ・・・・・・

！

視界がだんだんはっきりしてきて、周りが見えてきた。

――――・・・・・・・・・・・・・ぁっ・・・・・・・・ごめ・・

・・・あ・・・・・・さ・・・・・・・！

空には雲がかかって、重いねずみ色になっている。

――――・・・・ごめんな・・・・・・・・さい・・・・・・・・！

空気はかなり冷えていて、雪が降っていた。

――――・・・よわ・・・・・・くて・・・・・・・・・・ごめん・・・・・・なさ・・・・・・！

そう言えば、この声は、かなり近くから聞こえる。
というか、耳元からしている。
顔をずらして見ると、見覚えのある、亜麻色の髪が見えた。

――――・・・・・・・・・・くー・・・・・・・・・・・ぁ・・・・・・・・・・・・おねが・・・・・・・・・・！

・・・・・・どうやらこの体制は、誰かに抱きつかれているものらしい。
どうりで、さっきから体が動かないわけだ。
っていうか、この人誰だ？
声といい、髪の色といい、なーんか覚えが・・・・・・。

――――・・・・・・くー、ぁ・・・・・・・・しんじゃ・・・・・

・・いやだぁ・・・・・・・・！！

・・・・・・・・くーや？いやいや、誰ですか？

――――・・・・・・くーやぁ・・・・・・ひとりに・・・・・・・

ぁいでぇ・・・・・・！

たまたまなのか、見計らったみたいに、あたしの髪の毛が目にかかってきた。

見覚えのない、暗い色だった。

side　ティアナ

あの翌日。
訓練を終えたあたし達は、シャワーをあびてから、医務室に向かっていた。
というのも、あたしとスバルが、無茶な戦術やったことに対して謝りたいって思ってたのが始まりで。
ほんとは昨日のうちに謝りたかったけど。
負傷して帰ってきたなのはさんは、二度目の気絶をしていて。
その後もバタバタしてたから、結局言いそびれちゃったのよね。
で、それついでにエリオとキャロのお見舞いしようって話になって、今目指しているところ。
といっても、あんまり大勢で居座るのもなんだから、あまり長居はしないようにって思ってるんだけど・・・・・。
っと、もうついたわね。
何度かノックして、シャマル先生の返事を聞いてから、ドアをあけると、

「なのは！はい、あーん」
「いや、だから右でも食べられ・・・・・」
「あーん」

・・・・・・フェイト隊長に餌付けされてるなのはさんがいた。
ってか、何？この状況・・・・・・。
思わずシャマル先生をみると、嫌な顔一つせず――でも苦笑いはしてた――にわけを聞かせてくれた。
ついさっき目覚めたらしいなのはさん達は、先生が持ってきてくれた朝ごはんを食べてたわけだけど。
なのはさんは利き手が塞がってたから、最初は先生が食べさせるつもりだったらしい。
だけどそれを提案する前に、なのはさんは右手で器用に食べてたわけで・・・・・。

そこに、朝練であたし達の指導を終えたフェイト隊長が登場。
右で食べてるなのはさんを見て、無茶をするなと言い出して。
それからちょっとだけ言い合いしたけどなのはさんが根負けしたらしくて、それで今の状況らしい。

「ほら、あーん」
「・・・・・・・・・あ」

ミッドではあまり見かけないおはしを使って、フェイト隊長から食べ物をもらっているなのはさん。
その顔は真っ赤になってて、少なくとも、あたしは初めて見る表情だ。
・・・・・・・もしかして、恥ずかしいんだろうか？
なのはさんが飲み込んだのを確認すると、フェイト隊長がまた食べ物を取って差し出す。
それをまた真っ赤な顔でなのはさんが受け取って――――

「・・・・・なんでだろう、ティア・・・・・・こう・・・・・・・・じわじわくるよ」
「同感」

何でか、見てるとすっごい微笑ましく思えるんだけど・・・・・・。

「・・・・・・目に毒なものを見せたな」
「いいえ！むしろ和ませていただきましっ！？」
「アホ・・・・すみません」

食事が終わって。
満足そうに食器を持って出て行ったフェイト隊長とは対照的に、なのはさんの顔はまだほんのり赤かった。
変なものを見せたと謝罪されて、思わずかしこまってしまう。
とりあえず、スバルは叩いておいた。

「それで？何か用か？」
「あ、えっと・・・・・・」

・・・・・駄目ね。
いざとなると、迷っちゃう。
でも、やるって決めたんだし、なのはさん、あんなことになったんだし・・・・・。

「・・・・指導を無視して、すみませんでした」

スバルと一緒に、深く頭を下げる。
雰囲気から、なのはさんが驚いているのが分かったけど。
ふふっと笑うのが聞こえて、

「それはもういい・・・・・十分に反省してくれているみたいだし、だったら、それでいい」
「・・・・・・その、ありがとうございます」
「いいよ」

顔を上げると、少しだけ笑っているなのはさんがいた。

・・・・・仏頂面ばっかりと思ってたけど、こんな顔も出来るんだ。
ちょっと、意外。
さてと、

「エリオ、キャロ、調子はどう？」
「はい！」
「大分よくなりました！」

あたしの質問に、二人は元気よく答えてくれた。
とくにキャロなんか、あたしを庇ってくれたんだから、余計心配だったけど・・・・・。

「昨日は悪かったわね、あたしに付き合わせた挙句に、怪我させちゃって・・・・・」
「そんな！わたしやエリオくんだって、なのはさん助けたかったですし、それにわたしだって局員です！このくらいの怪我、むしろ想定しておかなくちゃ・・・・っ！」

子供なりの意地かしら？
キャロはどんと胸を叩いたけど、そこが負傷したところだったから、すっごく痛そうにしている。
・・・・・・・・センターガードって、結構大変ね。
自分の判断一つで、仲間が助かったり、全滅したりするから・・・・。
今回のことは、本当に教訓になったわ。

「大丈夫？」
「は、はい・・・・すみません」
「シャマル先生はなんて？」

「とりあえず傷口は塞いだそうですが、まだダメージが残っているらしいので、今日と明日はお休みです」
「そっかぁ・・・・・」

キャロの体に痛み止めの治癒魔法をかけてると、そんなスバルとエリオの会話が聞こえた。
二日も休むのか・・・・ガジェットだけなら、あたしらスターズや、残りの隊長、副隊長で十分だと思う。
でも戦力が二人も抜けるのは、精神的にもきついわ・・・・・。

「あのっ！わたし達もがんばって、早く復帰できるようにするので！！」
「ええ、ありがとう」

だからか、キャロのそんな言葉がうれしくて、思わず頭を撫でていた。
ふと、なんとなく。
目がなのはさんの方に向く。

「――――」

さっきから、こっちのやりとりを見ていたらしいなのはさんは。
すっごく優しそうな笑顔で、こっちを見ていた。

ｆｒｅｅ　ｓｉｄｅ

一方その頃、時空管理局本局。
とある一室。
会議室と見まごうばかりの広い部屋に、大勢の人間が集まっている。
綺麗に磨かれた机やイスが折り目正しく並べられ、人々は参考書やノートをチェックしながら、どこかピリピリした雰囲気を纏っていた。

「・・・・・・よしっ」

そんな中、周囲の人間と同じくして、参考書のラインを引いたところを何度も見返している少女がいる。
ノートと並行して繰り返し繰り返し、それはもう入念に復習しながら、そのときがくるのを待っていた。
部屋の時計が、時間ぴったりを知らせる。
すると、監督らしき局員が入ってきて、全員が気を引き締めた。
局員は一通り部屋を見渡して、小さく頷くと、

「それではこれより、入局試験を開始する！全員、筆記用具以外を机の上に出さないように！」

声高くそう注意事項を述べると、ウィンドウを操作して部屋のものとはまた別の時計を表示した。

「制限時間は一時間、トイレ、または急用以外で出ることは硬く禁じる！それでは・・・・」

手元のスイッチに手を近づけて、

「始め！！」

タイマーを動かした。

一斉にペンを動かし始めた受験生一同。

あの少女も、真剣な表情で手を動かして、問題と向き合う。

（やっとだ・・・・やっと・・・・・・・・あの人の力になれる・・・・・・・！）

ｓｉｄｅ　？？？

「お、試験始まった？」

「珍しいね、興味持つなんて」

とあるオフィス。
書類を片付けつつコーヒーを飲んでいた少女が、ふと時計に目をやってそう呟いた。
隣にいた顔立ちがそっくりの少年は、彼女と同じく黙々と書類を片付けながら反応する。
少女は明るい笑顔を見せ、

「だって、今回のは『あの子』も出てるんだよ?」
「『あの子』?・・・・・・ああ、なのはが可愛がってた?」
「そそ」

二人は脳裏に同じ人物を思い浮かべながら、言葉を交わす。
するとそこへ、休憩から帰ってきたらしい青年がやってきて、

「だったら、終わったらぱーっと打ち上げるか?」
「だね、でもなのはちゃんクラナガンだから、参加は出来ないかも」
「それに、この間転生者が襲撃してきて、負傷したらしいからね」

少年の言葉に、三人は少し残念そうに笑い合う。

「あー、にしても、暇だよう!!」
「暇っておめー、仕事があるだろうに」
「仕事はいいんだよ!でも、ミッチーもなのはちゃんもいないんだから、寂しいの!!」
「なるほど」

そう交わす三人の視線の先には、春先に撮ったらしい集合写真が飾ってあった。
現在よりも少し幼い顔立ちの八人が、無邪気に笑ってピースサイン

を作っている。
その中には、なのはの姿もあった。

「さーて、打ち上げだっけ？つーちゃんと弓さんの意見も聞きたいな」
「由香のことも忘れちゃだめだよ」
「はいはい」

湿っぽい空気を祓うように、若干わざとらしく少女が切り出して。
会話が弾んでいく。

ｓｉｄｅ　ティアナ

「・・・・・・・ふぅ」

午後の訓練も事務仕事も終わって、今は一人、自販機で買ったコーヒーで一息ついている。
ぼんやり考えるのは、昨日見た夢。
あの中であたしは、確かに別の誰かになっていて、誰か――――声とかに覚えがあったから、多分知ってる人――――に泣き疲れていた。
今ではぼんやりとなってしまったけど、目を閉じればあの泣き声だけははっきり思い出すことが出来る。

・・・・・・もしかして、だけど。
あたしは誰かの記憶を夢として除いてしまったんじゃないだろうか？
もしそうだったら、大分失礼なことしちゃったんじゃ・・・・・・。
・・・・・駄目駄目、推測でネガティブ思考に陥ったって埒が明かない。
明日も訓練あるし、ちょっと早いけど寝ちゃいましょう。
そう考えて、コーヒーの缶をゴミ箱に投げ入れて、自室に向かうことにした。

side　ツクヨミ

「よろしかったのですか?失敗してしまったようですが・・・・・」

帰還後、数日。
主に問いかけて見る。

「いいみたいだよ?彼は所詮かませ犬だったらしいし、『鍵』の腑抜けもある程度は矯正できたろうって」
「そうですか・・・・・」
「あいつ、君に感謝してたよ?お陰で襲撃のタイミングを図れたって」
「この程度造作も無い、とお伝えください」

わたしに賛辞を送るのは、主だけでいい。

「ふふっ・・・・分かった、伝えておこう」
「ありがとうございます」
「さ、今夜はもう遅い、明日も早いんだから、寝ておきなさい」
「主がそういうのであれば」

早速自室に戻り、休眠することにした。

第十四話ひととき（後書き）

一番書いてて楽しかったのは、餌付けされてるなのはさんｗｗ
ここから彼女のツンデレ道が始まる・・・・はず！
それではお返事の部屋～。

一般兵　高天原　Ａ　様
何もそばにいるだけが守り方じゃないんですよフェイトさんｗ
それと、このちゃも説得ありがとうございます。
今はつらいかもしれませんが、信じて見守ってあげてください。

栖こんぶ様
なのはさんを段々デレさせるのが難しい反面、楽しかったりしますｗｗ
あと、この小説は確かに空なのですが・・・・・。
残念ながら、今後空也は出てきません。
今後の展開に注目してくださいね！

さて、次回は機動六課のある休日！
物語が大きく動く・・・かも！？
それでは！
・・・・・あれ？何か言い忘れているような？

そうそう、今後『Ｓｔｒｉｋｅｒｓ編では』空也は出てきませんよ

w
w
w

ｓｔｒｉｋｅｒｓ設定（前書き）

キリがいいかなって思ったので、設定をば。
本編で解説が出たものに関しては、はぶいてます。

strikers設定

用語

『転生者』
近年になって増えてきた、前世の記憶を持つ平行世界からの次元漂流者。
そのほとんどが反則的な力を有している。
この世界のことを『原作』と呼び、そこに住む人物を『原作キャラ』と称している。
元々住んでいる人々を物のように見るものもいれば、一つの命として扱うものもおり、千差万別。
ちなみに約半分の転生者は、これから世界で起こることを知っている。

『デュアルアビリティ』
原作ペルソナで言うところの『ミックスレイド』。
人数が増えれば増えるほど強力な技が使え、『ドット』『デュアル』『トライアングル』『スクエア』『スター』『ヒランヤ』と段階が存在する。

『昇華』
ペルソナの能力を、一時的に限界まで引き上げること。
これにより一定の間だけ、本来の姿になる。
ただし、本体である人間への負荷はかなりのもの。

高町なのは

年齢：１９
利き腕：左
出身：第９７管理外世界（現地惑星名称「地球」）極東地区　日本・海鳴市
所属：時空管理局本局　三提督直属部隊「懐刀」
役職・階級：転生者犯罪捜査官・一等空尉
機動六課での役職：戦技教導官、及び前線フォアード部隊「スターズ分隊」隊長
魔法術式・魔導師ランク：ミッドチルダ式・空戦ＳＳランク
詳細：時空管理局内にて「エースオブエース」「キャスター」などの称号を持つ、「懐刀」に所属する魔導師。
機動六課では戦技教導官も担当。
４年ほど音信不通だったが、ミゼット提督が権限を使って強制連行、もとい、異動命令を発したことが切欠で、フェイト達と再会する。
常に鋭く射抜くような目をしており、人との交流も避けている。
口調もかなり乱暴なものとなり、以前のような優しげな表情は見る影も無い。
バリアジャケットは、エクシードのアンダーを真ソニック風にして、腰周りはアグレッサー、上着もエクシードにして、アンダー以外は全部黒。
実は、ジャケットで隠れて見えないが、アンダーには篭手とか装甲とか装備している。

スバル・ナカジマ
年齢：１５（転生前の分も入れると、三十代になるらしい）
利き腕：両方
出身：ミッドチルダ西部　エルセア
前所属：時空管理局地上部隊　陸士３８６部隊
役職・階級：武装隊所属陸戦魔導師・二等陸士

機動六課での役職：前線フォアード部隊「スターズ分隊」フロントアタッカー
魔法術式・魔導師ランク：近代ベルカ式・陸戦Ｂランク
魔力変換資質：毒
詳細：転生者だが、『原作』のことはあまり知らない。
幼い頃なのはに助けられた経験から、自身も誰かを救えるようになりたい、と魔導師の道を駆け上がってきた。
前世で夢中になっていたというゲームの影響で、ナックルを装備していない左手には、イチイの木で作られた小型の弓を装備している。
戦闘では、体術と弓を駆使するスタイルで戦う。
再会した際のなのはの変わりように戸惑うものの、それでも尊敬し、目標とする。

ｓｔｒｉｋｅｒｓ設定（後書き）

これからの展開的にまだ明かすべきではないかなっとおもってはぶいたものもあるのですが・・・・内容が短くなりすぎちゃいました；

それでは、お返事の部屋。

一般兵　高天原　Ａ様

仲良しはいいですよね！↑

ほほえましい光景です、眼福眼福・・・・。

それと誤字報告ありがとうございました！

きっちり修正させていただきましたｗｗｗ

さて、次回は、休暇ももらったフォアード陣！

それでは！

第十五話機動六課のある休日（前書き）

前回更新した設定、本当はホテル・アグスタ後にあげる予定でした。
だから若干古いんですよーｗｗ

第十五話機動六課のある休日

――なのは、あの子からメール
「なんだって？」
――試験無事に終わったってさ、今は結果待ちだって
「・・・・・・そうか」

レイジングハートを操作して表示した画面には、見知った顔が並んだ写真。
なのはは人知れず顔をほころばせて、中心でピースサインを作っている少女を見つめた。

「・・・・・・大きくなったな」

「よし！全員集合！！」

早朝、いつもの訓練場。
なのはの声が響いて、フォアードが駆け寄ってくる。
教導者ふくめ、全員が集まったことを確認してから、フォアードを見つめて、

「実は、本日の訓練は第2段階の終了を見極めるテストだったのだが・・・・・」
「えっ」

驚きのあまり、声を上げるスバル。
態度で示したのは彼女一人だけとは言え、残りの三人を驚きを隠せない。
そんな四人を、なのははじっと見つめてから、ふいにふっと笑って、

「そんな顔をするな、四人とも合格だよ」

一瞬言葉を失う四人。
だが、次の瞬間には、年相応に、うれしそうに笑っていた。

「まぁ、少々危なっかしいところもあるが、別段問題はない範囲だ、明日から次段階の訓練に入るから、心しておけよ?」
「はい!・・・・・・・・?」

苦笑いで付け加えられた言葉に、明るく返すティアナ。
しかしその直後で、ふとなのはの言葉に違和感を感じた。
少し思案してから、その正体に気がついて。
恐る恐る、話しかけてみる。

「あの、なのはさん、『明日』って?」

そう、現在終了したのは午前の訓練。
つまり、今日の訓練はまだ午後が残っているということになる。
さらに今しがた第2段階の終了を告げられた。
ティアナはてっきり、午後から第3段階を行うものと思っていたのだが・・・・・。

「ああ、だから午後は休暇だ、みんなこれまでの勤務や訓練をがんばっていたからな・・・・・所詮、ささやかな労いというやつだ」

そういってまた微笑むなのは。
つられて、フォアード達も笑顔を見せた。

ｓｉｄｅ　エリオ

「ハンカチは持った?忘れ物はないよね?」
「は、はい」

機動六課に来てから、初めてのお休み。
とりあえずキャロと出かけようってことになって、ロビーで待ち合わせています。
それで、フェイトさんはお見送りってことで一緒に待ってくれてるんですけど・・・・・。

なんというか、こうやって心配してくれてるあたり、変わらないなって思います。
けど、ちょっと恥ずかしいっていうか、なんていうか・・・・。
なんとなく視線をずらすと、私服姿のなのはさんを見つけました。
・・・・あれ？なのはさんも午後から休暇なんだ？

「あれ？なのはも休暇？」

僕が話しかける前に、気がついたらしいフェイトさんがなのはさんに話しかけます。
なのはさんはこっちを見て、頷いてから、

「部隊長にとらされた」
「そっか、って当たり前だよ！なのは、この間大変だったんだから！」

今度は苦笑いするなのはさんに駆け寄って、心配するフェイトさん。
・・・・・やっぱり、心配性なところは変わらないな。
お二人はそれから少し会話して、なのはさんが出かけていったことで終了。
フェイトさんが戻ってくるころには、キャロも合流していました。

「ご、ごめんね、お待たせしちゃって・・・・・」
「いいよ、キャロ、すっごく似合ってる」

女の子らしい服を着たキャロは、とても可愛かった。
そのことをまっすぐ言うと、うれしそうに照れて。
フェイトさんに見送られながら、僕達も出発しました。

「おろ、ミゼばぁだ」
「ほんとだ、ラルゴのおやっさんにレオーネ爺さんも出てるな」
「伝説の三提督そろい踏みだね」

昼食時。
休憩室で各々のものを食べていると、そんな声があがった。
どうやら地上のトップの演説が行われているらしく、その脇で覚えのある顔が並んでいた。

「しっかし、レジアスのおっさん気合入ってるな」
「まぁ、予算が本局優先なせいで、地上の治安はすごいことになってるからね・・・・・必死なんでしょ？」

――――レジアス・ゲイズ。
時空管理局地上部隊のトップで、極度の魔導師嫌いとして有名。
だが、地上の犯罪発生率の激減など、治安の方面で大きく貢献した人物でもあり。
彼を英雄視する人間は多い。

「っていうか、上もちょっとくらい地上を優先してやったっていい

のにな」
「でも、アインヘリアルだっけ？見た感じ結構でかいし、地上の犯罪にこれぶっ放すってのはちょっと・・・・」
「威圧じゃねぇの？地球の核保有国みたいにさ、『あんまりちょうしこいてると、これ撃つぞ！！』っていう」
「所詮牽制ってやつか」

画面の向こうのレジアスを見ながら、分析を続けるメンバー。
それでも食事の手は止まっていない。

「もうすぐ公開陳述会でしょ？気合入ってる原因、それもあると思う」
「予算も決めるから、アインヘリアルの分もぎ取る気満々だろーな」
「あたしとしちゃ、それでもいいかなっておもうけどね」
「まったくだ、本局金使いすぎ」

冷静にそう告げて、話を一旦区切った。
と、ここで、うちの一人が食べ終わったらしく、器にはしをのせて手を合わせる。

「ごちそーさまでした！やっぱ食堂のよりつーちゃんの日本食だわ、てんぷらさいこー！」
「お粗末さまでした、ありがと」

ｓｉｄｅ　なのは

――待ち合わせ、間に合ったわね
「・・・・ああ」

まさかレールウェイが遅れるとは思わなかった・・・・・・。
だが、時間に間に合ったのはありがたい。
走ったことで上がった息を整えてから、人を探すことにする。
しかし、あの子に会うのも久しぶりだな。
写真では元気そうだったが・・・・・。

――色々と心配？
「当たり前だ」

閑話休題。
探し始めて少し経った頃。

「あ、なのはー！こっちこっち！！」

覚えのある、元気な声。
がらにもなく胸が高揚して、そっちに駆けて行った。

「なーのはー！」
「あ、こらこら、人目があるんだぞ？」

勢い任せに抱きついてきた子をなんとか受け止めて。
口ではこう言っているが、内心会えて嬉しい。

「久しぶりー！元気だった？」

「ああ、そっちこそ試験お疲れ様、手ごたえはどうだった？」
「ばっちりだよ！」

ふふっ、こういう元気なところは騎子に似たな？
とにかく、息災でなによりだ。

「なのは、休暇でしょ？行きたいところある？」
「そうだな・・・・アクセサリーショップにいくか？結果待ちとはいえ、がんばったんだ、何か買ってあげよう」
「わ！ありがとー！」

・・・・・・この子に会うたびに、色々と軽くなってくる。
血塗れたわたしが唯一できたことだから。
だから――――

「というか、お前杖は？」
「今日一日くらい大丈夫！それに、なのはと一緒だもん！」
「・・・・・そうか、でも、無茶はしてくれるなよ？」
「あたぼうよ！」

「これは・・・・・・・」

一方、機動六課の面々が、それぞれ休日を満喫している頃。
ミッドチルダ首都クラナガンの、とある地下道。
トレーラーの横転事故が発生したと聞き、現場へと向かったこの局員。
スバルの姉であるギンガ・ナカジマは、現場検証を行っていた際、トレーラーの傍らに落ちているものに気がついた。
近づいて見ると、それは真っ黒な四角いケースで、底やふちには、ケースに入っていたと思われる液体が付着している。
少なくとも、工具や筆記用具などの、無機物を入れるためのものでないのは、間違いなかった。
ギンガはケースのサイズや付着物から、とある仮説を導き出し、顔をしかめる。

「・・・・・・何も、起こらないといいけど」

彼女のそんな呟きは、局員達の喧騒に消える。

時を同じくして、とある下水道。

「・・・・・・は・・・・・・・・・は・・・・・・・・・」

弱々しい呼吸を繰り返しながら、細い手に巻きついている鎖を引きずって。

世間では、明らかに幼女と判断される外見の子供が、不衛生なそこを歩いていた。

足取りはおぼつかず、どこを目指すわけでもなく。

ぺた、ぺた、ぺた、ぺたと、歩みを進めていた。

聞こえてくる呼吸は本当に苦しそうで、油断すれば今にも倒れてしまいそうである。

そんなにきついなら、鎖を――正確には、その先に着いている二つのケースを――捨ててしまえばいいのに、彼女はそれをしない。

ただ、とどまることはせずに、阿呆のように進むだけ。

しかし、この薄暗さには流石に耐えかねたのか、しばらく進んで、たまたま近くにあったはしごに寄りかかると、懇親の力でよじ登り始めた。

動作の一つ一つに力みながら、一段ずつ、上っていって。

――――最後に彼女が見たのは、下よりいくらか明るい上だった。

ｓｉｄｅ　キャロ

「・・・・・・・あれ？」
「どうしたの？」

エリオくんと休日を過ごしていて。
シャーリーさんに組んでもらったプランにそって、過ごしていました。
それで、今、次の目的地に向かっているんだけど・・・・・。
エリオくんが何かに気がついたみたいです。

「今、音がしなかった？」
「音？」
「うん、何かを引きずったような――――」

休日のプランを実行するのも大事だけど、何か大変なことが起きているんだったら、局員として見逃しちゃいけないって思って。
だから、エリオくんと二人で、音の聞こえたほう――――裏通りまで行って見ました。
そしたら――――

side　ティアナ

「あれ？ね、ティア！あれ！」
「何？」

あたし達はヴァイス陸曹のバイクを借りて、街にツーリングしてたの。
で、屋台で買ったアイスを二人で食べてたら、スバルが何か見つけたみたいで。
そっちを見てみると、

「なのはさん？」
「やっぱそうだよね？」

私服だったから一瞬分からなかったけど、あの人、ミッドでは珍しい肌の色をしてるから、すぐに分かって。
何してるんだろうと思って声かけようとすると、女の子がなのはに駆け寄っていた。

見た感じ、あたしらより年下で、エリオやキャロよりちょっと上くらい。
二人の表情からして、多分知り合いだと思うんだけど・・・・・。

「・・・・・めちゃくちゃ笑ってるね」
「うん、六課にいるときと全然違う」

その子と話しているなのはさんは、とてもうれしそうで。
クールな感じが残ってる微笑みは、六課じゃ見かけたことがないものだった。
・・・・・・・・なんだろう。

「あの子がうらやましい」
「うん」

なんてアホな会話を交わしてたら、デバイスが反応。
もう、何なの？
とりだして画面を見た瞬間、即座に気が引き締まった。

「任務・・・・やっぱゆっくりしてられないわね」
「局員だから」

思わず、苦笑いがこぼれた。

ｓｉｄｅ　なのは

「・・・・・・呼び出し、か」

レイジングハートに反応があって、内容を確認すると赤いミッドの文字で「アラート」と表示されていた。
ガジェットでも出てきたか？

「仕事？」
「ああ・・・・悪いな、今日はここで・・・・・・」
「わーってる！なのは、局員だし、それにあたしももう少ししたらなるかもなんだもん、慣れておかないと！」

この子はニコニコと笑っているが、若干の寂しさは隠しきれていなかった。
それを見ていると、かなり罪悪感が沸いてきて、

「・・・・・・また、休暇が出来たら付き合ってくれるか？」
「むしろこっちがお願いします！」

頭を撫でると、うれしそうにはにかんだ。
・・・・・・数ヶ月ぶりにあえたのに、こんな分かれ方は癪だ。
この子のためにも、迅速な解決を、だな。
とりあえず、

――――騒ぎの元凶、とっちめる、潰す、ぶっ潰す！！
「異議なし」

画面に表示された番地へ、駆け出す。

第十五話機動六課のある休日（後書き）

なのはさんが段々デレてきましたｗｗｗ
ただ、いつか言ったと思いますが、簡単に幸せにしてあげませんよｗｗｗ
誤字、脱字、アドバイスあらば、感想へどうぞ。
それではっ！

第十六話地下と上空・前編（前書き）

今日は連続やっちゃうぞ！

第十六話地下と上空・前編

「ふふふふふ・・・・・・物語は動き始めましたね」

上空。

かなり高い高度の所為か、雲を下に臨んだ景色は不可思議で雄大だ。

その中で、ぽつっと黒いしみを作ったように。

ミッドでもベルカでもない陣に佇む、影が見える。

メガネをかけたその人影は、くすくす笑いながらウィンドウを見つめていた。

「ここからは、わたしの手の上で回ってもらいましょう」

「エリオ！キャロ！！」

通信があってすぐ、人気の無い路地にて。
なのは、ティアナ、スバルの三名は、エリオ、キャロと合流。
二人の腕には、ボロボロの布切れを纏った幼い女の子が抱かれていた。

「二人とも、その子は・・・・・？」
「はい、下水道を歩いてきたらしいんです、」
「でも、長い間歩いてたんじゃないみたいです、足とか、そんなに汚れていないし・・・・」

「それよりも」と、エリオが女の子を手を握って、鎖を見せる。
それから、全員にその先を見るように促した。
されるがままに、視線をずらすと――――

「レリックのケース？」
「はい、それに・・・・・」

そういいながら、今度は鎖の先のほうをつかみ上げた。
そこの鎖は十字に組まれており、一部が不自然に大きく開いている。

「これは・・・・・」
「ケースがもう一つあった？」

戦慄する一同、エリオとキャロは緊迫した面持ちで頷いた。

「みんな！」

と、ここで医療道具を携えたシャマルと、フェイトが登場。
二人――――特にシャマルはこちらに駆け寄ると、流れるような動作で女の子を受け取り、診察を始めた。

『みんな！聞こえるか！？』

束の間一同がその動きに関心していると、はやてからの通信。
フォアードはこのまま地下へのレリック捜索に、なのはとフェイトはヘリの護衛として、一度六課に戻ることとなった。

「よし、みんな！初めての休日は満喫した！？こっからはお仕事モードに切り替えよ！！」

「はい！！」

ティアナの発破に、フォアード全員が頷いて。
それぞれのデバイスを掲げた。
起動させ、バリアジャケットをまとった四人は、勢いよく下水道に飛び込んでいく。
少女を抱えていたなのはは、人知れず彼らを見送って。
口元に、笑みを浮かべていた。

ｓｉｄｅ　なのは

「トレーラー事故？」
『はい、わたしが捜査している案件なんですが、恐らくそれと関係があると思われます』

ヘリの護送に就いてから。
例の少女について、スバルの姉だというギンガの話を聞いていた。
何でも、彼女が捜査していたトレーラー横転事故の現場に、ケースが転がっていたらしい。
それも、５～６歳くらいの子どもが入りそうなサイズの。
そこから、何かを引きずったような跡が続いていて、それを追っていたら、わたし達の仕事と重なったようだ。
・・・・・なんとなく、わたしの目の前でシャマルに診察されている少女に視線がいく。
まさか、とは思うが・・・・・・。

――人造魔導師・・・なんてことは・・・・・
（無い・・・・・とは言い切れないのが悲しいな）

無意識に、握り締めていたらしい。
開いた手は、少しの間白いままだった。
もう一度、少女を見て、

（出来るだけ支えてやるべきか？）
――分からないわ、わたし達立場が立場なだけに、どうやっても中途半端になりそう

（・・・・・・中途、半端・・・・・・か）

――――ここ最近、何度目か分からない。

あの時の記憶が過ぎって、思わずため息をついた。

ｓｉｄｅ　スバル

下水道に突入してから一時間くらい。

ティアやエリオの読みは当たってたみたいで、もう何度もガジェットと交戦している。

狭い場所だから、ちょっと動きが制限されるのは痛いけど。

今のところレリックらしきものは発見できてないし、だとしたらもう少し先にあるのかな？

あたしのお姉ちゃんである、ギン姉の事件も絡んでるみたいだし、

がんばらないと・・・・・。
しっかし、ギン姉かぁ・・・・・・・・今度また暇が出来たら一緒に出かけたいな。
っと、まーたガジェット！

「スバル！！」
「おうよ、任せて！！」

とりあえず今は、目の前のことを片付けないと！！
迫ってきたガジェットを踏み潰して、殴り飛ばして、叩きつけて。
エリオを中心に後衛の二人とも連携して、ガジェットを破壊していく。
むぅ・・・・・今回も弓は使えないかなぁ・・・・。
いつもなら開けた場所で戦ってるから、弓とかも頭使えば通すことは出来たんだけど。
こう狭い場所だと、ＡＭＦに邪魔されることが多くなって、純魔力の矢を撃つことができない。
・・・・・・今度、カートリッジ辺りをどうにかして、実体のある矢でもつくってみようかな？
そしたら、こういうときに役立ちそう。
まぁ、そう考え付いてみても、今無いものは無いんだから、しょうがない。
自分に出来ること、やらないと・・・・・・・！！

「スバルエリオ退いて！」

ティアの声に、ほとんど無意識で反応して。
大きくバックジャンプすると、ティアの魔力弾が目の前を飛んでった。
ＡＭＦと激しくぶつかり合った後、通り抜けて、ガジェットを貫く。

爆発したガジェットに巻き込まれて、周りの機体も破壊されていった。
あたし達のデバイスに出ているレリックの反応はもっと先・・・・・・。
ガジェットも大分集まってきてるみたいだし、なるべく手早く回収するのが吉かな。
とりあえず、そのことをティアに進言しておいた。

ｓｉｄｅ　なのは

「今のところ、異常は無し、か」

ヘリの護送を勤めつつ、ロングアーチが伝えてくるフォアードの状況を確認している。
目の前の少女も、シャマルの診察が終わってからは、容態は大分安定しているようだ。
静かに寝息を立てる少女を見て、思わず笑みがこぼれる。

――――のんきね、こっちは非常事態でピリピリしてるっつのに
（言ってやるな・・・・・この子も、よっぽど疲れていたんだろう）

こいつはこう言ってるが、そう言う割にはかなり軽い口調で。
結局、こいつもわたしということか。

――我は汝、汝は我だからねー、今のあんただからこそ、裏のことをぼやくのは当然
（そうか）
今ではすっかり恒例となった、こいつとの会話のあと。
何となく、窓の外に視線をやった。
そのとき。
『っ海上に新たにガジェット反応！航空？型です！！』
ｓｉｄｅ　？？？
ふふふっ、ここまでは『原作どおり』。
わたしの幻術入りのガジェットの大軍が海上に出現し、隊長二人が撃墜に向かう。
お嬢様も予定通りレリックを探しておいでですし、このまま順調に進めばフォアード陣とも鉢合わせるでしょう。
で・もぉ♪
一つだけ、『原作』とは違うことをやってるのよねぇんｗｗｗ
開いているウィンドウの一つ。

わたしの妹の一人が、今まさにビルの上に到着しようとしているところ。

・・・・お気づきの方もいるんじゃないかしら？

そう、ディエチちゃんの配備を、『ちょっと早く』してるのよ♪

これで、最悪の展開が拝めるはずだわぁ。

――――ハッピーエンドはもう何度も見ているもの。

次に見るのなら、バッドエンドがいいわ。

主人公さんもいい感じに弱っているようだし・・・・・・・。

・・・・・・・・ふふふふふふふっ、絶望したときの顔が見ものねぇ♪

ｓｉｄｅ　スバル

「おりゃあああっ！！」

手を地面について、逆立ちになって。

その状態で体をひねって、周りのガジェットを蹴り飛ばす。

体制を崩したガジェットを、エリオ、キャロ、ティアが、刺したり焼いたり、撃ち抜いたりして。
順調にガジェットを破壊している。
さっきロングアーチから入った情報によれば、上空にも出現したらしいし・・・・・・。
今回、ちょっと大事になるのかも？
そんなことを考えてたら、突然目の前の壁が爆発して。
あたしもみんなも、咄嗟に身構える。
新手かと思って睨んだ先には、

「よかった・・・・やっと合流できた！」

左手に装備されてる、マッハキャリバーの姉妹機。
あたしとは対の、暗い色のジャケット。
妹のあたしが確認したんだから、間違いない・・・・・！

「ギン姉！！」
「久しぶり」

そう、この人があたしのお姉ちゃん――――ギンガ・ナカジマ。
年も階級も二つ上で、あたしの格闘技の師匠でもある人！

「遅れてしまってごめんなさい、一緒にレリックを捜索しましょう」
「あ、はい！！」

ギン姉は、思わず呆気に取られていたらしい三人にそう声をかけて。
合流したあたし達は、レリックの反応を目指して、さらに下水道を進む。

ｓｉｄｅ　なのは

「マハガルーラ！」
「プラズマランサー！」

海上に出現したガジェットを駆逐すべく、フェイト隊長と二人で出陣、捌いていく。

「っはぁ！」

基本は物理攻撃で、時折魔法を混ぜながら応戦していた。
しかし・・・・・。

――派手な誘導ね

こいつがぼやいたとおり、これ見よがしに上空にガジェットがいることに、少し、違和感を感じる。
だが、放っておけないのも事実。
手っ取り早く片付けて、ヘリに戻らねば・・・・・・！！

ｓｉｄｅ　ティアナ

途中スバルのお姉さん、ギンガさんも合流して。
ガジェットを倒しつつ進んでいると、広い空間に出た。
おそらく、貯水のための空間だと思うんだけど・・・・・・。
すると、ほんの少しだけ水が残っている場所、あたし達がいるところから、ちょっとだけ進んだ先に見覚えのある真っ黒なケース。

「ありました！！」

そうやって、真っ先にキャロが駆け寄っていく。
あの子がレリックを確保しようとしているのを見守りつつ、周囲を警戒する。
・・・・・・・・・・・？何か、変な音が・・・・・・。

「あれ？」
「ねぇ、変な音がしない？」

ギンガさん達も気が付いていたみたい。
音が段々近づいてきて・・・・・・・・・っ！！

「危ない！！」

気が付いたギンガさんが叫ぶけど、もう遅い。

「え？っきゃあぁ！！」

レリックに近づいていたキャロが、見えない何かに吹き飛ばされた。
とっさにエリオが受け止めて難は逃れたけど、まだ油断は出来ない！
レリックケースの付近、キャロが吹き飛ばされたあたりを注意深く見つめる。
・・・・・・・・っ。
見えない何かに、レリックケースが拾い上げられる。
それから、やがて輪郭がぼやけて現れたのは、人間のようで、人間じゃない生物。
全体的に暗い色の甲殻に、薄い赤のマフラー。
多分、キャロを吹き飛ばしたのはこいつ・・・・・！
もしかしたら、アグスタのときにガジェットを送り込んできた召喚師の仲間かもしれない。
どっちにせよ、

「みんな、敵よ！！」

ｓｉｄｅ　？？？

「（クア姉、聞こえる？）」

「（はいはーい、聞こえてるわよ～？）」

「（配置に付いた、ヘリの位置も把握してる）」

「（わかったわ、標的は見える？）」

「（うん、大気も澄んでるし、今日は快晴だからね・・・・よく見える）」

「（よーし、それじゃあディエチちゃん！）」

――――やっちゃって☆

ｓｉｄｅ　なのは

『市街地に高エネルギー反応！！』
『ヘリがロックオンされてます！！』
「何だと！？」

ガジェットを迎撃していると、そんな通信が入ってくる。
っやはり、このガジェット群は囮だったか・・・・・・！！
早く向かわないと、シャマル達が・・・・・・。
だが、ここを簡単に離れるわけにも・・・・・・・・！！

「なのは、わたしが残るから、行って！！」
「っでも、そしたらフェイトちゃんが・・・・・・！！」

いくらフェイトちゃんでも、この数相手なんて、無茶だ！！
けど、シャマルさん達も、放っておけない・・・・・・・・！！
どうしよう・・・・・・！

「（こちらスターズ２！海上で演習中だったけど、ナカジマ三佐が許可をくれた！！早く行け、なのは！）」
「ヴィータが来るんだったら大丈夫！行って！」
「わかった！（ヴィータちゃんも、恩に着る！！）」

現場を二人に任せて、飛行魔法にありったけの魔力をそそいで急行する！

「（ロングアーチ０から、スターズ１へ！！さっき、クロノ提督と騎士カリムに、限定解除の申請を出した！間に合わへんかもしれないけど・・・・・！）」
「（十分だよ！！）」

とにかく今は、ヘリに向かわないと・・・・・・！！

・・・・・・・・・もう、無くしたくない！！

ｓｉｄｅ　フェイト

「はっ！！」
「シュワルベフリーゲン！」

なのはを向かわせて、ヴィータと合流して。
わたしはなお、ガジェットとの交戦を続ける。
バルディッシュを振るいながら考えるのは、状況のことと、さっきのなのはの様子。
聞き間違いじゃなきゃ・・・・・。

「（なのは、口調が戻ってたな）」
「（うん）」
所々、今のものが混じってたけど。
さっきヘリのもとに向かおうとしてたなのはは、あの頃に戻ってた。
――――やっぱり、実ははなにも変わっていないのかもしれない。
今はちょっと感情を表に出しにくいだけで、ちょっと色々抱え込んでいるだけで。
変わったって思ってたのはわたし達だけで、今までなのはは、なのはなだけだったのかもしれない。
そうなると、何で連絡よこさなかったとか、どうして口調が変わったのかとか、疑問が出てくるんだけど。
「っ・・・・・・・・・」
ガジェットを破壊して、なのはが飛んでいった方向を見る。
――――正直、なのはには、行って欲しくなかった。
多分なのはは、ティアナのときみたいに、自分を盾にしてでも護ろうとするだろう。
もちろん、仲間を護ること自体は、責められることじゃないけど・・・・。
・・・・・・・・・・・・なのはが、悩んだり、苦しんだりする姿は、見たくないから。
だから・・・・・・・・・。
「（ヴィータ、ごめん、わたしももう少ししたら抜けるよ）」
背後から迫ったガジェットを斬り飛ばす。

「（はぁ！？・・・・・・・・・って言いたいけど、なのはのことだろ？最近気が付いたけど、あいつ、前よりさらに、なんつーか、自己犠牲の気が強くなってるんだよな）」

「だから」と、ヴィータは鉄球で目の前のガジェットを一掃して。

「（あの馬鹿止めて来い）」

「（ごめん、ありがとう）」

またガジェットを斬り裂いて、移動を始める。

第十七話地下と上空・中篇

ｓｉｄｅ　なのは

魔力をつぎ込んで、全速力でヘリに向かう。
砲撃の反応が感知されたのはついさっき、早く駆けつけないと・・・・・・。
・・・・・・・・シャマルさんが、ヴァイスくんが・・・・・・・・・・！！
それに、あの子も・・・・・・・・・・・・！

――――っなのは！！
「うん、見えた！」

さらに加速する。
同時に、砲撃手があるであろう地点に光が見えて・・・・・・・・！！

――――なのは！限定解除されたわ！！今なら・・・・・・・・・！！
「分かってる！！」

わたし自身にリミッターをかけられると、『この子』も制限されてしまって。
スキルは使えるけど、もちろん威力は制限されるし、何より、外に出られなくなる。
だけど、解除された今なら・・・・・・・・・・！！

『砲撃、発射されました！！』
「・・・・・・・・・っ！！」

カードを取り出す。
青白い炎に包まれたそれを目の前に投げて、
「――――――イザナミっ！！」
迫る砲撃の前に、立ちはだかる・・・・・・・・・！！

ｓｉｄｅ　フェイト

なのはを追って、ヘリに急ぐ。
バルディッシュやロングアーチの情報を統計すると、恐らく相手の砲撃は魔力じゃないもっと別の力・・・・・・。
ペルソナじゃないことは確かみたいだけど、安心は出来ない。
とにかく急がないと・・・・・・・・・！！
ヘリが見えてきた。
けど、同時に砲撃の光が迫っている。
そして、それとヘリとの間に割り込むなのはの姿が見えて・・・・・・・・・っ。
「・・・・・・・・っなの・・・・・・・・・・！！」

名前を言い切る前に、

光が、直撃する。

ｆｒｅｅ　ｓｉｄｅ

「・・・・・・ぁ」

「――――――」

ロングアーチでは、オペレーター全員が息を呑んでいた。

目の前のモニターで今まさに、なのはとヘリが煙に巻き込まれたと

ころなのだ。
その光景に、全員が動きを止めた中、一番早く再起動したのは、

「――――っぼーっとしとる場合やない！！すぐにヘリとなのはちゃんの安否の確認！！急いで！！」
「っはい！！」

はやてが叫んだ指示に、スタッフが次々と再起動して。
コンソールや画面を操作し、少しでも情報を集めようと奮闘する。
しかし、

「だめです！！ジャミングが酷くて・・・・・・・・・・！！」
「なのはさん！？ヴァイス陸曹！！」
「シャマル先生！！」

悲痛な叫びが、管制室にこだまする。
はやての脳裏で、最悪の展開が過ぎったとき。

「っシステム回復！！なのはさんは・・・・・・・・・っ！？」

俗に言う『砂嵐』の状態から回復した画面に写ったのは。
未だに跳び続けるヘリと。
――――風に翻る、藍色のローブ。

『――――――ぁ――――――――お――――――』

それと、スピーカーから聞こえてくる、ノイズ交じりの声。
だんだんと聞き取れるようになった、それは、

『――――――おい、聞こえるか!?こちらスターズ1!ギリギリセーフで、ヘリの防衛に成功した!!』

side　???

「――――――――っ!!」

『うっそ、こっちも全力じゃないとは言え、マジで・・・・・・・!?』

通信から聞こえてくる、ディエチちゃんの声。
それはかなり驚いているもので。
だけど、仲間内で一番驚いているのは、多分わたし。
まさか、間に合った上に、防御を成功させるなんて・・・・・・・・!
いくらか違うとは言え、原作どおりになったわね。
・・・・・・・・・もう、楽しみを取られて、つまんないわ。
・・・・・・でも、ルーお嬢様のレリック回収はまだ澄んでいない

ようだし。
それに、『ＪＳ事件』はまだまだ先があるんですもの。
気長に原作破壊計画を立てないと・・・・・・♪
でもその前に、ディエチちゃんが危ないわね。
えっと、そしたら・・・・・・。

ｓｉｄｅ　フェイト

「・・・・・はっ・・・・・・・はっ・・・・・・・・・はっ・・・・・」

息を切らして、ヘリのもとにたどり着くと。
見慣れないけど、どこか覚えのあるカードを仕舞っているなのはがいた。
わたしと同じように息が上がっていたけど、目立った怪我も無いし、ヘリも無事なところから見ると、防御には成功したらしい。

「よかった・・・・・・・なのはも、ヘリも無事だね」

素直にそう言うと、

「何を言っている？ロングアーチの通信は聞こえなかったのか？」

・・・・・すっごく呆れた顔で返された。
冷たい視線が突き刺さって・・・・・うぅ、ぐさっとくるなぁ・・・・・。

「わたしはこのまま砲撃手を追う、フェイト隊長は海上に戻って、ガジェットの片付けに戻ってくれ」

「では」と、言い残して。
なのははさっさと飛んでいってしまった。

ｓｉｄｅ　スバル

よかった・・・・・・・。
さっきからロングアーチが、通信の向こうで騒いでるのが聞こえて。
耳を澄ませば、ヘリが危なかったり、なのはさんが飛び込んだりですごいピンチだったみたいだけど、何とかなったみたい。
隊長陣の限定が解除されたらしいし、空に出現したって言うガジェットについては、もう気にしなくていいだろうね。

さてと、

「――――っは！！」

後ろから気配。
回し蹴りで、足を交差させる。
そのまま鍔迫り合いの状態になって、それでもそれは一瞬で。
お互いにお互いを弾き返す。
体が真っ逆さまになったけど、なんとか立て直して。
ティアの隣に着地した。
入れ替わるようにギン姉が飛び出して、レリックケースを持ってる女の子に仕掛けるけど。
あたしと同じようにあの黒甲冑に捌かれて、後退せざるを得なくなった。
エリオはキャロを抱えてるから、動こうにも動けないし・・・・・・。
それにしても大分強いなぁ、あの黒甲冑。
動きにキレがあるし、甲冑も硬いから、攻撃が中々通らない。
『毒』を使えば、ちょっとは動きを制限できるだろうけど、やっぱりあの甲冑が邪魔してるし。
だったら関節狙えばいいんだろうけど、こう暗いと、狙いを外しそうで嫌なんだよなぁ・・・・・・。
うーむむ・・・・・・最近弓の出番があまりないし、腕が鈍りそうで怖い。

「・・・・・・・」

と、ティアが何か考えてるみたい。
ちらっとこっちに視線を送ったのが見えて、口元をにやっと上げて答える。

それから、ギン姉と戦ってる黒甲冑に飛び掛って――――

「茨の刺っ！！」

普通は地面で起こす爆発を、あえて拳に纏わせて叩きつける。
ちょっと驚いた様子のギン姉に、視線で事情を伝えてから、二人で攻め始める。
ギン姉の蹴り上げ、あたしのストレート。
ギン姉のアッパーカットと、あたしのボディーブロー。
なるべく辛辣な攻撃を、黒甲冑に二人がかりで叩き込んでいく。
さすがに二人分の攻撃を捌くのには、苦労するみたいだね。
意識はほとんどこっちに向いてる、これならそろそろ・・・・・・・。

「――――――」

ここで、ティアが何か呟いて、歩き始める。
そのまま、あたし達の『すぐ横』を通り過ぎて、女の子のところに向かう。
女の子は、この黒甲冑が苦戦し始めたのに気が付いて、自分だけでも撤退しようとしたみたいだけど・・・・・。

「ごめんね、でもそれ、本当に危ないものなの」

ダガーモードにしたクロスミラージュを、女の子の首元に突きつけていた。
やっぱりか、幻術を使ってたね。
黒甲冑は気が付いて、女の子の方に行こうとするけど、

「残念、まだあたしらの相手してよ？」

「女性とのダンスを、放棄する気？」

すかさずあたしとギン姉が割り込んで、攻撃。

うん、これならいけそう。

あとは油断に気をつけなきゃ。

――――――そんな時、

「スターレンゲホイル！！」

辺りがいきなり眩しくなる――――――！

ｓｉｄｅ　？？？

『ディエチちゃん、今はとにかくそこを離れることに専念して！』

「りょーかい・・・・・・！」

わたしの砲撃を防がれたことはショックだったけど、今はそれどころじゃない。

隊長の一人が、こっちにすごいスピードで向かってきてるみたいだし。

ここはクア姉の言うとおり、速く退避するのが得策。

とにかく、ここから離れないと・・・・・・・！！

――――――カノンを抱えて、ビルの屋上の扉に駆け寄った時だった。

「――――――――一方的にぶっ放して、逃げるのか？まさに当て逃げだな」

「・・・・・・・・・・・・っ！！」

足が、意思とは関係無しに止まった。

手はドアノブに伸ばそうとしたから、かなり微妙な位置で止まっている。

はやくここから撤退しなきゃいけないのに、体が言うことを聞いてくれない。

――――――いる。

振り返らなくても分かる。

わたしの真後ろに、恐らく立っている。

・・・・・正直、背中に受けてる威圧感が半端無い。

・・・・・なんか、とんでもないこと仕出かした気分だ。

だって、そうじゃない。

「まぁ・・・・・・・・・なんにせよ」

――――――――――いい度胸だ。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・かなりご立腹だよ、この人。

第十七話地下と上空・中篇（後書き）

年末年始に一気に更新するのもありかなと思って、もう一話書いてたら。
前回から実質２ヶ月放置しちまったぜ！（´∀｀；
誤字、脱字あらば、ご報告お願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8310q/

八つの仮面

2012年1月4日08時51分発行